
異世界に逝くぜ

ribo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に逝くぜ

【Nコード】

N5871L

【作者名】

ribo

【あらすじ】

これはよくある転生最強主人公モノです。そして、二次創作です。トラックにはねられて、神様にあつて、数百年前で、『JAPAN』で、『麻帆良』で、っていうそんな話。

ご都合主義です。感想もご都合主義です。

あとキャラ崩壊が激しいです。とくに県政とか。

ちょっと読み返すと、三点リーダをキチンと使っていないかったりし

たので、色々を書き換えず……

始め（前書き）

よろしく願います。

これは赤松健様作の『魔法先生ネギま！』およびアリスソフト様の『戦国ランス』を舞台にした二次創作です。

さらに、荒木飛呂彦様作の『ジョジョの奇妙な冒険』に登場する『スタンド』が登場し、その他いろいろな作品に登場するものが出ると思われませんが、それは一切上の作品などに関係がありません。

それを踏まえた上でご覧ください。なお、表現、台詞などで気に入らなければプラウザのもどるをクリックです。

始め

ヤッホー、みんな俺の名前は……言わなくていいか。

今は隣を歩いている友人と一緒に、帰宅中さ。いつもどおり帰っていたんだけど、後ろから大きな音がしたあと、急に体が浮いた。

一体全体何が起こっているのか全く分からなかったが、もう駄目そうなことは判った。

こういうときに限って、色々と考えてしまう。隣の友人は大丈夫なのか。どうしてこうなったのか。結局それは、俺にはどうすることもできはしなかった。

そしてそのまま俺は意識を手放した。

「んん……あれ、ここはどこだ？」

目を覚ますとそこは真っ白な空間。近くには友人が寝ている。……全く状況が判らん。

とりあえずコイツが心配になったから、声をかけてみる。

「お、おい、生きてるか!？」

「んん、パスタあと三皿」

少し、この脳天気な友人の目を覚まさせてやろう、と思い俺は腕を振り上げた時「フォ、フォ、フォ、フォ、そう慌てんでよいわ」と声が聞こえた。

起きたときに周りを見回したはずなのに、一体全体誰がいるって

言うんだ。内心ビビりながら俺は後ろを振り向いて、そこにいる人物に声をかけた。

「貴方は誰ですか？」

外見は誰が見たってご老体、と言うおじいさんだ。だが、白い手術着を長くしたようなものを着て、年期がありそうな杖をついて、立っている。

その姿はまるで、神様みたいだな、とも思うようなものだった。

「ワシか……それならそこで寝とる奴もおこしてくれんかのう」

返ってきた言葉は俺が求めているものではなかった。

何がそれなら、なのかはよく分からないが多分一度で説明するためだろうと思い、腕を振りかぶって拳を下ろそうとすると「優しく頼むぞい」と言われたため、仕方なしに軽く揺さぶって起こすことにする。

「おい、起きろ」

「ん……やけに照明があかるいな」

アホなこと言いつつ起きた友人と一緒に、このよく判らないおじいさんの話を聞いてみる。

「ふむ、それでは話をしようかのう。まず最初に、ワシは神じゃ。単刀直入に言おう。君らは死んだ。死因はトラックによる圧死。このままなら君らは、閻魔のところに行つて転生するのじゃが……最近暇での、現世の二次創作、となるものを読んでの、ワシも書きたいなあ、と思つたら丁度いいところに君らが来ての。だから、ワシの執筆に協力してくれ！」

とりあえず、長つたらしい話を聞いて思ったことは……は、え、死んだの？

確かに起きる前は夢みたいなのが起きていたような感じがする。が、あくまでこれは夢だという可能性もぬぐいきれないし……それにもつとも信じ切れないのは神様から、ちょっとよく分からない単語が飛び出しているところとか。

そもそも神様って何。

「うむ、君らは死んだ。神は……うん……なんか偉いもんじゃ」「え……？ 貴方今、俺が考えていたことを？ ……それなら神つてのもうなずける。わけがない」「ええ！？ 何で！ この人もすごくそれっぽくないか!？」

それっぽいで神様かどうかなんて判断するなよ。そんなこと言ったら『この人の福耳スゲー。七福神じゃね』って言うようなレベルじゃないか。

大体そんなかんたんに神様に会えるなら、世の中にいる神頼みしている人を助けるよ。こんな一般学生の目の前に現れるのなら、もっと他のところ行けよ。

どう考えても俺が見ているのは幻想なんだろう、そんな結論しか出ない。

「そこまで信じんのか……まあ、それも致し方あるまい。だが、これを見てでもそうまで言っていられるのかは判らんがの」

気持ち悪いものが上がってきた。頭が痛くなって、苦しい。隣で、友人も苦しんでいる。

脳裏に浮かんだのは、ブロック塀に飛び散った赤色と、何かよく判らないものだった。だが、お腹や手や、いろいろな場所は痛くな

ってどうしようもなかった。

「い……痛い……や、やめてくれ」

「む？ どうしてワシがやった、と思うのかね？」

「……っつ、そりゃあ……あんたぐらいしかいないからだろう……？」

「そっちの方はワシのことが解つとるみたいだのう。……お主はどうか」

そんなことは解つてる。大体最初からそうなんじゃないだろうかっていうのは思ってた。

ただ、そうは認められないって言うのもあるんだ。思春期の子どもナメンナ。この、よく判らないものは解りたくないが、解ってしまった。

はあ……まさか死ぬ、なんてな。

「あ、れ、？ 痛みが……」

「やっと認めたか。その痛みはお主がワシを神と認めたのなら、引くようにしたのだ。なんたって神だから、心の中ぐらい読めるわ」

「は？ じゃあお前は早々と痛みが引いてたわけ？」

「おう、ちよつと痛かったただけだな」

「なんで痛いフリしてんだよ！？」

こいつは妙な遊び心があるから面倒だ。しかし、コイツのおかげで少しはマシになった。

「ゴホン、軽い雰囲気になったしの、話の続きをしよう」

「宜しく頼みます」

「君らには執筆の手伝いをしてほしいのじゃ。何、異世界に行つて行動してくればいい。簡単に死なんように三つ、願いをかなえよう。」

「どうかの？」

「分かった、受ける」

これは、うまくいけば人間超えられるかもしれない。

痛い思いも、しなくていいかもしれない。勉強しなくていいかもしれない。自由かもしれない。楽しいかもしれない。

そう思い俺は受けることにした。

「では、君らが行くのは、『ネギま!』の世界じゃ。願いは三つ程ならいけるぞ」

「わあい」

『ネギま!』……か。内容なんて知らないなあ。ネットでの書き物しか読んだことしかない。

願い事はどうしようか……不老不死とか……？

「よし、俺は不老不死、『メタルギア』の登場キャラの技能に、異空間に『メタルギア』のアイテム全部入れて、運命の旧弓兵みたいに銃器を乱射できるようにしてくれ」

「ちよっおまつなんて言う……」

友人の奴はやる気だ。しかし、いちいち当て字じゃなくてギルガメッシュっていいばいのに。

「うむ、分かったぞ。しかし、弾は威力が高いからの、魔力で調節できる魔力弾になるぞ」

「オーケー、オーケー、十分だぜ」

友人は決まったか。なら、俺はどうしようか。

全く知らない訳ではないが、大体どう言うのかは分かってる。確

か『ネギま!』は主人公が父親を超えるためにがんばる作品だったはず。

なら、色々と汎用性のきく能力がいいよな。あれがいいか……。これがいいか……。

「不老不死と『ジョジョの奇妙な冒険』の『スタンド』三部から六部全部にしてくれ。それで十分だ」

「二つでいいのか。うーむ……スタンドは一体ずつしかだせんがよいか?」

「ああ、それでいい」

「お前二つでいいのかよ?」

友人が聞いてきた。確かにもう一枠ある。だが、言うだろ。過ぎた力は身を滅ぼすつてな。

いや、十分強力だつて? ……いいじゃないか。それに作者がもう一つ付けたらホント無理じゃね、つて言つてたし。

「いいんだよ。とくにねーし」

「ふーん。まあいつか」

「では、準備はよいか? それでは、鳥になつてこい!」

え?

どういう意味でその言葉を言つたんだ、と聞き返そうとしたときにはすでに、俺たちは真つ黒な穴に飲み込まれているところだった。

「なつ!?! 最初に言つてくれよー!!」

「フオ、フオ、フオ、お約束じゃ」

俺たちはその言葉を聞きながら落ちた。

その浮遊感はこのに来るときとは違い、気分が高揚するような感

じがした。

トリガーハッピー

俺達は今、スカイダイビング中である。
雲を突き抜ける、遠くの方で見たことのない鳥が飛んでいる。こ
れでパラシュートがあれば文句なかった。

「ぎゃアアアア!？」

そして今、地面とのご対面。まさか、地面とキツスするとは思っ
てもいなかった。

「ああ!! パラシュートあったの忘れてた!」

「何だつて!？ はやくそ」

ぐしゃり、と肉の潰れる音がしたが、土煙や痛さで何も判らない。
げふげふ、と咳き込んでいるといつの間にか痛みは治まり、視界は
はれていた。

周りは木々で囲まれていて、人や人造物はないようだ。

「つう……おお! い、生きてるぞ!」

「まさか、本当に不死になっているとは……」

「しかし、大穴があいたな……。とりあえず動くか」

俺達の着地、と言うか墜落というか。地面が抉れてしまっている。
こんなところ見られたら大変なことになる。

どうやって説明すればいいのか……。元からって言えばいいのか
……。

そう、考えつつ地面と衝突してできた窪みを上がって行こうとし
たその時に、まるで幼子の様な細かい声が響いた。

「貴様ら、待て！」

「ん？」

「あ？」

一体こんな木ばかりのところに誰が……？ それにこれほど近くにいたのなら、先ほどの衝撃に気づいているはず……。これはちよっとやっかいかなあ。

《side：エヴァンジェリン》

私は真祖の吸血鬼だ。名をエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、と言う。真祖の吸血鬼 と言うのは、一種の純正な吸血鬼だと思ってくれればいい。

そんな私は従者のチャチャゼロと一緒に、三百年近く放浪していたところだが、いきなりすごい衝撃と爆音がして、漏らしそうになった。秘密だぞ ミ

一体どうしたことなのか、と気になって見に行くと二人の男がいる。なにやら驚愕して、場所を移そうとしているようだ。フッフ、今出ていったらかつこいいだろうな。

と、いうわけで奴らを引き留めなければならない。

「貴様ら、待て！」

しかし、何故地面がアホみたいになってるのだろう。

《side：out》

これは神様に、感謝しなければならぬのか？ まさかこんなに早く原作キャラに会うなんて。だって、こつちも早いと自分の能力を確かめることもできやしない。

しかしエヴァンジェリンが麻帆良に居なくてこんなところにいるのと、チャチャゼロが動いているのがまだ原作始まってない証拠だな。それくらい知識は俺だってあるぞ。甘く見ないで欲しいな。キリツとしてみる。

「なにやってんだ」

「気にしないでくれ」

小声でのやり取りだから、彼女には気づかれていないだろう。だが、キリツとした顔がどうも彼女には鼻で笑われて様に見えたらしく、少しご立腹の顔をしてらっしゃる。

これはちよつと下手にでて、様子をうかがうしかないな。

「えっと、どちら様ですか」

ここは知らない振りをしとく。しかし彼女の態度は相変わらずで、なんともまあと言つものだ。

「フン、私か。私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、闇の福音だ。それで、貴様らは何だ」

何だ、ってひどい。こつちが下手に出てるからって……まあこんなので怒るような俺じゃないし問題ないか。

少しの幼女がこんな喋り方をするのに奇妙な物を感じつつ、話を

進めようとしたところでスネークがいきなり怒声を放った。

「なんだとワレ！ 調子こいてんとちゃうぞ！？」

「なんでお前そんなに喧嘩腰なんだよ！？」

ピキ、と音のはしる。エヴァンジェリンの方を見ると、額に筋が

……。

ま、まあ落ち着くべきだ。ここで争っても不毛な争いにしかならない。さっさとこいつに謝らせればすむ話だ。

「……おまえ、さっさと謝っとけ」

「なんで俺が幼女に謝らないといけねーんだ！」

「ええい！ さっきから一体何なんだ貴様らは！？」

「俺か、よくぞ聞いてくれた。俺のコードネームはスネークだ！！」
「ケケケ、莫迦バツカダナ」

いや、エヴァンジェリンの何なんだ、は名前を聞いているわけではないと思うんだが……。あれ、どうして彼女は満足そうなお顔をしているのでしょうか？

まあ……いいや……友人がスネークと名乗ったんだし、俺も何か名乗るか。

「スネーク……蛇か。で、そっちはなんだ？」

ここはスタンド能力貰ったのだし、ジヨジヨ、と名乗った方がいいかもしれない。だが俺は、敢えてそうは名乗らない。と、というか本名は言わない。（作者が考えてすらいない）

「俺は……ラグナだ！」

ふふふ、スネークがぼかん、としている。何故この名かと言うと、最近格ゲーにはまってたからです。とくに深い意味はありません。エヴァンジェリンは小さな声で俺たちの名前を復唱しつつ、本題に入ってきた。

「……ラグナと、スネーク。それで、貴様らこの穴はなんだ？」

いきなり直球ですか。何かいい訳はないだろうか……。いきなり空からふってきました。なんて言っても信じるわけがないし……。どう話すか悩んでいるその時、ガサガサ、と辺りの茂みが大きく揺れた。誰かいるのか、と思って見たらそこには大人数の逞しい見た目で、ボディビルダーでもやっていそうな男達が現れた。

「ハツハツハ。闇の福音！ この通りすがりの傭兵様がぶつたおし
てやるぜ！」

ぞろぞろと、ボディビルダー達が茂みの奥から出て来る。各人、剣や斧、他にはどういったものか解らない物を持っている。それは一目見れば人を殺せるような凶器なのだ。
しかし、そんな相手にも臆せずエヴァンジェリンは相も変わらず暴言を吐く。

「貴様ら、何だ。五月蠅いから何処かへ行け」

エヴァンジェリンさんはさっきから貴様ら何だ、としか言わないな。

歳ですか。なんて、こんなことを直に言ったらなぶり殺されるの
だろうか……。

「そういつてられるのも今のうちだ……ぎああああ!？」

急に傭兵が倒れる。

悲痛な叫びが辺りに響く。それは断末魔というものだった。しかし、その状況はエヴァも、俺も、周りの傭兵達も、驚いている。

「ヒヤッハーハー!!」

と言う掛け声と、ともにスネークが『M63A1』を構えて、仄かに青紫色をしている魔力弾を撃ちまくっている。その弾丸は、数の多い傭兵達に次々と当たっていく。辺りの木々には赤い装飾がされていく。不思議と人が死ぬ、とは感じていなかった。

ただ冷静にスネークの様子を眺めていただけだった。トリガーハッピだったのか、なんてどうでもいいことを思いながら。

「ええい、怯むんじゃない!! 俺たち傭兵がおろしてどうする!？」

「そうだ! さつさと闇の複音を引つ捕らえて、帰るんだ!」

「こんな奴相手にもたもたしてられないぜ……」

傭兵達が反撃してきている。

スネークの撃つ弾丸はかなりの速度を出しているはず。それをこつも躲すのは、一体どういうことなのか。しかし傍観しているだけでは済まない。傭兵達は各々スネークを通り過ぎていく。

それでもエヴァは唯々傍観している。こうなってしまうては、俺が何かすることになる。俺のなりふり構わずの考え故か、体からエネルギーがあふれ出す。

「いまなら何でもできるような気がする……。出せるのか、俺に。別になんにも考えちゃあいないが、こんな考えで……」

ツピーじゃ……なかつたんだな。そんなことを考えながら、俺とスネークは地面に倒れ、気を失った。

《side：エヴァンジェリン》

全く何なんだ、こいつらは。

スネークと言う方は、傭兵達が現れたら持つていなかったはずの黒っぽい塊から魔力の塊を撃ち出している。

もう一人のラグナと言う方は、いきなり傍に半透明の男が現れて傭兵達を殴り殺している。

しかし、異常だ。奴らは、傭兵達の攻撃を防御せずただくらつている。おかしいのだ。普通の人間なら死んでしまうほどの血を流しているはずなのに。

未だに立って、傭兵達を殲滅している。奴らは普通ではないのか？ 私と同じ様な生き物なのかもしれない。しかし、奴らが傭兵を殺し、倒し終わったあと、急に呆然として倒れてしまった。

私はコイツらが気になったので、連れていくことにする。もちろん、チャチャゼロに引っ張らせて。

「御主人、重インダガ……」

「いいから、さっさと運べ」

「アイアイサー」

主人公達の設定(前書き)

いろいろチートですな。

主人公達の設定

主人公達の設定

1・ラグナ

神様の執筆活動の手伝いさせられるかわりに、スタンド能力と不老不死をてにいれた。

髪型はリボーンの骸 あとわかるな…？

スタンドは一体ずつしかだせない。

そりゃ世界に、^{ザ・ワールド}K・クリムゾンと、メイドインヘブン、同時に相手したら、ねえ？

一応主人公

でも、目立ちそうにない。目立ちそうもない。
トリガーハッピーがいるから。

この小説ではスタンドでできたものはスタンドを解除しても無くならないということになってます。

wikiの方にスタンドに触れるのはスタンドだけらしいけどそんなことじゃバトルにならないから無視ね。

そんなこと言ってたら敵は本体しか攻撃できなくなるじゃないか。

(一部のスタンドを除いて)

二つ名『悪霊使い』『ひとりなのに大部隊』とか『隕石ふってくるとか運良すぎだろ』とか『時の者』^{クロノス}

ランス世界ではつつこみになりますた。
好きなスタンドは世界。

2・スネーク

こちらも神様の執筆活動の手伝いをする事になり、能力をもらう。不老不死にメタルギアの登場キャラクタークターの技能。

(主にCQCだとかオセロットの跳弾だとか魔弾でできるかしらんが…)

あと、ギルガメッシュのバビロンみたいに銃器を乱射できる。

バビロンの中には無限バンダナとかステルス迷彩も。

さらにカロリ メイトまで！

無限バンダナの効果は魔力無限とか……あばばば。

銃弾だと大変なので魔力で調節できる魔弾になっている。

二つ名『乱射魔』や『トリガーハッピー』、『ちょ、やめ冷却スプレー、目がー』

トリガーハッピーである。

好きな銃はフェリスウィール・ピストル。

オリキャラ達

大抵はネギまで出てくるんで見たくないわー、と言う人は見ない方がいい。と思う。

1・バング

獅子神忍法を使う。

忍ばない忍びとは、一切関係ない。ただの転生者的存在。

2・獅子神

ライオン。

好きな物は長瀬楓。爪とか牙とかを使う。

こちらにも転生者。ライオンに産まれたことは不幸とは思っていないらしい。

3・エージェントC

似非紳士。好きな物はドリル。

文字のどこかがカタカナになる。（たまに作者が忘れることもある）
実は黒幕。

4・緋平

るる剣の張。みたいな感じ。太閤立志伝V的な技を使う。

好きな刀は圧切。

5・凍次

元ネタは新説ボボボーボ・ボーボボの邪ティ。だが男。

氷結真拳を使う。

6・7 カークランドとラインバック

名前はゾイド。ただし体系と喋り方は違う。くっす、みたいな感じ。
好きな物は兄貴、という生き物。

けんか

パチパチ、と何かが燃えているような音が聞こえた。

寝ぼけ眼を擦って開けると、空は真っ黒だった。木々から見える星はきれいで、都会ではみられないようなものだ。昔、田舎へ行つたときのことを思い出す。

「ん、起きたか」

近くから声が聞こえた。

起きてみると何故か正座しているスネークと、偉そうにしているが何故か可愛く思えるエヴァンジェリンがいる。その姿は腰に手を当てて、スネークを見下ろす形なのだが、いかせん身長が足りなくて背伸びしているようだ。

普通、吸血鬼相手にこんなこと考えてたら、死んでしまいそうだが俺達は地味に不老不死、と言うものだから痛いだけなんだろうな。そんな目には絶対遭いたくないが。

俺が思考の海（水溜まりぐらい）に潜っていたら、スネークが小声で話しかけてきた。

「すまん。エヴァの血が出るような拷問にたえかねて、神様うんぬんしゃべっちゃった。てへ」

鼻から血のあとが見えるスネークが言う。

まず、怒りよりも先に血の跡の位置がどう考えてもおかしいことに気づいた。それと先のスネークの喋った言葉、血の出るような拷問。鼻から血が出るような拷問ねえ……？

「……ほう、それは具体的にどのような拷問だったのかなあ……かなあ？」

「ああ、それがなエヴァが上目遣いでこうお兄ちゃん」と……」

俺の怒りは有頂天。

髪の毛はまるで怒髪天。このやり場のない怒り、ぶつける対象はたった一人。

「そうか……そいつはよかったな。なら、いっぺん……死んでこいやー！！ゴラァー！！」

俺はスタンドである『ザ・ハンド』を出す。こいつの右手はその空間ごと削りとる。つまりは、不老不死だろうが何だろうがお構いなしに削り取る。

ある意味、最強のスタンド。スタンドに強いも弱いもないが、『星の白金』でも殴りつぶせない物があつたら、これが適任だろう。しかし精神に依存するスタンドだが、案外俺の心の状態でどうにかなるモンだなあ。

「や、そ、それはやりすぎじゃないかなあ？ あはは……？」

「問答無用！！」

スネークの大事なところかを削っていく。それは男という、生物学上でもっとも自身を象徴する物であり、多くの男性にとって大切な物であることは間違いないことだ。

「ぎゃー止めて！？ もう俺のライフはゼロだ！！」

スネークの悲痛な叫びが耳を通り、脳を通り、また耳から出ていく。しかし……いくら削り取るうとも不老不死だから再生してくる。

高速で肉体の細胞が活性化しているような物なのだろうか？ 肉がどんどん増えていく様子を間近に見られる。いや、ただキモイ。

「キモイ。主に下半身がキモイ」

そんなスネークにとっては命に関わる物で、俺にとっては遊びをしていると、いい加減しびれを切らしたのか、エヴァンジェリンが大声を上げた。

「貴様らしい加減にしるー!!」

どう考えても彼女を怒らせるのは得策ではないだろう。俺はそう思い、仕方なしに『ザ・ハンド』でスネークを削り取るのをやめた。いや、別にエヴァンジェリンに言われたからやめた訳じゃないぜ？ ほんとだぜ？

「はあ……はあ……助かったよ、エヴァンジェリン」

「貴様はいいから隠せ……でないと次に私が葬ることになる」

「えっ、何をつてえ、服がきえちよるー!?!」

そう、肉体は再生しても服まで再生なんてうまい話はない。

「さて、転生して貴様らがバグな力を手に入れたのは知っている。あの馬鹿の能力はどうやら対軍を相手にしても平気みたいだが……貴様はどうだ？」

俺はとりあえず、気絶する前に戦ってくれた『星の白金』をだしてみる。出そうと思えば、かんたんに出せるようになった。

その逞しい体は言うまでもなく、俺が気圧されるような感じだ。いつでも英雄の精神はそばにいる、と思うと心強い。

「こいつが見えるのか？」

「ああ、見えるがそいつは一体何なんだ。さつきも似たような出していたが……」

よかった、見えてたんだ。見えてなかったらきつと俺がいたい人だったからな。しかし、何故スタンドがみえているのだろうか。スタンドはスタンド使いにしか見えないはず。

あれだろうか、神様がいじったのか？ まあ、そうしないと、見えない攻撃の連打だもんな。

いや、しかし『ストレンジス』の例もあるし、俺のスタンドパワーが強すぎるのだろうか？

「これは……降霊術かな……？」

「何故に疑問形なのだ。はっきりしろ！」

「えっと、精神体攻撃？」

「だから聞かれても困る」

「正式名称は……『スタンド』でいいのか。傍に立つもの、って意味らしい。いや、それとも『幽波紋』の方がいいのか？」

俺が迷い悩んでいると、エヴァンジェリンは催促してきた。いわ

く、お前はめんどくさい奴だと。

「普通は同じスタンド使いにしか見えないんだが……ま、いいか。一応これで殴ったり物に触ったりとかできる。さらに特殊能力付き」「そうか、貴様も不思議能力か。その特殊能力とはなんだ？」

「このスタンド『星の白金』は精密な動きに加えて時を止める、と言うかすさまじい動きで時が遅れるというか……まあ、要約すると俺以外のすべてが止まる」

「なっ!?!? そ、そいつは本当か! そんなことできるのなら、貴様本気でバグじゃないか!?!」

ここまで驚いてくれるのは、何というか……嬉しい物を感じるな。何故か、エヴァンジェリンの反応が子どもみたく、かわいく感じる。

「そこまでいうならやるしかないよな。『星の白金・世界』!?!」

そして、一切すべてのものが動かなくなった。スネークは股間を隠せる物を探している途中で、不自然に止まっている。エヴァンジェリンは、俺を前にして目を輝かせている。

しかし、エヴァンジェリンはどうやって俺が時を止めていることを知るんだ? まあ、そんな些細なことは気にせず。

「こいつぁグレートだぜ。マジに止められるとはなあ。よし、今のうちエヴァンジェリンにでも、触ってみようか」

俺が腕を腕を動かそうとしたとき、時が動きだしたことが分かった。辺りの空気が違うのだ。木々は風に揺らめき、スネークは慌てて、エヴァンジェリンは驚いている。

そうか、少し近づいたから瞬間移動しているようになるのか。

「む！ 貴様、動いてるな！！」

「どうやら今のところはせいぜい一〜二秒つてところか。それでもスタンドは成長する。今後に期待だな。」

「もしかしたら……恐ろしいことになるのかもしいな。そんなことは心の奥にしまつて、大きな葉っぱで股間を隠しているスネークに話を振る。」

「そういや、スネークのはどんな感じなんだ？ みせてくれよお〜」
「ふっ、やっと俺の出番か。俺の神憑った銃の腕前を見せてやる。いくぜー！」

スネークの背後からいろんな銃が出てくる。

『M16A1』や『M653』、『M4』、『AK47』、『FAL』、なんか『RPG-7』とかあるぞ。本人は『パトリオット』持つてる。それらが全部俺とエヴァのほうに……向けられているのは気のせいだよな？

「シユン、と風を切る音。それと俺の足下の地面は黒く焦げている。」

「うおお！？ さっきの腹いせかよー！」

「そうだ！ 何が悪い！ 俺にはその権利がある」

「バカ野郎が、やれやれだぜ。こんな子どものケンカの原因に、こんな物を持ち出してくるなんて……。」

「まあ、俺の悪かったと思ってるけど……少し怖かったじゃあないか！！」

「いいだろう！ なんならその土俵に上がってやるぜ！」

「さっさと来やがれ。怖じ気ついたか？」

「張り合うなよ貴様らー！」

「ケケケ、俺も混ぜテクレ」

銃の軍隊が相手なら……こちらも軍隊で勝負だ。

スタンド『バッド・カンパニー極悪中隊』全部で五十の小さな歩兵や戦車、戦闘ヘリのスタンドだ。その一つ一つは小さな力だが、五十すべてで攻撃したときの破壊力。

「これでおしつきってやるぜ！　そしてあのセリフを言う！」

「いくぜ！　オラオラオラオラオラアア」

「ふ、貧弱、貧弱」

side：エヴァ

私の目の前でたぶん、全人類がしっぽ巻いて逃げだすようなアホみたいな、激戦が繰り広げられている。

最初にラグナが、スネークの下半身あたりをすたんど、とか言うやつで消しさつたのが問題だろう。スネークが一面に、じゅう、とかいづのを出現させて、こちらに向けて撃ってきた。私は別に天才無敵の超絶ラブリーな吸血鬼だからいいんだが、こいつらはどうなんだろう？

む、そういえばスネークが不老不死とか言ってた気がする。これは家族……ゲフン、仲間が増えるんじゃないんだろうか。それは、うれしいな。ぐへへ……痛い！　戦闘中だったの忘れてた。

それに張り合うようにラグナはいきなり小人や、小さい動く物や、飛んでいる物を出した。さっきは男のようなのだったりしたし、いろんな種類があるんだな。

しかし、私はこいつが恐ろしい。さつき、ラグナがスネークの下半身を消した時に使った技は、下手したら死んでしまう、いや存在が消されてしまうのだろう。こいつらとは敵対したくないな。不老不死みたいだし、面白いし。

そういえば、こいつら魔法使わないな。……いや、さてよ？ 使わないんじゃないかと、使えないのではないだろうか。こんな、能力もってたらいらないだろうが、覚えていたら便利だからな。

よし、おぼえてなかったら私が教えてやろう。それを理由に……
ぐへへ。

「御主人、キモチ悪イゼ。」

side:out

「……落ち着いたか？」

「ああ……」

「う〜」

あのあと散々撃ち合ったが、どちらも不老不死、決着がつかなかった。結局散々な結果に終わり、決め台詞すら言えなかった。

しかし、スタンドについていろいろ分かった。

まず、スタンド使いじゃなくてもスタンドに対して目視、攻撃が可能。一体全体、どういう理由でこうなったのかは判らないが、どう考えても俺に対してのデメリットだろう。

スタンドの肩が剣で切られれば、俺の肩も剣で切られたようになる

る。スタンドと本体は一心同体。俺が死ねば、スタンドも死ぬし、スタンドが死ねば、俺も死ぬ。

だが、俺は死ぬことがない。痛いことは痛いんだろっけどな。

俺が思考の海（川サイズ）に潜っていると、エヴァンジェリンから話しかけられた。

「うむ、き、貴様ら……魔法はつかえるか？」

「多分使えないだろうな」

「無理だろう。そもそも魔法を全く知らん」

何故かエヴァが、宝くじにでも当たったような　すごく嬉しそうな顔をしている。それはまるで泣いて喜ぶや、うれし泣きなんて言葉が当てはまるのだろうか。

ともかく尋常じゃない喜び方に見える。

なんとって、スネークを喜びのあまりジャイアントスイングで飛ばしてしまっくらいだ。

「そ、それなら私がお、教えてやろうか？」

これは……喜ぶべきなのだろうか？

エヴァンジェリンと一緒にいる、と言うのは彼女といるだけで大変な目に遭うと言うことだ。それが彼女の悪名たかさを物語っているのだろう。

しかし、まあ……いいんじゃないのだろうか。別に一緒にいるのに悪いことはない。ただ、痛いのは勘弁だが。

スネークの方をチラリと見る。その顔は万事オーケーと、言っている顔だ。

「おーそいつぁ助かるぜ。ラグナもいいよな」

「バリバリ、カモンだぜ」

何故かまた、エヴァがいまにも昇天しそうなぐらい喜んでる。
どうしたのだろうか。彼女の喜び度をメーターにしたら、目盛りは振り切れるんじゃないのだろうか？

「よ、よし。この私に教わるんだからな、心しろよ！」

「アイアイサー」

早速、エヴァンジェリンはまず俺たちの魔力の多さを見ることにしたらしい。

これは気になる。こういう魔法がものを言う世界で、それを使う源はそれだけ重宝されるからだろう。

「ふんふん、スネークは魔力は申し分ないな。って何だそのバカげた魔力はー！ー！？」

エヴァンジェリンの絶叫で耳鳴りがする。

一体、何デジベルで叫べばこうなるんだ……？

「ふ、それは俺のロードが栄光に輝いているのさ。やっぱ俺すげえ、まじばねえな！ー！」

「うるせー。俺の速さは世界一だ（スタンドの速さ的に）」

とりあえず粹がったスネークを殴っておく。本当に調子に乗りすぎると、その股間を隠している葉っぱをとるぞ。燃やすぞ。

「なんなんだ全く……ラグナのほうは……あ、あれ？ どういうことだ！ 魔力が無いぞ！？」

「そしておまえは次に「まじでえ！？」という」

「まじでえ！？ ……はっ！」

どうしよう。俺には魔力がないらしい。

メラすら唱えられないなんて……いいや、俺には魔術師の赤がい
る！

全く問題ない。……はずだよなあ。

けんか（後書き）

エヴァにザ・グレイトフル・デッドを使うと、年相応の体になるの
だろうか。

傭兵さん

side：スネーク

皆さん、こんばつぱ。今日から始まりました。修行です。
いや、それほど大層なものでもないんだけど、ここの形から入った方がやる気が出ていいかなあ、と思ひまして。

実はあのあと、ジョセフっぽいセリフ言っただけなのに、スタン
ド『アヌビス神』が乗り移った刀を出してきて、器用にも内臓だけ
攻撃してきたんすよ。精神も乗っ取られてなかつたし。

あれは一体どういふことなのだろうか？

まあ、些細な疑問は置いといて、切られたおかげで血反吐を吐き
まくりですよ。窒息で何回死んだか。

さらにそんなことは置いといて、ラグナには魔力なかつたんだ。
だから、チャチャゼロと戦闘訓練しながらスタンドのチエツクとか
してるらしい。特にする必要もなさそうに見えるけどねえ。

たぶん、あいつの能力が上がったら俺、勝てなくね？

だって、『キング・クリムゾン』で魔力弾かわして殴ってもいいし、
『ザ・ワールド世界』使えば当たらないし。

何というか……俺のほぼ攻撃に特化したのと違って、汎用性高そ
うだな。いいや、これは所謂『隣の芝は青い』現象だ！

俺の方が、もっと便利なはず……何故なら、この異空間にはカロ
リ・メイトが……！

「おい、スネーク。聞いているのか？ 埋めるぞ」

何かエヴァさんがおかしいです。えっと、最初は喧嘩腰だった俺
だけど、何というか……もう、尻に敷かれている。

本当にこれでいいのか……俺。俺はおっぱいの方が好きだぞ。

……ホント、心の中でも読まれてるのかって感じがする。何故か
判らないが、エヴァの目つきが鋭くなった。ちゃっちゃとするべき
かなあ。

「はぐい。えっと、プラクテビギ・ナル 火よ灯れー」

点かない。いや、当たり前だろうけど。そんな一回や二回で点
くようなものじゃないって判ってるよ。

でもさ、こつほんのり暖かくなる程度にでも点いてくれるのなら、
やる気が湧いてくるんだけどねえ。

どうも、うまくいかない。それに加えて、エヴァからの酷評。

「貴様……才能ないな。あと、二回は死んでこい」

「ひどいよー！ エヴァたんとお『魔法の射手・連弾・氷の70矢』
うえーい！？ し、死ぬ！ help me raggunaaa
aaa!!」

side:out

なにか幻聴が聞こえた気がする。が、そんなことを気にしている
場合ではない。

俺はチャチャゼロと、これから俺がどうやっていくのかを知るた

めに手伝ってもらっているのだ。

「ケケケ、余所見シテテイイノカヨ〜？」

シュツ、サツ、と風を切る。チャチャゼロのナイフが襲ってくる。一応何とか避けているが、それはドッチボールでギリギリ球をよけたような感じだ。

こういうのに何とか対応できるスタンドなんていたか？ 頭の中で、色々なスタンドの像が浮かび上がっては、再び沈む。

（人型の、大ぶりの奴じゃあだめだ。躲しながらなんて、とてもじゃないがうまく操作できる気がしない）

小さい敵を相手にするには……ならばこちらも小さければいい。

「スタンド ハーヴェスト 『収穫』！ チャチャゼロに取り付け！！」

「ゲツ、ナンダコイツラ。切ツテモ切ツテモ、減ラネエゾ！」

チャチャゼロが ハーヴェスト 『収穫』を相手にしている間に、次の手を考える。次の手って言うのは、フィニッシャー級のスタンドをどう相手にあてるか、と言うことだ。

必然、今使っているスタンドは解除しなければならぬが……それをどううまくするかって話なんだよな。

「オイ！ コイツラホットイテイイノカヨ？ スタンドツテノハ、本体と繋ガツテンダロ〜？」

「ハーヴェストは無数の虫みたいなスタンドがたくさん集まったものだ。それは本体の耐久力を表すらしいが……俺は死なないからな。何度やられても問題ない」

「ソウイウ問題カヨ……」

わざわざ相手と同じ土俵に立つ理由はないんだ。

……さつきスネークと撃ち合いしていたのは例外として、相手が魔法使いだろうが人形だろうが、変態だろうがバグみたいな力だろうが。

魔法使いなら、『シルバー・チャリオッツ』の突きで詠唱する前に倒してしまえばいい。人形なら、『ハーヴェスト』で取り囲む、『バッド・カンパニー』でも良い。変態なら、『ザ・ハンド』で削り取ってしまえばいい。

バグみたいな力なら、こちらはそれを上回る力で倒せばいい。

結局、魔法が使えないだ何だと言ってても、大丈夫ならそれで良いじゃないか。

本当に心強い。

side：スネーク

「うゝわ……だめだ。うゝわ……」

点かない。なんだってんだ。

あれから、何度だって叫んでる。喉がひりひり痛んできたり、それにかまけてまるで精気の抜けた声で唱えていたときもあつたけど……それでもいつまで経っても火が点る気がしない。

この杖、実は不良品じゃああるまいな？

コツコツ、と手の甲に当ててみたりするが、これ以外の杖を知っているわけでもないのだから無駄だが。

「ホントもう一回死んで、魔法の才能もらってきたらどうだ？」

「い〜や、もう死にたくはない。このスネークには夢がある！」
「そうか、よかったな。まあ、がんばれ。そのうち点るかもしれん
しな」

「何ですか!?! その超投げやりな態度は!?!」

ちくしょう……完全に莫迦にされてる。

こういう見下した奴を見返すには、エヴァが俺に絶対にできない
って思ってる、魔法をやり遂げるしかない!

今に見てるよエヴァ!!

「……何というか、ド低脳、というか……まあ、扱いやすいしから、
問題ないがな」

side out

今は『ハーヴェスト』を解除して、ただチャチャゼロの攻撃を躲
しているだけだ。俺は死な無いのだから、相手を倒すことだけ覚え
れば良いわけなのだが、痛いのは嫌だ。襲ってきた、とは言え人を
殴って倒れた奴の考えることじゃあないな。

成り行きでここまで来てしまったけど、なってしまったものは仕
方がない。案外、こうなることが俺の運命だったのかもしれない。
そう思うのは、それはそれで、いいのかもしれない。だが、ずつ
と運命に乗っていくわけじゃあない。

「ケケケ、マアタ考エゴトカ。偉クヨユージャーネエカ」

チャチャゼロのナイフが鼻先を掠る。ピュツ、と血が飛び出た傷口が、ひりひり痛む。……少し、嫌な気分になった。こうまで俺は痛い、と言うのが嫌になったようだ。

人間誰しもそうだが、どうも過剰に感じる。

「ハハハ、そんなこと無いぜ。これでやっとだ」

チャチャゼロは本気でないからだろうか、ナイフはいつもギリギリの所を掠めていき薄く皮膚や、服の一部を切っていく。……それでも矢張り、嫌な気分は拭えない。

実は俺が根っからの平和主義者だから、と言うのなら解るが生憎そんな大層なモンじゃあない。別に自分が第一の普通な人間だ。いや、もう死ねないし人間じゃあないのか？

しかし、どうも気分が優れない。これはやっぱり俺の精神的なものから来るのだろうか。

ふと、気がつくのと辺りはもう日暮れの時のようだ。老いることのない体を持つためか、特に疲れたという感じはしない。……精神的には疲れを感じるが。

こんな時間なら、スネーク達は戻ってくるだろうと思い、チャチャゼロに休憩する旨を伝えると、その辺の木の根元に座り込んだ。地ベタだからって、躊躇しない。そんなこと言っただけなら、楽なときだけだからな。

『スタンド』……今の、無知な俺を守ってくれる、強すぎる者。

……やつぱもつと謙虚に生きれば良かったかなあ。そうしたら扱いに困ることもないのに……。でも、今更って奴だ。俺はこの力に責任を持って行動をして、真っ直ぐに歩く。

俺の両手はもう汚れているのだから。良くは確認していないが、さっきの傭兵……はあ……。よし、それも含めて真っ直ぐに生きていけばいい。まだ、はじまつたばかりだ。

ちよこちよこ、と歩く影が目に入る。チャチャゼロだ。

その表情は何を考えているのかはよく判らず、少し苦手でもある。こんなことは実際、本人に言えることじゃあないが。

だから、少し体が強張ったり、返事が素っ気なくなることもある。大抵はエヴァンジェリンがいたり、スネークがいたりするから平気なのだが……。どうもそういう訳にはいかないな。

「どうしたチャチャゼロ。俺に何か用か？」

ああ……。なんだか味気ない。って、そもそも俺に用がなければ、唯々恥ずかしいじゃあないか！

「イヤ、ナア……。今日、才前トイテ、思ツタンダガ……。ア、ア……」

「一体どうしたって言うんだ？ 何か俺に落ち度でもあったのか！？ そ、それならすぐにでも言ってくれ！」

チャチャゼロが口ごもるほどの用件なのか。こ、これは少しばかりじゃあなくて、強く心構えを持たなくちゃあならないようだな……！

俺はあきらめないぜ。どんな絶望な言葉を言われようとも、俺にはたくさんの味方がいる。心配することはない。ただ……。どうしようもないようなことを言われたらそれで終わりなのだが……。

「何ダカランダ言ッテ、ナカナカ動キノ筋ガ良イゼ。……チョットグライドケドヨ」

「ほ、本当か！？ あゝ……安心した。チャチャゼロに誉めてもらえるのなら問題ないな」

「アンマリ、浮カレンジャネーゾ」

今日一日、躲し続けていたけれど、これをずつとしていれば大丈夫だつて事なんだよな。俺は体力的には問題ないから、だとすると完全回避も夢じゃあないつてわけか。

これは希望が持てるぞ。明日からはもっと真摯な姿勢で取り組んでいこう。たかが服の先端や薄皮程度、切られたって問題ないわ。

俺が内心陽気になっていると、近くの茂みがガサゴソ、となつた。スネーク達が帰ってきたんだろうな、と思いゆっくりと腰を上げてそれを見てみると。

辺り一面、見渡す限り傭兵。右見て、左見て、もう一度右を見ても傭兵ばかり。こんなのに戻ってきて欲しいと思つた覚えはない。しかし、スネーク達は大丈夫なのだろうか？ ……エヴァンジェリンが点いているから全く問題ないと思うが。

そんなことより、俺の体は少し強張っている気がする。矢張り、強い力を持つとも、大人数を相手にするのは気が滅入る。が、すでに戦闘態勢をとつたチャチャゼロがすぐ側にいる。

「ケケケ、性懲リモナク良ク来ルゼ」

「む、なんだかいつにもまして数が多いな。私の絶対的カリスマに釣られてきたのか？」

「おお……汗臭そうなおツサンがいっぱい……エヴァは大変なんだな」

いつの間にか二人とも来てた。……全く気づかなかったんだが。それによく普通に会話に入ってこれるモンだな。俺としては小便ちびりそうであってられないんだ。

莫迦なのか。あんたらは恐怖も感じない莫迦なのか。

「私が恐怖することなど無いと思うがな？」

「恐れ入りました」

確かにそうだけど……いいのかそれで。

ゴソ、と傭兵達が茂みを超えてくる。矢張りいつまでも暢気にはしてられないのか。良く聞くと、後ろからも草をかき分ける音や、ガチャガチャ、と鉄の音が鳴っている。

これは囲まれてしまっているのか……。だが、この面子なら大丈夫だろう。後は、うまく手加減できるかどうか、か。

side：スネーク

すごい人数の傭兵達が襲ってきた。この数はハードモードなんだろうか。

駆けてくる傭兵は、俺たちに真っ直ぐ向かってくる。ただ、エヴァを狙ってきているわけでは為しに、俺たちまで標的にされているようだ。

慣れたものなのか、走りながら剣や斧を掲げ迫ってくる。勢いについて、ものすごい力が加わるのだろう。だが、それでも当たったときの話だ。

いくら人数がいようと、前から攻めてくる人数、横、後ろからは限られている。

「オオオオ!!」

「俺なら、隙間無く銃弾を飛ばせるんだがな？」

後ろの空間は不気味に揺らぎ、何も無いところから銃身が飛び出ている。傭兵達はいきなり見たこともないものが現れ、驚き足が止まっている。

彼らは判るはずもないが、銃身は半分ぐらいしか出ていないため、キチンと撃てる状態かは判断がつかないだろう。そしてそれは俺自身も同じ事だが、全く問題ない。

この銃の山に使われている弾丸は俺の魔力。装填も発砲も自由自在だ。

「止まっているのなら……… かんたんに中うちまうぞ!!」

ズダダダ、という発砲音と悲鳴が入り交じった空間。

傭兵達は倒れ、自分の得物を放し倒れていく。それでも彼らは傷つくことを恐れず、まだ前に進もうとする。しかし、その進み方は後には血、しか残らない。

彼らも莫迦ではない。逃げ出すものもいれば、後ろに回り隙を突こうとするが、俺は自由に動けるのだ。両手でしっかり持ったハンドガンでは狙いを外すこともなく、その眉間に吸い込まれていく。

side out

side: エヴァ

今日はえらく大勢だ。矢張り、私が超絶プリティクールビューティガールだからだろうか。おい誰だ今『それはない』なんて言った奴は。

しかし皆、張り切りすぎだ。こんな見渡す限り人、人、人。どこからこれだけ集めてきた？ あくまで私は賞金首だぞ。いや……：こいつらか？ さっきも傭兵が来ていたが、その時に、か。全く物珍しさに見るべきじゃあなかった。

「まあいいだろう。どっちにしろ放っておいて良い輩ではない。この、ビュウウウウウウウウウウティイイイイイイイイイイイイイイエヴァンジェリンがお相手しよう」

「ハアアア！！闇の福音覚悟オ！」

「ええい、違う！ 私はビュウウウウウウウウウウウウウティイイイイイイイイイイエヴァンジェリンだと、言っているだろう！ ……：全く、『リック・ラクラ・ラックライラック』」

「こういふ輩は話を聞かんから、やっていられん。……：まあ、わざわざ賞金首になっている者の話を聞こうと思う奴などいるまいが。そんな珍しいのは、あいつらぐらいだ。」

何も知らなく、言うことは突飛したことばかり。後者はスネークに限ってだが。

それでも、おもしろい奴らだ。まだまだだからな、私が守ってやらねばなるまい。そのために使うような魔法ではないが、今なら違う気持ちで魔法が使えるだろう。

『契約に従い 我に従え 氷の女王 来たれ とこしえのやみ えいえんのひょうが』

『全ての 命あるものに 等しき死を 其は 安らぎ也 おわるせ
かい』

side out

大人数の傭兵だったが、始まるやいなや数というアドバンテージも意味をなさない状態だった。問答無用で無力化されていき、血の海を作っていく。それは普段見るようなことじゃあないけど、この世界では良くあることなのかもしれない。すでに前の常識は通じないようだから。

それでも自分を襲ってくる相手でも、死んで欲しくないと思う。人を殺すような物を持っていたと、だとしてもだ。何故なら俺は死なないから。自分も反撃するような非常になるのはやっぱり難しいだろう。

これは甘ったるいだとか、他人に聞かれたら莫迦にされるだろう。もしかしたらもっと酷いことを言われるのかもしれない。だが、その他人はどこまで行こうが他人だ。俺が決めたことは俺にしか変えることはできない。他人にどうこう言われようとも、俺は俺だ。相手を傷つけないで、無力化する方法なんていくらでもある。それはこの精神とある。

そして、俺は選んだ『スタンド』を出そうと決めたとき、体が凍った。これは一体何だ？ なんて思う暇すらなかった。

気がつくくと、地面が揺れている気がした。冷たい感じはしないか

ら、氷は溶けたんだろう。体を起こして辺りを見れば、一面は何か大きなモノに飲み込まれていた。それは巨大な物体で、何か俺と繋がりがあるように感じた。

その物体はまるで傭兵を食べているようで、特に逃げ出している者を優先的に狙っているようだ。逃げられないようにするためだろうか？

気を張って立ち上がるうとすると、物体の背中と思う部分がいちいち動いた気がした。それは伸びてくるような感じで。俺はもしかと思いつくり、慎重に物体の前方に回ってみる。傭兵達に気づかれた様子はなく、各人逃げるか戦うかに集中しているようだ。

少し時間をかけて、前方まで回って俺は驚いた。この物体は『スタンド』であったのだ。そしてその正体は『ノートリアス・B・I・G』。こいつは本体が死んだときの恨みで動く、『自動追尾型スタンド』分け目もふらず、とにかく速く動いた者を優先的に狙って攻撃する。対象を追いかける速さは、それよりも速く人間だろうと飛行機の燃料だろうと、何でも食らい自身のエネルギーとしてどんどん吸収していく。

こいつが現れたのは俺が死んでしまったからなのだろうか？

「ひっ……！？ に、逃げろ！ こいつ……いくら切っても復活して、俺たちじゃあどうしようも無いぞ！」

『ノートリアス・B・I・G』は、そうやって逃げていく者を食らい成長していく。

このまま見ていただけじゃあいつかみんなを攻撃してしまうだろう。そうなってしまったら、こいつは無限のエネルギーを手に入れることになる……！ そうなる前に何とかして、こいつを消滅させなくてはならない。

どういうことか、『ノートリアス・B・I・G』を戻すことはできず、俺が制御することはできなくなってしまう。ダメージ

を与えて消そうにも次々と再生していくため、倒すのが難しい。

だが、再生する間もなく粉微塵にしてしまえばいい。

「『キラール・クイーン』 第一の爆弾！！ こいつを爆弾に変えてしまえ！」

俺の側から現れた、人型のスタンド。体の至る所にドクロの模様がある。こいつの能力は『指先で触れた物質や生物を爆弾に変化させる能力』で『ノートリアス・B・I・G』を爆弾にすれば、こいつを止められる。

だが、現実はそのうまくいかないようで……高速で動く『キラール・クイーン』を狙って、思いもよらぬ方向から攻撃される。

「くっ……！？ な……なんとか触れさえすれば……アア！！」

何度触れようとしても跳ね返され、カウンターで触ろうとしてもそれを上回る速度で反撃される。

どうやっても届かなくて、どうすればいいのか膝をついたときに、手が伸びた。

「ケケケ、コンナ所デノンビリシテテ、良イノカヨ？ アレヲ止メルンダロ」

手を伸ばしてくれたのはチャチャゼロだった。しかし、それでも速ければそれより速い『ノートリアス・B・I・G』を触るにはどうすれば……？

「才前ヨリ速ク動ケバ良インダロ。何ダ御主人ノ相手シテルヨリ楽ジャーナール」

「はあ……？ い、イマイチ言ってる意味が分からないんだが……？」

「……ケ」

チャチャゼロがいつもと変わらない表情で俺を見ている。でも、目は笑っていない。まるで俺が自分で解れて言ってるみたいだ。シュツ、と影みたいにチャチャゼロが飛び出すと、『ノートリアス・B・I・G』の巨大な体が丸ごと動いた。それだけチャチャゼロが速く、優先された、と言うことなんだろう。しかし、このままではいずれチャチャゼロも食われてしまう。それまでにどうにかしなければ。

意気込んで、思いっきり立ち上がってしまった。慌てて『キラークイーン』を前に出してガードしようとするが、何も飛んでこない。不思議に思っただけを見れば、そのすべてはチャチャゼロが相手をしている。

これは……チャチャゼロが速すぎて、他の物体を追おうとしていない……？ 他の傭兵はエヴァンジェリンの援軍が来た、と思っただけ各人得物を放して逃げ出している。

普通なら『ノートリアス・B・I・G』がそれを見逃すはずもないが、チャチャゼロを狙っているためか！ だったらそれを無駄にしないためにも、さっさと終わらせるために。

『キラークイーン』 第一の爆弾！！ セットだ」

そして、『キラークイーン』の右手の人差し指にある起爆スイッチを押せば、後形もなく消し飛ばはす。

「これで勝った……！ チャチャゼロ、速く離れるんだ。爆発するぞー！！」

「ヤットカ。全ク……御主人もコイツモ手間ヲ懸ケサセルゼ……！？」

『ノートリアス・B・I・G』から離れようとしたチャチャゼロに、さっきまでとは比べにならないほどの速度で手が伸ばされる。縦横無尽に伸ばされた手はチャチャゼロをつかみ取ると、その魔力を吸収しようとし始めた。

しまった……。くそ、こうなりやあもう、押してやる……！

「点火だアアアアアア！」「キラール・クイーン」スイッチを押せ
エエエエエエ！！」

カチリ、と鳴ったスイッチの音を聞いた者はいないだろう。それを上回る爆音が、辺り一帯を揺るがした。『キラール・クイーン』の爆弾は、内部から爆発し、髪の毛一本残すことはない。さらにその爆発自体の規模すら調節することも可能なのだ。

どれほどの質量を持つ『ノートリアス・B・I・G』爆弾にしよ
うとも、木っ端微塵に爆発させる大きさにすれば、他に被害がいく
こともない。

そう思っても、案外爆発が近すぎて耳が痛い。それに加え、火と
光でとてもじゃあないが目を開けられない。風の勢いもすごく、後
ろに吹っ飛ばされてしまう。

気がついて、ヨロヨロと起き上がると、辺りにはそれほど変化は
見られない。所々の木に『ノートリアス・B・I・G』の破片が見
られるが、それらはもう再生できる状態ではないようだ。

爆心地に来るとそこには煤に汚れて、服が汚れているチャチャゼ
ロがいた。どうやら本人も何故自分が無事なのかよく解っていない
様子だ。

「チャチャゼロ……無事か？」

「オ！ コイツハ一体ドウ言ウコトナンド？」

「その前に『ノートリアス・B・I・G』に食われた部分と、服を

直さなくちゃあな」

いつの間にか引っ込めていた『キラール・クイーン』に感謝をし、新たにスタンド 『クレイジー・ダイヤモンド』を出す。

さつと、チャチャゼロに触れると今までの状態が嘘だったかのようになり、新品同然の姿に戻る。チャチャゼロが驚いているが、どうやら『ノートリアス・B・I・G』にエネルギーの魔力を吸収されたようで、うまく動けないようだ。

「オオ！ スゲエジャアネエカ！！」

「おいおい……あんまり騒ぐな。間違えて原材料にまで戻したらどうする？」

「ナ……！？ ム、ムグウ」

手を交差して口を塞いでいるが、こう見るとただのかわいいお人形さんに見える。

『クレイジー・ダイヤモンド』にも感謝をしてから、チャチャゼロを持ち上げる。片手で乱暴に持ち上げたりせず、両手でしっかりと。

彼女は命の恩人だからな。もし、あのままなら『キラール・クイーン』の爆弾をセットすることもかなわず、本体の自分も食われていただろう。本当に、本当に……良く来てくれた。

「さて、エヴァンジェリン達の所へ帰るか」

「マテ！ ソノ前ニコノ持ち方ハヤメロ！！」

はて……？ この持ち方というのは『お姫様だっこ』と言う奴のことかな？ わめき散らすチャチャゼロの声は、耳から入り脳を通ってまた出て行ってしまった。

カーン、と蹴った傭兵の剣はくるくる回り、止まって残る。

俺は強い心と精神を持って、進むことに決めたのだった。

傭兵さん(後書き)

『ノートリアス・B・I・G』爆散！なんちゃて。

なんだかチャチャゼロ にはいつてる気がするが気にしない。

もし、スタンド名を『』で囲むのが煩わしいんなら言ってください。

外伝・天啓を受ける（前書き）

オリスタンドが嫌な方は戻るをクリック。
内容薄めです。

外伝・天啓を受ける

空は快晴。朝の気分は絶好調。今日はそんなとても平和な日である。

そんな日に、何故か天啓がきた。

『ピローン、新たなスタンドに目覚めました』

頭の中にそんな言葉が走る。ついつい嬉しくてバンザイしてしまったせいで、スネークに変な目で見られた。

気にしないんだぜ！ いや、さすがにキツイ……俺はこの世界から自由になる！ ……一巡するか。

「おい、ラグナ。桐生さんが天啓受けた顔して、どうした？」

「フッフッフ……来たんだよ。新たなスタンドが！」

「何イ！？ そいつは本当か。なら、さっさと見せてくれよ」

スネークに答えようと、早速スタンドを出そうとしたところでいつの間にかエヴァンジェリン達が来ていた。

いつもと変わらぬ格好をして、まあお世辞にも中学生程度と言った身長をしている。

こっ、いつもいつも思っているせいか、そのうち顔を合わせるたびに殴ってくるんじゃないのだろうか、と思ってしまう。現にエヴァンジェリンは右手をグーにしてらっしゃる。

「どうした？ ラグナが鳥のフンでもくらったか」

言葉の暴力なのか、グーパンチではなく何気に酷いことを言うてくださる。それほど頭に来ていたのか。今度からそう思わないよう

にしておこう。

エヴァンジェリン達が来て、水を差した感じになったが気を取り直して、もう一度スタンドを出そうとする。

「……………まあいい。『踊る妖精』!」

「おお、なかなか名前じゃないか……………さて、いったいどんな……………うっ!」

虚空から現れたのはおかしな髪飾り、こしみの、スネゲ、そして奇妙な踊り。多分であろうが、大抵の者が知っている『キタキタおやじ』である。

どこでどう一体間違えたのか、俺の精神はどうやってたらこんな奴を……………。

「おお、あなたがマスターですか。私、アドバーク・エルドル。剣と魔法と踊りまでこなすスーパー賢者ですぞ」

「おお、ラグナよかったじゃないか。すごいのがたぞ!」

「ケケケ、外見八変ダガヨ」

「……………」

エヴァンジェリンとチャチャゼロは大絶賛をしている。が、そういう事をするような相手じゃあないんだ。

一歩間違えれば一体どんなことに巻き込まれるか解ったモンじゃあない。さっさと引っ込めてしまおう。……………あれ? どうして……………?

「どうしたラグナ?」

「このスタンド……………引っ込めないぞ!! 一体どうなってやがる!」

「マスター元気がないですな。私が一つ踊りましょうか」

俺がスタンドを引っ込もうとしたとき、何とこいつは踊りだしてしまっただの。そして、どこからともなく聞こえてくる気が抜けるような音が、おやじは完全にノリノリになってしまった。

ピ〜ヒヤラ〜ラ〜

「ん？ な、なんだ！ 体が勝手に動くぞ！？」

「服までかわったぞ！？」

「ケケケ、ナメタマネシヤガル」

「ハツハツハ、私の能力は踊りだしたら周りまで巻き込んで止まりませんぞ。マスターは別ですがな」

くそ、なんでこんな奴に限って、自我があるんだよ。いや……ただ無言で踊るだけなのも十分怖いが。

しかし、なんて面倒な能力なんだ。ある意味使えそうだが、仲間がいる状態じゃあ、逆に足を引っ張ってしまう。

「ラ、ラグナこの変なオヤジを止めてくれ〜！！」

「ハツハツハ、無駄ですぞ。私を止めるにはマスターがキタキタ踊りの正装フォーマルを着て踊らねばなりませんからな」

「ラ、ラグナ〜」

エヴァンジェリン達が露出度の衣装を着て、不思議な踊りを踊っている。

……俺はこのまま仲間たちを見捨てていいのだろうか。子供みたいなこれが嫌ってやつをやっちゃまって。

俺は仲間、前世からの付き合いのスネーク。たまたま出会って一緒にいるエヴァ。その従者のチャチャゼロ。

こいつらを本当に見捨てちゃまっていいのか？ いや、絶対にだめだ。そんなこと転生させてくれた神様だってやらせはしねえ。

「俺は……踊るー!!」
「ならばマスター、これを」

俺に変な髪飾りとこしみのを渡してきた。……これを着てぴゅぴゅやらやらかなきゃあいけないのか。何てこった、いざ衣装を前にすれば一瞬にして決意なんか吹っ飛んでいってしまった。駄目だ、できそうにない。

俺があと一歩で折れそうになるとき、仲間の顔が目に入った。みんな苦しそうだ。あたりまえだろう。あんな服装させられて、拳句の果てにはぴゅひゃららという踊りをさせられているのだ。

なのにみんなは俺ができなくても許してくれそうな慈悲深い顔をしている。

……俺は駄目だな。こんなとこでくじいてる暇はねえ。このラグナ一時の恥を耐え忍び、仲間を救えねえ一生の恥は選らばねえ!

「いくぜおやじい!!」
「フハハハ、マスター、来きなされえ!」

ラグナの勇気が仲間を救うと信じて。

御愛読あり(r y)

外伝・天啓を受ける（後書き）

気にしないんだZEE！

スタンド：踊る妖精^{キタキタおやし}

自我を持つスタンド。踊りだすと周りにいる本体以外の生き物などにキタキタ踊りをおどらせる。

発動したら消すには本体がキタキタ踊りの正装をきて踊らなければならぬ。なんてね。

実はすべて口実で、キタキタ踊りの継承者を捜し中。

やあみんな。今日もこんぱっば〜だ。朝でも昼でもこんぱっば〜。何故死にかけたのにこんなにもハイテンションなんだって？ ……
…そうでもしなきゃあやってられないんだ。チャチャゼロと、エヴァンジェリン達の元に帰れば、やれ、さっきの爆音は何だ。やれ、チャチャゼロどうなってるんだ。だのと、矢次に質問攻め。

これでは疲れるというわけだ。

そもそも、『ノートリアス・B・I・G』が発現したのは、俺が死んだために出てきたのだろう。あの状況では不死がかんたんに死ぬとは思えないが、気を失う前は何か冷たい感じがした。

この中で、冷たい 氷なんて使えるのは俺とエヴァンジェリンしかない。俺が自分に攻撃するわけがないから、エヴァンジェリンに問い詰めたところ『そんなこと私を知るわけ無いだろう。そんなことよりどうしてチャチャゼロがこんなにも綺麗なんだ？ 新品同然じゃあないか』後は魔力がどうこう、と言っていたが結局はぐらかされたのに違いない。

まあ……そんなわけだから今日は俺の友人、スネークに視点を移してみようと思う。新たな発見があるかもしれない。

何ッ俺のほうがいいって！？ 八八八、そんなに引っ張らなくてもいいじゃないか……うっ！？

「シヤアネエケド五月蠅イノ八終ワツタゼ」

「うむ、流石チャチャゼロ。このビュユユ（ry エヴァの従者だ。褒めてつかわずぞ！」

「ケケケ……バカバツカ」

side：スネーク

俺のコードネームはスネーク。蛇だ。

ラグナと一緒に死んだあと、この世にきた。いろいろあったな。

(遠い目)

そして何故か、エヴァに会い、傭兵達にもよくあう。これは運が良いのか悪いのか。そういうわけか最近、傭兵達と仲が良くなった気がする。あれかな、『CQC』の練習に素手で挑んだからかな。

「へっ……なかなかやるじゃねえか」

「フツ、お前もな」

なんていう素敵なシチュエーションなんだろう。俺は断固断るけど。

この前、倉庫(『メタルギア』のアイテムが入ってる便利な倉庫)を漁っていたら、レーションを見つけたんだ。どんな味かな、と思って食べたら焼け過ぎだった。うちには四つ星コックはいないので、なんて切実に思ったよ。

でも、『カロリー メイトメープル味』が有ったのは感動したね。

数あるってほどじゃないが、『カロリー メイト』の中でも俺が一番好きな味だ。他にもチョコやチーズ、ポテトも有って驚いたぜ。話が変わるけどさ、俺『ESP能力』使えるか試したんだよ。こっ、頭で石ころなんかを動け動け動けって、念じてたら石ころが浮

いたんだ!! 嬉しかったよ。まあ、使うか解らないんだけどね。
また話が変わるけど、『高周波ブレード』なるものがあつたんだ。
『雷電』の技能や『サイボーグ忍者』の技能のおかげで、岩や木が
スパスパ斬れたから、この前ラグナのスタンド『アヌビス神』に殺
られたから、御返しにいったんだ。

ええ、負けましたよ。あっさりだね。

『雷電』の運命なのかどうかは解らないが、かっこつけて斬りに
行ったら、石に躓いてこけた。『MGS4』でも、かっこつけて腕
落とす羽目になってたし。

それとエヴァに魔法、才能なしっていわれた。エヴァいわく「魔
力があつても、魔法の才能なし。だめだあこりゃあ」
なので、『CQC』の修行と剣技を高めている。

覚悟! ガンドルファイ二! さらに、刹那修行フラグはいただい
たあ!

フッフ、さらには銃の知識で真名に急接近!

スネーク! 今回の任務はバイアスロン部部长を抹殺せよ! 了
解だ。……少しはしやぎすぎました。すいません。

今度ラグナと話し合おうかな。今後の大戦だとかいろいろあるし。
でも明確な時期とか分かんないんだよな。

なんとかなるかな、うん。

俺さ……『メタルギア』作ろうと思うんだ。『REX』とかの。

こいつがどういったことに使われていたのかは、作中でよく解つ
てる。でもさ、これの使い方やそういった方面にしか向けなかった
から、悉く破壊されていったんだと思う。

だから、俺はまた違った方面に役に立てたいと思うんだ。『オタ
コン』や『ヒューイ』に『ストレンジラブ』とか、ひしの技術者
陣の技能があるから。

知識としてはさっぱりなんだけど、どういいうわけか解るんだ。こ

の世界の技術レベルが上がってきたらやろうかな。

それで超を驚かせてみたいな。もしかしたらスカウトされるかもしれないなあ。考えれば考えるほど無限にあふれ出て来るみたいだな。

何だがすごく楽しいな。

これで、俺としての方針は決まった。よし、ラグナに話に行こう。

> side out <

スネークがこっちきた。ちよっ今回はスネークの話だったのに。そして、それを口実にした俺の休憩って真の目的まであるのに……。しかし、どうも話があるようだ。聞いてみる。

かくかくしかじか。

「今後の方針か……そうだな、俺はあまり介入したくないな」

「どうしてだよ？ せっかく、来たんだぜ」

どっちにしろ、なし崩し的に関係を持ってしまいかもしれないんだけどな。それでもだ、もし町中で俺が死んじまうような出来事が起きたら、ただじゃあすまない。それこそ俺が大災害だ。

でも、どうしようにも関わってしまうのなら、関係は良好な方が
良い。

「一応、大戦ぐらいは出るつもりだけどよう、麻帆良学園は勘弁願

う

主にナギの息子であろうネギが面倒くさい。って言うのは口実で、学校というのに慣れることがない。その時になったら、実年齢はうん百歳って成っているのだろう。そういう状態で大丈夫なわけがない。

もしも、そこに居るといふのなら何かしらの手伝いはさせられている可能性もある。だからって教師何ざやるわけではないが……。

どうにもこうにもうまくいくはずがないんだ。どれ位っていうと、逆立ちして水飲むぐらい。不可能の領域かもしれない。

「でも、ヤマ場だぜえ？ 女の子いっぱいじゃウフフだぜえ？」

「エヴァンジェリンやチャチャゼロがいるから十分だろう」

「……？ エヴァは解るが、どうしてチャチャゼロなんだ？」

「げふんげふん！！ まあ気にすること無いじゃあないか。アハハハ……」

何とか流せたかな、と思っで一気にわき出てきた汗をぬぐおうと、腕を上げたときに突然、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

（ならん！！ ならんぞ……いかんぞ……関わってもらうからの、絶対じゃあ！！）

「こ、この声は界お（じゃあかしい！！ わしじゃあわし。お主らを空から見守ってる神様じゃあ）なんと……」

声の主はいつぞやの神様であった。

しかし、一体何のようなのだろうか。こちらに来てからの初めての連絡だが……。

(いやあ、の？ 見ておつたらお主達が不拔けたことを抜かしたりするからの、強制的に関わってしまうようにしたのを連絡させてもらったのじゃあ。これでも良心的なのじゃあぞ？ なかには言いもすらない神だって居るのだから。それでは特に聞くことはないの？ 心が読めるって便利じゃあのか)

「またもや長つたらしい話を聞いて、思ったことは……仕方ないのか。」

そして話の内容も前半部分は聞き捨てならないことばかりだった。……後半はどうでもいいが。しかし、こうして無理矢理にでも関わってしまうのならどうせいっそ……。

「と、言うわけだ。足掻いても無駄だし、やるぜラグナ！」

俺がこれからどうしようかって、悩んでいるときに声をかけないで欲しい……。しかし、スネークの言うとおりにこのまま加わってしまうのは何だが妙な敗北感もあるからな。

「だが断る！！」

「無駄！ 無駄！ お前の運命はもう決まっているんだよオオオ！！」

「かんとんに運命どころ、言ってんじやあないんだよ！！」

俺が一步前に出れば、スネークも一步前に出る。そのたびに喉が痛くなりそうな大声で、自分の主張を押し合う。どう見ても醜い争いだ、友達同士だからできる一種の遊びって部分もある。

どちらも本気じゃあなかったんだが……いつの間にか手近にあるものを投げるような感じで、スタンドを出したり、魔力弾を打ち出したりしていた。

「そこだ！ 各砲、てえええっ！！」

「これで……決めるっ！ 『ザ・ハンド』！！」

「おわああ！？ お、お前本気かああ！？」

「まだだ。まだ終わっていない！」

「ふん、自分の主張を曲げられないからって、あれだけやったのか……？」

「すみません……ホントすいません」

「ごめんなさい……もうしません」

ただいまエヴァンジェリンによる説教中。

どちらも引き際を知らぬまま戦い続け、何事かと、飛んできたエヴァンジェリンとチャチャゼロに止められて、もうかれこれ二百四十時間。もう十回は朝日を見た。

不老だから、時間の感覚がおかしいのかエヴァンジェリンはずっと立ち続けている。でも、俺たちは正座。

そして、戦いが起こった経緯や自分たちの考えを話させられた。エヴァンジェリンは若干、考える素振りをして、こう切り出した。

「ふう……そのうち大戦がおこるから行かせてほしい、か……。私は面倒だから行かんぞ。だが仮契約してもらおう！」

「断る……！」

これほど息の合うことは久しぶりじゃあないんだろうかと、思いながらも次のエヴァンジェリンの怒声を防ぐため、耳を押さえる。

「何故だ一体何が悪い！！ この可憐な私が仮契約してやるというのだぞ！」

「どうせ俺たちをこき使うつもりだろう？」

「うっ！ だが……ぐぬぬぬ……」

どうも凶星だったようで、エヴァンジェリンの頬はいつもより赤みが増している。

「まあ……大戦終わった後なら、いいと思っぜ。きつと暇なんだろうからな」

「うむ、わかった。約束だぞ！ で……大戦っていつなんだ？」

俺とスネークは顔を見合わせて、お互いうなずくと俺が口を開いた。

「……そのうち」

「わかってないのかー！！」

「だ、大丈夫だ！ 俺が『キング・クリムゾン』でふつとばす！ えいや」

ここは一体どこだろう。どうも辺りは変わりなく、近くに女の子がいる。少し見たただけだが、どうも見たことあるような……？

誰だったのだろうか、と黙っていると女の子がこちらへ来た。どうもすごく驚いているように見える。

「あなたたち、どこから来たネ!? いきなり現れたヨ!」

「もしかこの独特なしゃべり方……彼女ではないのだろうか? そう思い、そして外れて欲しいと願いつつ彼女に聞いてみた。」

「もしかして……超鈴音ですか?」

「おお! なんで分かったヨ? あなた達いたいだれネ?」

「あーもしかして火星?」

「そうアルって私の疑問に答えてないヨー!」

BADEND 『キング・クリムゾン』は計画的に。ってこんな
終わり方があって良いかアアアア!!

戦国

殆どの生活は怠惰であった。

日がな一日ごろごろし、まさに夢のような生活であったが、ものすごく暇なのは変わりなかった。

傭兵　と呼ばれる鋼の肉体を持つような者も現れなくなってしまった。それもそうだろう、唯でさえ狩り難いエヴァンジェリンに加えて俺たちも居るのだから。

そんなことをするなら、まだ食い逃げでも追っている方が良い。結局、特にするべきこと無くこんな日になってしまった。

どうも大戦の片鱗が起き始めてるらしい。そこから小さな小競り合いがあった、と言うのも良く聞くようになった。

そろそろエヴァンジェリンに話に行くべきかな。

「エヴァンジェリン。どうも大戦が起きそうだから、行ってくる」「ん……もうそんな時期か。よしラグナ行くか。エヴァも達者でな」「そうか……べ、別に寂しいなんて思っていないからな！！　がんばって逝って来い！」

何か不吉な気がした。でも、不吉どころでやられるようなモンじゃない。そんなんで片付けてしまっただはお話にならないから。

ある程度歩き、もうエヴァンジェリンから見えないだろう、とい

う所でスネークに話しかける。

「俺、ちょっと旧世界に行ってくる」

「え？　なんでよ？」

矢張り、疑問に思ったスネークが聞いてくる。そりゃあ、突然違う所へ行くなんて言われりゃあ疑問に思うのも当然だろう。

まあ俺も何も考えていないわけないんだから、その何言ってるのって顔をやめてくれ。

「早い時期に行動しすぎて、うまくいかなくなるようなことを避けるためだ。この世界で生きていくのならイレギュラーは少ないほうがいい。どこでどうなるかわからないからな」

おお、怖い怖い。って言う単純な理由です。本当に俺が、損な目に遭わないために唯うまくしようとしているだけなのだ。

えっ、スネークは？　って、こいつは無駄に元氣じゃあないか。

少しは水でもかけて冷やさなくちゃあいけないよ。

「じゃあさ、なんで大戦に関わろうなんて思ったのさ？」

「少しでも英雄なんて呼ばれるようなのと、接点あったほうがいいだろ。多分、俺たちが居るけど、エヴァンジェリンの麻帆良入学は変わらないと思うし、なにより神様が無理やりやってくると思うかね……」

スネークは手を顎に付けて考えるような素振りをしている。まあ俺は止められようが、止められまいが行くつもりである。何たって、今までずっと三人と人形だったんだ。

家なんて物はなかったし、一人の時間なんてもっての他。この夕イミングでしかやりたい事ができないのだ。

「ん……あーそれもそうだな。じゃあ俺は行ってくる」

顎から手を放し、こちらを真つ直ぐ見たスネークはこう、言った後歩き出してしまった。この結論は彼なりに考えた末に出てきた答えなのだろう。

「じゃあな、余り暴れるなよ。俺も適当な時に行くだろうから」

俺もスネークとは違う方向に歩き出す。長い付き合いだが、あいつとは同じような生き方をするとは思えないな。

なんたって、性根から生き方も、考え方も、精魂も違う。まあ、だからこそ一緒にやってこられたのだろうけどな。

歩き出してから、まだ数刻だろうか。

俺は順調に旧世界へ行くゲートを目指して歩いていたはずなんだが、どうもゲートらしきものが眼前にある。

ちよつと日本語がおかしい気もするが間違っちゃあいない。俺はゲートを探して、街などで情報収集なんてしようと思っていたら、何故かゲートを見つけてしまった。と言うことだ。

しかも、うっそうと木々が生え茂る秘境みたいなところだ。どう見ても、長い間使われているようには見えない。

「なあ……神様よ？ あんた見てるんだろう。これも か？」

（いや……ワシは知らんのう。そういうのは弄った覚えはないから
の）

なら、唯々俺の運が良かった、って訳なのか。好都合なのか、それとも……。まあどちらにせよ行くことには変わりないのだから、ここを通っていくことにする。

だが、神様はいつも見ているのか？ それならプライベートもありゃあしない。

(うるさいわ！ 妙な詮索せずに、さっさと行ってくるのじゃあ。

ホレエ！)

「うわあああ!?!」

神様(ボンクラ爺)が気合を入れると、後ろ風が吹いてゲートに無理やり入れられてしまった。一体どこに着いてしまうのやら……。もしも、口にもできないような所なら神様を一生恨んでやる。

「いてて……」

放り込まれるようにして、ゲートに入ったため着地は等閑なおいりになっ
てしまった。

打った頭を押さえつつ、辺りを見回してみるがそこは、ゲートに入った所と幾分変わりなく、木々がそこらに生えている程度だった。ここで頭を押さえているわけにも行かず、とりあえず歩くことにした。

少し迷ったが案外歩きやすい所だったようで、いつの間にか開けた場所にでた。

そこには小屋……だろうか？　どうも木造の住居に見える。もしかすると日本かもしれない。

少し近づくと、樵しゅうだろうか、人がいる。今まで歩き通しで、人にも会わなかったので少し寂しかった。いつも隣にはみんながいたからなあ。おっと、ホームシックだろうか。もつと強く気を持たないとな。

樵に近づいて、話を聞いてみることにする。

「すまん。ちよつと良いか？」

樵はこちらに気づくと何かをやっていたのだろうか、手を休めてこちらに向き直った。

「なんだべ？　お前さんこちらで見ねえ顔だつべが」

「ははっ……今さっき来たばかりでな。で、聞きたいんだが……ここは日本か？」

もう聞かなくても言語が通じているし、顔を見れば何となく解ってくる。だが聞いた手前、話しかけておさらばはちよつと悪いだろう。まあ、確認の意味を込めてって感じかな。

「そこはどこだつべよ？　ここは日本つて所じゃなくて、『JAPAN』だべよ。お前さんは異人つぺかあ？」

「ああ……異人だからちよつと乏しくてな」

ふむふむ、日本じゃあなくて『JAPAN』か……。もう、日本には英語が入ってきているのか。それも、こんな田舎みたいな所まで入ってきているのか。まあ、ハイカラなものが好きなのだろう。それじゃあ時代的には、黒船来航とかは終わってしまったのかなあ？　なら、幕末の人とか見られるのかな。

「もう一つ良いか？ 矢張り、徳川將軍は江戸にいるのだろうか？」
「変なことを言う人つべね。徳川の狸は三河つべ。それに江戸
関東は北条が支配してるつべよ」

えっ？ 一体どういうことなんだ。もう、すでに英語が日本圏に
入ってきているのに、徳川が三河で、北条が関東地方を支配して
るつべ。まるで 戦国時代のようじゃあないか。

「まあ、ウチにはどちらも関係ないつべ。ハニー共は勝手にやつ
てるつべ」

また、おかしなワードが出てきた。ハニー？ 生き物のような言
い方をしているが…… 一体何なんだ？

しかし、何も判らない状態で悩んでいても仕方がない。もっと話
を聞かなければ。とりあえず、場所を聞いてみるか。

「欲張りだが、もう一つ頼む。ここは、一体どこだ」

「ここは東海道つべ。今はハニーたちがのさばってるつべよ」

東海道…… ハニー…… そして戦国時代に英語の『JAPAN』……
… 一つ心当たりがある。だが、それに成るにはまだ欠けているもの
がある。

「本当に申し訳ないが、もう一つ頼む。妖怪…… はどこにいる」
「これで最後つべよ。奥州つべ。確か、独眼竜とか言うのが治めて
いたはずつべよ」

あいた口が閉じない。と言うのは今の俺のことを言うのだろうか。
独眼竜まで聞いてしまった。確実にここは『JAPAN』だ。

英語がどころ、戦国時代だ、幕末だ、なんて問題じゃない。
ここはまた、違う世界だった。

勧誘

樵から聞いた話では、ここはどうやら『JAPAN』 『Ra
nceシリーズ』の世界のようだ。

今の心情を一言で表すと、ナンテコッタ。いや、ここはポジティブにいこう。

一回の転生で二つの異世界経験。ちょっと得したと、思えばへのカッパ。

この世界は美少女とランスっていうエッチ第一主義の野郎が繰り広げる戦国活劇ぼりもあるよ。俺みたいな男は案外安全な世界だ。しかし、俺は戦国時代（史実の方）とか国取りとか興味あったからな。ネギまじゃ、絶対ないたのしみだ。

そしてここは東海道。ランスの世界じゃ、ランスが来る前は今川のおっさんがハニーキングと間違えられて、仕方無しに領主やってんだよな。……約300年経ってるのにまだ覚えてる俺って。

よし、ハニーキングこと今川のおっさんを説得しよう。嫌々やらされているのだから、俺が代わってやる、と言ってあげればのってくるだろう。

そうと決まれば居城……って、場所なんて知らないんだよな。道すがら、人に聞いて回るか。

何だかんだと、回り回って、ようやく着いた。

実物を見てみてよく解ったけど、城って時代で生きてると、こつも違うんだなあ、って思う。

「おお……お城ってこんなに大きいモノなんだなあ」

おおつと、いけない。いつまでも見学してるわけにはいかないのんべんたりとするのも、もういいだろう。

しかし……当たり前のように城門が閉まっていらっしやる。これはどう開けようか？ 殴って壊すか？

「無駄！」

一発で城門をブツ壊す……あとで壊さないで、開けりゃよかったんだと思った。

「ハニホー」

「人間がきたよー」

「王様、王様ー」

矢つ張り、城門なんて大きなモノを吹っ飛ばしたせいか、土偶みたくなって言うかハニワが大慌てしている。

だが、慌てているだけで俺にちっとも見向きもしない。適当に騒いでいるだけなのか？

まあ、無視してくれるのはありがたいので、さっさと天守閣まで上がってしまふことにする。

外から見たときも大きな城だと思っただが、実際上ってみるとよく解る……なにがって、上るのがしんどいんだ。よくこんな城、なんて場所に住めるな。

悪態つきながら右に行くハニーを避け、左から来るハニーを突き飛ばし、ようやくハニーの長、ハニーキングが居るであろう天守へと到着したようだ。

「ハニーキングー！ 俺の話を聞けえ！」

「ひいい、お、おらちがうっぺよお」

「そんなこと解ってる。あんたを助け来たんだよ。手伝ってくれるな？」

「わ、分かったっぺ。おらはどうすればいいっぺ？」

「それはなあ、かくがぐしかじか」

「うっで、でもおらにそんなこと……」

「ぐだっている暇は無いぜ」

入り口の方からハニー達が大量にやって来た。

口々に「大丈夫ー？」だの「王様ー？」「あいつだれー？」とか聞こえてくる。

「ほら、あんたの出番だ」

ハニーキングの格好をしていて解らないが、きっと中では冷や汗をかいているんだろう。そう思ったから、背中を物理的に押してやることにする。

「う、うー。み、み、皆聞くっぺ。この人は『ハニー達の指導者』」

だっぺ。これからは、この人の言うことを聞くっぺ。これで安心したから、おらは大陸にかえるっぺ」

「新しい王様ー？」

「王様帰るのー？」

「バイバイー」

案外冷たいハニー達だった……が、これで一件落着。俺も城主でおっさんは解放。一石二鳥だな。

「あ、ありがとうっぺ！ 貴方のおかげで帰れるっぺ！」

そいつはよかったなあ。

「城門から堂々と出て、木陰で着ぐるみ脱いだらいいだろう。あ、一つ、尾張でなにかあった？」

もうランスが来ているなら大変だろうけど、もしまだなら楽ができるだろう。

「織田っぺか？ うーん、特に動いていないっぺ。領主の信長様の体調がどうも悪いみたいっぺ」

じゃあまだ来ていないんだな。

ん……これでちよっとのんびりしていられるな。久しぶりに日本の料理が食べられるんだろうなあ。楽しみだ。

なんて思っていると、なんだかそわそわしているハニーキングがまだいた。

「どうしたんだ？」

「えっ……と、もういいっぺか？」

「ん、ああ。達者だな」

どうやら、律儀に待っていてくれたらしい。……きっとあんな正確だと損するんだろうな。

こうして今川のおっさんは行った。俺は無事に拠点を確保し、安心できるようになった。しかし、これから忙しくなるだろう。

だがその前に、目の前の五月蠅いハニー達を何とかせねばなあ。

二週間はたったただろうか。忙しいせいか、最近早く感じるなあ。

俺が、今川に入っつてすぐに人を入れた。そして八二一と人間の混合部隊を作った。これで北条なんざ怖かねえぜ！

関東を治めている北条は陰陽道の組合が合わさったもので、陰陽術や式神などで各地の鬼、と呼ばれる存在を払っている。

で、八二一は魔法やそういったものが一切効かない。だから、八二一を前に立てて後ろから弓を撃つたりすれば、楽勝だぜ！

そしてそんな俺は、沖田のぞみの宅前にいる。いきなりで、びっくりしたかもしれないけど、俺は考え事をしながら動ける人間だからね。

兵士を入れたのはいいけど指揮する人がいなくてね。べつに俺だけでも十分なんだけど、せっかくだからそれっぽくしたくって。

で、聞き込みして宅を発見したんだが、聞き込みしてると変な眼で見られたんだ。新しい領主を見るような目ではなかった。何か汚らしいものを見るような目だったような……。

「すみませーん。のぞみさんいらっしやいますか？」

こんな時代、インターホンなんて無いから、大声で呼びかけてみる。すると、ドタドタ　アッ、ガラガツシャーン。……大丈夫だろうか。

「は、はい……。どちらさまでしょうか……？」

「……沖田のぞみさんですね？」

「は、はい……。あ、あの大丈夫ですか……？」

くうなんていい子なんだ！ 初対面でいきなり訪ねてきた怪しい奴を心配してくれるなんて！ 俺は決めた！ なにがあるうとのぞみはいじめない！

「単刀直入に、うちの今川軍（めんどいのでかえてない）に入っただけないだろうか？」

「えっ！？ そ、その……なんで私なんか……？」

「とりあえず、簡単な説明でも。俺はラグナ。名前で思うかもしれないが異人じゃあない」

のぞみは「はあ……」とよく解らない感じの相づちを打っている。まあ、いきなりよく解らない奴の話なんて、わかんないだろうからな。

「そして今の東海道の領主だ。前の領主ハニーキングは国取りする気が無く、今は兵がいるが将がないんだ。だから君の力が必要なんだ」

「で、でも私すぐ血を吐いて……」

ケホケホ病だったかな。それならすぐ直るはずだ。

「それなら大丈夫だ。病名は分かっている。すぐ直るものだ」

「ほ、ほんとですか……？」

なんか嬉しそうだ。しかし、みるみるうちに凹んでく。どうしたっていうんだ？ 顔色も悪くなってゆき、まるで嫌なことを思い出しているようであった。

「で、でもきつと貴方もすぐに……」

心配御無用！！ のぞみをいじめるなど俺の鋼の心はやわじゃない。

「大丈夫だ。ムラムラしているが、君をいじめて得るようなムラムラじゃない。どちらかという欲望のムラムラだ」

「え、あ、あの……」

なんかのぞみの顔がすっげー紅いんだが。熱か。いや、俺が破廉恥すぎたか。

「で、来てくれるのだろうか？ 無理はしなくてもいいが……」

来てほしいなーじゃないと俺一人で、群率いることになる、という思いを込めた目をのぞみに向けてみる。

困ったような表情をしているが、まんざらでもなさそうである。もう一息！

「あ、あの……。は、はい、お願いします。私を入れてください……」

……！

「そうか！ やってくれるか。よし、今すぐ城に帰って、薬のめ！

「そんですぐ出陣じゃあ！」

「は、はい。お供します！」

「いくぞ！ のぞみん！」

「え、のぞみんって……」

もちろんのぞみんはのぞみんだ。どうした顔が赤いぞ。タバスコでも飲んだか。あ、まだ熱でもあるのかなあ？

そして城へ。ねらうは千ひ……げぶん、徳川だ！ 思っんだがな、ここで嫁探ししようと思うんだ。どうだろう？

勧誘（後書き）

次回はたぶん徳川戦。

ほかのランス作品で千姫がヒロインのがあるからかぶりたくない
だけど

千姫かわいいしなー

とりあえず謙信ねらってみる！

開戦、終戦、また開戦（前書き）

開戦、終戦、また開戦

えー只今、壊滅状態の徳川軍の面前にいます。何故かって言うと、スタンド『プラネット・ウェイブス』で一発景気付けしたんだ。

そしたら隕石が、ひゅーんと墜ちて、地面が揺れたと思ったたら徳川軍壊滅してた。何だかんだ言っつて結局、俺一人で『Japan』統一できるんじゃないの？

さて、残りカスを掃除しに行くか。

「付いてこい、のぞみん！」

「はい！」

殲滅中……

俺は今、徳川家康（駄目ダヌキ）の目の前にいる。その巨体は狸と呼べるものではなく、彼が妖怪であることを物語っている。しかも器用にあぐらかいてやがる。

俺が天守に殴り込んだときも、取り乱さず冷静に部下や側近を使って排除しようとしてきた。が、蹴散らしたが。

いまや、残る敵はコイツだけ。多分ね。

「……貴様何者だ」

鋭い眼光が俺をとらえる。後ろののぞみんは震えてしまっている。だが、俺は臆せず前に一步踏み出す。

「俺か。俺は今川の、だ」

「ハニーばかりで脳天気共の集まりと思ったが……そうでもないよ
うだな」

「うるせい、さっさと終わらせてやんよ。かかってきな」

一応で、持っている刀を構えなおして家康と対峙するが、コイツ
は相変わらずあぐらをかいたままで、刀を構えようとしない。

不審に思ったが、一気にけりを付けようと俺が動こうとしたこ
ろで、

「……ならば我が徳川の最終秘密兵器で、ひねりつぶしてくれる！
！」

徳川の秘密兵器……徳川の秘密兵器……徳川の秘密兵器？ 知ら
ないぞー一体なんだそれ！

俺がナゾの情報に戸惑っていると、家康は立ち上がり、右手を拳
げて高らかに叫んだ。

「出えええろおおお！ タヌダアアアアム！！」

意味不明な単語に驚きながらも、のぞみんと一緒に家康に迫ろう
としたところで、風を切る音が聞こえた。それも、上で。違う違う、
もつと上だ。空よりも。

ヒュウウウウン、という風きり音は一瞬で。

ドオオオオオン、という爆音は耳をさくように。

上空から青色のものが落ちてきた。それは城の横に落ち、大きさは
城と変わらないくらいに大きいのだが、タヌキだった……そう、
ドラ もんだ。どうしてこうなった。

そして家康が乗り込もうとする。

「フハハ、これで終わりだあ!!!」

乗り込まれると面倒なのだろう、と思いつき引きずり落とそうか考えていると、さらに上空から五機のタヌダムが落ちてきた。

「僕はタヌキ・ザ・スピード！ 服部半蔵！」

「タヌキ・イン・ダイヤ！ 井伊直政！」

「クラブ・タヌキ！ 酒井忠次！」

「ぐつつ！（タヌキ・ハート！本田忠勝！）」

「ぷくう（タヌキ・ジョーカー！ 榊原康政！）」

おまえら、どっから湧いて出た。

「そしてわしがあ！ キング・オブ・タヌキ！ 徳川家康だあ!!!」

一体この戦国時代になんという技術革命が起きたんだ。なに、フ
アイトすんの？

俺が呆けていると家康が、

「フハハハハ、このタヌダムを見て！ 手も足も出んだろう！」

売られたケンカは買い漁る。それがいくら高級だろうと、セール
品だろぅが関係ない。代金は俺の攻撃、おつりはいらねえ！

右手を掲げ、俺も高らかに叫ぶ。やつを呼ぶぞ！

「出るおおおお！ ガンダアアムツ！」

そう言った俺はスタンド「力」^{ストレングス}を城と一体化させ操る！ 本来船

にしかなることのできない『ストレンクス』だが、今、この瞬間だけは違う。この一瞬だけは俺の思い通りに！

細部を変形させ現れたのは『ゴットガンダム』！ちなみに巻き込んだ人たちは吐きだしたよ。

「ぬうつ、貴様もタヌダム使いかあ……！」

いや、タヌダム使いつてなんだよ。そもそもタヌダムって一体何だよ。誰がこんな残念な名前付けやがった。

「タヌダム使いは惹かれあつ……そういうことなのか！」

え？なにそれ。それはもう少し違つやつらのことじゃあないのかな。

「しかもそのタヌダム……見たことのない形式……新型か!？」

「たしかに新型だ。能力まで再現してるよ。だがな……タヌダムなんかじゃあねえよ!！」

「ならば手加減はイラン……ゆくぞ!！」

来るか……。開けた草原には俺を含めた7機の機体が、にらみ合う。にしても場違いにもほどがあるつてモンだ。

家康の機体が前に出るのに合わせて、他の機体も後ろに続く。

「いくでちゅよ!！」

「ぐつっ!！」

「ぶかあ」

「しぬでちゅ!！」

「これでおわりでちゅ!！」

そして、6つの機体がかけ声と共に放った拳から、

「『タヌタヌ同盟拳』!!!」

まるで肉球の形をしたエネルギーの塊が、俺に向かって飛んでくる。

ぬつづ……なんのこれしき!

「俺のこの（ry 『石破天驚ゴッドフィンガー』!!!」

こちらも同様のわざを放ち、迎え撃つッ!

「ぐぬぬう!」

「うおおおお!!!」

『タヌタヌ同盟拳』と『石破天驚ゴッドフィンガー』が拮抗している。い、いや……僅かに『石破天驚ゴッドフィンガー』が負けているッ! 力負けだとオオオオオ!?

「くつ……だがこれで終わりだ!!!」

「なにをオオオオオ!!!」

「めいきやうすい明鏡止水!」

瞬間、ガンダムが黄金に光る。

『石破天驚ゴッドフィンガー』のエネルギーが格段に上がり、
『タヌタヌ同盟拳』を飲み込んだ。

「ぬおお! このワシがやられようと第二第三のわしがああ」

「ヒイイト・エンド!!!」

「で、何で生きてるわけよ？」

何故か生きていた、タヌタヌ同盟達。あの状況で、機体が爆発してなお、生きているこいつら。生命力どうなってんだ。いまは荒縄で6匹まとめて縛ってる。

「いや……タヌダムに装備した落花生システムが作動して……」

なんだそれ……世の中便利な安全装置もあるモンだな。まあいいそろそろくるだろ。誰かって？ 来たら解る。

「失礼ッ！遅くなった」

そう、何を隠そう妖怪王・独眼竜正宗殿である。今回来てもらったのは、こいつらの処遇をどうするか話すためだ。

家康は正宗を見るなり表情を悪くして、低く唸った。

「ぬうう……正宗か……」

「家康……ラグナ殿こたびはありがとうございます」

え？ 俺がどうしてお礼を言われるの？

「ああ、家康の暴走を抑えてくれてな。正直、あの巨大な城みたいなを出されていたら人間や妖怪達はどうしようもなくなっていただろう」

そんな強かったのか、タヌダム。

「で、こいつらどうなるんだ？」

「あれほどの大罪、未然に防げたとして打ち首に変わりないだろう」

「それはちよつとやめてもらえないか？ できたらお宅で引き取って、その性格叩き直してやれよ」

「ふむ、ラグナ殿がいうのなら致し方あるまい」

交渉、というかお願いはどうやら通ったようだ。

「ところで一つ……お前は妖怪か？ 人間か？ または、この『Japan』に災厄もたらす物か？」

「人間か妖怪か……あいまいなとこだな。災厄はもたらさない。元からいるのはしらんがね？」

「そうか……それではさらばだ」

家康達が引つ張られていく。あれでエゾあたりまで帰るのか……。俺は家康達のお尻を心配した後、ガンダムだった城に入った。それは、とつてもとつても大事な理由があるためだからだ。

正宗殿のお城訪問は終わったし、千姫を探しに行くことにした。確か、家康達に破れたものの殺すことは敵わず、幽閉されているはずだ。でも、どこだったっけ？ うんうん唸っていると、家臣Aを見つけた。

「なあ家臣A、千姫はどこにいるかわかる？」

「はっ！ 千姫様でござるか。それならば……」

「ふむふむ……そうか、その辺りにいるんだな。それじゃあ、行つてくる」

「お気お付け下さいでござる」

分かつてるでござる。おっと、語尾が……。

移動中……

ここか……なんとも湿っぽい場所だな。仕方ないか、まだこの城を攻め取って、数時間しか経っていないのだから。今川軍でない者を安易に解放していないんだろう。

まあ、ここに千姫もといせつたんがいるんだな。

「おーい、誰かいるかー？」

「……誰だ？」

お、あつちから聞こえてきたな。他に捕虜がいる、とは聞いていないからきつと千姫だろう。

声が聞こえた牢屋まで進むと、そこには確かに千姫がいた。始めは怪訝な顔をされたが、家康の配下じゃあないってことが解ったのか、殺気は飛ばされなくなった……はあ……。

矢張り、家康のタヌダムがおかしかったのか、ここの牢屋は木と鉄でできている。

開けようと、扉を押しても残念なことに開きはしない。鍵がかか

つてる。当たり前か、と思いスタンド『マジシャンズ・レッド魔術師の赤』を出す。扉は燃やし、千姫に火の粉すら近づかせなかった。

千姫も鳥人間は初めて見るのか、驚きの声を漏らした。

「ほお」

扉は一瞬で燃え尽きた。

この時代の牢屋だと、扉が狭い。いそいそと、肩を下げて入った。

「はろ、お元気ですか」

「人間か？」

また、質問に答えづらい質問を……。いや、ここではつきりさせておくべきだ。俺は育ちも生まれも人間だってな。

「人間だ。東海道の領主をやってるラグナってもんだ」
「異人か？」

よく間違えられるのは仕方がない。きっとこの時代と、未来じゃあ日本人も作りが違うのだろう。こう……霧囿気とか。

「異人ではないな。白馬に乗ったそれっぽい名前の日本人だ」
「ふむ、その領主がなぜここに？」

どうも、元徳川の家臣はまだここに来させてもらっていないようだ。だから、情報が少なくて俺に聞いてくるのか。

「君を救いに来たのだ。上にいたタヌキ達は俺が妖怪王に頼んできつーいお灸を据えてもらえるように頼んである」

「そうか、礼を言わねばならんな」

ほっこり、と喜びが見て取れる顔をしてくれる。いい美人さんだ。だが、俺も現金な人間で、つついこついうことを頼みたくなる。使える者は使わないと。

「ついではお礼がほしい」

「ああ、そうしたい気持ちはあるが……私には残されたものが何もない」

それは承知の上である。だが、千姫にはまだ残っているものがある。

俺が特に不満がなさそうな顔をしていると、千姫は疑問に思ったのか、何があるのか、と聞いてきた。

「あるじゃあないか、そう……君の身体でいただくか！」

「なっ!?!」

おお顔真っ赤。どうしたんだろう？

「どうした？ 顔真っ赤だぞ、熱でもあるのか？」

心配だ。のぞみんの時もそうだったし、俺が武将を勧誘すると熱が出るのか……？

「な！ そ、それは貴方が……」

「まあいいや。で、今川いまがわで働いてくれる？」

「え？ ……ああ！ ……そういう意味だったのか……しかし、わたしはなあ……」

落ち着いて断ろうとしてくる千姫。うむむ……貴重な人材を逃すわけには行かない。

「今川いづみにきたら戦できるぞ。負け戦みたいな緊張感もあ「わかった！ いいだろう！ よろしく頼む」

「ああ……よろしく……」

「ははは、今日はいい日だ！！」

そう笑っている彼女はいい笑顔だった。俺は反対に疲れたけどな。

と、いい締めりだったのだが、のぞみんがかけ……転がり込んできた。文字通り、転びながら。

「いたた……あ、ラグナさん、た、た、大変です！！」

そんなに慌ててどうしたんだ。三河の攻略は終わったんだ。アフタヌーンティーでもいかが？

「その、北条がラグナさんを呪い付きだと言って……東海道に攻め込もうとしていると……」

だったら、一々宣戦布告する暇が省ける、ということだな。

次は武田辺りで良いか、と思っていたが……。

「良かったな、せつたん！ すぐ戦だ！」

「せつたんって……私のあだなは戦姫なんだが……」

「なら、戦ってその証拠をみせてくれよな！」

「ふっ、いいだろう。私の力とくと見せてくれよう」

うーんでも、武将が良くても兵士がなあ……。ハニーだし、まあ
いつか。

表から裏へ

「あ、のぞみーん。織田行ってきてくれる？ ちょっと用事があるんだ」

「ちょっとやつてもらわないと困る用事がある。こつ、小さいことも早めにやっておくべきなんだよ。」

「なんですか？」

「それはな、織田に同盟か不可侵結んできてくれ。いくら織田の領主の体調が悪いからって、全員がそうってわけじゃないだろ。それに、北条と戦ってる間に三河に攻め込まれたら大変だからな」

「それもそうですね。あれ？ でもなんで武田じゃないんですか？」

「うむ、よくぞ聞いてくれた。特に深い理由はないが。」

「説明しよう！ 武田は八二ーばっかの今川よりも、陰陽師大量の北条のほうが潰したいだろうから、こつち来る可能性は低いんだ。四将的にも」

「え？ 信玄公じゃないんですか？」

「あ、中の人いないってしらないのか。いいね、夢と希望を与えるね。」

「もし、対象が討ち取られる方が一ってないし。そりゃあ、戦場でそうなったら兵士の士気に関わるけど、暗殺のしようとかないからなあ。」

「ま、まあとりあえず行ってきてくれ。スタンド『ヨーヨーマッ』でも付けておくから」

ずっと埃まみれであったであろうスタンドを使ってみる。もう、こいつにどんな能力があったかすら覚えていないよ。まあ、特に危険じゃないだろうし、大丈夫だろう。

「はい！ 行つてきます。えっと、よろしくお願いします、よーよーまっさん」

「ええ、お嬢様。よろしくお願いします」

うんうん、うまいこといったな。幸薄いのぞみんなに言葉をかけてあげようか。

「H a i l 2 U (君に幸あれ!)」

「えっと……何語ですか……?」

オー！ ノーツこんな所で文化の違いが……。

一人とスタンド一匹の見送りの後は、今川軍の様子でも見に行くか。

「報告です！ どの部隊もいけます!」

俺がスタンド『プラネット・ウェイブス』で一気に徳川軍の兵士を片づけてしまったからかな。まあ、いいことだろうけど。

「よし、東海道まで戻るぞ！ せったん、準備はいいか?」

「ああ、十分だ。いつでもいけるぞ」

「Luck（幸運を！）PLUCK（勇気をツ！）」

「で、何語なんだ？」

「のぞみんと同じリアクションをするなー！ツ！！」

HEEEYYアアアアアアアア……。ここまで文化の違いって恐ろしいんだな。喜び笑いを共感できないなんて……。

ああ、せつたん、無理に笑わなくてもいいんだよ。

東海道……

いやー壮観でなあ。これが戦場か。人だけでないって所がまた、ファンタジックだな。

見渡す限り人、鬼、人、でつかいの、カップル……カップル！？

「キヤー早雲がんばってえー」

「ああ、蘭ためなら石ころ一つ、式神でおしかえしてやる！」

「早雲のその良く分かんないところが好きよおー」

「はっはっは、俺の式神は世界一イイイイだ！」

はっはっはあ？ なんだこのバカップル……俺は信じんぞ……断じてツ！ というか、目に入らない、認識しない。ソレガアンゼン。

「なあ……あれ、なんだ？」

千姫までえええ嘘だと言ってよせつたあああん！

気を取り直して軍勢はこちらが負けている。流石北条、戦は数だね。

俺は『ヨーヨーマツ』出してるから、大規模攻撃はできない。だが、うちの軍を見る。ハニー前衛により陰陽術をカバーし、後方が弓、弓、弓……！

そして相手の指揮官は……バカップル！ 勝った！

「さぐていくか！ MASSACLE（みな殺し！）」

「で、なに語」もう、いいよ……！」

「……すまない」

私は千という。いきなりの自己紹介で驚いたかもしれないが気にしないでくれ。

私は徳川家に生まれ父上や母上、家臣の者達に愛されすごしていた。しかし、ある時妖怪狸達が攻め込んできた。いきなりのこともあり、ほとんどの者は殺されてしまった。

私は奮闘したおかげか狸も私に手をつけられず、投獄となった。それから、ある日いつもより城が激しいかと思うと、今川が攻めてきたらしい。しかし、相手は妖怪。ハニーごときで勝てるのだろうか、と思っていたら一人の男が降りてきた。

私が人間か？ と問うとそうだと答える。話していると東海道の領主つまり今川の者と分かった。話を聞いて、私の敵の狸どもを成敗してくれたらしいことも分かった。……うまいこと乗せられて将にもなったが、私は戦場がいい。

そして、今！ 戦場にいる！ ……相手の指揮官はあれだが。

これからも私は突き進んでいくだろう。この者と共に……まあ、なんだ。私の決意表明だと思ってくれればいい。こんなこと、わざ

わざ口に出す必要もないからな。
知りたければ知ればいいのだが、生憎こんな恥ずかしいこと言えるわけがないだろう。

「ワッーーーー、と味方鼓舞する声が聞こえる。

東海道戦はもうすぐ終わる。なぜなら、俺が不死という点が強すぎるからだろう。このまま押し返したら江戸まで攻め入るつもりだ。え？ 兵士の疲労を考慮ろって？

心配御無用！ そのときはスタンド『ザ・キユアー』で治すから、安心だ。でも、『ヨーヨーマツ』消すことになるけど。

むっ！ あいつはめかぶ太郎じゃないか。あいつを切るのは忍びないがやらせてもらうぞ。

「はぁーーーーでりゃ「てりゃあああああ！」

「ぐわあああ

とられた……一体誰がこんなに早くめかぶ太郎を……。

「む、貴方が。この首級は私のだな」

「せったあああん！ わざわざ人がねらっていた奴を斬ることはないだろう？」

「だったら、名前でも書いておくんだな」

「君は一体何なのさ!？」

お母さんですか。でも、人に自分の名前を書くってすごくマヌケ

なことじゃあないのか。

「はあ……この一帯も制圧し終わったかな。よし、江戸に攻めいるぞー！ 兵を集めろー！」

兵士達を回復させるためスタンド『ザ・キュアー』を使うか。『ヨーヨーマツ』解除つと。のぞみんは大丈夫だろうか。

その頃のものぞみ……

こういつた時代ゆえ、あちこちには森林があり、三河から尾張へ行くのも変わることではなかった。

ラグナ達が東海道で北条と開戦している頃、のぞみはスタンド『ヨーヨーマツ』と、尾張へと向かっていたが、『ヨーヨーマツ』の能力、『標的が独りになった瞬間、肉を溶かす唾液で攻撃する』という能力が発動した。

が、発動する前の『ヨーヨーマツ』の状態、それは召使のように従順なのだが、その状態はのぞみの隠れざる性格を表へと出してしまつものだった。

「あ、あ……あー！ もつとぶつてー!!」

「そんなに言うならしかたないですね。駄目な豚はきちんと躡しなといけませんね」

「ああ、はあ、はあ……ありがとうございますうう」

「ハハハハ！ 喜ぶんですか！ 喜ぶんですか！ 変態ですね！
そんなにされたいんですか！ ハハハハハ！ 蝋燭がいいですか

? 鞭ですか、縄ですか？」

「No! No! No!」

「もしかして……全部、ですか？」

「Yes! Yes! Yes!」

「くふふふふう、とんだ変態さんですね! ああ、ラグナさんありがとつございますう! こんな喜びを教えてくださいるなんて! ああ、たまりません! ……あら、いなくなってしまうたね。どういふことでしょうか? しかしどうしましょう? この胸の高鳴りは……そうです! 織田に行くんです。ならそのときに……くふふう」

のぞみんは『いじられ体質』をうしなつた!

新たな能力を手に入れた『サド』『狂気』をてにいれた!
ラグナに対する忠誠度が上がった!

表から裏へ（後書き）

ザ・キュアーは小説版のスタンドです。

能力は怪我、病気を治す。ですが、許容量があります。

そこはラグナのスタンドパワーを信じてあげて。

戦姫はあだ名で済まない(前書き)

大変な変態が現れた!

戦姫はあだ名で済まない

ここは江戸。ただいま北条と交戦中。

波のように、牛井の特盛りのように人間やハニー、式神達が入り交じった戦場なのだが、あのカップルは目立つ……。

「キヤーかつこいいわ早雲！」

「フツ、俺が早雲だ！」

「最高よ！ 早雲！ もう最高！」

「ああ抱きしめたいなあ！ 蘭！」

……あいつらはどうにかならないのだろうか？ よくも今まで北条、という家が保つたものだ。あんな当主で滅ばないのか。でも……ちよつと妬ましい。だが、妬んでも仕方ない。でも妬ましい。

と言うかなんなの？ ばかなの？

俺が戦場を走りまわっているのに、聞こえてくるあいつらの声。

ワイワイガヤガヤ、グサーー、ギヤアアア、キンツ！ カンツ！

ノド！ アメ！

こんなにつるさいんだよ。それで聞こえてくるんだから、うちの士気は駄々下がり。無論あちらもあのカップルを除いて、疲れたような顔をしている。

ほら、見てくれあの式神の『もつ……やめようっかな』という顔を。どこが顔かは解らないけど。

もつこつなったら、さつさと終わらせるしかない！ スタンド『エアロスミス』！！

「ボラボラボラボラボラボラボラ、ボラーレ・ヴィーア（飛ん

で行きな)」

「ふむ、いつみても貴方の悪霊はいろいろいるんだな」

せつたんいつのまに……。まるで最初からいましたって雰囲気醸し出さないでほしい。どうせ、俺のスタンドを見つけて、『わっ！ なにあれ、強そう』という感じでやってきたんだろう。そうだろう。

だが、せつたんは俺がそんなことに気づいているはずもないという顔で、何か思案していた。

「しかし、指揮官が無能なのか江戸戦も終わってしまっつな。うむ、これでは緊張感が足りない！」

そのとき、なぜかせつたんの顔が思い付いたりって顔になった。この状況下で何か思いつくって言うのは、何か悪いこと以外にあり得ないと思う。俺視点で。

「足りないなら貴方とやればいいじゃないか」

なによ、そのいいこと思いついたよ私、みたいな顔は。やめてよね俺が本気出したらこの世界一巡するよ。……いや、しないけど。

でも俺と一騎打ちか……なにかいいスタンドはなかったか。うーんと、唸っていると、

「なら、無手でやればいいじゃないか」

「なに俺に死ねと？」

いや、しないけどさ。妖怪狸6匹相手に立ちまわれる姫さん相手にしろと？

だが断る。絶対に嫌だ。俺は通ると思っている奴の思惑をNOと

いってやるのが好きなんだ。……それくらいの心構えで行かなきゃ、うんと言ってしまうような気迫なんだ。

「だがしかし、やらせてもらう。この戦は終わった。北条も撤退し始めている。やるぞ」

ずるずる引きずられる俺。

しかたない。

今日の俺は紳士的だ。

どうも、北条マサコです。初めての人は初めまして。知ってる人はおはようございます、こんにちわ、こんばんわ。

江戸戦まで負けてしまいました。本気でやばいんじゃないんですかこれ、と常々思います。

早雲さまも蘭様も仕事しないし、やるきあるんでしょうか？ ばかなんでしょうか？

それに今川のラグナ（噂が流れてきた）という者は異人ではないらしいのですが、最後の飛び回る悪霊いったいあれはなんでしょう？ 他にも色々確認されていますし、どうも個々に様々な能力があるようです。

かてるの？

あれに陰陽術は効くのだろうか、さらに不死身という噂まででてきている。一味……違うんですね……。

なんというか……北条終わったかもしれませんか。

こんなこと考えるのは不謹慎かもしれませんが、私は北条家に仕える身。ならば北条家と命運を共にするのは当たり前。

最後まで気張らせていただきますよ。

しかし、本気で早雲様と蘭様はどうにかならないでしょうか？

あの二人どうなるんでしょうか？ でもあの二人が本気出したらすごいですよ……本気出したら……。

ぐえ……カエルみたいな声出しちゃった。

せつたんに引き連れられるままに来たら、特になにもない平原まで連れてこられた。どうやら、本当にするらしい。

「さて、やろうか。ああ楽しみだな。ではいくぞ？ 覚悟はいいか

？ 私はできてる」

「気が早いよ！」

って俺は本気で無手かい！ それは無理だつて。

「スタンド発動！ 『シルバーチャリオッツ銀の戦車』！！ この斬撃、かわしきれるか

！」

『シルバー・チャリオッツ』の鋭いレイピアが千姫の頬を掠る。

「つう！ なかなかやるじゃないか」

せつたんも負けじと俺めがけて、薙刀をふるう。だが、その斬撃

はチャリオッツの甲冑によって阻まれる。

ガツキーン、と金属同士の衝突音を鳴り響かせた。その反動により『シルバー・チャリオッツ』が一瞬よろめくが、またまた鋭いレイピアの斬撃がせつたんを襲った。

「ふん、ふん、ふん、ふん、ふん！！」

「くう、はあ！ くっ、てらやああ」

しかし、せつたんはそれをいなして、反撃する。『シルバー・チャリオッツ』のレイピアを横目に、小さく薙刀を構え、こちらに突っ込んでくる。

どう考えても俺が無傷で躲ききることは不可能。だったら、

「く、避けきれない！」

カーーン、と金属の鎧をトンカチで叩いたような音がした。

俺はとっさに『シルバー・チャリオッツ』を傍らに引き戻したのだ。だが、千姫の一撃が『シルバー・チャリオッツ』を揺らした。

そのまま『シルバー・チャリオッツ』は無様にたおれてしまった。

「ふ、どうやらわた「何勘違いしてるんだ」

「なに？」

そういうやいなや『シルバー・チャリオッツ』の甲冑がはじけ飛び、不格好な本体が姿を現した。

しかし、普通ならおかしいのである。さっきまで確かに『倒れていた』のだ。『倒れていた』はずのチャリオッツがなぜ立っているのか？

せつたんは不思議でならないという顔をしている。

「何故……起き上がっている？ さつきまで確かに『倒れていた』……どういうことなんだ。種明かししてくれるか？」

「そこまでいうならしかたない。ただ、そう、ただ単に『速い』んだよ」

「『速い』だと……？」

「そう、『速い』んだ。こいつは重たい甲冑を外したことにより、こんな芸当ができるような速さになったのさ」

語り終えた俺は『シルバー・チャリオッツ』を動かした。すると『シルバー・チャリオッツ』何十体ともに増えたのだ。

いや、正確にはすべて残像である。『シルバー・チャリオッツ』の驚異的な速さにより、残像が見えてしまうほどの動きなのだ。

「なんと……これは恐れいったな。正直、私にはどれが本体なのか分からない。だが、だからこそ！ まだ私は強くなるうとする。私は強くなるだろう」

「ふ、ブツた切ってやるッ！ 今の俺の『シルバー・チャリオッツ』は素早いぜッ？」

すさまじい速度の斬撃がせつたんめがけて放たれた。だが、それはすべて寸止めで終わっていた。

「どうしてだ……？」

「せつたん、模擬戦だぜ？ これはよ？」

「フフフ、そうだったな。ついつい熱気にあてられてしまったよ」

負けたことに対する感情よりも、思いつきり戦えたことに対する感情の方が大きいらしい。またもや晴れ晴れするほどの良い笑顔を見せてもらった。

そのころののぞみ……

スタンド『ヨーヨーマツ』が消えてしまったが、その後は順調に進み尾張へと無事に着いたのぞみ。そこで、尾張の領主、織田信長と無事に会うことができた。

織田信長は常々体調が悪く、ろくに国の舵取りもできていないらしい。そんな国が今だの残っているのは、先代と家臣によるところが大きいだろう。

ちなみに信長には香という妹がいる。

無事、信長と謁見できたのぞみだが、本来の目的の『同盟か、不可侵条約を結ぶ』という望みが果たされたわけではない。むしろ、家臣の方では代替したばかりの今川と結ぶのもどうかと……、という流れが多い。

それに加えて、道中で狂気に目覚めてしまったのぞみ。こんなやつを使者に送ってくる今川は……、という感じにもなっている。ちなみにラグナはこのことについては全く解っていない。

そして、とりあえずの謁見は終わったのだが、このままでは無事に条約が結べるが見込めない、と思ったのぞみは、夜にひっそりと信長の部屋へと行ったのだ。

「ああ！ もっと、もっと力いっぱい踏んでください！ お願いしますー！」

「く、ふふう〜尾張の領主もとんだ変態ですね。妹さんにつめたーい目線で見られてもいいんですかあ？」

「ああ、それもいい。香にゴミクズをみるような目で……いい！！」

「ほんとに変態さんなんですね。でも、ほかの武将さんに見られてもいいんですかあ？その、『縄で身体を亀甲縛り』しているようなお殿様についてくる人いるんですかねえ？」

「いい！ まるでだめな男を見るような目で俺を見てくれるのか！
最高だ！」

「でもでもいいんですかあ？ 人がいないと尾張は無くなって、罵ってくれる人いなくなりますよ？」

「人がいない……放置プレイキタよコレ！ でも、罵られないのはつらい。どうしようか……？」

「それなら今川と同盟すればいいんです。そうすれば無くなりませんし、助けてくれますよ」

「おお！ そうしよう。あとで3Gと話をしよう。でもいまはもっと踏んでください！」

「はいはい、変態で駄目なお殿様はどんどん踏まれちゃいますよ」
「アツーーーーーーー」

のぞみは新たな能力を得た！

『智謀』 『策士』 『女王様』

のぞみは能力を失った！

『駄目』 『不幸』 『小心者』

信長は新たな能力を手に入れた！

『マゾ』 『変態』 『縛られ体質』

信長は能力を失った！

『威嚴』
『常識』
『温厚』

戦姫はあだ名で済まない(後書き)

最後のほうは

気にしたら負けだと思っ

このヘアースタイルがパイナツポーみてエだとオ？

して、せつたんとの一騎打ちが終わり、一ターン過ぎました。
ドロー！

引いたカードは「のぞみん帰還」！

発動っ！

すると…

あらま、なんだが危なすぎるふいんき（なぜかへんかんできない）
を

醸し出すやば〜いのぞみんが現れた

なにがあつたの？乳酸菌とt（ry

なにこれこわい。なんか狂気しまくってる感じだわ。

全力で勇気を振り絞って話しかける

「よ、よう、のぞみん。織田との関係性どうなった？」

「ク、フフフフフ……」

だめだ！今すぐ逃げ出したい！！

だれか救急車！むしろ病院が来い！！

せったんも顔が引きつってる

誰だって、そーする、おれもそーする。

「フフフ… ああ、いい… 縄… 蠟燭… 女王様…」

あれ？なんかのぞみんながぶつぶつ言ってる。

小さすぎて聞き取れないな…

聞こえないよ、だって、のぞみんなから、あの、のぞみんなから

そんな言葉が聞こえるわけじゃないじゃないか！

何？俺が悪いの？のぞみんなを織田に行かせたのが悪いの？

気にしたら負けだ。

この件は保留。のぞみんなはいつか修正してやる！

「よ、よろし、上総2000にでも攻めいるか！」

「終わったあと模擬戦な」

せったんはいつから戦闘狂に…

てか、何で落ち着いてるの？

なれたの？

ふう、やれやれだ。

さて、やるか！

ワアアアア！

開戦！

戦国ランスのゲーム風な画面で戦闘してみた

今川軍

俺一人 兵数 極悪大部隊（バット・カンパニーV）

攻撃回数

北条軍

6人

塚原卜伝 足軽隊 兵数9999

名和義忠 僧兵 兵数9999

東条山吹 忍者隊 兵数9999

東条ヒデキ 陰陽師隊 兵数9999

風魔房純 武士隊 兵数9999

東条巫女隊 巫女隊 兵数9999

…なあにこれ？

いや、どこの魔軍だよ

早雲遊んでたんじゃないの？

え？本気出したって？

「一晩でマサコがやってくれましたって、あるあーねーよ！」

ふっ、まあいい…

お前は忘れているかもしれないが、このゲームには、**全体攻撃**があ

るんだよう！

俺のターン！

準備中…

塚原ト伝

名和義忠

東条山吹

東条ヒデキ

風魔房純

東条巫女隊

まとめてお送りいたします

「ワァー！相手は総大将だ！うちとればこの戦、勝てるぞ」

「忍者隊かかれええい！」

ザシユ、あいた！おれはしんだ。スイーツ（爆）

「なぜだ…何故死なん！」

「俺を始末するってことは逆に始末される覚悟があるってことだよな…行くぜ！」

「な、なぜだあ。攻撃を受けてまだやるってのか〜！」

「人とは違うのだよ。人とは！（身体の出来が）」

左腕を関節ごと右回転！

右腕を関節ごと左回転！

そのふたつの拳の間に生じる真空状態の圧倒的破壊空間は

まさに歯車的砂嵐の小宇宙！！

ドアアア ゴ ゴ ゴ ゴ ゴ

「これが「神砂嵐」……………」

塚原ト伝 壊滅

名和義忠 壊滅

東条山吹 壊滅

東条ヒデキ 壊滅

風魔房純 壊滅

東条巫女隊 壊滅

やりすぎたかも…

まっいつか。蘭だって朱雀出したら今位なるし

さて…早雲たちはどこだ…？

なんていうか…すぐ見つかった。

だって、騒いでるからすぐ見つかるんだよ。

「来たか…！悪霊使い…！」

なにこのシリアス。やめてよね、俺にそんな耐性あるわけないじゃないか！

「早雲！…私もやるわ！」

「だめだ！蘭！君は逃げるんだ…！」

「いやよ早雲！…私は…貴方といたい…！」

「蘭…！」

がしっ

なにこれ…俺悪役ですか？

空気ですか…風を操る流法キドやったからですか？ええ？

あれだよな…空気読んで今は話しかけるべきじゃないんだよな

ヒーローの敵の悪役だって律儀に待つし…

風を操った技出したんだし、俺は空気読むぜ！

しかし、あのラブラブ空間は解せん！その空間…ぶっ壊す！

…

「またせたな…悪霊使い！行くぞ！しきがm「オラアアアア」ア
ーーーー」

早雲が空を飛んでいる

星の白金でぶつ飛ばスター・ブラチナしましたけど何か？

「早雲ーーーーー！」

ドーン

死んだかな…

「いつつ…ああ、蘭、大丈夫だ」

「そつづ〜ん！」

ガシッ

またか…てか、なに？何で生きてるの、ギャグ補正？主人公補正？

「ああ、早雲良かった…」

キツって効果音が出そうな勢いで蘭が俺をにらんでくる

「あんたみたいな髪型がパイナツポーみたいなやつと早雲は出来が違うのよ！」

え？いま…なんだってえ！！

「このヘアースタイルがサザエさんみてエーだとオ？」

「え…ちが（サザエさんって、誰？）」

パイナツポーはあながち間違ってるんじゃないと思う

立ってる髮的に

「おまえら…ぶっ飛ばしてやんよ〜！スタンド：狂った金剛石クレイジー・ダイヤモンド

ドラララララララララララ…ッ！！！」

ああ早雲と蘭がさいたま方面へぶっ飛んでいく

なぜだろう…遠目からだか全然変形してないんだが…

なに？やっぱ、主人公補正かなんか

さて、あとはさいたまだな

このあとせつたんとの模擬戦を回避し、のぞみんとOHANASSI
してなんとか話せるぐらいには

修正した。

side：上杉領

「謙信、北条が今川にやられて落ちそうだけどどうする？」

「無論、義によって助太刀する！…でも、その前に料理長のお魚が
食べたい」

「あゝ、わかったわよ。話してくるから、おとなしく待ってなさいよ」

「うん！分かった！」

愛…直江 愛が部屋をでていく

「わくわく！わくわく！」

謙信は…お食事が楽しみなようだ…いいのかそれで

このヘアースタイルがパイナツポーみてエだとオ？（後書き）

ラグナの髪型があのでタするためだけに決まりました

しってる髪型がおかしいキャラはリボーンのみくる位しか知らなくて…

神砂嵐は不死なんで気合入れたらできそうかなって出しました。

けんしん！けんしん！（前書き）

作者の謙信の位置づけはf a t eのセイバーです

今回も壊れます。

けんしん！けんしん！

修正してなんとか話せるのぞみんに、織田とどうなったか聞いてみる。

上総2000戦の前に聞きそびれたからな。

「でよ、織田とどうなった？」

「くふふふう、無事に…」

何故止めたし

気になるじゃねえか

はっ！こいつ…遊んでやがる…！

「くふふう、ちょっと領主で、遊んじやいましたけど上手くいきましたよ」

ヤベえ…遊ばれてるよ…

俺いじめて楽しいの？

「ふ、ふうくん。ま、まあそんなくらいできて当然だけどね！」

なんかツンが入った

決して恐怖ではない！あくまでツンだ！

怖いんじゃないへーこらするた…してないな。うん…俺がなりそ
うだ…

「くふふう〜」

「ニヤニヤ（・・）」

あばばばばばばば、せったんもニヤニヤしないでよ。

「じつは一つ、大切なことが…」

え、なに？シリアスなの？

「…どうした…？」

「実はラグナさんの（ryなんです」

「略すなよ！！大事なところ略すなよ！！」

「実はラグナさんの（ryなんです。大事なことなので二回言いま
した」

「二回言っても大事なところ略してちゃあ〜意味ないだろ！！」

「くふふう〜」

言ってから気付いた…俺は…乗せられていただけだと……

のぞみん…恐ろしい娘！

「で、結局（ryの部分は何だっただよ〜お？」

「ああ、とくになのもないですよ」

「ないのかよ！…：まあいつか、何にもないなら もうラグナド
キドキして損したよ」

「…ラグナ殿…貴方はSSをなめている！！」

するといきなり口では言えないアイテムを持ち出したのぞみんが背
後にツ！！

「なにいいい！？…いつたいいつのまにいいい！！」

や、やめ、あ、あれ？いつのまに縄でしぼられ、ちょ、ちょっと
く？

いったい何をする気なのかな〜？…かな〜？

や、そんな太いのはいら、アツーーーーー

結論だけ言おう。守り切った…

して、やってまいりましたよ、さいたまです！

さうていくか！さいたま200げぶん、さいたま覚悟！！

さばみそー…キラ ミ

「ふう、結構やるじゃねえかよ〜早雲？」

「ふ、愚問だな。俺は蘭の愛によって守られているからな」

「カップルのマンネリ打破には男を戦場へ送るに限るんだ」

「だれがマンネリだと?!」

早雲とたわいもない戦闘あそびをしていると…

“ ”

「なっなんだ!?!」

「この揺れは?! いったい…?」

「見ろ! 砂嵐だ!?!」

「違うぞ! 良く感じる! 地震だ!」

「そうじゃない! タズマニアデビルだ!?!」

「いや、違う! あいつらは…」

でっかく書かれた畏の文字

「上杉軍! 義によって参上ッ! この戦に武力介入するっ!」

上杉きちやったよ

どうすんの…謙信原作チートの兵数9999ですズラ

俺ならどうにかできるズラが健太郎君になんていわれるか…

「私は上杉謙信ッ！北条の助太刀するぞ！」

「覚悟！今川の悪霊使い！毘沙門天の加護ぞある！」

やべえこつちもろ敵だわ。てか、悪霊使いはもう俺のことなのね…

だがしかし、謙信には原作より伝わる必殺ワードがあるのだよ

この魔法の呪文（笑）を唱えれば勝ったも同然！！

「うん、綺麗だ。めちゃくちゃ可愛い」

side:けんしん

私がこの名前は異人だが異人じゃない今川の悪霊使いを見たときの

一言はそう、

「おいしそつである」

なぜかというところの頭もしゃと思うが、

異国に伝わる「パイナップル」とやらではないのだろうか

あの髪の立ち方、食べ物だと聞いていたがまさか生き物だったとは思ってもよらなかった

しかし、なかなか大きい。喰い応えがありそうだ

でも、相手は関東を支配（四国もあるよ）していた北条家をももの数日で落とすまでに、

至らしめた手腕なかなかのものだろう

でも、食べたい。すごく食べたい。愛に言って勝ってきてもらおうかな（誤字にあらす）

でも、やっぱり今食べたい

食べる、食べないが問題じゃなくて、どう食べるかが問題なんだ

それに、こごいこのをナマモノっていうんだったよな

それなら、新鮮なうちに食べなくちゃ！

はあはあ…おいしそう…

柄にも会わず興奮してきてしまった

これが未知の食べ物に対する好奇心なんだろうか

むむむ、全然隙が見つからない

力技で無理ならどうしようか

ま、なんとかなるだろう。とりあえず力技でどうにかするか

…あれ？悪霊使いがなんか言ってた気がするけど気のせいかな…

s i d e o u t

よし！顔が赤いぞ

魔法の呪文（笑）が効いたな

さて、そろそろにげようお〜！

いきなり切りかかってきやがった！

なに？なんなの？ヤンデレかなんかなの？

ちい！今の俺はごくごく普通の刀しか持ってないんだよ

スタンド：アヌビス神やスタンド：銀の戦車シルバー・チャリオッツで

相手してもいいんだけど俺は杉崎ばりのフェミニストなのさ

女の子に刀を向けるだけでもじんましんが出るぜ

え？蘭？もう、早雲とくつつけよ

キンツ！カンツ！

「はあはあ…じゅるり…おいしそう」

聞きたくなかった…

なに？なんなの？戦闘おほか狂ばっかしかいねえ！！

しかしきつとあれだ県政のおやつさんあたりに操られてんだ！きつとそうだ！

あれだな絶対佐渡やMAZOに攻め込んでやるぜ！

ブオーー

あの音はなんか貝みたいなの音だったかな

「謙信ッ！もう引くべきだよ！」

おお愛がいるよ どうもです

「（くっ！ここで「パイナッポー」を逃すのは惜しいな。でも仕方ないか…）愛、今行く！」

なんだろう…ものすごく見つめられたんだが、すごく嫌な気分じゃないんだ

こっ…のぞみんに見られてるときみたいな

ゾッ…やめてくれよ、のぞみん+せつたん=けんしん、みたいなのとは

いくらなんでも…悪夢だよ…

もう腹切るしかないの？腹切御免ですか！？ダンシングなサムライじゃないんだよ！

side:愛

今はさいたまから佐渡に向けて後退中

今川軍はなかなか強靱だった

とても連戦して疲れている様子は見受けられなかった

どういうことなの…？

なにか今川軍には秘密があるのだろうか…

それとさつきから謙信がこわいんだけど…

いや、嬉しそうなのはわかるよ

でもね、この感覚はお腹がすきすぎて

人まで食べだしそうな勢いに似てるんだよ…

いったいどういうことなの

全力で聞いてみよう

「謙信…さつきから嬉しそうだけどなにかあったの？」

ゾクウ…やばいこの感覚は死ぬる

ああー！虎子おーッ！勝子おーッ！駄目だ！佐渡までもう少しだ

気を振り絞れええ！駄目だそのままじゃ喰われるぞ！！！！

「愛…殿…わたし…は上杉に…れて幸せで…た…ガク」

虎子ーッ！…！！しっかりするんだ。ガクって口で言えるくらいなら気入れるやああ！！

「愛殿…私は…もう…りです…たぶん」

勝子おおおおッ！！言ったよね！？たぶんって！！言ったよねえ！！！？？

ああ…なんてこった…私は死地けしじに一人か…

「ふふ…ん。愛なんと私はッ！最高の食べ物を見つけたぞ！！」

いやだ…聞きたくない…今ほど私の体に両の耳があるのが憎ましい

「なんとっ！今川の領主の悪霊使いが「パイナッポー」だったんだ！

これほど嬉しいことはないっ！」

アア…ああ…あー…どうしたらいいの…

どうやったらこんな勘違いができるの…あんたの思考回路はどうなってるの…

「それでな、「パイナッポー」は案外強かったんだ。で、愛になど

うすれば食べれるか

聞こうと思ってな。どうしたらいいかな？」

やめてよ…私にそんなこと聞かないでよ…

というか、私にどうしろと？

無理って、言えって？

私に腹切れというか！？ダンシングなサムライじゃないのよ！

そんなこといったら私が謙信に喰われちゃうわ！（性的な意味ではない）

ああ…私を残していった虎子と勝子が憎い…

「どうした？愛、顔が青いぞ…？」

あんたのせいだよおおお！

はっ！私はいまッ！ものすごい名案が思い付いた！！！！

勝つる！これで謙信に勝つる！！

「ははは、私じゃよく分からないから県政様に聞いてみようか」

「うむむ、そうなのかー。愛でもわからないのか。私はすぐ食べた
いのだがな」

「あわわわ、ほら、チュ パチャプスだよ！！これでも舐めてたら
！！」

「おおお！愛、気がきくなあ。ハム、ペロ、もう一本！！」

早すぎだよあんたああ！！

含んだ瞬間か。ええ？スーパースローカメラで撮ってやるか！？え
え？！

…もちつけ私…素数を数えて落ち着けるわけないから…とりあえず
もちつけ私

ああ…もちつけて言ってる時点で落ち着いてないよおお！

なんで素数で落ち着けるんだよおおお！素数で落ち着ける奴連れて
こいやああ！

そんなやつは口に煙草五本入れてジュース飲ましてやる！！

…何言ってるかわけわからなくなってきた

もういやああ！！

side out

上杉軍が後退した後、早雲をばこってさいたま占領しました。

で、早雲、蘭、小松達は使えるから

早雲はのぞみんに、蘭は俺、小松はせつたんに説得をするのさ

…早雲大丈夫かな

るーやへ移動…

ガチャ

「よお、元気か？」

「何よ？なんかよう？」

「そうかつかスナナよ。あれだ、説得しにきた」

「あたしに今川軍に下ってほしいの？早雲がいいならいいけど…」

「ああ、あいつなら………下るだろう………きっと」

「はあ〜今きつとは何よ。ま、早雲が下るならいつか」

「おお、そうか！なら、お前達には新婚さんバリバリの愛の巣をプレゼントするぜ！」

すると、蘭は立ち上がって俺の手をとってきた

「あなた…わかってるわ」

応ッ！あたぼ〜よお！

あ、そうだ。朱雀ってどうなってんだろうか。聞いてみよう

「なあなあ、朱雀って出せる？」

時期的にまだかもしれんが…

「朱雀？なんであんたが知ってるのよ。ま、いいわ。見せてあげる。出でよ、朱雀！」

すると、なんか火の鳥って感じのができた。だせるのかよ…

「ふふ〜ん。どう〜す〜いでしょ」

むむむ、今出てるってことは朱雀出るのが早いってことなのか

(蘭よお〜こんなとこで出してど〜ゆことなんだよ)

え？しゃべった。ごほん、しゃべった!？

「いやね、こいつが私と朱雀のウルトラスーパーまじパネエすよ蘭の姐さんファイヤーが見たいって言うからね。ちよつと一発くらわそうかと」

(おおそうか！なら俺と蘭のまじパネエ連繋度見せてやつか！)

「え？もしかして二人とも仲いい？」

「何よ？悪いの？」

(そうだぞ。御仁、俺と蘭の友好度1000ぐらいあるぞ)

「愛情度じゃないとこがみそね」

「や、朱雀よ〜ザビエルとの仲は？」

(む、あの馬鹿とか。御仁がなぜ知ってるかは聞かんが最悪だな。

主に俺が嫌ってる。あのダメおやじなんかより姐さんのほうが万倍まし)

なんかザビエルの嫌われ方がすごい…

「さっさと行きましょ。こんなとこでだべっても仕方ないでしょ」

蘭が出ていく。はあく勝手に行くなよ

とりあえず次は佐渡だな

side: 死国

作者「略…タクガができました」

死国「いいのか作者…駄目だろ。ドラァア」

作「グハァア」

死「勝手ながら俺が書く！え？作者は神じゃなかったっけって？しらん！」

死国、そこは北条家が支配し呪い付きのものが送られる場所である
しかし、そこは鬼があふれ出て死ぬも生きるも狭間なような場所である

だが、そこに一人の者がたった

名は坂本龍馬！

そのものと愉快な仲間が巧みな腕により四国を制圧ッ！

この者たちの物語が、今ッ！始まる…

でも、もう少しやさしくしてね…？火とかひどいよ

けんしん！けんしん！（後書き）

タクガ発起しましたが本編で出来るか知りません

ちよつと感想がほしい

でも批判怖い

批判が来てもこの言葉があれば大丈夫

『こいつらは可哀想な生き物なんだ。僕とは違う生き物なんだ。嫌がらせをしないと呼吸ができなくて死んじゃうんだ。可哀想に。君たちのために僕は甘んじて嫌がらせを受けてあげる！僕ってなんて優しいんだろっ！』

ああ、凰火さん貴方の言葉は勇気をくれます

タイトルがきまらない(前書き)

えーと

前編後編でわけてたんですが不慮の事故で消えちゃいました

今日中に書くつもりなんで前編で我慢を

タイトルがきまらない

俺がさいたまで佐渡に攻め入ろうとしているとのぞみんが話しかけてきた

「くふふう〜ラグナさん。織田に行った時のことで言い忘れていたことがありました」

え？まじ？他に重要なことって…まさか

「織田に異人がきたみたいですよ。どうやら影番におさまったみたいです。それと私たちがさいたま戦し

ているときに大和と伊勢を攻めとったみたいです。なかなかやりますね〜。

次はまむし油田攻めるみたいですよ」

あー来たんか。ってエ、もう大和と伊勢を攻め終わってまむし油田狙いだとお！？

…のぞみんよ、そーいう重要なことは早く言ってね…

て、ことはもうすぐ足利かつ！

やべえ。山本さんちの太郎君殺されちゃうわ。

あの鬱うー展開は回避すべし！

「おい、誰かおるか〜！」

するとどこから現れたんじゃ、こんちくショーばりに忍者っぽい人
が出できた

「はっ！何か…！」

「実はなかなくかく、しかじか、しかくいむーぶなんだ」

「はあ、そのものを探し出し護衛するのですね」

「おう、結構多く付けてくれよ」

「それほどの事なのですか？」

「念のためだ」

忍者が去ったあと俺はどうするか考えた

むむむ、俺は佐渡攻めたいだろ

で、ランスはまむし油田攻めか…

浅井朝倉は出てこないとして武田か…誰かに任せるか

せったん、のぞみん、小松に任せるか

早雲と蘭は愛の巢で盛ってるから使えないし…

佐渡は俺だけで十分だろ

さてさて、戦の準備するか

side：ランス

エッチしたい

俺様は俺様だ

織田の影番になって数ターン立つがなんと二国も占領してしまったのだ

さすが俺様

で、次は何かと織田といざこざがあるらしい足利とかいっとこを攻めるのだ

影番になった時今川とは同盟しているから攻めるなと信長に言われたが俺は知らん

どうもいまは、北条との戦が終わって上杉と膠着状態らしいが俺様は足利との

戦が終わったら攻める気ではないぞ

あんな大国だ、かわい子ちゃんの一人や二人、にゃんにゃんするぞ！

しかし、でかいからな。うーむ…でかい国…頭が大事…

なら、頭首を殺せばいいのか！

どうせ奥に引きこもってるやつに違いな

よし、暗殺だ

「鈴女ー！ちょっとーいいー！」

シュタツ！

「呼んだでござるか、ランス殿？」

「うむ、ちょっと股かせ…じゃなくて、今川の領主殺してこい」

「でも、織田は同盟してるでござるよ」

「いいから殺してくるのだ！そして女の子とにゃんにゃんするのだ
ー」

「はあーランス殿は我慢しないでござるな。そこまでいつなら仕方ないでござる。

らっくくるでござる。ニンニン」

「ばれるなよ」

「当たり前でござる。任じとくだいござるよ〜」

鈴女はいったな

よし、これで女の子とにゃんにゃんだ！ガハハハハ！

side out

せったん率いる軍勢が貝に向かった

俺も佐渡に行こうかなあ

その前に少し部屋で休むか

あう〜あう〜

オールウェイズ冬眠中…

む、少し寝てしまったみたいだな

そろそろ起きようかな

あれ？誰か上にいるみたいだなあ

「起きたでござるか。動かない方がいいでござる。でも、動いても動かなくても一緒でござるけど」

え〜？この独特喋りは長瀬…じゃなくて 鈴女か。

でも、何でこんなところにいるんだ？

確かに織田と同盟したってのぞみん言ってたし。

「話がわかるでござる。これでおさらばでござるが」

俺の首もとと、胸元に苦九が当てられる。

あるえ〜？

絶対絶命ですか。

やばいですな。

あ、ちょっと、危ないですよ。

そんな僕なんか殺しても…

グサッ

あいた

side：鈴女

「案外、呆気なかったでござるな」

護衛は忍者数人。

脅して聞いてみると、どうもある人物を護衛してるみたいでござる。聞いたとき、今川になんの関係が、と思ったでござるが、これは、足利戦でつかえるでござる。

これでランス殿に褒めてもらえるでござる。キャッキャッ……ッ！……落ち着くでござる。

今、今川の領主の“死体が、動いた”わけないでござる。

そんなホラー普通は遭遇しないでござる。

で、でも今、見間違いであってほしいし、いますぐ尾張に帰りたいでござる

しかしもし、仕留めそこなっていていたら、大国今川との、戦になるでござる。

むむむ、ええい！ままよ〜でござるー！

いた。『死体が立っていた』。

「はわっわわっわわっわあっわわっわわ（驚いて声にならない）」

「はぁ〜い どちらさんですかぁ？」

あとはわかるでござろう。すぐ逃げたでござる

死体が動いてしゃべったら誰だつてそーするでござる。拙者もそーするでござる

尾張に帰ってランス殿に

「あ、ありのままさつき起こったことを話すでござる！ 『拙者はたしかに今川の領主を殺したでござる。』

しかしッ！その死体が動いた』な…何を言っているのかわからねーと思うでござるが、拙者も何をされた

のかわからなかったでござる…

頭がどうにかなりそうだった…

催眠術だとか影武者だとかそんなチャチなもんじゃあ断じてないでござる。

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったでござる……」

と言っても信じてもらえなかったでござる

嘘だッ！と言われて突っ込まれたでござる（性的な意味で）

流石ランス殿でござる。ニンニン

side out

うむむ、最近死んでなかったから、びっくりして死んだままだった

しかし、なんで鈴女が俺殺しに来たんだ…？

……すぐ思い付いた…ランスしかいねえ

大方女の子とニャンニャンするために俺殺そうとしたんだろ

殿は不死身でいらっしやいますな

いいセリフだ。私の墓にはそう書いてもらおう

的なやり取りができそうだ。墓には入らんが

しっかし、ランスはどこまでも欲望に忠実だねえ

もし、俺が死んだら、今川が織田攻撃してくるってわからんかね

まあ、武田と上杉にも手伝ってもらったらわからんけど

…とりあえず今度から、血みどろで誰かの後ろには立たないでおこ
う…

悲鳴あげられて逃げられるのは、ちとキツイ…

タイトルがきまらない(後書き)

このあとも続きます

次回予告なんて信じるもんじゃない。俺はディスプレイで知った(前書き)

消える前の思い出しながら書いたんで

変なことかあるかもしれません

そこは偉大な読者パワーで乗り切ってください

次回予告なんて信じるもんじゃない。俺はディスプレイアで知った

俺は今、佐渡の城の前にいる

何故に、急展開すぎる。死ねば？とは、言わないでくれ

これにもいろいろあるんだ

そんな読者のために回想に入るぜ！

Vの体勢をとれ！

無理だ！

なら、見せん！

だが、私のスケジュール表にはそう書いてある

なら、仕方ない

回想スタート！

…上のは気にしないでくれ

回想捏造中…

俺は鈴女に逃げられた後、少し考え事をしていた

何故、鈴女が俺を殺しに来たかだ

…すぐ気がついた。ランスしかいねえ

どうせ大方女の子とにゃんにゃんしたいが為だろう

流石ランス性欲の塊だ

しかし、ランスも馬鹿だねえ俺が死んだら今川が総攻撃してくるっていうのに

あれか、ゼスとかが守ってくれるぜ！とか思ってるのかな

それが、武田、上杉と連合したら勝てると思ったかな

まあ、結局俺は死なないんだがな

殿は不死身でいらっしやいますな

いいセリフだ。私の墓にはそう書いてもらおう

的なやり取りができないかなあ。まあ墓には入らんが

で、だ。織田と同盟を切るか切らないかもある

で、考えた結果、切らないことにした

というか、切れそうにないし

まず、証人がいない

だって、「俺が殺されたんだ！」って言っても「てめえ生きてるじやねえか。ばかか？」で、

一蹴される。ランスと鈴女が黙っている限りばれないんだろうし

で、そんなこんなで、考えていると家臣Aがやってきて驚いてた

どちらかという俺のほうが驚いた

いくらなんでも「な、なんじゃこりゃ〜!？」をアップするのはやめてほしい

俺は血みどろだったから仕方ないんだけど

何の用か聞いてみると上杉から書状が来ているらしい

なん…だ…と？

俺なんかしたか？

で、読んでみると『ちよつと、こつち来い』

冒頭に戻るですね

回想上映終了…

回想が終了した俺は今城の中を歩いてる（春日山城なのかな？）

ふと、気になったことがあった

前を歩いて案内してくれている人に

聞いてみよう

「すみません。あの部屋なんですか？」

「（やべえ。話しかけられた。しかたない適当にするか）

え〜と、あれは、わがま間、宝のや間、つかの間、とん間、あら間、お茶の間ですね」

なんだそれ、某幸運ヒーロー思い出したじゃねえか

そんなこんなでどうやらついたみたいだ

「ここが県政様のおわす場所です」

「お、おとうさんの間だ…と?!」

「県政様、お連れしました」

俺の驚きなど気にしない案内の人

シュ

「ちくしょう、どつぞ」

ちくしょういつたい全体なんだってんだ

はっ！もしや強力な水中バレエを見て思いきり笑った後は魚も泳ぐ
戦国風呂を味あわせれ

俺と読者のハナミズを飲みつくされるのか!!

俺は決心をクーガの兄貴並の速さでし、「おとうさんの間」に入る
礼儀作法なんて知らないんだぜ

でも入った後が問題すぎた

面子がやばい

中々の広さの部屋に真ん中に、こたつ机みたいなのが置いてある

で、座ってる人物が県政のおっさんと謙信なんだよ

そのつしるに、愛がいる。助けて愛さん

「ふむ、君が今川の領主、ラグナ君か。よろしく頼む」

え？なにこの紳士。変態じゃない紳士だぞ

「え、あ、ラ、ラグナと申します。ふつつかものですが、よろしく
お願いします」

何？なんなの、これ県政？

「さて、今日君を呼んだのは他でもない。君が娘の謙信に見合つか
どうか、確かめるためだ！」

俺ですか？ってか、娘ってどういうわけ？

確か姪と叔父の関係だった気が

「私を手塩にかけて実の娘のように、育てた謙信が、君に任せられ
るか、覚悟を問わせてもらう！」
どうしてこうなった。

助けて、愛さん！おーいーいーい ネコドラクーン

はあくどうしてこうなったかは、私が聞きたい。

そんな見捨てられた目をしないでよ。

というか、全部あの娘が悪い。

あんな言い方したら誰だって勘違いするわよJK

回想スタート！なによ文句ある？

…さいたまから帰ってきました…

ふう、無事帰ってこれた。

後で、虎子と勝子をしめとかなきゃ

ん？あれは…謙信じゃないの

どこにいくのかしら

あの方向は…県政様のいる「おとうさんの間」じゃないの！？
まさか県政様にお話する気なんじゃ…

やばい、それはとめないよ

結果必死に追いかけたけどあの娘こんな時に限って持ち前の運動能力を存分に発揮して

追い付けなかった

ついたときはもう謙信がこんなこと叫びだして

「ラグナがほしい!!」(名前は撤退中に教えました)

その言い方は誤解を招くわよ

「ラグナとは…今川の領主か?」

なんでこんな時に限って県政様も知ってるのよ

県政様は男女平等に優しく謙信も実の娘のように扱っている

…謙信は食べ物もらえるから懐いてるのかも知れないけど

「はい、そうです(食べ物が領主やってるって不思議だね)」

「ふむ、色恋事にまったく関心をしめさなかった謙信が決めたことか…だが、一目会わせてくれんか?」

「いいと思います(お父様も食べたいのかな?)」

「誰か!紙と硯を持って来い!今川の領主に書状を書くぞ!」

今確かに勘違いが発生した

まちがない。こんな奇天烈な話がつまく廻るわけない。

…ご都合主義という言葉が聞こえた気がする

すまない。今川の領主…止めきれなかった

かいそーおわり…

これで事の経緯はわかったわね

あー県政様が覚悟試しだつて今川のに腕相撲挑んでる

謙信は謙信でにやにやしてるだけだし

どうにかなんないのかしら

あ、県政様が負けた。あの人結構強いのに。

「謙信本当にこの者といっしょでいいんだな？」

「はい。一緒にいたいです（そのほうが食べやすそうだし）」

「君の勝ちだ。潔く謙信を譲ろう。謙信…元気だな」

「えーあの、一体どういう状況なんですか…」

今川の、貴方の疑問はもつともだわ

でもこの場でその勘違いを覆せる決定的方法はないのよ

「よし！今から婚姻の儀を済ませるぞ！皆のものすぐ準備せい！」

オオーーー！

あんたらいつの間に…

とりあえず私は今川のの命が助かることを祈ってるわ

side out

気付いたら謙信と結婚させられていた

何を言っているかわからねーと思うが俺も何を言っているかわからねー

世界がどうにかなりそうだった

あのと上杉と当り前のように同盟を結んだ

帰ったらせったん達も帰ってきていて驚かれた

というか俺のほうが驚いた

貝に攻め込んでたはずなのに信濃まで勝ち取ってきてるんだけど

武田弱ッ！

この後どうなるんだろうと思っていると謙信が話しかけてきた

「どうしたんだ？何か思い悩むことでもあるのか（私の「パイナツポ」に何かあれば一大事だ）」

「ああ、これから先どうしたらいいのかわかって」

「そうか、でも私は貴方に一つ、言えることがある」

何だ？

「出会ってくれて本当にありがとう（訳：未知の味に会えた。うれ

しい)」

「…ふ、どうも。こちらこそだ」

「（やっぱり食材はおいしく食べてもらえるのがうれしいんだな）」

「（絶対に勘違いが起きている…!）」

あれ愛さんそんなとこでなにしてるの？

そのあと、パイナップルを食べさせてくれと言われたがどこにあるか知らないのです

スタンド：パール・ジャムを混ぜた食べ物を出してみた

実は俺エヴァ達と放浪中は俺が食事係なんだぜ？主にパール・ジャムを使えるからという

謙信はおいしいと言ってくれた

…あの勢いだとほんとに味わってるのかわからないけどでもたとえるなら、

サインとガーファ クルのデュエット！

ウツチャンに対するナンチャン！

高森朝雄の原作に対する、ちばてつやの「あしのジョー」！

とか叫んでたんだけど気のせいかな

なんか強くなったとかいきなり言いだすもんだから岩殴らせたら粉
みじんになった

…パール・ジャムのせいですか？

次回予告なんて信じるもんじゃない。俺はディスプレイで知った（後書き）

謙信と結婚しました。ごめんなさい。すいませんでした。

そのかわり謙信パワーあつぷしましたよ！

すげいでしょこれなら埋め合わせに…ならない？

後主に謙信は結婚は気にしてませんパイナツポーが食えるならそれ
くらいの感覚です

外伝・方角により（前書き）

外伝のときはラグナ、エヴァ、スネーク、チャチャゼロ時代に戻ります

大体はほかの作品のキャラクターがスタンドとして発現しますが

本編で出てくることは余程のことが無いと出てきません。

では、どーぞ

外伝・方角により

おっす、おらラグナってえもんだ。

今日もエヴァとスネークと一緒に青い空を見上げているぜ

つまり宿なしです。ほんとうにつらいです

「なあラグナ。バーニング・ダウン・ザ・ハウスで部屋の幽霊見つけられないのか？」

「こんな森の中にあるわけねえだろ。馬鹿かおめえ」

「てめえそんなにいうことねえじゃねえかよ〜！」

するとスネークの後ろの空間からレールガンを出してきた

「お前レールガン使うならダイナモ回せよ」

「ふ、残念だったな。こいつはMGS4のレールガンだ」

それなら溜めるだけで十分じゃねえか

ピュイイイイイン

チュドーン！

「おわあぶねえ。おら、どうした？俺はここだぞ？」

「ヘイツ！ 胴体に別れを言いなッ！ ちょんぱだ！」

ちよつとまで。そのチェーンソーどこから出した

「偉い奴が強いんじゃない、強い奴が偉いんだ！」

ギューイイイイイイイイ

「うるさいぞお前達！ もう少し静かに殺れ！」

エヴァ… 止めはしないんだね

「ええい！ スタンド：龍の夢発動ドリーム・スタンディング・ドリームっ！」

ドラゴンズ・ドリーム、俺に避けきれる場所を！」

「俺は中立ダツツーの！」

方角は… かのえの方角、 225度0分か…

「お前ひきよーだぞ！」

「チェーンソー出してくるお前に言われたかないわ！」

次はこの方角か…

俺が動いてその方角に向いた瞬間ドラゴンズ・ドリームが消えた

「なっ！ どういうことだ！？ 出る！ ドラゴンズ・ドリーム！」

だが、俺が焦っているのにスネークは攻撃してこない

「なぜ…攻撃してこない？」

「できるならしてえ…だが！それは一体なんだ！？」

..
..
..
..
..
..
..
..
..
..
..
..

スネークが指さす場所に‘物体’がある。

一体こいつはなんだ？！

ドラゴンズ・ドリームが消えちまった事に関係あるのかっ！？

その‘物体’がゆっくりと動き始める

生きているのかこいつはっ！

そしてその‘物体’の姿が現れるッ！

..
..
..
..
..
..
..
..
..
..
..
..

ネコミミしっぽ幼女だった。…期待した読者怒らないでね

そいつは高らかに名乗り上げる

「この凶華様は全知全能だぞ！」

凶華様（笑）でしたあ

「おい、ラグナこいつお前のスタンドか？」

「ああ、そうみたいだ…」

「なんだこの猫耳幼女は？」

エヴァ、お前がそれ言っているのかよ

「ふう〜ん、この凶華様の魅惑のボディに酔いしれているのだな
！だな！」

でも〜私を押し倒していいのは凰火だけだぞ ミ

なんだこいつ

「む、貴様いくらこの凶華様の本体だからといえども今の考えは置
いておけんぞ！」

え、考え読まれるの？本体だからか

「むむむ。スパムメール送信！」

なんと迷惑極まりない攻撃だな

まったく言葉の暴力って知ってるか

…、なら言葉の警察を呼びなさいよ、って聞こえた気がする

「だが、着信拒否。これでそのメールは貴様に帰ることとなる！」

「うわわわあああああ」

凶華が頭抱えてる

「くう、ここまでの仕打ちいくら仏より寛大な凶華様とはいえども

もうゆるしておけん！その体乗っ取ってやる！えい」

しかし、俺は華麗なステップでかわす

すると、後ろのエヴァに当たった

場には倒れているエヴァと凶華の肉体ことSYGNUSシグナス

こいつの能力『生命を操る機能』って最強だよな

おろ？どちらも起きたみたいだ

「なあラグナ…この後対応がすごく大変だと思わないか？」

「ああ、俺もそう思う」

「だから俺は逃げさせてもらおう！」

ダツ！（スネークが走る音）

サツ、ガシツ！（ラグナが回り込んでスネークを捕まえる音）

「死ぬときは一緒だ」

「今ちくしょう！鬼畜う、鬼い、最低野郎、ラグナ！」

今俺の名前が罵倒に入ってたか

「うう…な、なんだこの体は！凶華様のボツ、キュツ、ボ、のナイ
スバデエ〜じゃなくてひんそーな体じゃないか」

お前がそれを言うか

だが、猫耳エヴァ。これはいける

てか、精神でエヴァ、凶華に負けたのか

「うあ〜ん、うるさいぞ凶華」

シグナス
SYGNUSことナス子さんが起きた

「どうもです、ナス子さん」

「おはようございます、ナス子さん」

「…おい、貴様ら覚悟はできてるな？私は寝起きで機嫌が悪いぞ？」

すまん…死ぬときは一緒だといったがぁりや嘘だ…

「貴様ら覚悟しろよ…？」

ナス子さんが自死の能力を存分に使ってくれるようです

あ、スネークてめえなに段ボールに避難しようとしてんだ

俺も入れる

「お、おいナス子が暴れるぞ！いいのか？！」

あたふたしてる猫耳エヴァ。最高だ

「凶華おめえもこっち来い」

凶華in猫耳エヴァを引っ張る

段ボールの中…

「どうだ？ナス子さんは落ち着いたか？」

「粉塵でよく見えんが大丈夫だと思うぞ」

段ボールを出してみる

景色と言うものはこうにもなるのか

ナス子さんの自死の能力で森が荒野と化していた

「あ、ナス子さん」

「あーすまんやり過ぎた」

森を荒野と化してそう言うか

なら、反省させよう

「ナス子さん、ナス子さん！」

「ナス子さん言うなっつーに……」

「反省してください」

「は？」

やりますか。

そのパソコンの前の人もケータイの前の人も。スネークもいいか
…？

荒廃した森はスタッフが直しました（チャチャゼロより）

「スタッフ…？ソナモニーネーヨ。俺一人ダケダ…」

外伝・方角により（後書き）

ナス子さーん！

スタンド：全知全能（凶華様）

自分を飛ばし相手を猫耳しっぱモードに強制転換
さらに自我まで乗っ取り、能力の大幅アップ
いいことづくしだが凶華を操りきれるのは凰火だけである

スタンド：自死（ナス子さん）

凶華が相手にとりついた際発動

この際原則のスタンド一体は適用されない
名前が違っただけでスタンドの能力みたいなもんだから

『生命を操る機能』を持つ

ぶっちゃけ最強

ナス子さんとよばれると暴走する

タイトルと内容は関係ないことが多い(前書き)

今回はあんま進みません

あーランスの口調が難しい

タイトルと内容は関係ないことが多い

side:ランス

俺様はランスだ。さいきよーだ。

誰だ今、？って言った奴は！

出てこい業務用製氷機で殴るぞ！

足利戦はよゆうだったぜ

五十六ってゆう可愛娘ちゃんも下ったし。ウヒヒ…

弟生きて嬉しがつてたし…まあ良かったんじゃないかなー

そのあとはもちろんしたが

「おーい信長ー」

「どうしたんだい？ランス。」フキフキ

「む、なんだその瓢箪は？特に変わっているようには見えんが…」

「見た目は普通だけどね。なんでも『Japanに災いをもたらす物なので力あるものがしっかりと守らねば」

ならん』というわけで天志教に認められた主要な大名に昔から代々預けられているんだよ。

尾張にも信者がたくさんいるし国を治める協力してもらっている。その天志教との友好の証だから

大切にしないとね」

「ふーん。こんなモンがなあ……」

瓢箪を手を取ってみる

「キ、うつきー！ー！ー！」

ん？今のは信長の肩に乗ってる藤吉郎とかいう猿の声か？

「どわっ！？」

こいついきなり俺様のナイスなフェイスに覆いかぶさってきやがったぞ

ええい！離れる！

コンッ あ、思わず瓢箪を離してしまったぞ

「き。うつきっ。うつきん」

「な…なんなんだ？」

むかあ、こいつ猿のくせして

「き。き」

ガツガツ こいつ瓢箪を叩きつけてるぞ。何がしたいんだ

「こらこら。やめないか藤吉郎。壊れてないかな…あ、ひびが入ってる。全くしょうがないなランスは」

「なんでそうなる！悪いのはその馬鹿猿だ！」

なんで俺様が悪いのだ

「くつつければ大丈夫かな？」

ずっ…

ん？なんか今瓢箪から出てきたような…？

ぐいっ

信長が倒れる。ってどづいつことだ！

「お、おい信長！どうした。お…おいしっかりしろ」

ゆっゆっゆっをすってみる。起きない…

「GG今すぐ来い！」

うおーどづいづことだあ！

「なにごとじゃあ」「の、信長様！」 「誰か医者を呼べ！」

…その様子を傍目に藤吉郎は出ていく

主が封印されている瓢箪を探しに

…猿一匹で。(どうして我が主は人望がないんだウキツ！)

使徒・煉獄などをはじめとする使徒は皆、主に愛想尽かしている

戦闘狂の使徒・式部でさえ。…お父さんが嫌いな娘の年頃なんだろうか

みんなでみんな反抗期である

猿の自分じゃ人を頼りに人海戦術もできない

しかし、あの馬鹿な異人のおかげで一つ目がやっと割れた

これで何とかなるだろう

「どうだっぺか？」

「うめえ。なかなかやるな今川のおっさん。謙信もつまいか？」

「うむ、美味だ。もっとくれ」

「…もう少し味わって食べてほしいだよ」

さて、いきなりでよくわからない人がいるかもしれないので説明しよう

気付いたら謙信と結婚させられていたので上杉とも同盟してしまっている

つまり今川は当面暇なのだよ

あー今川焼うめえ

よし、今夜はみんなを集めて宴でもするか

夜になる…

「さて、みんな。まずは異人っぽい名前の俺についてきてくれてありがとう。お前たちのおかげで東北、

中部と今川は勝ちとれた。長い前置きはいらねえ。とりあえず飲んで騒ごうぜー!」

「ウオオオオオオオ!」

みんな元気だなあオイ!

「ふう、ドンチャカ騒ぎだな」

「そうですね」

せつたん…いつのまに

「主役は騒がなくてもいいのですか?」

「いーんだよ。上がいたらいたで下の奴が騒ぎにくいだろ」

「そういうものなんですか。そういうえば…まだ戦姫と呼ばれてませんね」

「けっ!そんなあだ名俺に勝ってから言いな」

「では、殺らないか？」

「だが断る。俺を誰だと思ってやがる、死んでもやりたくねえことは死んでもやらねえラグナだせえ」

「そうか、残念だ。私は貴方といるのは好きなのだがな」

「俺と模擬戦闘なんかやってたのしいのかねえ」

「そういう意味で言ったわけではないのだが…それに謙信に取られてしまったし」

俺は謙信と模擬戦なんてやってないぞ

「ふう。さて、そろそろ私は行くよ。他の人も飲んであげてくれ」

「へいへい」

せったんが去っていく。綺麗なんだけどな―戦闘^{おぼ}狂だし

「のんできますか？」

ん…？のぞみんか

「ああ、ほどほどにな。のぞみんも飲んでるかー」

「はい、飲んでますよ。…チツ、それほど飲んでないですか」

今、なんかいった？

「いえいえ何でもないですよ。ささ、もう一杯どうぞ」

おおっと、すまんな

「私本当にラグナさんに感謝してるんです」

どうしたいきなり

「きつと、ラグナさんがいなければ今の私は居なかったでしょう」

ぐふう。そ、そうかもしれない

「でもラグナさんのおかげで本当の、本当の私に気づかせてくれて

…！」

え、そこ俺は喜んでいいわけ？

「当たり前じゃないですか！そのお礼に私が身に付けた数々のスキル、ラグナさんの身体で試させてあげますよ」

お断りです。俺の身体はそんなに安くないんだからね！

「そうですか。…チツ！酔いでどうにかなると思ったけど…。せつかく練習したんですけどねえ」

たまに鎧の下にに縄を巻いている奴がいると思ったらお前の被害者が

「まあいつでもいってください。そのときはお相手しますよ」

ぎりぎりな発言はするもんじゃない。摘発されても知らんぞ

「それでは、ラグナさんもゆっくりしていつてくださいね」

饅頭しか思い出さないよ…

「よう、ラグナ飲んでるか？」

「早雲じゃねえか。蘭はほつといってもいいのか？」

「酒なんて飲ませられないからな。今日は俺だけさ」

北条家の陰陽どこのうがすごく楽になったおかげか楽しそうだ

「俺よりも…謙信とはどうなんだ？」

「あー俺の料理をおいしく食べてくれていると楽しいんだがなあ…」

「どうした？何か問題でもあるのか」

「いや、俺実は300歳の春過ぎた爺なんだぜ。そんな俺がなあ」

どうだ驚いたか

「バツカきや朗！」

ぐべ。早雲の右ストレートパンチが入る。

「愛に年齢なんて関係ないんだよ！お前らの間に愛があればいいんだよ！」

早雲…

「俺と蘭は時間が合わずあえない時間が多かった。それでも今でも前でも仲良くやってんだよお！」

早雲…俺は、俺は…

「わかつたらとつと行きな。待ってるぜ？」

「ありがとう。早雲。俺行ってくる」

俺は食事の消費量がすごいところへ行く

「なあ謙信」

「フガフガ、もきゅっもきゅっ（どうした？）」

「俺はお前の事が好きだ。謙信はどうだ？」

謙信はそこで食事の手を止めこう言った

「私はあなた（の作る料理）が好きだ」

…うれしいね

「そうか。ありがとう…」

「（待つんだ！勘違いが起きているぞ！）」

あれ愛さんじゃないかどうしたんだい？

…

「どうしたんだ蘭？わざわざ来て」

「ちょっと朱雀がラグナに言いたいことがあるみたいなんだけど…」

「ああ、あの空間を邪魔するのは忍びないな」

「そうよね。あとでいいか」

(…まあダメおやじの事だしあとでいいか)

タイトルと内容は関係ないことが多い(後書き)

謙信は全力で勘違いセリフを吐いてくれます

謙信はこのままかもしんない…

しりあすてきなのは書きにくい

朱雀は使徒なんで魔人のザビエル復活がわかったと

…しかしどこまでだめなんだザビエル

タイトル考えるのめんどくさいな。でも一話とかは無理(前書き)

まだランスです。

はやくネギまに戻りたい

ネタがいっぱいできてるんだ

タイトル考えるのめんどくさいな。でも一話とかは無理

さて、宴の日から一日経ちました。

二日酔いです。本当にありがとうございます。

「うう…なんでお前らはそんな平気なんだ…」

「武将たるもの飲めんな。それによく飲んでいる」

うう…そう言えば俺は全然飲んでないんだな

エヴァ達と放浪中はそんなもん買えないし、こっち来ても国取りばつかなかったし。

「まあ今日は休んでいたらいいだろっ
そうさせてもらっ

「あ、そうだ」

なんだ早雲

「昨日わざわざ蘭が来ていたぞ。どうも朱雀がお前に話があったら
しい」

え〜なんですかあ

「そこまでは聞いてない。じゃあ俺達は行くな」

早雲とせつたんが出ていく。そついやのぞみんが来てなかったな

まあねるかなあ

「くふふう〜ところがどっこいですよ。そつは問屋が許さないんです〜」

のぞみんが現れた！
嫌な予感しかしない

「自分の状態を確認してみてください」
状態…二日酔い

機動力…皆無

俺の運命…オワタ

「お祈りは終わりましたか？それでは…くふふう〜」

どこからか出した縄で俺を縛ろうとするのぞみん。

か、身体がう、動かない

「大丈夫です。痛くはしませんよ…？」

疑問系…！安心できねえーよ！

あ、ちよ、なにするやめ、アツ、そんな太いの…

あんな危機的状況でもどうにかなるもんなんだな…

side：織田

一つの部屋にランス、その奴隷のシル、3Gに織田の領主の妹、香が集まっている。

それもそのはずいきなり信長が倒れやっと思きたのだから

「ははは、心配掛けたね」

信長は変わりないように笑う

「まったく、信長のおかげで国取りができなかった出ないか」

ランスが声を上げる。国取りができなかった理由は領主の信長が倒れたままでは安心できないからである

ランスは早く女の子とにゃんにゃんしたいのだろう

「はは、ランスも心配してくれてたんだね」

「な！？お、俺様は別にそーいうわけではないのだ！」

「ランス様は優しいですからね」

シイルが一樣ランスを援護するがその援護は間違った援護になってしまい頭をぐりぐりされる。合掌。

「もう、ランスさん。優しくしてあげないとだめですよ」

香も声をあげるがランスにそんな道理は通用しない

「ふん。こいつは俺様の奴隷だからいいのだ」

「「これ！あまり騒がしくするでない」「」

3G…喜怒哀をあらわす顔を持つ妖怪だが織田家の重臣が騒がしいランスだけを叱咤する

「まあまあ、いいじゃないか」

信長がそういい、香の頭に手をのせなでる

「もう…にいさま」

そういうがそれほど嫌がっていない香

「それにもう大丈夫だからね。ランスは国取り始めてもいいよ」
そう言いつつ香から手を離し力瘤を作る

「む、そうか！ならいまからいくぞー！」

ランスはすぐに部屋を出ていく。そのうしろからシルがあわててついていく

「やれやれじゃのう。信長様、儂も行ってきますぞ」

3Gも出ていく

「香、もう大丈夫だから。ランスのところに行っておいで」

「はい、わかりました。…あれ、兄様藤吉郎はどうしたんですか？」

ゾツ…一瞬信長が顔をこわばらせたようだが一瞬だったので香は気付かない

「藤吉郎はその辺にいるんじゃないかな。そのうち戻ってくるよ」

「？そうですね。じゃあ私は行きますね」

香が少し気にしたようだがふすまを開けて出でいく

「…ふう。藤吉郎出て来い」

するとどこにいたのか瓢箪を四つもった藤吉郎が現れた。どう持っているかは気にしない

「キツ、ウキ」

「そうか。伊賀の足利に同盟国の今川の元武田、北条には簡単に入れたか。くくく」

信長は瓢箪を手に取り叩きつけるッ！

すると瓢箪は割れ中から黒いもやもやのようなものが出てきそれが信長に吸収される

「くくく、いい気分だ。まるで、幼女を侍らせて『お兄ちゃん』と言わせたぐらいにな！

だがまだ足りん。ランスの奴は次に浅井朝倉を攻めるつもりだったな。瓢箪はなしか…

上杉は今川が同盟しているし…明石あたりか…。

しかし、この貧弱うな体に付いていたときはどうしようかと思っただが、いつまでもここにいないのは不味いな。場所を移すか…」

…

.. ..

信長の独白は誰も聞いていない。

悪役の独白はうまいこと聞かれないものだ

「しかし、使徒が誰も来てくれないなんて…やっぱりこの前復活した時幼女侍らせたのが悪いのか？」

「ウキ」

信長：魔人の疑問に答える者はいない

藤吉郎はどちらを言ったのだろうか

しかし、この猿なかなかやる

一匹で伊賀まで行きさらに足利、武田、北条の元領地まで行った能力…

この猿侮れんかもしれない

俺はいま早雲と蘭の愛の巣にいる

といつてもただのマイホームってやつだ

で、俺が来た理由は昨日の蘭がわざわざ来た話ってえのを聞くためだ

「で、何の用だったんだ？」

「あんた…そんなことよりそれどうにかならないの？」

俺はのぞみんからのお遊びから、ひやひやな思い出逃げ出したおかげで

ぜんぜん準備もできてない。寝巻のまんまだ。さらにおでこにヒエ
ピター（何故があった）

「まあ気にしないでくれ」

「いやよ。私が気にするわ。ほら、ちゃっっちゃっ脱いで。ホラホ
ラ」

ちよ、まてよ。のぞみんのあの手から逃げ出したこの俺が成すすべ

もないだと!？」

あつと言つ間に脱がされ着替えさせられた。

きつと将来いいお母さんになるんだろつな…あれ俺三百歳だよな

「どつしたのよあんた」

「いや、自分が情けなくなつてきて…」

「はあ、もうめんどくさいから話すわよ。朱雀う」

(アイアイサー。姐さん!さて、今回呼んだのはほかでもねえ。なんと)

「なんと…?」

(なんと…巫女機関限定発売!巫女さん全集)ドキツ巫女さんだらけの…の初回限定版をあんたに…

ちよ、タンマ。その振り上げた手はえーりんだろ?わかつてんだぜ)

そんなわけないだろう。だが、殴る気が失せた

「いいから早くはなせ」

(たつくよ)せつかちなあ、オイ!…まあこんな話は置いといてマジな話だぜ?)

「どつという話なんだ?」

「私は聞いてないわよ」

こいつから聞くより楽だと思ったのにな

(魔人：ザビエルの野郎が復活したぜ)

え？魔人？ザビエル？フランシスコの？

ここは戦国ランス。魔人：ラスボス、ラストボスの略

あっあ、あゝ！瓢箪すっかり忘れてたあ！

OH~~~~~！ノオー！

「え、それマジなの？」

放心中の俺の代わりに聞いてくれる蘭

…もう泣くか目を潰すかして落ち着くか俺

(マジだぜ姐さん。奴が復活した時ビびっと来たからな)

「えゝそれじゃあ大変じゃあなゝい」

「でー丈夫だ。蘭は連れていかねえ」

「あらそう？楽だからいいわね」

簡単に引き下がった。愛って素晴らしいね

俺は決意を胸に立ち上がる

…無理だった

「すぐ行くのは無理そうね。適当に休んでからね」

（そうだけ。まだちょっとしか、ちか…うん。ザコなんだしよあ）

なぜ言い換えた。力が何だって？

だが、問い詰めるほど俺も元気がない

帰って寝るか。

どうやって魔人倒そうか。気合で行けるかな

タイトル考えるのめんどくさいな。でも一話とかは無理(後書き)

魔人が起きましたよ

もうちょっとって感じですかね

ランスはツンデレだと思っただ（前書き）

駆け足ですよ

さて、魔人はどう倒そうか

ランスはツンデレだと思っんだ

さて、行く準備はできた

どうも俺が寝ている間に魔人の野郎は本能寺に移動したらしい。忍者に聞いた

で、さっそく行こうと思ったんだが只今捕まっております

行こうとしたらどこからか話を嗅ぎつけてきたせったんとのぞみんと謙信

「いいじゃないか。魔人なんて早々戦えるもんじゃない。血が騒ぐのだ。こう…ふるえるぞハート！燃えつきるほどヒート！！って感じで」

波紋でも使えるのせったん？

「くふふう〜魔人を調教するのはめったにないことなんですよー。楽しみじゃありません？」

そんなことありません。魔人を調教する機会もありません

「私の食覚が訴えるんだ。魔人はおいしいものだ。ならば私は食べなくてはならない！」

魔人は喰えませんよ。どう考えたら食べるの？

俺はそんな柔軟な発想は持っておりませんのでわかりかねる

わかってても怖いが。魔人をおいしいと思える日…来てほしくない

「でもな〜きつと危ないぞー」

「燃えるじゃないか（ですか）」

何にどう燃えるってんだよ。俺は不思議だよ

考えてみるよ戦闘狂に調教者に魔人鬼（食人鬼をもじった）簡単に集まらねえ。

俺のパーティーすごいだろ。どいつもマスタークラスだけ。

こんな奴ら馬車には乗せたくないが。っていうかさのぞみんの変貌ぶりマジで別人だよなー。

原作知ってる人は『はあ？だれてめ』って言われること間違いなし。

なんなのもうヨーヨーマツの能力は『相手をサドに変える』でよくね？

何このスタンド使えね。よええ。サバイバーよりザコい

話が変わったがこいつらは『来ちゃダメ！絶対だめ。父さん通さんぞ』といってもすべての障害を乗り越えてでも来るだろう

たとえばトンネルを馬車を投げつけてふさがれても、物事を三つまでしか覚えられなくても来るだろう

変に途中で来られても困るし連れていくか

「あーわかったわかった。連れていくからおとなしくな?。」

「「わかったぞー! (ました!)」」

この気迫ただじゃすまねえ。亡霊どもも素足で逃げ帰るぐらいだ。俺も逃げたい

逃げちゃだめだ。逃げちゃだめだ。逃げちゃだめだ…

ガシッ

「逃避は終わりです。行きましよう?。」

なぜわかったし

「「あーいうこと」をしているとわかるもんです」

何その嫌な特技。俺は覚えたくない

…ついた。はええ

原作どおりなら煉獄さんあたりが張ってるはずだけどほんとにいねえ
忍者さんはたくさんいたけど。只今、のぞみんによる口では言えな
い変態プレイによって黙らせています

『私の分も残しておいてくださいね』と言われたが残したら魔人が
かわいそうな気がする

とりあえず俺とせつたん、謙信で行く

（一階）

「フハハハハ。一階刺客はこの俺！ザ・フジミだ！俺は十回刺され
んと死なんぞ」

謙信とせつたんが走りだした

ザク、バサ、ザン、ドシュ、メメタア、シュ、ザク、ガツ、K I L
し、オワタ

「ぐふう、俺を倒すとはなかなかやるな。だが俺は後二回へんしん
をのこ」
「ドラー」

フリーザ様な発言をしようとしたらしいザ・フジミ殿はお二人のお
パンチによりお星様になりました

流星にまゝたゝがて貴方に急降下あゝしては来ない

すると、階段が降りてきた。どういつ構造してんだ本能寺。

く二階く

「フハハハハ。俺はザ・クビナガ！貴様らなんぞ捻りつぶしてくれ
るわ！」

顔がない奴がいる。別にのっぺらぼつってわけじゃない

俺達から見えないんだ。物理的に

ザ・クビナガ殿の顔がよおく突き破って見えないんだわ。天井をよ
どっからどう見てもキリンですありがとうございます。人材が少な
いのか

ガタッ

空気を読んでくれたのか階段がひとりでに降りてくれた

「な、なぜだく！俺はまだやれるぞ！」

そんなセリフを吐くと大抵上司に殺されるぞ

「な、なにをする。ザ・！ぐわー！！！」

ほらー殺された

三階の奴はどんなのだろうか。仲間を簡単に殺す極悪非道な奴なのだろうか

〈三階〉

カーテンみたいなのが掛けてある

シルエットでもう駄目だこいつ

なんか生物の形してないし

何？棒かなんかかなあ立てかけているように見える

「なあ謙信。あれなんだと思う？」

「私にはわからないが食べられるものではない。実に残念だ」

何故わかるし。これで特大うま 棒の線はきえたか

「せつたんはどうだ？」

「私にも正体まではわからないが剛の者だとはわかる。すごいぞ…すかうたーの測定値を超えた」

だからなんで正体がわからないのに他の部分がわかるの？

というか、すかうたーって。ああせつたんの脳内測定器ですね

「フッフ、私の正体を探ろうとしているが無駄だぞ。貴様らにはわかりっこない」

そんな思いもつかないような奴なのか。棒状しかわかんね

「どつやら見当つかんようだな。いいだろう！我が真の姿見せてくれよう！」

カーテンらしきものが外され。姿が露わになる

反応は三者三様

俺は呆然。せつたんは目をキラキラ。謙信はいたって普通

俺だけだろ正常な反応してんの。だっておかしいだろ。

敵が「スキー板」だぜ？どうやって戦えと

いや、まさかザ・クビナガを殺した奴はほかにいて呆然とした俺らを殺そうって魂胆か！

「我の名はザ・ソードマスター。私に切れぬものなどあんまりない！」

「私は千。戦姫とも呼ばれたこともある。では……」

「尋常に勝負！」

俺は目を疑うしかないんだ。物理法則を無視してスキー板が飛び跳ねるなんてありえないんだ

キンツ！

せつたんと切りあってるなんてありえないんだ。

「なかなかやるな。ならば我も本気をだそう」

「ふっ、私はまだ八十パーセント程度だ」

「いや、実は我六十パーセント程度だ」

「おっと、私は四十パーセント程度だった」

「ん？我は…」

なにこの争い。どんどんどちらも攻撃の手が緩んでいく

馬鹿だろこいつら。もう少し人を疑うって心は持たないのか。いや、清い心で素晴らしいと思うけどな

最低限そういう心は持とうよ。プライド高すぎだろおい。そんなもんそこらへんの犬にでも食わしとけよ

「なあラグナ。ぶらいどつてうまいのか？」

「俺の心を読むんじゃねえ。それと新出単語が出るたびおいしいか

「どうか聞かないでくれ。」

「せめて食べれるかどうかにしてくれ。」

「うん？わかった。じゃああの千姫と切りあっている奴はおいしいのか？」

「学習してくれよ。この…ド低脳がっ！」

「どうして食べられるかどうかにしろっつていてんのにおいしいかどうかなんだよ！？」

「おまいらも一回謙信の相手してみる。原作でなんでランスが出て行ったかわかった気がするから」

「カンッ！」

「スキー板ことザ・ソードマスターが吹っ飛ばされて床に突き刺さるマジであれ本体だったのか。ラ ガキ王国2で書いてやるうか。昔ウイングゼロを書いて友人に」

「なにこれ？白い物体？」といわれた俺の絵心を見せてやるぜ」

「どうぞやら私の勝ちのようだな」

「ああそのようだ。私の完全な負けだな。ここまで心踊る戦いは初

めてだ。これで悔いはない我を使いなせる猛者がいることだしよう。できれば我を使ってくれんか？敗者の情けない頼みだ。聞き及ばなくてもいい」

「使おう」

せったん…よく考えて言わないと駄目だろ。呪いの装備だったらどうすんだ。

教会ねーぞ。この世界は巫女か、巫女に頼むんか

「ありがたく思うぞ…我が剣生に悔いなし」

あいつ剣だったのか

スキー板の消えると同時に現れた雑刀。オイ…剣じゃないのかよ

しかしスキー板ってなんだったんだ？よくわからん削除

「これは…いいものだ」

業物らしい。あれで魔人倒せないかな。流石にそこまで都合主義じゃねーよな…え？可能性ありますか

ガタン

四階への階段が降りたか

次は一体どんな奴なんだろうか。…攻めてもう少しまでもあってほしい

く四階く

誰もいなかった。いや、透明だとか、超小さいとかじゃなくっていない
せったんのすかうたーとかにも引つかからなかった。便利だなオイ
もしかしてあれか。使徒四人に相手させるつもりだったけど、頭数
が足りなかったのか

ぶちやつけネタ切れですか

せめてなんか置こうよ。こう…歩きにくくなる剣山おくとかさ、シ
ルバーいっぱい巻くとかさ

何かしらほしかったんだよ。別にマシなもんじゃなくていいからさ。
もうツつ込めればそれでいいわ

チョーほんとマジでねえし。なんか突つ込めるもん持ってこい！

あー突つ込めるもん…床の木目に突つ込むか？いやいや、インパク
トが足りない

それかいきなり回想に入つて適当にねつ造突つ込むか？いやいや、
面白味が足りない

あーもー赤土でも食つてみようかな…

「ラグナ。赤土ってうまいのか？」

「茶色い船に海苔巻いたぐらいおいしくない」

「よくわからないがそーなのかー」

どうしてここの謙信は食うことに対して敏感なんだろう

親の顔が見たいわ。もう少し適度ある食生活にしてほしかった

ガタツ

なぜか階段が降りた。この階は俺が苦しむようにできているのだから
うか

それなら効果は抜群だったぞ。もうだめ死にそうだ。何か突っ込めるものを

「おやおや、死にそうですね。しかし、突っ込めるものってエロいですね」

！のぞみんいつも間に…

「いつの間になって結構前からいましたよ。暇でしたが」

って、どうやってきたんだよ。どうして行動を起こしてくれなかったんだ！

「どうやって来たかは忍者におぶってもらいましたね。何もしなかったのはラグナさんの苦痛に満ちた顔を見るためです」

ひでえこいつはひでえ。人つてのはここまで変わるもんなのか

ちよつと待てよ…？忍者におぶってもらった？

確か今川からは忍者なんて連れてきてないけど。おかしいな

「何言ってるんですか。織田の忍者を調教したに決まってるじゃないですか」

何という早業。精神屈服させるの早すぎだろう

「もうラグナさん。そんなまどろっこしいことしなくてもいいんですよ。体を屈服させるんです。そしたら忍者の方は『体が勝手に動いちゃう。らめえええ』とか言つてよかったですねえ」

愉悦に頬を赤らめるのぞみん。なにこのここわい。

貴女なんて業持つてんですか。初心ののぞみんはどこへいった

もう調教に関しては人がいレベルだわこれ。

もう枕を高くして眠れない。いつ襲われるか…

「何しているんだ。次行くぞ」

待ってくれ。お願いだからのぞみんと二人つきりだけにはしないで

くれ

死ねる。主に俺の貞操が死ねる。まだグ、パツイ処女はしたくない

side：織田

「どづいつことですか…？今川の領主が本能寺にいるって。にいさまは！？」

香が慌てる。それもそうだろう。休養のために本能寺へ向かった信長。同盟しているとはいえ

連絡もせず他国領に入り信長の場所へ向かっているのだから

「はっ！信長様には大量の忍者隊が付いていますが…領主のほか何名か確認ができました。言いづらいこ

とですが…無事とは言い切れません」

「これ！香様になんてことを…」

3Gが報告に来た忍者を叱咤する。報告とは言え香に聞かせては不味いものを聞かせてしまったからだろう

「3Gいいのです。まだ今川の領主の目的も分かっています」

「しかしですな…」

3Gが言うこともわかるだろう。狙ったようなラグナの移動。信長は療養中。

『悪霊使い』と恐れられるものが向かったのだ。心配してもまだ足りないくらいである

しかし、こいつらはお見舞いという言葉は知らないのだろうか…連絡はよこしてないが

「こんな事態…にいさまを守るには…そうです！ランスさんはどこですか!？」

「ランス殿なら浅井あさくら攻めのため只今準備中です」

「今すぐ呼んでください!」

香が思い付いた必殺の秘策はランスに頼ることだった

しかし、これで魔人の死亡率が上がったことは知らない

…

「なんだ香ちゃん。俺様は雪姫をいただくために忙しいんだぞ」

流石ランス。言う事はいつもと同じ

「ランスさんお願いです！にいさまを助けてください！」

ランスの雪姫うんぬんをカレーにスルーし、香が大変だと言いつ

「信長ー？俺様は雪姫とやりたいのだが…」

ランスの心ともないせりふ。切羽詰まった香見てよくそんなセリフが言える

「「ランス殿！信長様にもしもの事があればお主は影番は続けていられんぞ」「」

ランスに今最も響くこのセリフ。流石3Gなかなかやる

ランスは見る見るうちに『しかたないがやってやるわ』な顔になっていく

「はあくしかたないなあ。で、その本能寺だったか？どこだ」

そのセリフを待ってましたと言わんばかりに香の顔が笑顔になって

いく

「ランスさん行ってくれるんですね！ではさっそくですね…」

こんなやり取りを見てシイルは思う

「（ランス様は幼女に優しいんですね。私に優しくしないで）」

それはまた違う話だと思う。ただランスはツンデレなだけだ。え？
ちがうとな？

ランスはツンデレだと思っただ（後書き）

あと、一、二話ぐらいですかね

案外長いですね〜

しかし、主人公が活躍する気配なし

もうただの突っ込み要員

ランスの世界のまんまじゃずっとこれかも

魔人は封印される(前書き)

今回主人公がおかしい。

その理由は作者にあります。すいません。

…あたったんですよ。何がって？

宝くじじゃありません。

鳥のフンです。泣きました。自分はこれで人生二度目です。

朝歩いていたらいつの間にか背中にくらってました。

学校に着くまで気づきませんでした。俺はそれで電車にも乗りましたよ。気づきませんでした。泣きました。

皆さんは何回あたったことがありますか？

魔人は封印される

side:織田

ランス達一行は本能寺の目前にいる

その中には香の姿もある。大方無理を言っについてきたのだろう

しかし、わがままもここまでできたら大したブラコンだ

3Gやほかの重臣たちも気苦労が絶えないだろう

「ランスさん。ここが本能寺です。きっと兄様は最上階にいますよ」

「そうか。ならいくか」

ランスが声をあげるがやる気がないように聞こえる

それもそうだろう。いやいや連れてこられたのだから

帰ったらすぐに戦が始められるようにシイルしか連れてきていないようだ

「でも気を付けてください。ランスさんも来る途中の方々…」

「ああ…あれはひどかったな。俺様には到底思いつかん」

「ランス様のひんそーな頭じゃ考えれそうにないですけどね」

「うるさいわ！」

ポカ

「ひいひいひん」

言わなきゃ殴られることもなかったのに…

香達がここへ来る途中のぞみんの毒牙にかかった口では言えないかわいそうな人たちを目の当たりにしたのである

そりゃ、いくらなんでもトラウマになるだろうが香はなんだかんだ言っでよくわかってなかったりする

「それではいきましよう」

計三人は本能寺へと入って行くのであった

side out

この部屋暗いな。蝋燭がゆらゆら灯っている程度じゃないか

なんだかラスボス臭がするし、ここに信長もとい魔人ザビエルがいるのだろう

んーどこにいるんだ？でないと目玉をほじくるぞ

ユラ…

蝋燭の陰で何かが揺れた。居るな！

このところ活躍がなかったからな。おいしいところぐらいは頂かせてもらおう！

「きたか…まぬけな今川の領主よ。くくく、我に何の用だ？」

けっ白地らしい。てえめーをやりに来たんだよ

「ほう…瓢箪もあと三つで完全復活する我を前にか。それは蛮勇だぞ…？」

蛮勇どうこうはこの際目をつむる。もう瓢箪五つも割ったの？え、いつの間に

織田のに伊賀のたる。あと、足利。あと二つは？

「くくく、本当にマヌケよ。今川の領地。元武田、北条から運び出させてもらったわ」

あー俺瓢箪の事すっかり忘れてた。てへ、とべろ出して謝ってみた

「ほんとラグナさんは馬鹿ですね」

「馬鹿だな」

「そうだな」

一瞬にして味方が敵に回ったんだが。これは俺が悪いの？瓢箪の存在忘れてた俺がわるいの？

違う！俺が悪いんじゃない。わざわざ封印されているのに復活するザビエルが悪いんだ。

責任転嫁？はっ！そんな言葉くそくらえだぜえ。世の中ってのはどう思っても上手くいかないことがあったり、理不尽なことがあるんだ。

つまり俺が言いたい事はとりあえず俺は悪くないってことで。俺の考え方はポジティブだぜ。

「悲しいけどラグナさんが全部悪いんですよね」

「だよな。どう考えてもそうだろう？」

「私もそう思うな。責任転嫁なんていい歳した大人がするなんてな。小学生までだろ」

うぐぐぐぐ。何故俺はこんなに味方に糾弾されているんだ。おかし

いだろおい。いやまあ、俺も大人げないこと言ったなあと思っただよ。

そこまで言わなくてもいいんじゃないかな。って俺は思うわけ。それにさ今最終決戦だろ？ラストボス戦だぜ？燃えるだろ。

後ろでFFの戦闘曲とか流れてたらもう最高だと思っただよ。だからさ、俺がすごく悪いみたいなこと言うのやめてくれなやかあ。

お願いだよ。俺の心はアルミ並みなんだぜ？片手で十分。ハートブレイクなんてされたら俺一瞬で終わるね。

「さっき考え方はポジティブだ。とか言ってますでしたか？」

「ああ、言ってたな。いまさらアルミハートとか言われても困るんだが。…アルミって何語だ？」

「どうも片手で十分らしいぞ？…アルミっておいしいのかあな？」

ゆぎいいいい。やめてね！やめてね！ザビエルまでも俺に憐みのもった眼を向けるのをやめてね！

もっどゆぐつりぎざでよおおおおお。…おっと、お見苦しい場所をお見せしてしまいましたかもう大丈夫です。

しかし、俺の心はズタボロでござーんす。あいつらめ言わせておけば好き勝手なことばっかしいやがって…

というかまともなこと言ってるのぞみん程度じゃね？せつたんに謙信はしっかりボケてくれちゃってますよ。

そこにとごどう思います？解説の俺さん。いやー素晴らしいセリフですね。よくあんな言い回しができると思いますよ。

少なくとも私にはできませんね。天然は素晴らしいと思いますよ。

ありがとうございます。私もそう思います

「現実逃避はその位にしてもらおうか？今川の領主。役者はそろつたようだよ」

ダダダダダ

いまさら誰がくるってんだ。ほかに来そうなやつとかいるんか？よくて早雲とかだろ

あれかもしかして全然活躍していない健太郎君が日輪持ってきてくれたか。

それもないとなると、目ぼしい人物とかいなくなるんですけど。

スターン！

「俺様、参上ッ！」

ランスでした。完全に忘れておりました。主人公なのにねえ。ついでに俺もオリ主なんだぜ？忘れてる人多いだろ。俺はおみとうしだぜ。

おいおい、後ろに香姫とシイルまでいるじゃあないか。何故にきた

し。ラストボス戦のイベントでいるのかー？

おろ？香姫がこっち睨んでら。俺何かしましたか？…あー俺ってよく考えると結構怪しいんだよなあ。他国に不法侵入して、あげくその国の領主に勝手に会ってるからな。

でもさ、今の信長って魔人って感じが強いからそういうその他もろもろ忘れてたんだわ。ちよっ、のぞみん達も『なにやってんだ』みたいな目をするのやめてくれ。

（オイ！心の友よ。こいつは魔人だぞ）

ナイス！カオス。その言葉で俺はたすかって…ないんだが。みんなが俺の方向きながらそんなセリフ吐くんじゃねえよ。まるで俺が魔人だつってんじゃねーか。

（ああ、そいつじゃなくてな。こっちだ）

カオスは信長の方を指す。ランスも香姫も驚いてら。のぞみん達は俺が最初から言っていたので問題なし！

でも、カオスの言葉で『この人ならあり得るかも』な目はやめてくれないか。俺もさあ、人間超越して人外になったと思うけど露骨にそんな目を向けられると困る

「に、にいさま！…ほんとうなのですか！？」

香姫が驚くわ。そら自分の兄貴が人外やってるとかびっくりだよな。俺も兄弟がそんなことやってたらびびる。

そして俺も成り方教えてもらう。なんか強そうだし。魔、とかつて
なんかかつこいいいな。

こういうのを巷では中二病というのだろうか。でも、男ってもんは
かつこいいものにあこがれるんだぜえ？

そりゃーある程度したら自分は恥ずかしいことをしたと思うかもし
れないが別段恥ずかしがる必要もない。それは一つの個性なんだ。

だから弱気に考えちゃだめだぞ俺。影が薄い主人公なんていやだぞ。
ほんとに俺はさいきよ　オリ主なのか。

ふじりゅーの太公望並みに主人公っぽくないな。あれかやっぱ主人
公っぽくなるにはシリウスがいるのだろうか。

それとも暗い過去の的なのいるのか。やっぱ強敵の出現かな。でも俺
一応さいきよ　なんだぜ。

「ふふふ、我は魔人ザビエル。貴様ら雑魚を蹂躪する存在よ！」

どうして最強オリ主は嫌われるのに強い敵は好まれるのだろうか。
もういつそ俺敵側とかに回ろうかな。

やっぱり一次作の壁はでかいのだろうか。まあ今となってはそんな
こと思っても無駄だ。

とりあえずどうやって魔人倒そうか。何かいい案は無いのか。

「そ…そんな…嘘です！そんなこと」

香姫がちょっと放心してるけど大丈夫だろう。なんだかんだいって強い子だし。

ランス慰めてやってくれ。がんばって俺が倒すから。でも普通の攻撃って魔人に効かないんだよな。

ランスがこの場にいるから効くぜ！みたいなことは起こらないんだろうか。

そう考えているとせつたんがいきなりしゃべりだした。

「みんな行くぞ！合体奥義だ！」

カットインが入る。なんかこう縦に俺とのぞみんとせつたん謙信の顔が入る感じに。

とつか合体奥義ってwいつそんなのに目覚めた。俺は知りませんぞ。俺だけはぶられたのか。

それは地味に嫌なんだが。

「はあああ！」

せつたんが走る。あの薙刀が魔人倒せる武器だといいな。

魔人にせつたんの攻撃が当たる！効かないからって交わさないのも防御しないのもどうかと思うよ。

これで倒れてくれたらいいのに。しかし現実はその甘くは無かった

よしがんばれのぞみーん

「くふふ〜魔人さん魔人さん。あなた何か忘れてませんか？胸に宿るあの熱き思いを」

いきなり何いだすかと思えば熱血による説得か。でもザビエルみたいなやるーはそういうのは全然聞かないんだぜ

こついう悪役はあかんのよ。説得？なにそれおいしいの状態だから。

一気にやっちゃってくださいよーのぞみん

「思えば貴様らが…いや、貴様が我の前に来た時から何か感じるこゝとがあつた」

なんか食いついた。 。 どうしてよ。 なに、どこからの伏線じゃ！

俺の知らんとこでなにやってんだよのぞみん。きつちりフラグ立までやってやるなあオイ！

おれでさえどうやって信長殺さないようにザビエルやっつけようか悩んだんだよ。

悩んだ拳銃スタンド使って無理やり引きはがそうかと思つたわ！

「そうです。その思いです。その思いによって次にあなたがとる行動がわかります。やってみてください」

「うむ、我の…我は…こつするー！」

ザビエルが跪いた　！いきなりすぎるよ！

どうしてこういう状態になるのか説明してよ。俺も読者も付いていけないよ。

熱き思いで跪くザビエルもどうかと思うけどさー！

「そうです。なかなか上出来ですね。…この後はどうするんですけど？」

「このあとは…そう、縄で簀巻きにしてもらう、のはずだ」

なんなのー！一体どういう経緯でこうなってるのー！

摩訶不思議ですよ。七つの球集めようぜ！

ゲシゲシ

「ラグナさん。気になりますか？」

ゲシゲシ

気になりますけど…魔人踏んでいいのかよ

ゲシゲシ

「いいんですよ。望んでいますし。ほら、「踏んで！もっと踏んでください！」ね？」

ゲシゲシ

分かったけどよー。どうしてザビエルが踏んでもらいたがってるんだ？

ゲシゲシ

「それはですね。この体が織田の領主のだからですよ。心は忘れていても身体は覚えているんです。まあ見ててください。ほら、織田の領主の体から出てください」

ゲシゲシ

「分かりました！もっと踏んでください！」

ゲシゲシ シュ

あ、信長の体から黒い靄。ザビエルが飛び出した。でもものぞみんの話だとザビエルはすぐ復活するんじゃないのか。

てか、簡単だなーオイ。どういうこった俺が小一時間悩んだ挙句スタンドで剥がすという奇跡的な方法を思いついたのによ！

ゲシゲシ

「もっと踏んでえー！」

ゲシゲシ

あいも変わらず喜んで踏まれ続けられているザビエル。どういうこ

とでい？

教えてのぞみーん

「私なら一秒も要りません」

言いきった…。この人いいきっちゃったよ。

「ん？ここは…」

どうやら信長が目覚めたようだ。早く兄妹の再開をしてやってくれ。

香姫も復活したみたいだし。

ランスとシイルは何故いきなり魔人が飛び出したのかよくわかってないみたいだけど。

「にいさま！香はここです！」

「おお、香じゃないか。ん…？」

俺はこのとき兄妹の感動の再会を見るはずだったんだ。

だが、運悪く信長の目にはのぞみに踏まれているザビエルの姿が。

「僕も踏んでくれー」

「……………」

香姫はどうしたらいいかわからないようだ。それもそうだろう。

「……………」

「ちょ、こっち見られても困る

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「いや、無言の重圧やめるよ。

「俺が悪いみたいじゃないか。こっとなったら俺も無言をつきとおすしかねえ。」

「……………」

「もっと踏んでください！」「いや、こっちをまっとう！」「……………」

「くふふふ踏みますよ〜」

ゲシゲシ×2

だまってたらよく聞こえてくる。ダメだこいつら。

ハッピーエンドかと思っただら香姫が一番かわいそうなエンドかもし
れない

魔人は封印される（後書き）

前書きについてはごめんなさい。愚痴ってしまいました。

もうランスへんも終わりです。なんでいきなりランス編入ったのかなあ

まあこれからネギまでです。がんばってほかの二次作じゃない展開にしたいですね。

大戦中は無理だと思っけど

いざゆかん。ネギまへ(前書き)

前のぶんとセットでお楽しみください。

いざゆかん。ネギまへ

今、隣には謙信がいる。

前には俺がこの奇妙なランス世界へときたゲートっぽい。

何故ここにいるかというところ、もう時期的にやばいから。

もうそろそろグレート＝ブリッジ奪還作戦が始まりそうな時期らしい。神様に言われた。

で、なんで謙信がいるかというところ。俺の嫁だからじゃなくて『パイナップルとかおいしいのが食べれるんだな!』というわけで付いてきました。

まったく困ったものだよねえ。

魔人との戦いの後、魔人はのぞみんの『封印されてくれます?』のあと『放置プレイ来たー!』と叫んで封印されました。

信長も妹パワーで何とか戻ってきた。香姫は泣きそうだった。

今川の領土は織田と合併してより強力になった。だって、俺の跡がま任せられるような奴いねえし。

織田もあんだだけ大国ならランスでよゆうだろ。ランスがやりすぎないようにのぞみんにも任せてるし。

「さてそろそろ行くぞ。謙信」

「ああ。未知なる食材が私を待っている！」

その食材たちは辛いそうでごさる。俺も懐が怖い。しっかり見はつときゃな。この前『あなたは食べれるのか』と聞いてきたことがあつたし。

そのときは愛さんがいなければ死んでたな。そついや謙信が俺についてくるって分かった時の愛さんの笑顔がまぶしいぜ！

「じゃあな。ランス世界…」

俺はこれからの舞台であろう世界へとびたつた。

こそこそ…

「むむ、シイルあいつら消えたぞ！しっかり見たよな」

「ええすごいですね。新しい転移魔法なんかですかね」

「とりあえず俺様たちも行くぞー！」

「お供しますよランス様！」

ピンクと緑が騒いでいたそうなの…

ランス編
〜完〜

名前だけしか出なかった可哀そうな人

・小松 アイドルな人。活躍させるの忘れてた

・健太郎君 出す暇なかった

・坂本龍馬 上に同じ

・武田の皆さん 上に同じ

・使途の皆さん（朱雀を除く） 出したらめんどくさかった。出てこない理由は魔人ザビエルが前の復活の際幼女侍らせてあきれられた

・太郎 五十六の弟さん。ランスからこれ以上女の子は奪えなかったため太郎君生存

・五十六 原作のヒロイン。俺にはどうしようもなかった

・浅井朝倉の皆さん どう考えても雪姫のイベント折れそうになかった。そのため速攻で終わらせた

・明石の皆さん 出す暇なかと

無駄に立てたフラグ

・家康達生存 ホントは主人公ピンチ 助っ人参上！ 出る！タヌ
ダーム！みたいな感じだったけど出す暇なかと

・太郎君生存 俺はランスにそこまで酷いことができなかつた。あ
と鬱イベント回避

・浅井朝倉攻め 上の奴と同じく鬱イベント回避のためランス達は
放浪の旅へどうなる！？

・のぞみん、せつたん こいつらは癖が強すぎた。どうしてのぞみ
んこんなになっちまったんだらう。

・スキー板 特に意味なし

ランス世界で明確に死んだことが分かる人

・めかぶ太郎

歯あくいしばれ！そんな大人修正してやる…と思ったのか？（前書き）

ggggdしてすすまねえ

ていうかなんなの？ネタで投稿したはずの『史上最弱』が幸先良すぎるんですけど！

なんなの期待してるの？残念だったね！本命はこっちなんだよ！

…と思っているのか？

歯あくいしばれ！そんな大人修正してやる…と思ったのか？

俺達は歩きながら紅き翼と会うために集合場所へ赴いている。

こっちの世界に戻ってきた後、紅き翼と合流すると言っていたスネークに連絡を取ったのだ。

どうやって？そんなの気にしたやつは負けです。

もう少しかな…

それまで少しここに来た時の話でもしよう。

着いたときは適当に街を探して宿をとった。その時出てきた料理に謙信は目を光らせていたな。

なんでもパイナップルも食べたいらしいが生憎魔法世界にあるか知らない。大戦が終わったら食べさせてあげよう。

だが、俺がそういうと『目の前にあるじゃないか。だめなのか？』と聞かれたがどういう意味だろう。きつと現物を見たことがないから勘違いしたのだろう。

で、結局謙信は食べては飲んで食べては飲んで…一体いくら入るんだ。俺の懐が死ぬわ。

ああ、それと読者のみんなは忘れていかもしれないが、俺は一応賞金首である。なのでフードがぶってる。アサシンのな。エツイオ！

だからどうやってスネークが紅き翼入ったかは気にならない。大方ナギが気にいった、入れ。みたいなご都合ルートなのだろう。

けどな、同じ賞金首の俺まできたらどうだ。昔はスネークとエヴァとチャチャゼロと一緒に戦ってたから、

『幼女の守護右神』『幼女の守護左神』と恐れられたものだ。だからナギやラカンと言ったお馬鹿さん達は心配ないだろうが、アルビレオさんや詠春、ゼクトさんなどまともな人から見たらなあ…

何とかなるのかね。ちなみにエヴァが幻術で大人verだと『おっぱいの守護右神』『おっぱいの守護左神』と恐れられたものだ。

名誉がある二つ名のかとは思えない。悪意ある奴がつけたとしか思えん。嫉妬でござるか。羨ましいでござるか。かっかっか。

さて、この辺りだったかな…まだ来てないのだろうか

ならちようどいい。ちょっと謙信に聞きたいことがある

「なあ謙信。ホントに付いてきてよかったのか？」

「ああ。私はあなたの妻だぞ。傍にいらなくてどうする（おいしいものが食べれないじゃないか）」

「…そうか。ありがとう」

謙信は付いてきてくれるといった。なら仕方ないだろう。ほんとならエヴァのどこにでも任せたかたんだけどなあ

ザッザッザッ

ん？来たのかな。話し声が聞こえるな。

「おいスネークほんとにここか？」

「ああ間違いねえ」

「さてさて、かの有名な『幼女の守護右神』に会えるのでしょうか」「ていうかどうやって連絡してきたんだ」

「そいつもつえーのか？」

「魔法はつかんのじゃったな」

どうやら全員できたみたいだな。騒がしいったらありゃしないね。

まだ気づいてないみたいだし、ちょっと脅かしてみつか。フードを深めに被って謙信に一言

「ちょっと脅かしてくるわ。待っててくれ」

「うむ、じゃあこのうんまい棒というのを食べながら待つとする」
なかなか安かった奴だな。俺に優しい奴だ。

さて、このまま近づいたらされるし、面白味もない。何かいい案は無いかな。

やっぱスタンド：世界で近づくか。時よ止まれッ！

さて、少しあそぶか。今の俺の止めていられる時間は約1分30秒。時間の止まった世界で1分30秒とはおかしいが、とにかく1分30秒だ。

咲夜さんと比べれば短いかもしれないがあのDIEOでさえ9秒だったのだ。300年かけてこれだぜ。

んっんっ

まずはそうだな…ナギとラカンの向きを地面に向けてみようか。どっこいしょういち

アルビレオさんはどうしようか。いつもながいローブだな。少し探

そして時は動き出す…それっぽいことを言いたかったんだ

「ぬう!?!」 「うおお!?!」

ゴツン
≡

当たってくれましたよ地面とキツスです。ほんとなら向かい合わせるとかもいいんだけど身長が足りん

「ナギ!?!ラカン!だいじょ…おかしい。何か違和感があります」

「ああ、何かおかしい…」

おおアルビレオさんと詠春さんは俺の存在に気づいたか?

「重量が…本一冊足りない…いや、本が違つようですね」

「私も違つようだな。護身用の本が違つ…入れ替わっているな!」

そつちかよ!なんで調べなくてわかるんだ。本一冊一冊の重さって…

「詠春!まさかあなたが!?!」

「そういつアルも。まさか…」

あれ俺の悪戯で仲違いですか。や、ヤベエ…

アルビレオさんと詠春さんは向かい合いそして…

握手を交わした。え？

「詠春！あなたも分かるんですね！？」

「アル！そういつおまえもか！？」

なんかしらんが友情がえらく変態的に結びなおされたようだ。

「ようラグナ。これはオメエの仕業か」

スネークが話しかけてきた。今まで放置されていたのが不思議だったんだよ

「ほう、お前があの『悪霊使い』か…わしはゼクトじゃ。紅き翼に入るんじゃないな。まあよろしく頼むぞ」

『悪霊使い』か…中二癖え。痛いよ痛すぎる。けどこの苦痛が逆に
かい…なんでもないぞ！

「いつつえ〜よう！俺はナギだ。紅き翼のリーダーやってるもんだ
よろしくな」

なんていうか。もう入ることになってるの。

「又フフ。お前なかなか強いな？俺はジャック・ラカンだ。いつち
よ、やらないか？」

お前が言うとなんだか危ない空気になりそうだよ！アツーーーは
勘弁願うよ。

「フフフ、アルビレオ・イマです。あなたとは同じ匂いがしますね」
う、嘘だ！俺にはいい奥さんが付いてるんだぞ。

「ふう、青山詠春だ。ん？なぜか巫女レーダが反応したぞ？」

もしかして朱雀にもらった『巫女機関限定発売！巫女さん全集』ド
キッ巫女さんだらけの…の初回限定版』か？今度あげよう

さてみんな自己紹介終わったし俺もしようか

「俺はラグナ。スネークからも聞いているかもしれないが俺はスタ
ンドというのをつかう。魔法は使えん」

「なあなあ、そのスタンドってのさっきなんかやったのか？」

そうでございます。まあこいつらなら教えてもいいか

俺はスタンド：ザ・ワールド世界をだすぜ

「おお！なんだこいつ？」

「又フフ。いい筋肉だ」

「あなたの人生に興味がありますね。仮契約しませんか？」

「ちなみにさつき悪戯したのはこれの能力だ」

「又ツ殺す！？」

Oh！ やっちまったぜ

「じゃあそろそろいくか」

おっと待ってくれよ。紹介したいやつがいるんだ

「だれだ？まさかオリキャラか！？」

フフフ、残念だったな。ヘイカモーン謙信！

ス…ばりばりはべりいまそかり

「私は上杉謙信というものだ。よろしく頼む」

じゃじゃ〜ん。

「…きつと同姓同名だろ。女だし。そうだろ」

詠春は日本人だったな。ニッポンポン

「いい女だなあ〜惚れちまいそうだぜ」

「ちなみに俺の嫁」

「「死ね〜〜〜い！！！」」

ちよっスネークと何故ラカンまで。やめ、スネークお前冷却スプレ
ーって目が目がああ〜

歯あくいしばれ！そんな大人修正してやる…と思ったのか？（後書き）

まあ…がんばりますよ。『史上最弱』も。

みんなチート物は嫌いなのかね

タイトルってなんだろうね(前書き)

短いな。だいたい千文字程度

テストってだりいな

タイトルってなんだらうっね

へらすていこく『やったよ！ぐれ〜と=ぶりっじをてにいれたよ！』

めせんぶり〜なれんごう『まってよ！そこはもとはわたしたちのだよ。かえしてね！』

へらすていこく『ひろったものはわたしたちのものなんだよ！だからわたしたちのなんだよ！』

めせんぶり〜なれんごう『そんなことないんだよ。ぶんぶん！かえしてくれないなら…』

へ・め『よかるっ…ならば戦争だ』

そんな感じでグレート＝ブリッジが帝国さんにとられたみたいですよ。連合さんから『ぶんぶん！かえしてくれないならじつりよくこうしだよ』との連絡があったので

前線に出たとたん八面六臂はちめんろくつひの大活躍！！

この戦いでナギが『千の呪文の男』とかって言われるんだよね

俺はスタンド：極悪大部隊バッド・カンパニーやスタンド：プラネット・ウェイブスで粉碎！玉砕！大喝采！！

おかげで『ひとりなのに大部隊』とか『隕石ふつてくるとか運良すぎだろ』とか『時の者』とか…ってえ誰だ！俺は時を止めれるなんて紅き翼のメンバーにしかいってねえぞ！

全くどういうわけだよ。人気もなんだかんだ言ってみんなより劣るんだぜ。極悪大部隊バッド・カンパニーが銃器使いまくるから。スネークもそんな感じだ

ん？俺が賞金首なのになんでいれるかって？

ふふふ、それはな新たに入られた我闘殿じゃなくてガトウどうに何とかしてもらったのさ！

なかなかやるぜあの旦那。ほかのSSじゃないがしろにされぎみだけどなあ！ゴホン

なんでも

れんごう『え〜しょうきんくび〜?どうするの〜?』

ガトウ『手元に置いといたら楽じゃね?』

れんごう『ナイス!がとちん。そのあん、さいよう!~!』

ガトウ『…計画どおり。ニヤ』

なんてやり取りがあつたとか。気にしたら負けです。紫ちゃんもそう言ってます。タライが落ちてきますよ?

そうそう俺以上に銃ばつか使ってる『乱射魔』や『トリガーハッピー』、『ちよ、やめ冷却スプレー、目が』で称えられる?スネークさん。

この野郎は一体何考えてんだか。戦闘中に狙つたように俺に冷却スプレーを当てているんだ。ついでに狙つたように色とりどりなスモークグレネードを投げてくださる。

やんなるよ。

謙信も謙信だ。戦闘中はまじめな子だと思っていた俺は泣いた。

なんでも力ロリ メイトを食べながら殺っていたそう。俺はそんなに飯をあげてないはずだろう…

おかげで『紅き翼の紅一点』や『軍神』、『紅き翼。飯あげるよ』
…最後はなしだろおい！

うう、と俺が心で泣いているとナギが大戦に疑問を抱いている話を
しております。

なんだかんだいって『核』って『抑止力』があるからな。旧世界に
はよお〜

もし魔法世界に『核』に勝るようなものがあつたとしてはたしてこ
のような大戦は起きたのだろうか。

それは分からない。戦争の負つてもんは人間が背負つていかなきゃ
ならんのかね。

壁があつたら殴つて壊すっ！ 道が無ければ、この手で作る！

こんな男になりたいね

タイトルってなんだろうね（後書き）

クロノスはなんか時の神みたいなんでカナ振ってみました

神話とかは全然分かんないけどね。あと都合よすぎるだろうって思った人は

これがこのSSの都合のよさ度だからね！甘いよ！甘すぎるよ！

もうカル ス原液で飲むぐらい。のんだことないけど

タイトル＝題名らしい(前書き)

国立アソニユイ学園のSSが書きたい

なんかしらんがネタができそう

だけどなーこれと史上最弱もあるし。どうしよ

タイトル＝題名らしい

「まるで誰かがこの世界を滅ぼそうとしているかのよう
ですか？」

ぼへへへん

アルビレオさんがなんか言ってる気がするけど興味ないんでラカン
と一緒にぼへへへん。

「ある意味その通りかもしれないぞ」

キヤーカーかっこいいガトウさんじゃないですか！あなたみたいな渋い
人好きですよ！

だが、筋肉が足りない。もっとラカンみたいな筋肉付けたらかっこ
いいぞ！

萌えキヤラより筋肉の方が好きである。(これ迷言)

「俺とタカミチ少年探偵団の成果が出たぜ。やはり奴らは帝国・連
合、双方の中枢にまで入り込んでいる。秘密結社『完全なる世界』
だ」

秘密結社Wうひゃひゃひゃ。痛え。今時秘密結社は戦隊物だけだろ
う。あと気になったんだけどタカミチ少年探偵団ってタカミチひと
りじゃね？クルトはまだなのか。

と、言うかさ話変わるけど今食糧危機に瀕してるんだよね。主に謙信参入により飯バカが『デルタフォース三飯馬鹿』に進化したせいで。ありえん。

おかげでどうもスネークの便利倉庫内のカロリー メイトやレーションが尽きかけているのこと。どんな腹してんだおまいら。

なんというかお前ら見てるだけでお腹いっぱいになります。謙信見てたらそれだけでご飯五杯はいけるね。なんかもきゅもきゅなってる。サイコー！！

もう嬉しすぎてみすちー肌だぜ。そしたら謙信に『手羽先とかおいしそうだよな』とか言われちゃいました。は は は は は

あれ？脳内会話していたらなんだか景色がいいところにいるぞ？どうなってるんだ。

「何だよガトウわざわざ本国首都まで呼び出してさ」

お偉いさんに決まってるだろ。じゃなきゃわざわざこんなところこねーよ。…気づいたらいたんだけどな

「あつてほしい人がいる協力者だ」

れんごのお偉いさんですねわかります。でも、俺みたいな賞金首まであつていいのか

ガトウさんまじパネエツス！！

「協力者？」

「そつだ」

「マクギル元老議員！」

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ」

そんな登場の仕方したら誰でも間違つと思つよ。

カツカツカツ

「ウエスペルタティア王国…アリカ王女」

うえすべるたていあおうこく…覚えきれねえ。魔法世界の勉強は大変そつだな。魔法の勉強に歴史とかオワタ

「……………」

「ん」

よーよーナギの奴すつかり見入つちまつてるぜ。

あー？何だスネーク。なに？美人の嫁がほしいだと？無理無理wお前にも無理無理。え？ラカンのテオドラフラグ奪うだってえ？俺は知らんかってにせい。

ん？また話していると夕焼けがきれいそうな場所に来てるぜ。俺はいつK・クリムゾンを使ったんだ。

「ワハハハハ、上手いことやりやがってこんガキヤ！」

「ああ！？何の話だ！？」

「とぼけんじゃねーよ。お姫様とイチャイチャキヤイキヤイおしゃべりしてたろーがっ！」

「してねっつの。何がイチャイチャだ。バカ」

してたねえ。ラブ臭がしたかもね

「なーに言っただかよ。俺なんか…『気安く話しかけるな下衆が』だぜくくく？…いや、ありやイイ女だぜ。一本芯の通ったな」

ちなみに俺には無反応。それはそれで悲しい。

「頭大丈夫かジャック？マゾかアンタ？俺あんなおっかねえ女見たことねえぞ」

俺もです。ただいい人だと思うけどねえ。

「グハハハハハハ。そ ゆートコはまだまだカワイイガキなんだよなてめーはよ」

ラカンが言つとあぶねえ。どうでもいいけどラカンって聞くとラカン・ダカランを思い出す

「んっだそりゃ。意味わかんねえ。触んなっつーの勝負すっかてめ」

「…仲いいな」

「そうですねあ」

あれだなケンカするほど仲がいいってやつだな。

むっ！ということはスネークと仲いいのか俺？いやいや、俺ははいつもカレーにスルーしてるから。

まあせっかくアリカ姫が紅き翼に助けを求めたんだしがんばってるか。

「要するに戦争やりたいやつらがいるんだろ。まーた『あいつらか！？』」

「『完全なる世界』…帝国・連合だけでなく、歴史と伝統のオステイア内部にまでシンパがいるようだ」

腐ってるのね。あーやだやだ。

「世界全てが彼らに操られているようです…やはりこれは思った以上に根が深い…」

なーんか大変なのね。めんどくさいから頑張るのやめるわ。あとたのんだ。

俺はラカンとバカンス楽しむわ。

あーええ太陽だわ。

バチーン

あ、ナギが平手打ちされてやんの。何？首都の方にアリカ姫といくだど？楽しんでやがるなあ野郎

ん？謙信なんだ？海の幸が食べたいだど？よし素潜りジャー！

ふう、魚取りは終わったぜ。なかなかでかいのがいたなあ。謙信の喜んだけど…あの量くうきなのか

「まさか…こんな…」

かっこいいガトウさんどうしたんですか。

「よおガトウどうしたい？深刻な顔してよ」

「ああラカンにラグナか…いや、遂に奴らの真相に迫るファイルを手に入れたんだが…これがどうも信じがたい内容だな」

むむむ、ラカンと謙信と一緒にでっかい魚食ってるような者です。わかりません。

「いや、情報ソースは確かなんだが…うむ。信じていいんだか悪いんだか…しかしこれが確かなら奴らの行動も…」

うむむ、がんばれガトウさん！俺もがんばって原作知識を思い出させ！…二秒であきらめた…スネークを頼ってくれ。

「んだガトウ？ハッキリしねえな。もつとわかり易く言えや」

俺より肉体派なラカン。考えないところに痺れるツ！憧れ…ないな。うん、冷静になれ。

「いや、言ってもあんたにや興味ない話だよたぶん」

きーに なーるうーというか俺までラカンと同じ扱い！？

「それよりこっちの方が深刻だ。この男も『完全なる世界』との関連の疑いが出てきた…大物だよ」

ガトウさんの出した紙をしてみる。…誰かわかんね

「こいつは…」

え！？ラカン分かるのー！？そ、そんな…俺がラカンより頭が悪いだどー！？

ポン…

俺がorzしていると謙信が肩に手を置き大丈夫だという風に微笑んでいる。ああ、ありがと…謙信。俺はいい嫁を貰ったわ。

「（おなががすきました。）」

目からのコンタクトで分かりそうになったけどきつと気のせいだぜ！

ズズンツ！

およ？

「なんだ！？」

あーあれは首都の方面じゃないのかな。まあ心配いらないよね。

タイトル＝題名らしい(後書き)

中途半端な気もしますが、ノロノロ更新していきます。

アンニユイ学園書きたいな。まあオリジナルストーリーだろうけど

タイトルってなんかかつこいいよな（前書き）

なんか原作なぞるような感じだなー

でも作者の腕前じゃオリジナルなんて無理です

国立アンニユイ学園は妄想を明確にできそうにないからあきらめた。
だれかがんばれ

タイトルってなんかカッコいいよな

ピクピク

「…で、貴様は一昼夜アリカ王女殿下を連れ回した挙げ句、その敵本拠地とやらを壊滅させてきたのか！…どんな夜遊びだそれはっ！」

「まあ…あとは警察に任せただけ」

おーおー怒られてるなー。なんでも姫さん連れ回して敵さん壊滅させたんだって。ようやるよ。

テレビから流れてる放送の奴ってナギだな。

「敵の下部組織をつぶしても意味は無いっ！何の為に秘密裏に調査していると…」

俺は働いてないけどな。いやーバカンスええわ。冷蔵庫のもんがよー冷えとる。

「大体万が一王女殿下にお怪我でもあつたらどうする気だ！！」

ないと思うけどね。立派な騎士様が付いてるじゃないか。ゲラゲラw

「姫さんノリノリだったぜー？楽しかったとかって」

あの鉄面皮の能面冷血王女様がねえ。どんな感じかな『ワハハハ逃げ惑えあほどもめ』みたいなの…これだとエヴァと変わらねえ

「嘘つけっ！どうせ貴様が無理やり…くどくど」

へーへーそーなのかー

「詠春さーん」

およ？タカミチどうしたんでい。あ、謙信。アイス二十杯目はさすがにどうかと思うけど…

「あのコワイ冷血お姫様が今廊下で僕に向かってニツコリ…僕ビツクリしちゃって…あ、なんかナギさんにお礼を伝えてだそうです」

なんか皆姫さんにひどいなあ（笑）冷血だとか鉄面皮だとか。

詠春も絶句してるぜ。あれだなやるせない気持ちってのだな。あ、アルビレオさんや笑ったりなや

「それに…ちゃんと証拠も見つけてきたぜ」

誰だこのおっさん。何いつてるかわかんね

「な…それは…」

くそ！詠春までわかんのかよ。

あー謙信よ。食いすぎるなよ～おたふくかかっても知らんぞ

ひこーせんじゃ飛んでるわ。

なあスネークよ。あれ作られへんのか？

「ああ？どっかから貰ってくればいいじゃねえか」

フツ、分かってないな。カスタマイズ 改造したいだろうがぁ！

ビカーン

「な、なんだつてえ！？くっ、俺がわかってなかったぜ。燃える俺の魂ソウルよ。うなれ俺の指先！」

我ら、魂ソウル兄弟！ バーン

てなわけでナギがデリカシーのないことを言っではたかれているのも気に知らず俺らはやるぜ！

作るのは漢のロマン。ロボメカだ。さーてどうしましょうかスネークさん。

「気合いがあれば何でもできる！」

そつですかー気合いですかー…がんばろうか

むっ、なにをするのさアルビレオさんや。何？マクギル元老議員にナギ達と会いに行つて来いだつてえ？

俺たちは今熱い作業をしているんだ。邪魔するんじゃない！

何？とりあえず行けって？

俺を！

俺たちをお！

誰だと思っていやがる！

「いいから行ってください」

はい…

「マクギル元老議員」

あーもーめんどくせえ。何で来たんだろう。もっとひきこもっていてもいいじゃないか

「御苦労、証拠品はオリジナルだろうね？」

「ハ…^{ブラエトル}法務官はまだいらっしやいませんか」

誰だよそのおっさん。あれだよね外国人は見分けつかないって感覚だよ

「法務官は…来られぬこととなった」

「…ハ…？」

「…あれから少し考えたのだがね。せつかくの勝ち戦だここにきて…あわてて水を差すのもやはりどうかと思ってね」

大変ですね。自由気ままな人生でうれしいよ。食費に困るけど

「私の意見ではない。そう考えるものも多いということだ。時期が悪い。時を待つのだ、君たちも無念だろうが今回は手を引いてだな…」

「待ちな」

長つたらしい話しちいち聞かなくてもとよつたんじゃあないのかな。大人つて大変なのね。俺は春すぎた爺だから

「あんたマクギル議員じゃねえな。何もんだ？」

えっそうなの？俺が疑問に思った時もうポウンッってなってる。ギヤグだとアフロ確定だね

「ちよ　！？ナギおまつ…何やってんだよッ。元老議員の頭いきなり燃やしておまつ…」

「バーカよく見てみなおっさん」

「何っ…」

どれどれ。何が見えるのさ。

「…よくわかったね千の呪文の男。こんな簡単に見破られるならも

「う少し研究が必要だ」

「すまんが俺は分からなかった。どうやってわかったし。

「言うかこいつフエイトってやつだよな。たしか大戦終わった後女の子で囲む奴だったよな…」

「フツ、妬まないぜ。俺には謙信がいるぜ。」

「でも今はガチガチに男どもだろ？どーゆー趣味してんだか。」

「よし、とりあえず沈めるか」

「とか思っていたらいつのまにか水の中でした。どうなってんだ。」

「ホワイト・アルバムで固めていいか？」

「ばれるからやめとけ」

「そんなんっ…ひどいわ！固まっちゃえー」

「ちよおまつ！」

『必殺奥義・冷凍庫にぶちこんだ』

「ぶちこむ！」と心の中で思ったならッ！
その時スデに行動は終わっているんだッ！

「ウーンーウーンー」

あ、空には連合の戦艦があるんだっ

おいお前ら何氷漬けになってるんだよ。早く逃げるぞー

器用にラカンが氷漬けにされているのに何かしゃべってら

「ムオーー（てめえささつととけよお！）」

フ、大丈夫こんなこともあるのかと！

パチイイイン！

バシャーン

湖に浮かぶは巨大な機影。その正体は？！

「おーすおら小林。助けに来たぞ」

巨大なメカ操るはスネーク参上！どっからどうみてもメカア

バシャンバシャン

スネーク乗るメカにより水しぶきが起きる。連合の艦隊はいきなりの巨大なメカにビビっているようだ

そのREX似のメカが氷漬けになったナギ達を運ぶ。俺も乗る。

フハハ、さらばだ明智くーん

のちのちこの騒動によってアリカ姫がより色々と難癖付けられると
は知らなかった

ごめんねー。わるぎはなかったんだよ！

タイトルで押してみようと思う(前書き)

戦闘シーンって難しいのね

長いと思ってても案外短かったりするし

タイトルで押してみようと思う

俺達紅き翼は各地を転戦しながらアリカ姫を救出に向かって『夜の迷宮』に向かった。

いや、スーネクさんが大暴れな登場してくれたせいで大変だった…

行く先々に敵イ、敵イ、敵イイ！死ぬかと思って虎の子の『必殺奥義・燃え盛るパツシヨ―ネ横町』を使うところだったぜ…

ん？どうも今から『夜の迷宮』に潜入するようだな。で、どこにいるかわかってんのかよ。知らんのか。手分けして探索か

おいスネークそのREX似のメカはよ便利倉庫にかたずけるよ！そのデカブツのせいでばれたんだぜ。まあ敵さん片っ端から蹂躪してたけど。たまに冷却スプレーもかけてたよな。

さて俺はこっちいつてみるか

カツカツカツサンドォー！

俺の足音しか聞こえない。兵士の声も聞こえないな。どういうことだ？

不自然なほどに静かなこの空間。適当に兵士ぶっ飛ばして見ようとしたのになあ。

あーどれくらい歩いたんだ。どこまで行っても人っ子一人いねえ。

すると物陰から奇妙な奴が現れた

「クツクツク。どうも紅き翼のラグナ殿。ご機嫌はどうだア？」

誰やこいつは。いきなり初対面でご機嫌うかがわれてもしらへんわ

「俺の正体が気になるでしょう。クツクツク。そして人っ子ひとりいないこの空間にもね？」

「いや、あんたの事は興味ねえ。で、どういうこった？」

「いやいや、俺の事興味ないの！？もつとき、オリキャラ的なのできたのに驚こうよ！？」

と言つてもなーだれもモブキャラなんて気にならないだろ？読者のみんなもきつとそうだな。

そりゃーモブって一概に言えないキャラとかいるけどさー。こんなやつはねえ？

「ひでえ！俺が嫉妬に憤怒を燃やしているのをしらずにいいー！」

「知らんがな。で、この空間は？」

「俺が兵士かたずけた」

「フーン」

やっぱり話してても無駄だな。さっさといこ。じゃーな達者でなー

「ちょ！？スルーですか？！俺がやったんだよ？お前何者だ的なこと聞かないの？」

「おまえなにものだ（棒読み）」

「棒読みいいい！ええいこうなったら俺の正体が知りたいかあ！」

「いや別に」

「フフフ、そうかあ。そんなに知りたいなら教えてやるぜ！」

あ、こいつ無理やり進める気だ。俺の意見の尊重しろよ。

謎の敵がかっこつけたポーズで（自分では）優雅に歌うその名前

「俺こそはある時は謎の敵。ある時はツッコミ。その正体は？！」

もう前置き長いよ。さっさとしたらいいのに。こいつもこいつだよな。わざわざ俺の方に出で来なくてもスネークの方に行ったほうが相手してもらいやすいだろうに…

「俺は！^{エックス}転生者Xだ！」

バーンと後ろで火薬が爆発したような気がしたと思っただら、していた。どういふことだ？火薬なんてないと思うし火をつけた様子もなかった。それに転生者ってバリバリばらしてるな。もしかすると発火能力でもあるのかもしれないな。

「で、その転生者^{エックス}Xさんはこの天才で優雅で努力家で気品さバリバリで全人類の頂点の俺に何の用？」

「こいつあからさまに自分を褒めてやがる！？がーそんなことどうでもいいんだ。俺は数々の世界を渡り数々の転生者共を打ち砕いてきたんだ。貴様もそうしてやるぜ！」

ああこいつアンチか。よくいるんだよね。しかしこいつは色んな転生者を破って来たってことは何かといろいろな能力を持つてるのか。

「てめえもどうせこの世界でハーレムでも築くつもりだったんだろ！でもぶち壊してやるぜ。安心しな、みんな幸せにしてやるからよ」

「や、俺ハーレム好きだけど嫌いだから。安心しなよ」

「いや、どういふことよ！？好きで嫌い？意味分からんわ！」

「俺はギャグのないハーレムは嫌いなんだ」

「ギャグのあるハーレムってなんだよ？！」

「生徒会の 存」

「ああ、八方はどうなるのかな。ってちがうよ！？確かにギャグだ

けどお。シリアスもあるよ!？」

「俺には見えない」

「馬鹿にしてんのか!？」

フリーフリーって転生者Xが疲れ果ててる。やっぱりツッコミって
疲れるよなー。

しかし誰も彼の苦勞を敬わない。ここにいるのは二人だけ。切れた
転生者Xがする行動は一つ

「うがぁーもう知らん! さっさと逝ねや!! 天地乖離す 開闢の
星!」

切れた転生者Xは英雄王の超必殺技をだす。プツンしたんだね。
英雄王の宝具ってことはみんなが思うにテンプレですね

対して俺ことラグナがすべき方法は…

「(耐える!) スタンド: アヌビス神!」

長物の刀を自分を守るように構える。

「どうしたア!? 気でも狂ったかア。貴様の能力は知っている。世
界じゃなくていいのかア?」

「構わない。口上はいい。さっさとこい。その攻撃が終わったら…
お前は終わる」

「ヒヤッハー! もう終われエー!!」

ズドドドドドドドドドドドドドドドド

粉塵が舞う『夜の迷宫』。立つ者は一人。そこにはもう一人の影は無く何も無い。

「フン。生意気なこと言ってっからだ。さっさともう一人もやるか」

転生者^{エックス}Xが立ち去ろうとする…が、物音がする

「なっ！？どういうことだ。ここにはもう俺しかいねえ…なら残るのは奴か？」

ザザッ

粉塵で周りも見えない空間で姿を隠し忍び寄る。転生者^{エックス}Xは動きを止める

「チイどういうことだ？あれを防ぎきったとしてこの粉塵の量メタリカやアクトン・ベイビーで消えちまったら反対に目が付いちまう。どうやっていどうしている？！世界か？いや、それならばもう俺は死んでいる！」

ザザツ

「もう一発天地乖離す開闢の星打ち込むか？」

「いや…もう俺にはそれは効かない。なぜならアヌビス神で受けた攻撃はもう効かない」

「なあ！？いつのまに！？」

そこにはいつのまにか不老不死により傷が回復したラグナが転生者^{エック} Xに手を伸ばしていた

転生者^{エックス} Xは距離をとり、離れようとするがラグナの手が伸びそして触れる…転生者^{エックス} Xは本となった！

「スタンド：天国への扉^{ヘブンズ・ドア}。これは触れた者の体を本にし相手の事を読むことができる。さて気になるな？どうやって近づいたか。それはアース・ウインド・アンド・ファイヤーによって小石に変化した。かんたんたる？」

「なつぐう！？た、立てない！？足まで本と化している！」

へブンズ・ドアによって本と変えられてしまった転生者^{エックス} Xはなすべない。

「フムフム。確かに言つとおり色々な世界を渡っているようだな。本名はバング。いや、これは貴様が転生したところの名前か。本当の名前は薄れてしまっているな」

ラグナは興味心身に転生者^{エックス}X、バングの体験を読んでいく。が、そのままやられっぱなしは性に合わないバングが気合いで乗り切る！

「ぬう！ふざけんなよオ！オオオオオオハツ！」

「グツウ！」

気合によりラグナの体が離れる。その隙についてバングは一気に立て直す

「いまさら立ち直っても無駄だ。貴様の技は防ぎきつた」

「何いつてるんだ。勘違いしてるぜ」

「ひよ！？」

ラグナは驚きを隠せない。それもそうだろ。天地乖離す開闢の星なして勝てる打算があるというのだから。

果たしてバングの持つ隠し玉とは？！

「いくぞオ！うおおおおおおお」

バングが一気にラグナへ近づき肘打ちっ！裏拳正拳！とおりゃああ

あっ！と言ったようにもう打撃を与える

「うぐぐぐぐ！？だがその程度じゃあ効かんぞ」

「誰がこれで勝つとிட்டあ？もう布石は打ってあるんだよ。さっき殴らせてもらったからなあ！」

「何?!殴ることによって発動する技だと？呪うような技か!？」

「そんなチャチなもんじゃねえぜ。行くぜ。覚悟はできてるか？俺はできている。『獅子神忍法・究極奥義・萬駆風林火山』!！」

バン〜バツババン〜

奇妙な歌とともにバングの全身が光り輝く。まるでスーパーモードなに？それはないか

「これでお前は終わりだあ！韋駄天!」

一瞬にしてバングの姿がぶれて消える。その一瞬にもうラグナへと迫っていた

「ウラウラウラウララララアア!！」

見えない拳の弾幕によってなすすべなく打たれるラグナ

「バカな、この俺が手も足も出ないなど、そんなことが、あつて、たまるかあああつ!！」

ラグナの体からスタンドの像が飛び出す

ヴァイジョン

「スタンド：キラー・クイーン発動！」

ラグナからヒト型の奇妙なグローブを嵌めたスタンドが現れる

「バカめ！キラー・クイーンは触れたものを爆弾に変える能力。このスピードでは触れまい！」

「フツ、今ほどこの体が頑丈なことに感謝をするぜ」

「？どういうことだ。気でもふれたか？」

このような会話がなされているが今でもバングはラグナを超高速で殴り続けている
ひとえにラグナの体の頑丈さだろう

「てめーも道づれだ。キラークイーン！俺を爆弾にしろ！」

「ぬおおお！？自分を爆弾にして吹っ飛ぶつもりかあ！（この距離ではかわせない！）」

ラグナの体にバングの超高速パンチが迫る。だが、殴った瞬間、接触型爆弾によって至近距離の爆発を食らう

回避する手段は…無

「うおおおお！？」

BOOOON!!..

煙が晴れた先では少し血を流したラグナと倒れているバング。誰がどう見ても決着はついた

戦闘に幕が下りたのだ

「おい、生きてるか。エセ忍者」

「…っ。…へへ、死ぬかと思っただぜ」

「そうか…」

特に何もするわけでもなく去っていく我らが主人公ラグナ。無敵細胞のおかげで爆発でも死なない

「よー俺ほってていいのか？どうせまたお前殺しにくるぜ？」

「いーってこった。お前殺りがあるし（作者的にも）。それに…」

「それに？」

「さっきの技。えーと。『獅子神忍法・究極奥義・萬駆風林火山』だっけ？あれパくらせてもらったし」

「ええ！？どういふことなのー！？」

「気合い」

「なにそのある意味チートな能力は!？」

こうして暴れまくりの戦いをしていた二人だがなぜか紅き翼の面々は来なかったとき。

チャンチャン

タイトルで押してみようと思う(後書き)

オリキヤラー登場の巻き

キラール・クイーンはやればできそうだったから

咸卦法つかえないなら風林火山があるじゃないか

で、覚えました。使うか知らないけど

どうやって覚えたか？ボーイ・ツー・マンとかじゃないの

タイトル四天王参上！（前書き）

ノロノロ進むよ！

タイトル四天王参上！

「何だこれが噂の紅き翼の秘密基地か！どんなところかと思えば…掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してんだこのジャリはよ」

「まったくだじえ」

おおつスネークの華麗な割り込み。ラカンもスネークの身に覚えのない気合いに戸惑ってる。スネーク、あんま気合い入れるとがちバトルになっても知らんぞ

「何だ貴様ら無礼であろう！」

「へっへ〜ん生憎ヘラスの皇族に貸しはあっても借りは無いんでね」

「嬢ちゃんさつさと返しなあ〜体で払ってもらっぜ」

スネークそいつは言いすぎだ。マジで青髪ピアスと語ってこい。

「な、な、何い！？貴様何者だ」

「フ、俺か。名乗るほどのもんじゃあねえが名乗ってやるぜ！俺は紅き翼所属、狙った獲物は逃さない紅き翼の艦載級砲台スネークだ！」

なげえよ。どんだけ自慢したいんだお前さんは。テオドラマも「な！

「貴様があのスネークだと!? 嘘つけ!」とか言われてるじゃないか。きつと嘘の誇張のしすぎだな

はあく、スネークにはやれやれだぜ。あ、謙信これ食う? 結構うまいぜ。味に目醒めたアーってなるね。あ、ちよ、そんな急がなくてもおお! 俺の手ごと食うなあ!

あーそんな急いで食うから喉詰まらすんだぜ。この水の目めよ。なんつーか、気品に満ちた水つーか、たとえと、アルプスのハーブを弾くお姫様が飲むような味つーかスゲーさわやかだから。あ、謙信は姫様だったな。ハツハツハ

うめえイカうめえ。何、これも食べたいだど? お前どんだけ食べるんだよ。

ゴソゴソ

あーたこ煎うめえ。バリバリ。何、これも食べたいだど? お前どんだけ食べるんだよ。

ゴソゴソ

んーピッツアはおいしいな。シンプルなマルガリータがおいしいなあ。何、これも食べたいだど? お前本気でどんだけ食べるんだ!?

む、謙信と飯の取りあいしていたらいつの間にか話が進んでいるぞ

「連合に帝国そして我がオステイア。世界全てが我らの敵というわけじゃない。じゃが…主と主の紅き翼は無敵なのじゃろ?」

おつきい話だな。いつのまにかスネークが戻ってきてやがる。テオドラをREX似のメカに乗せてるな。あれはなついた。

おい、謙信いつまで食ってんだ。ちょっと酸っぱい味付けのもん食わずぞ

「世界全てが敵　良いではないか。こちらの兵はたったの10人だが最強の10人じゃ」

はあーたった十人これで世界相手に戦うってどんだけハイスペックなんだよ。俺はその高性能に痺れる。憧れるう

「ならば我らが世界を救おう。我が騎士ナギよ。我が盾となり、剣となれ」

「…へ、だから俺は魔法使いだっつーのに。やれやれ、相変わらずおっかねえ姫さんだぜ。いいぜ俺の杖と翼あんたに預けよう」

おおっかつけえ。…謙信うるせえぞ。ピッツアはもう少し味わって食え

…

それ〜から〜半年ぐらい『完全なる世界』をちぎっては投げ、ちぎっては投げ。大忙しだったぜ！

それに実はスネークがお前どうやって謙信ちゃんを知り合った？と、聞いてきたので嘘と誇張と大真面目を混ぜ込んだ超大作を聞かせた。

「じつはなそこで魔人がサニー・サイドアップ使ってきてビビったぜ！」

「まじ！？目から出したの？すげえ！魔人すげえ！」

ノリノリだったぜ。謙信は口にもものがずっと入ってるから喋れないし。そうこうしていると話が変わってきて、スネークの話になった

「実はなお前と別れた後になんとか紅き翼をさが…」

(全略)

で、今に至るわけなんだが…何故全部略したし！俺の壮大な物語語らせるよー！」

「だってお前いまから『完全なる世界』潰しにかかるんだぜ？馬鹿だろ」

そう、今は『完全なる世界』をぶっ潰すため布陣してんだ。

血がたぎるぜ…野郎ども行くぞー

フニユーキユー

「バット・カンパニ極悪大部隊が鳴いた！？いつのまに。しかもカワイイ！どういうこと？！」

俺たちに不可能は無いんだぜ。なあ野郎ども

キユーフニユー

「もうそれ野郎どもじゃねえだろ。デフォルメされたかわいい軍隊だよ！」

オイ組長。あいつに一発撃ってやれ。カワイイものには棘があるってな

「否！断じて否！カワイイは正義！」

「オーイお前ら何やってんだ。そろそろ時間だぞ〜」

ナギが呼んでる。さて、なかなか長かったな。じゃあ行くか、なあ相棒？

「けっ。こ　ゆー時だけ一丁前な顔しやがってよ。まったくやれやれだ」

スネークがREX似のメカに乗り込む。あいつあれで出る気なのか。

「不気味なぐらい静かだな。奴ら」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

そういうものなのか。ラカン何故知っている。

「ナギ殿！帝国・連合、アリアドネー混合部隊準備完了しました」

「おう、あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ」

「ハッ。それであの…ナギ殿」

「ん？」

このやり取りは。ああサインほしいよの件か。ならスルーでござる。
K・クリムゾン！

「連合の正規軍の説得は間に合わん帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう。決戦を遅らせることはできないか？」

ガトウさんからの連絡ですな。きついですね。もう世界を無に帰す儀式ってのをやってるんだろ

「無理ですね私たちでやるしか」

「すでにタイムリミットだ」

「ええ彼らはもう始めています…『世界を無に帰す儀式』を。世界

の力ギ『黄昏の姫巫女』は今彼らの手にあるのです」

「ああ、よおしつ野郎ども行くぜっ!!」

「おう!さいつしよから クライマックスだ」

俺は進む。さつさとこのふざけた大戦を終わらせるために。最初からクライマックスにしてやる

うおっスネークそれ飛ぶのか。なんかかっこいいな。

タイトル四天王参上！（後書き）

ノロノロした結果がこれだよ！

俺のタイトルは108式まである(前書き)

白騎士物語がおもしろくてノロノロダヨ!

俺のタイトルは108式までである

おらおら死ねや自動人形どもに召喚魔。イエロー・テンパランスで食ってやるぜ。

しかし、何体食っても何体食っても減らないぞ。どれだけ多いんだ。今は紅き翼が思いつきり突撃しております。もうそろそろフェイトが見えてくるんじゃないのかな？

…お、あのビリビリなってる所かな。

「やあ『千の呪文の男』またあったね。これで何回目だい？僕達もこの半年でずいぶん数を減らされてしまったよ。この辺りでケリにしよう」

おー周りは壮絶なバトルを繰り広げているな。で、俺の相手は誰ですかー？

「この俺だ！ここで会ったが百年目待ちに待ったこの時が来たのだ。数々の苦汁をのみ、男共に囲まれ、暇で辛かったあの日乗り越えたのだ。オリ主よ。私は帰ってきたー！」

長い登場セリフどうもありがとうございます。

みなさんこの前俺にボコボコにされた転生者^{エックス}×ことバングさんですよー。

「うるせー！お前も血流してたじゃねえか！今度こそは全国のアンチオリ主チートの皆様に掛けててめエを倒す！」

すごく意気込んでくれちゃいましたよ。なら俺も

「ならば俺は満足するまでお前をフルぼっこにする。主に泣くまで」

「嫌な宣言しやがって。もういい ブチコロス」

タッ

バングが迫ってきた。俺はどうする？

ジャンプ！そこでスタンド：アース・ウインド・アンド・ファイヤ
ー発動

「ロードローラだ。（タンクローリーでも可）」

「アース・ウインド・アンド・ファイヤーでなれるの？！」

複雑な構造は無理だけどな。

どうですか皆さん。このバングの驚きっぷり。皆さんもやりたくな
ったでしょう。

「ええーい！こちらは数で勝負だ。光弾よ！穿て！」

バングはどこからか五円玉を大量にとりだし周りにいつきりバラまいた。…あれが五百円なら飛びついてるぜ！

その五円玉は急に光だし宙に浮くと…俺に向かって突撃し始めた。

「なんと！お前なんで五円使いの能力まで持ってたんだ！」

「ふん、俺は行く先々の世界でオリ主を打ち破りし者。そんな俺が弱かったらだめだろ？」

「答えになってんねえ！」

ヒュン

うおあぶねえ。うわ。あ、ちょ。ほっ、とお！あつよつと

「なに、今のをかわしきるだと!？」

華麗な俺はもう日本が埋まるんじゃないかってくらいの五円玉をかわしきった。

「ここからはずっと俺のターンだ。いいな」

「よくねえー！」

「いくぜ。スタンド：ホルス神。発動！」

空中に一気にドでかい氷の塊を作りだす。これでバングをぺしゃんこにすることも可能だ。だが、かわされる可能性がある。だからこ

つする。

「さらにスタンド：魔術師の赤マジシャンズ・レッド。発動！」

こいつで空中にできた大阪ドームぐらいある氷を溶かす！

「てめえ何しやがるつもりだ？」

「答えたからおもしろくねえだろ。黙って見るかしとけ」

で、でかい氷が解けるとできるのは水。たくさんできたよ

まあ案の定雨みたいな感じで落ちてきます

ザブシャアー

「ぶおい。ばんだでこんなことじゃがる（おい。何だってこんなことじゃがる）」

「ばばれ（だまれ）」

水のせいで上手くしゃべれない。なのにこの意思疎通は何なの。俺はどこでも電話のドッピオみたいなことができるのか

あたりが水浸しと言っかもう湖だ。みんなどうなってるかな。ハハハ

「さあ〜て。こいつで終わりだ」

「何がきやがる！」

「スタンド：クラッシュ。発動」

クラッシュ。こいつは水から水へ瞬間移動する能力を持つスタンドだ。

俺が周りを水浸しにした理由がわかったな？ドゥー・ユー・アング
スタン？

「チィ。クラッシュだと?!ま、まずいこの状態は非常にまずい！」
ふふふ怯える。戸惑え。鳴き叫べ。お前が恐怖した時、それこそが
終わりだ

チラ

「……………」

わざとバングに見えるようにクラッシュの姿を出す。

攻撃するか？今出ている位置は二の腕のあたり。

このまま首のところへ進めてみよう

肩まで来た。まだ攻撃しない。どういうことだ？さそっているのか。

…

色々やってみたが結局首まで来てしまった。もういつそやるか。
クラッシュやれ

鮫型のスタンドが飛び出す。…が、一瞬でとらえられた

「バアカメ！出る場所がわかっていたら捕まえるのも楽よお！」

「…てめえが馬鹿だ。忘れたか？クラッシュの能力は水から水へ飛ぶ。お前の手は？濡れている」

「あ…やっちゃったぜ。逃げちゃ駄目だぜ？」

「恐怖したな？お前が恐怖する時鼻の血管が浮き出るようだ」

「マジ?!」

「スタンド：エニグマ。発動！」

紙はどこから出したかは聞かないでくれ。

「うおー！この俺がやられようと第二第三のオリ主殺しが来るだろ。ウハハハハ」

ふう。紙はきれいに折りましょう

こうして長い長い大戦が終わったと思うか？

ちょうどほかの奴らも終わったみたいだな。俺も横に並んでみる。
あれ、スネーク。メカはどうした？

「潰された。ムカついたから八子の巣にした」
だそうです。また作ってね

ん？ナギがフェイトの首根っこことっ捕まえているぞ。いいぞもつと
やれ！

あれ？この時って造物主ライフメーカーのレーザー攻撃があるんじゃないか？
それはやばい。もしこの怪我があとになって…とかシャレにならない。
い。

というわけでスタンド：ザ・ワールド世界発動！

ふふふん、これでゆっくり助けられるな。

ユラ…

ああ？今なんか動いたような？いやいやありえない。この世界で動けるのは同じ力を持つ者だけのはず。

じゃあ何だ今の？誰かいるのか？いや、いたら嫌だけど

「誰だ？誰かいるの？」

ゆらっ…

黒くて無駄に長いローブを被った方が揺れております。

考えたくなかったけどこの目は現実をとらえてしまっ。

「お前…何で効かない？」

「……………」

けっ無視か。しかしまさか造物主ライフメーカーに効かないとかどうするの

奴の前に魔法陣が現れた。まさかこの時の止まった空間でナギに向かって打つ気か!?

「くっ時は動き出す!」

そのとき奴が喋ったような気がしたが俺は聞こえていなかったのか、意図して聞かなかったのか知らない

「…所詮は人形。人形の技など効かない」

バズッ

「!?!」

「ナ…」

「誰だ!?!」

くそ! あいつ何で動けるんだよ。あーあわてている暇はない。

このあと超極太レーザーが飛んでくるんだったな

スタンドに防御系というのはほぼ全くない。なら超極太レーザーを消せる奴を使うしかない

「スタンド・クリーム！間にあえええ！！」

すぐさまクリームの口の中へ。クリームの口には暗黒空間につながっているらしい

ならば超極太レーザーを暗黒空間に送り込んでしまえば…防げるかもしれない。ただ問題なのは口の面積が全く足りていないことだ。この際文句は言ってもらえない。どうにでもなれ。

「いかんつ。クラティステイ・アイギス最強防護！！」

ドッパキヤーン

ああ…ゼクトの防護壁が一瞬かよ。ちっ、やばいー勢いが強すぎるう！

ちよ、このままじゃ俺が暗黒空間に落ちるうう！！

やばいやばいやばい。早く終われえええ！

ドゥ

…なんとか乗り切ったのか？

謙信とスネークは無事だろうか。主に謙信。

これで、あ…手が滑ったあああああああああ！！！！

ヒューン

ドサッ

いってえゝあ、あれ？ここ何処だ？

確か俺はクリームの暗黒空間におっこちたはずだよな？普通ならもう俺の存在は無くなってるはずだよな。よくて神様のところ

とりあえず周りを把握しておく。なんつーか、店？で表せれる。ウ
イトレスさんとかメイドさんとかいそうな感じだなー

んー？カウンターのところにだれか座っているな。とりあえず話聞
きに行こう。

隣失礼します

「ん？君は…いつたい」

「あ、俺、ラグナというものです」

「そうか…君もあのスタンドにやられたのか…」

え。何の話？一つ聞いてもよろしいでしょうか？

「なんだね？」

「お名前は何と言つのですか？」

「ああ！失礼。私の名はモハメド・アヴドウル。アヴドウルと呼ん
でくれ」

あ？あヴどうる？アヴドウル？え。モハメド・アヴドウルうううう
！？

ジョースター・エジプト・ツアー御一行様の！？クリームにパクリ
と逝かれた！？

「どうしたんだ？まさかあのスタンドにやられた時か？それともポルナレフが何かやらかしたのか！？」

「や、何でもありません。ちょっとびっくりして」

「？何にびっくりしたのだ？」

あわわわ。漫画で知ってるなんて言えないし。どうする俺

「えーと。えーと。あ、あれですよ。アヴドウルさんはたしか占い師でしたよね。それでちよっとね」

「ああそっち関係か。で、どういう経緯でこっちに？」

あわーまた答えずらいのおおお。どうする。どうするんだ俺！

「たまたまちよつとありまして…」（シリアス臭）

「そうか…すまないな」

ふうーう乗り切った。シリアス臭（笑）すげえ！

「い、いえ。それよりここはなんなんですか？」

「ここか。ここはな、すごいんだぞー！」

「へ？こんなどこにでもありそうな店みたいなのですか？」

「そつだぞ。オイみんな来てくれえー！」

アヴドウルさんが声を上げると…いつのまにかメイドさん達がいた。
はっ？

「「ようこそいらつしやいました。暗黒世界町メイド喫茶にご来店
ありがとうございます」」

なにその危ない名前。ま、まさかアヴドウルさんはここにずっと？

「ああそうだ。気づいたらここにいてな。ここはいいところだぞ？」

ですよね〜うへへへへ。可愛い子ちゃんがいっぱいだぜエ

ワイワイガチャガチャ

はっ！いつのまにか大分いたような気がする。

アイリンさんや。どれくらいしゃべってたかな？

「はい〜。結構喋ってましたね」

それじゃあ答えになってないですよー。あ、アイリンさんはこのメイドさんで喋ってたら仲良くなったぜ！

アヴドウルさんもいちゃいちゃぺちゃくちゃしてるぜ

「まあ暗黒世界と現実には時間軸が違ってますけどね。で、帰ります？」

そーなのかー。って俺が生きてるの知ってたの？

「そりゃそうですね。だって輪っかないし」

どうも死んだらドラゴンボー てきな天使の輪っかができるらしい。みんな気付かなかったけど

「気づいてますよ。みんな『何あの人生きてるの!?!』、『先輩！あの人なんなんですか!?!』、『落ち着くよ。素数を数えて…』とかですね」

俺めっさ珍獣扱い。じゃあ帰りますよ…帰り方教えてください

「別に帰ってほしいんじゃないんですけどね。みんな珍しいんですよ。あ、帰り方は来た時と同じ方法で帰れますよ」

じゃあクリームまた落ちたらいいのか。アヴドウルさんに挨拶しとこうかな…別にいいか。何か楽しんでるし

「また来てくださいね」

はいはい。…暗黒世界ってなんだかいとこだな。ヴァニラも来て

いたのだろうか。無いか。

たぶんきつと造物主倒し終わってるんだろっな！。活躍の場を逃してしまった。俺は反省すると強いぜ

俺のタイトルは108式までである(後書き)

白騎士物語がたのC-!

おかげで何かいてるかよくわからないよ。今回は造物主にスタンドが効かないだど!? はい、人形フラグ?

まあいろいろとおかしいところあるかもね。あ、スタンドの能力できたものは解除しても無くならないってことで。

白騎士物語たのC-!

白騎士の兜に合う防具を探しているんだ。案外どれでもあいそうだけ

恒例の次回予告(なにそんなのしたことないだど?)

次回!ラグナが目覚めるとそこは宇宙要塞ザイガス。隣にはかの有名なシューマツパが!

いきなり宇宙戦艦の指揮官に命じられ流されるままに進んでいくラグナ。

だが、船員の死亡によりこのままじゃいけないと悟る。そこに現れるキッド総司令

次回・タイトルの宇宙そびに散る者達

君はあの奇跡をみるこゝとなる…

俺のタイトルは音速の二倍はあるんだ(前書き)

白騎士物語がおもしろくて謙信のフラグが立った

PS3の自動で電源切るのが発動して3〜4レベル落ちた…

俺のタイトルは音速の二倍はあるんだ

「しらな、ゴフウ!？」

目が覚めて知らない天井だったので名台詞を言おうとしたら腹を殴られた。

そこには笑顔のアルビレオさんが…

「起きましたね。さっさと準備して式典でろ。でなさい。でますかね？」

俺は威圧を感じて頷くしかなかった。おかげで何がどうなったのかわからなかったが、式典ということはナギがきっちりやってくれたのだろう。

あー何だが体が痛むぜ。きつとあの超極太レーザーを耐えきったからかな

「ぐだぐだしてないでとつと準備しろ。…ゴホン、してくださいね？」

言い直されても困ります。

ドカア

ドアが勢い良く開いた。誰か来たみたいだ。

「あなた！大丈夫か?!」

おお謙信や。俺は大丈夫だぞ〜心配してくれていとうれし

「いや、ピッツアが食べたいな。故郷のシンプルなマルガリータが食べたい」

故郷って何いつてるの。お前の故郷は日本であって日本でないJa panだろ

「む、?いや、ちょっと電波が」

えー謙信が電波少女でせうか。いや、もとからだったわ。

とりあえずアルビレオさんの無言の圧力が怖い。道中で謙信の話を聞くか

服は…着ていた。このままでいいだろう。

とつとと部屋を出る。アルビレオさんやあなたは出ないのか?

「ええ。めんどくさそうです」

じゃあなんで俺は?

「いいから行きなさい。ペしゃんこになりたいですか?」

レッツゴ。行くぜ謙信。

で、超極太レーザーの後どうなったんだ？それと怪我はないか？

「うむ、私はあなたに守られていたから平気だぞ。ポッ」

謙信がデレタだとお！？こ、これは罠だ。出てこい！犯人は誰だ？！

「……………」

ええ、あまりデレ無い人がデレると混乱しますよね。いつつあゝ

で、強引に話を戻すぜ。極太レーザーの後は？

「む…、少ししてからスタンドからあなたが出てきた」

ムスツとしてる謙信もかわいいんだぜ。

暗黒世界では結構喋ったんだけどな。ほんとに時間軸がずれてるのか

いやゝなかなか楽しかったな。また今度行こう

「何が楽しかったのだ？まさか他の女と…」

ややや、なんでもないですよゝ。

しかし、謙信が嫉妬？いままで食にしか興味を示さなかった？

俺が守ってあげたからフラグ立ったの？とりあえず保留

どうやらもうそろそろだな

ワアアアア

うひょーすげえ人の数だな。

オウ、ナギに詠春、ラカン、スネーク元気そうだな

「お、ラグナ起きたか。遅いじゃねえか、遅刻だぜ」

うるせー俺は忙しいんだよ

「寝てたのに？」

……はい

「おまえら話は酒場でしろ。とりあえず手ぶつとけ」

あいあい。

どうも〜ラグナです。どうもどうも〜

ところ変わって酒場。みんな騒ぎすぎだぜ

「今騒がなきゃいつさわぐんだよ」

ラカンお前は年中お祭りだろ。

あ、謙信また料理頼んだのか。たくさん頼むなあ〜

俺がそういうと謙信は食事の手を止めて

「……………食べない」

な、なんだってー!?!? あ、あの謙信が食べ物の前にしてお断りする
だと!?!?

ま、まさか『完全なる世界』の奴が何かしら攻撃してきたので、ゴッホウ

「…もう、知らん」

とってまた食事を始めてしまった。何だったんだ

「グへへへ。ラグナよ、お前も分かってねえな」

ラカンなんだ。酒臭いぞ。

「…俺にはテオがいるんだ。テオがいるんだ」

スネークどうした。いきなり黒くなって

「何なんだこれは…」

「楽しくていいんじゃないんですか？」

しばらくすると戸があいて誰か来たようだ。

なんか周りがすごく騒がしい。ナギが来たみたいだ

おい、ナギとラカン傷をど付き合うな。死ぬぞ

「まさかあのゼクト殿が逝ってしまわれるとは…」

「なー　？あの妖怪じじい殺しても品ねえ気がしてたんだが。まあ戦争だしよ、ほかにも大勢死んだ」

「いや、お師匠は…」

「ナギ」

アルビレオさんがナギの肩に手を置いて何かしゃべんなやってる。ゼクトどうなったんだっけ？

えーと、ただ死んだんじゃないっけ？

「…死んだ奴らと世界の平和に」

戦争は遊びでやってんじゃないんだよ…

なんだナギがえらい暗いぞ。

そんなナギにラカンが話しかける

「おう、どうした英雄さんよ。暗えな。女か？」

「ちげーよバーカ」

「あーハイハイアリカ姫な？アリカ姫じゃしょーがねえそーだろそーだろ。ホレホレ？アリカ姫のプレミアムファイギア？50万で売るぜ？」

ラカン甘いな。ナギ俺なら25万で売るぜ！あ、ちよ、謙信何するの。グシヤ。アリカ姫のファイギアがああ。

え、謙信その振り上げた手は何ですか？となりでボコボコになったラカンからナギのターゲットマークが俺に切り替わる。

もしかして二人の右手で殴るんですか？

「「NO!」」

じゃ、じゃあ左手ですか？

「「NO!」」

も、もしかして両手ですかあー!？

「「YES!YES!」」

オラオラですかー!？

「「YES!YES!YES!」」

その後の俺は聞かなくてもわかるだろう。恐ろしいものを見た。こ

れまで見たことがない恐怖を体験したぜ。

その後オスティアが崩壊。俺達紅き翼も救助活動を手伝ったがやはり犠牲者はでた。奇跡的な数字らしいがよくねえよな。

オスティア崩壊からちよつとして…

「いくのかラグナ」

俺はエヴァとの約束を果たしに彼女の元へ行くつもりだ。謙信は一緒だ。スネークは何でもテオドラにフラグ立てたせいで逃げられないらしい

「また、一緒に酒でも飲もうぜ」

実は何か引つかかるんだけどな。このあとおっきいイベントがあったような気がするけど…ま、いっか

「それではロリ幼女によろしく」

アルビレオさんやケンカ売ってるんですか。俺に死ねと言ってるんですか

はあ〜

「じゃあな。お前ら、また会おうぜ」

さあついた！ただいま！エヴァ〜いるかい〜？

ドタドタドタドタドカーン

「おお！帰ってきたかラグナ…！」

エヴァははち切れんばかりの笑顔の後、俺と謙信の顔を見てこう一言

「スネーク…いくらラグナに下半身が削られるからと言って…こんなに変わる事無いじゃないか！」

エヴァよ何を勘違いしているか知らないがスネークは今頃ヘラスの王宮でごろごろしてるよ

「む、そうなのか。で、誰だこの泥棒猫」

「む、酷いではないか、泥棒猫とは。私はこの人の嫁だ」

エヴァのバックに雷がズドンと落ちた気がした。あるえ〜？どうなってるの

「ククク、いい度胸じゃないかラグナア〜。そうなれば強行手段だ！こっちこい！」

襟首つかまれどこにそんな力があるんだ、という風に少女に引っ張られる俺。助けてくれや謙信

「あなたが悪いんじゃないのか」

そんな冷たいわ…！へるぷみー。

ズンズンと、音を立ててエヴァが進んでいく。一つの部屋に入った。

そこには見慣れた人形が。チャチャゼロである

「ヨオ。久シブリダナ、ラグナ。ゴ主人準備ハデキテルゼ」

へ？何のだよ。なあチャチャゼロ助けてくれよ

「ムリダゼ！」

俺を見捨てる冷たい言葉が胸に刺さる。しくしく

俺はそのまま部屋の中央に連れて行かれそのままキスされた。え？

すると周りが、どうやら始めから魔法陣があったようだ。もしかして仮契約の？

「ソウダゼ。ゴ主人は大戦が終ワツタツテ、シツタラズツトコノ状態ダツタゼ」

まじでー。おい何だこのエヴァの勝ち誇った笑みは。

「プハツ。フフフこれで契約は結ばれたぞー。貴様らはどうやらしていないみたいだからな。フフーン」

やー何故か後ろの謙信から威圧を感じますよ。肩を掴まれグルンと一回転。口には何か当たりました

「し、しまったー!?こいつの存在忘れてた!」

どうやら謙信とその、き、き、ザ・キッス!

ー騒動あつてからなんとか落ち着きました。大変だった…

仮契約の陣だったらしいのでパクティオーカードが手に入ったぜ。

契約の関係は主エヴァ、従者俺の関係と主俺と従者謙信のよく分かんらん状態になりました。

「で、その女はどうでもいいとして、どんなアーティファクトなんだ?」

さっき出てきたカードを見てみる色は藍色だった。とくに珍しくないのか。

何々名前は…『吸血鬼の必需品』えー。無いわ。俺は吸血鬼ではないのだが

「と、とりあえず出してみる」

うむ、アデアット！

バズドーン

すると、上からロードローラーが降ってきました。俺は開いた口が閉まらない。

さらにその上からタンクローラーまで降ってきました。俺にどうしろと。これもって「ロードローラーだっ！！」
(タンクローラーでも可)「って言えばいいの？」

カランカラン

ナイフまである…もうこれはあの吸血鬼しか思い出さない

「ま、まあナイフは武器として使えるからいいんじゃないか。なにが吸血鬼の必需品なのかは分からないが」

どうもこのアーティファクトはどこからでもロードローラーとタンクローラー、ナイフが取り出せるようだ。

ロードローラーやタンクローラーが分からない人はものすごく重いものだと思えばいいよ。ナイフは持ってたら銃刀法違反で捕まるぐ

らい長いナイフだ。まんまD.I.Oの使ってたのだね。

なんというかこれがオリ主のアーティファクトなの？ただの物量攻撃じゃねえか。

ちなみに謙信は帝装備でした

俺のタイトルは音速の二倍はあるんだ(後書き)

パフパフ

アーティファクト紹介

『吸血鬼の必需品』

ロードローラーとタンクローリーとナイフをどこからともなく出す

ロードローラーはわかるけどタンクローリーがわからない人はOVA版ではロードローラーがタンクローリーになってる

ぶっちゃけDIOのアイテムを出すだけ。石仮面とか弓と矢みたいな道具的なの出したかったけど出して使わないし。ということになってしまった。

謙信アーティファクト

『帝の威光』

帝ハチマキ 帝ソード 帝リングを装備することで日本人に対して絶対命令権を持つことができる(ギアス的な)

謙信はこれしかないと思った。どこで使うかは知らないけど。

恒例の次回予告(気にしない気にしない)

ラグナが目を覚ますとそこは学園都市。超能力者と魔術師がはびこる世界でスタンド使いはなにをする

「俺は世界と止めることができる」

「あなたは…クロノス時間の神にでもなつたといつのですか！」

「てめエ今どうやってさけたア？」

「そのふざけた世界は俺がぶち壊す！」

数々と襲いかかる（たまたま）魔術師たちと超能力者。

ラグナは世界を止め何をする？

次回・タイトルはとある魔術と時間神クロノス

君は作者のどうでもいいことに付き合わされる…

タイトルで満足できる日が来るまで…（前書き）

カーラカーラカーラカーラアア！！

うおおおおお！！

ってなりました。いやー白騎士物語すごいですね。前作も付いてくるなんて。

そんな感じで今回は結構速いです。速さがすごいです。

タイトルで満足できる日が来るまで…

あれからエヴァ家が壊れたので適当に放浪中。

で、このまま行くとエヴァ、ナギに出会い『登校地獄』の魔法をか
けられるんだよな。

どうしよかな。その時は俺、どっかに雲隠れするか止めさせようか
な。

でもそうすると原作分なくなっちゃうからなー。…今ではもう
全然ないけどな！

ああそれと、謙信とエヴァの仲が悪かったがなんか同じ志を持つ姉
妹として義姉妹の契りを結んだとか無いとか。

早い話が仲が良くなったって訳で。作者的にいつまでもギスギスし
てるとダルイらしい。

ふっ…俺はなにもいってないぜ？

あーあ何で俺のアーティファクトこんなのかな？

そりゃロードローラーがすぐ出せるのは便利だけどさ、ハイ・プリエステス女教皇で充
分だろ。

ハイ・プリエステスは様々な鉱物・無機物に変身可能なスタンドだ。
本体ではない。

だから、ハイ・プリエステスを発動して「ロードローラーだッ！」は、一応できるんだ。ただ時間の止まった世界ではない。

アーティファクトならスタンドと併用して使えるからまあいいんだけどね。ただ…もう少しマシなのなかったのかな。（作者に知恵があればね）

そうこうしながら数日がたった。もうなんか俺の居場所がない。

女の子二人ってすごいね…肩身が狭いよ。

で、俺が泣く泣くパール・ジャムで健康にいい料理を作っていたら、
バババババ

なんか空中にクリサリス的な飛行メカが飛んでいた。ありゃスネークが作ったのかな。

ちなみにクリサリスはAI兵器だったかな？なんか人が乗らなくて
もいいらしい。

あ、ちょ、風圧で飯が！

俺がアタフタしているとクリサリス的なメカから何か落ちてきた。

ふっ華麗にキャッチ！落としたらクリサリス的なメカは去って行った。

「何だっただんだ今のは…？ラグナ何か落ちたよな。それなんだ？」

エヴァが疑問を問いかけてくる。当然だろう。いきなり空から巨大な物が現れてなんか落として行ったら。

「わ、私のご飯が…」

謙信は風圧でぶっ飛びしまった料理を前にしてOTZしてる。すぐ作りなおしてやるから待て。

で、落ちてきたのは手紙だった。よくあの風圧でどっか飛ばなかったな。

何々、送り主は『紅き翼のスーパースターマン。輝く星のスネーク』
てめえはギャグキャラか。はっ！思わず突っ込んでしまった。

これもきつと奴の思惑なんだろう。俺もまだまだだな。精進せねば。

ビリリ

破って中の紙を読んでみる。そういやなんで俺の場所が分かったんだ。高性能な発信機でもつけてやがんのか。

『アリカ姫が捕まった。カモン』

めんどくさいので破りさった。

「おい、いいのか？スネークからの…スネークだからいいか」

エヴァも納得してくれたようだ。謙信はどうせ飯が食えるかどうかだし。

「何を言っている。私はあなたの従者だ。あなたの傍に居るのが当り前だろう。どこへでもついていくぞ」

なんか言われてうれしい言葉だな。俺が逝ったら地獄まで付いてきてくれんのかな。

手紙に関してだが、本気で行かなくていいだろう。なぜなら俺と謙信を抜いたってナギにラカン、アルビレオさん、詠春、ガトウさん、スネークは入れているのか知らんが最強が6人もいるんだぜ？

タカミチとクルトはまだそんなに強くはないだろ。

紅き翼の主力が居たら問題ないだろ。というわけで行きません。

ぶっちゃけると、面倒なので行きません。てへ 三

「キモインダゼ」

それから二年ぐらいたった。その間も執拗にスネークから手紙が送られてきた。が、全部無視した。

中には鬼神兵ぐらいの量の時もあったが全部魔術師の赤で、燃やし
てやった。マジンヤンズ・
テッレ

すごく熱かった。量が量だったので山火事になってしまったがウエ
ザー・リポートで楽チン消化

ウエザー・リポートの能力は周囲の天候や大気を自在に操ることの
できる能力だ。

昔大戦で使った技で「雨に降られてクラッシュユ！」って技があった
んだがそのときはいちいちホルス神のスタンドで氷作ってた…

どうしてウエザー・リポートを使わなかったのだろう。俺のお馬鹿
さん

「マツタクモツテ、キモインダゼ」

街に入った時アリカ姫が処刑されたって言う話が耳に入った。

だが、どうせMMが失敗を隠すためのウソの報道だろ。見え見えなんだぜ。

後日スネークから何で来なかった手紙999通と1通の成功したと記された手紙があった。

それとんでも京都に行くらしいのだがなんか面倒臭がするのでキヤンセルした。

また後日、日本の京都辺りですごい魔力反応があったとか

俺の危機回避能力はどんな群れのボスにだって負けないぜ！

それから3年…

時たまスネークと連絡を取るぐらいでほかの紅き翼のメンバーはど

ここに居るか分からなくなった。

ナギはきつとアリカ姫とイチャパラな状態なんだろうな。俺？

なんというか謙信とエヴァ、チャチャゼロが日常になっている。

朝起きて3人と会話。飯を謙信だけ大盛りで作り、昼飯も謙信だけ大盛りで作り、夜飯も謙信だけ大盛りで作る。

なんであんだだけ食って太らないんだろう。かれこれ数年経ってるのに全然年取ってるように見えないし。もしかしてパール・ジャムのせい？

パール・ジャムはとても小さなスタンドで料理に混ぜり食べたものに影響を与えるスタンドなんだけど…やっぱり？

ん？ああ〜もう一品ほしいな。もう作り終えたんだけどな。確か近くに川があつたはず魚でも取ってこよう。

謙信も付いてきてくれ。どうせこの量じゃたりないだろ？

「（食卓を見て）…全然足りないな。よし、たくさんとってこよう！」

「エヴァ先に食べてていいぞ。すぐ戻ってくると思うから」

「…謙信が食べる量を取ってくるのにちょっとで済むわけないだろ。飯が冷めたら失礼だ。先に食べておく」

エヴァに頼んでおいたし一踏魚取りでもすつか。あ、あと謙信、全部とっちゃだめだぞ？

「え〜。だめなのか」

当り前でござんす。なんか謙信一人いれば世界の環境一人でぶっ壊せそうだ。

うへへ釣れるわ釣れる〜。釣り吉三平並みに連れるぜ！謙信は素潜りで取ってる。すげえ

いや〜スタンドって応用が効くから便利だよな〜。

「プハツ！お〜い貴方〜たくさん取れたぞ〜」

おおったくさん取ったな〜。ってなに二人で呑気にやってんだ。エヴァ待たせてるんだった。

「そろそろけえるぞー！」

エヴァは怒ってやないだろうか。今度からはもっと計画的にしよう。俺は反省すると強いぜ。反省しないけど。

「おい〜すエヴァー帰ってきたぞ〜」

そこには見るからに怒ってます。な、エヴァがいた。

そして食卓は無残にも綺麗にすっかり全部食されていた。

「エ、エヴァもしかして全部食べてはらいたいのか!？」

「バ、バカ! 違うんだ…実はな」

エヴァが言うには俺達が行った後フードを被った赤髪のやつがふらりとやってきて、「腹減った。分けてくれ」と言い。

エヴァがうんともすんとも言っていないのに急に食べだしたのだ。それを見たエヴァは家族の食事がー!と、切れるのは当たり前前。

超ド級魔法でぶち殺してやろうとしたら、フードの赤髪は全部を綺麗にたいらげゲップをしたあと「いやーうまいな。サンキュー」と言って去ってしまったらしい。

エヴァはあまりの解析不能の状態に陥りポカーンとしていたそう。な。気付いたら全部食べられていたので家族の食事を守りきれない自分の不甲斐無さに怒っていたらしい。

「って、そいつナギじゃね?」

「なにい! 『千の呪文の男』だと!? いくらラグナの知り合いとはいえ家族だんらんの象徴『食事』を犯した奴を放っておくわけにはいかない! 謙信、お前もそうだろ!」

「……………」

謙信はあまりの空腹によって倒れてしまっている。その口の端にはまだピチピチしている魚の尻尾が見えた。

最後の力を振り絞ってなんとか魚を食べようとした心意気が見える。だがいかせん生だったため食べれなかった。

これほど悲しいことはないだろう。チェリーをレロレロ食べていたら落としてしまったぐらいに。

「ぬうううう！なんということか！？家族だんらの象徴を犯した拳げ句、昔の仲間までに手を出すとは！もうこれは殺るしかないぞ！ブツ血KILLぞ！」

エヴァが意気揚々と燃えている。だが、誰か早く謙信に干乾びた胃を潤す水の役割を持つ食す物をやってくれ…！

タイトルで満足できる日が来るまで…（後書き）

で、速さがすごい結果。

ほんとはもっとゆっくりしたいんだけどいかせん文才がねえですよ。

こつれーの次回予告（気にしたら負けですう）

そこはグローバルなネットワークによってスイーツがいつでも食べれるようになった世界。

だが、いつでも食べれるが人々のめんどくさいを無くしたくさん食べてしまった結果人類皆太ってしまった。

そこに現れる救世シユラグナ。セト神を巧みに使い皆を痩せていたあの素晴らしき体格へと戻した。

その結果世界がラグナに支配された。

次回・救世シユなの？慢心王なの？

あなた達は否応なしに試される。心の強さを…

俺のタイトルもイカスだろう（前書き）

… やっちまたぜ。どうしようもないんだぜ。難産だった。

ここでこうしたら今が楽だけど後々大変になる。

ここでこうしなかったら今が大変になる。

というわけで俺は大変を後回しにした。何を言っているかわからない人は本文を読めばわかると思う。苦手な人もいるかもしれないけど

俺のタイトルもイカスだろう

エヴァがナギを追い始めて一カ月ほどたった。

それまでは長い道のりだった…。基本、俺と謙信は手を出さなかった。そりゃー紅き翼のメンバーが仲間内でケンカしてたら何言われるかわかったもんじゃないだろ？

時にはエヴァがチャチャゼロを使い襲撃したり…超ド級魔法で辺りをさっきまでとは違った風景に変えたり…

とにかく大変だった。ナギを追いながらだったから、食料も集めるの大変だったし…。

で、なんだかんだいってユーラシア大陸の極東の島、日本に来てしまった。

エヴァとナギは海岸で対峙している。ちなみに大人verだ。無駄にエロいです。あ、ちょ、謙信痛い

俺達は少し離れた茂みで観戦している。…やっぱり助けた方がいいのかねー。

「ついに追い詰めたぞ『千の呪文の男』子の極東の島国だな。今日こそ貴様を打ち倒し、この怨みはらしてやる」

「……あきらめろ。何度挑んでも俺には勝てんぞ」

ナギよそんな無駄にかっこつけなくてもいいんだよ。

「パートナーもない魔法使いに何ができる！？行くぞチャチャゼロ！」

「アイサー御主人」

エヴァとチャチャゼロがナギに襲いかかる。

「えーとこの辺だっけ…」

ナギがエヴァと距離を取ろうとしているが遅い。なぜそんな事をするのだろうか？そんなことをするならば魔法の一つや二つ放てるはず。

「フ…遅いわ若造！私の勝ちだ」

エヴァの攻撃とチャチャゼロの攻撃による挟み打ちがナギに襲いかかる。しかしナギはかわす気も攻撃する気もないようだ。何か手でもあるのだろうか？

エヴァの攻撃があと一步と言うところで変化が起きた。エヴァがナギの一步手前に足をつけた時ズポツという音とともに地面が陥没したのだ。見ての通り落とし穴だった。

「なっこれは!？」

「落トシ穴ダ。御主人」

「見りやわかるっ」

「ふはははは」

ナギが落とし穴にニンニクやネギを大量に投下している。この落とし穴は中に水が大量に入ってるようなものすごくきついだろう。匂い的にも。

「ひっひいいー!? 私の嫌いなニンニクやネギ~~~~!!? っ
…いやあ〜っや、やめろお〜っ」

「フフ…お前の苦手な物はすでに調査済みよ」

ナギ…まあ孫子的にも間違ってないけどさ。限度というものがあるんじゃないのか。

「あつっっ」

ボンっという破裂音的な音とともにエヴァの姿が子供に戻った。あーこれは本格的にやばいんじゃないかね？

「わははは噂の吸血鬼がちびの餓鬼だと知ったらみんな何というかな」

「やめろーバカーッ。ラグナに迷惑かかるだろっ〜ッ」

「ん、確かあいつらの知り合いだったか。確かラグナはこいつに会

いに行ったんじゃなかったのか？ま、いつか」

エヴァも可哀そうだしな。助けに行っただ方がいいのかねー

「あなたが思うようにしたらいいと思うぞ。あなたの道だ」

そうか…なら助けようかな。よし！

「おーい、やめろー」

だめだ。エヴァが暴れてパシャパシャなってるから聞こえてないみたいだな。もう少し近くに寄らないと。

「謙信はここで待ってけよ」

「分かった」

む、ナギの魔力が上がりが始めたぞ。これは急がなくては。

タッタッタ

「オイ、ナギやめろ」

「マンマンテロテロ…」

だめだナギの奴詠唱に入っちゃまって聞こえてねえ。それならエヴァの方を引きずり出すッ！

「たっ助けて、誰か助けてーっ！」

「エヴァ！こつちだ！この手に掴まれ」

「おお、ラグナ助けに来てくれたんだな！」

俺とエヴァの手が重なり合う。そして俺は落ちた。え？

バシャーーン

「プハツエヴァてめえ何俺まで引きずりこんでやがる！？」

「いや、助かるうという一心で手を引つ張ったらラグナが落ちてきて…」

う…たしかに海とかで溺れている人は暴れているから助けるのが大変らしいけど、ってこのまま居たら俺まで『登校地獄』かけられるんじゃない？

や、やばい…これはいとやばし。どうすれば助かるのね？ええいとりあえずナギに俺の存在を気付かせねば。

「お、おいナギ俺がいるぞー！詠唱をやめろー！」

「（なんだかさわがしいな。えーとここがこつちで…）」

「うわーやめろー」

「御主人トラグナピーンチ！」

インフェルヌス・ヨラスティクス
「登校地獄！！」

「ウギヤアアアア」

こうして俺はオリ主にあるまじき『登校地獄』をエヴァと一緒に掛
けれるということになりました。なんでも。

…

「あっはっはっは。似合う！素晴らしくにあってるぜエヴァンジェ
リン」

ここは麻帆良学園。ナギに『登校地獄』をかけられた後謙信を呼ん
できた。

「ホントじゃのう600万ドルの賞金首には見えんわい」

「…殺す。肉片も残さずに」

「エヴァ、俺も手伝っぜ」

「まあまあ学校生活も楽しいもんだって。経験ないんだろっ？」

「そうじゃな小学生ではちと可哀そうじゃし…中等部に編入してみるかの？」

ちよつとまで、それは俺まで入ってるのか。

もしそうならぶつ潰すぞごらあ。

「なーに言ってるんだ。当り前だろう。ラグナはあれだ。アリカ助けるときに来なかった罰だ」

うぐっ…いや、だってお前らがいたら充分だろ。

「まあ、卒業ぐらいになったらスネークでもよこすから」

「…本当だな？」

俺はその時後ろに雷が落ちた感覚になった。

ナギではなくオリ主がだと？いや、ナギでも変わらないと思うけどオリ主が解きに来る？

15年はこのままですね…orz

「あ、そうじゃ。ちなみにラグナ殿もエヴァンジェリンと同じクラ

スが良いじゃろう」

ちよっと待て。俺はこのままで編入するのか。無理があるだろう。

「む、それなら年齢詐称薬があるから大丈夫だぞ」

あーそれか。なら15年のんびり暮らそうかな。

「フッフッフ。ラグナくそれだけで済むと思うか？」

何だナギ気持ち悪い笑い声出しやがって。

ババーン

ナギが懐から取り出したのは瓶に入った薬のようだ。なんだあれ

「これはな。性転換の薬だ！」

…俺も歳だ。耳が遠くなるのもうなずけるよな。

「実はな、旅して放浪していたら緑色のガハガハ笑うやつとピンク色の奴に出会ってな。仲良くなってもらった」

えー緑色のガハガハ笑うやつとピンク色の奴？…あいつらしか思いつかないんだが。

「で、それをどうするわけだ？」

「お前に飲ます」

「はっ？」

ナギが不可解な事を言い出して俺に一步また一步と寄ってくる。

「待つべ！ちよつと冷静になれ！」

ま、待つんだ。はっ！エヴァ何しやがる。謙信まで…

エヴァと謙信は俺の後ろに回り逃げられないように後ろから腕を掴んでくる。

や、め、ガツむぐう

うっ！おおお〜

ああ…飲んでしまった…効力がないことを祈るしかない…

ん？エヴァそいつは…年齢詐称薬だと？それまでの増す気か！

うわー謙信助けてくれーああこいつもグルだった…

エヴァいわく『あれだ。そのばのノリだ』らしいです。

…

「プハハハハハ。ヤベエ似合ってるぞラグナ… ツプハハハハ」

俺は無事女の子にされエヴァと同じように麻帆良学園の制服を着せられている。俺は断固反対したんだぜ？あいつらが無理やりな…

「ふむ、これが大戦の英雄とはだれも気付かんだろう。まったくナギの奴は…昔の仲間に『登校地獄』をかけた。と言われてビビったわい」

俺は笑いごとで済ませないんだけどね…

「まあ…あれだ。なかなかにあってるぞラグナ。…うん」

「ああその通りだと思っぞ貴方。…うん」

何だよ。てめえらありえねえだろ。

俺の容姿はクロームでも思い出してくれればいいと思う。

「えええ！ならばナギ貴様もチビにしてくれるわ！」

俺はセト神の影を伸ばしナギに当てる。

セト神のスタンドは影と同化したスタンドでその影に触れた相手を若返らせるのだ。

「ん？何もかわんねえぞ」

「そ…そんな馬鹿な…」

ナギにセト神のスタンドが触れているはずなのに全くっていいほど効果が見受けられない。

ま、まさか俺がチビになったからスタンドの効力が弱まったのか!?

オー！ノー！

「ほれ、ラグナ。これやるよ」

ナギがまた懐から箱みたいなのを取り出した。

「なんだこれ」

「そいつはな元に戻る薬が入ってた」

うおおおー！開けええ

俺は力いっぱい箱のふたを開けようとするがびくともしない。

エヴァはこの光景を見たとき『小さい女の子がジャムのふたを開けようと頑張っているようだ』簡単にとほほえましい光景だったらしい。泣きたい

「ぎーんねん。そいつはスネークの魔力を感知して開くようになってるからな。じゃ、達者でな」

「ナギやもう行くのか？」

「おうよ。ラグナも学校生活楽しめよー」

ナギはそう言って去って行った。俺に大多数の問題を押しつけていて。

俺は蹲った。頭を抱えてうんうん唸っていたそうなの。

「まあいいんじゃないのか。3年ぐらい」

エヴァ…その思いは簡単に打ちひしがれるだろう。

俺のタイトルもイカスだろう（後書き）

やっちゃったぜ。…ああ物を投げないでほしいんだぜ

とくに十五年は何もないから、適当に飛ばすと思う。

恒例の次回予告をしようと思つとけどネタがあつたのでそつちをしようと思う。

ここは紅き翼のアジトのどっか

今ここには俺ことラグナとスネークアルビレオさん、詠春がいる。

ア「ひまですねー」

エ「いや、俺は巫女さん写真集を眺めているからそつちでもないぞ」

ス「なあお前ら三次元リアルと二次元でんのどつちが好きなんだ？」

ア「私はどつちでもいけますけど二次も触れたら触りたいですねー」

エ「ふむ、そうだな。巫女さんならどつちでもいけるがアルと同じ意見だな」

ス「フフフ、ならラグナさんやっちゃってください！」

ラ「俺の出番が来たみたいだな。お前ら二次元のキャラクターと触

れ合いたいか？」

ア「それは…できるならしたいですね」

エ「そうだが…そんなの考えるの邪気眼もほどほどにしろよ」

ラ「俺のスタンドに自由人の狂想曲ボヘミアン・ラプソディーというスタンドがある」

エ「それがどうかしたのか？」

ラ「こいつの能力は…」

ア・エ・ス「…ごくり」

ラ「二次元に行けないなら二次元が来たらいいじゃないか、というスタンドなんだ！」

ア・エ・ス「な、なんだってー!？」

ア「すごい…すごいです。発想の逆転です…」

エ「今まではパソコンの画面に頭を打ち付けるしかないと思っていたあのころがほほえましいぞ！」

ラ「行くぞ。準備はいいかおまいら！」

ア・エ・ス「サーイエッサー！」

ラ「全世界のオタども感謝しろー!ボヘミアン・ラプソディー発動
!」

世界はいろいろと混沌になりましたとさ。

今日の私はタイトルすら凌駕する存在だ！（前書き）

つなぎみたいなもんですから短いです。

もも鉄おもろ

今日の私はタイトルすら凌駕する存在だ！

あまり話すこともないので飛ばさせていただきます。

俺は学園に編入した時はラグナ・上杉と名乗ることにした。『ラグナ・上杉』私の事を呼ぶなら、そう呼べ！

何年かしたらタカミチが入学してきて同級生やってた。

まあ、俺はずっとサボタージュしてたが。

タカミチも久しぶりに会った時すごくびっくりしてた。すこし顔が赤かったのは気のせいだと思う。きっと熱があっただと思う。そうじゃなきゃ俺は一生クリームの暗黒世界に引きこもる。

それにアルビレオさんも来ていた。エヴァはどうやら気付かなかつたようだが、俺は変態臭がプンプンしたのですぐに分かった。

会いに行ったらいきなり鼻血を出して倒れ、むくりと起き上がった。『スクール水着を持って』これ着ませんか？』だぜ？ありえない。俺は姿が変わってるから初対面の相手にこれを言ったことになる。

普通に危ない奴だ。俺はスタンドの能力は落ちているが破壊力とかならまだ十分実戦で使えるのだよ！

こう像シムジヤクの腕ウデだけを出す感じで……殴りぬけるッ！

ブハッってアルがぶっ飛んだ。もうさん付けはしねえ。

ぶっ飛ばした後こんなことも言ってたな『アルティミット究極のロリ生命体ラグナの誕生だッーっ』とか。何いってるかわけわからん。

まあこんなところなんだが…ん、エヴァなんかようか？何、あれも話せと申すか。い、いやだって無理だろ。

え、話さなきや寝起きのやばいシーンを放映するって？いつの間にそんな…茶々丸に取ってもらったって…

あれだ、まあなんとというか…トイレだ…

トイレするのが無理でした…トイレでも災難はポルナレフの役目だろうッ！

全く…

え、なんでもう茶々丸がいるかって？そりゃもう2003年の2月…ではなくその半年前である。

ナギの息子がやってくるということとエヴァもあの時はたせなかった『復讐』をするそうなの。

『登校地獄』の解除をするそうなの。

もちろん俺もする。あたりまえだろ！

『登校地獄』をかけられ女子中等部だぞ？見つけたらぶっ殺してや

る。

なんか死んだとか言われてるらしいがあいつが死ぬわけねえ

で、ナギの息子がくるのでその鬱憤を晴らそうかと思ひまして。

え、大人げないと。お前らには俺の屈辱がわかんね〜んだよ！

分かるか。ポルナレフが味わうべきトイレでの災難…

他にも色々ムカつくんだよお！そのために今から俺とエヴァと茶々丸で色々計画練ってんだ

謙信は参加しない。何故か、って言うところについては特にナギに恨みのないからだ。

基本飯食べてたら幸せ〜な奴だし。

それと当り前のようにスネークの奴は来ませんでした。手紙もあほみたいに送ったんだけどなあ

それになんだかタカミチがよく郵便局に出入りしていたりするんだ。どういうことだ？

ん〜他に話すことは〜そうだな今、ウルスラに居る奴らが面白ったな。

いい歳してドッチボール部だぜ。今でも続けているらしい。もっとその情熱を他に向けられんか

今のメンツ？

そうだな。基本エヴァと茶々丸と居るからな。エヴァの事知ってる奴には何かとうるさいと言われる。

先公とか、桜咲とか、そのあたりにな。

桜咲なんて『貴方が何者か知りませんがお嬢様に仇なす者は切らせていただく』だつてよ〜うひゃひゃ

俺の正体知つたらみんな泡吹くだろうな。この学園で俺の正体知ってるのエヴァと茶々丸、学園長にタカミチ、謙信、アルぐらいだろ。あー超は知ってんのかな

俺はエヴァと居るから魔法生徒的な扱いを受けてるみたいだ。俺からは一回も使つたこと無いんだぜ？

全く…俺がただ単にエヴァと仲良くしている一般学生だつたらどうすんだよ。馬鹿だろ。

ラグナつて名前で気がつかないのかな。それに上杉まで付いてんだぜ。

そんな理由とサボタージュばっかしてるから仲いいやつはそんなに居ないんだな。ただあいつら俺は何もしてないのに普通に接してく

るからやりにくい。

それにあいつら発育まじばねえ。風呂の時もなれなかったなー。いやなれたらやばい気もするんだが。

ちなみに俺と謙信は絶賛二ト中だ。警備の仕事とかやってないし。

だって、英雄が『登校地獄』にかかって学園から離れられません。なんてシャレにならないだろう。

ああホント何でかかっちゃまったんだろ…

さーてナギの息子に鬱憤晴らすために俺もスタンドも少しマシに使えるようにしないとなー

エヴァもエヴァでなんかハイテクだか、結界だが、色々頑張ってるみたいだし。

ナギの息子ぶっ潰す為に今日も一日えいえいおー！

…後日この姿がアルとエヴァにしつかり見られているのを知った俺は火事場の力かなんだが知らないが世界で2秒ほど時間を止めパクティオーカード『吸血鬼の必需品』によるロードローラーによってぺしゃんこにしてやった。

今日の私はタイトルすら凌駕する存在だ！（後書き）

今のラグナは全体的に能力が落ちてます。大体1〜2ランク落ちるぐらいかな。

ギャグのときは気にしない。おk？

恒例の次回よこーく

ここはとある幻想郷。というか幻想郷。
流れ着き忘れられたラグナはどうすごしていくか？

「え、あなたも時を止めるの？二番煎じね。私よりも短いみたいだし」

「炎を使って不老不死？もろ私とキャラかぶるじゃないか。二番煎じだな」

「さいきょーのアタイをマネして氷を使うのね！二番煎じね」

「水を操るんだ。河童なの？二番煎じだね」

「念写？いちいちカメラ叩き割ってるの？二番煎じね」

「知ってる？いまどき『東方』はリーゼント頭の奴みたいな古臭い奴じゃなくて私達の事を言うのよ」

彼女達に能力かぶりと言い続けられ。苦汁をのむ。

それは新たな能力の発現となるのだろうか…

能力がかぶってて駄目な主人公に転機は訪れるのだろうか…

ブロッコリーとタイトル、緑色はどっち？（前書き）

タイ、ブロッコリー！

プロッコリーとタイトル、緑色はどっち？

2003年2月

「待ちに待った時が来たのだ。多くの私の苦汁が無駄で無かった事の証の為に、再び自由の翼を得る為に、私の復讐の為に！ついにやつがやってきたあつ！」

「ラグナさんあまり五月蠅くしないでほしいですね。どこそのバカレッドじゃあるまいし」

「なによ！私の事なの！」

ムキーツという効果音が嫌ほど似合う彼女らは雪広あやかと神楽坂明日菜。

彼女らは俺のいるA組の犬猿の仲と呼ばれるものだ。どうも神楽坂は今日の新任先生が来るというのがいやなのだろう。

タカミチから変わるのが嫌なんだな。俺は待ちに待った奴が来るから小躍りしそうだけど。

「なあエヴァ。来たら一瞬で殺っちゃったらいけないのか？」

「まだ時期じゃない。それにお前トラップにさんざん仕掛け加えただろ。それで満足しろ」

「そんなんじゃない私の満足は止められないぜ！」

その通りである。ドアを開けた時に落ちる黒板消しトラップをタライに換え、中身に無駄に醤油を入れる！実は俺…醤油飲ませる拳を使えるんだ。

さらに落ちてくるバケツにコールタールを入れる。これにより動きに支障が出る。

玩具の矢は爆竹付きだ！ハハハどうだ恐れいったか！

「ダメだこいつ。早く何とかしないと…」

「今日もラグナさんが楽しそうだなによりです」ジー

「む、茶々丸後でよこせよ」

フッフ、早く来るんだなナギの息子。ネギ・スプリングフィールド。

俺のしかけたヴィクトリーで火傷しそうなヒートなトラップの数々に物見せてやるぜ。

と、不敵に笑うラグナの姿はクラスの全員が見慣れているので特に気にした様子は無かった。

コンコン

「来たようだな」

ガラッ、という音を立てて扉を開いて現れたのは10歳程度の少年であった。

しかしそこが重要ではない。ラグナによって仕掛けられたタライト
ラップが、その新任の先生、ネギ・スプリングフィールドの頭の上で
しっかり止まってしまったのだ。

ざわ…

「な…なにに！？」

「障壁張ったままだな。おかげで助かっているようだが誰かにばれ
るかもしれないぞ」

ゴン、バシヤ〜

「な、なんですかこれ〜ジャパニーズソースですか！？」

クラスの者たちは一瞬奇異の目で見たようだがキッチンと落ちたこと
と、ネギによるアホなセリフに冷たい空気。

だが、それだけでは終わらない。足元にロープが引っ張ってあり、
期待道理に引つかかってくれたネギは醤油で下味をつけコールター
ルでコーティングされたチョコのようになっていた。まずいだろう。
それに加えて、爆竹によってまるでチョコレートケーキに？燭がと
もっているようであった。

バンバン

「あははははは。って、あ…あれ……？」

「えっ……」

「え　　っ子供!？」

「ゴメン、てつきり新任の先生かと思って…」

「ていうかあのレベルの高いトラップの数々は何!? タライまであったのにだれも気付かなかったよ!？」

「…クフフフ…おっしゃ! この気持ちはあれか! 格ゲーでコンボが全部決まった時のあれか!？」

「その気持ちは大切にとっておいたらいいぞ…」

「今日もラグナさんが楽しそうだなによりです」

ラグナの高笑いはネギの紹介とともに襲いかかったクラスの悲鳴によって掻き消されていた。

途中、神楽坂によってなにやら詰め寄られていたようだが、雪広によって有耶無耶になり、源先生によって閉められた。

ネギが教壇に上がりいざ授業ということで大半の生徒は期待のまなざしを向けていたりする。

が、我らが主人公はお気に召さなかったりする。

「むう、なんとか妨害できないかなー」

「まだなんかやるのか。いい加減にしとけ」

ギャグ補正によってコールトールも綺麗にとれてしまっている。恐ろしやギャグ補正。

しかし、その結果が気に食わなかったりする。俺の怨みはこの程度じゃないんだぜ、という勢いで黒い靄を出している。

どのみち満足しなけりや気が済まないものだ。

ポコッ

ラグナがどう妨害してやろうかと思惑を巡らせているとまるで消しゴムが勢いよくのレベルを超えて、もうスナイパーなレベルの領域に達したような音がした。

前を向いていみると神楽坂が消しゴムをちぎって思いっきり飛ばしたり、パチンコにして飛ばしているではないか。しかも全発命中。死紋十字斑いらんじゃないか？

この光景を見たラグナはピーンと来たような感じがした気がした。

すぐさま筆箱をあさり消しゴムを探し出す。M N Oの消しゴムだった。

「狙い撃つぜえ！スタンド：星の白金発動！このスタンドは発射された弾丸を止めれるほどの精密性を持つんだぜ」

「あんまり騒ぐなよ」

「私は狙った獲物は逃さないんだぜ」

スター・プラチナ
星の白金はスタンドの中で最上と言っていいほど精密性に優れている。いくら神楽坂の能力が人間はずれといっても化物には敵わない。フリーク
スタンドの像の手の部分だけを出し、まるでベアリングやライフルの弾丸をはじき出す様にして打ち込むッ！

スター・バチンコ
「流星指飛！！」

バコンッ！

と奇怪な音とともにネギの頭は黒板にめり込んでしまっている。

「さらに追加だあ！クレイジーフィンガーデスビーム！！」

ひゃひゃひゃひゃひゃ、とどこかの宇宙の帝王さんごとく消しゴムを高速連打で撃ち込んでいる。

だが、何故誰もラグナに気付かないのだろうかと思う方がいるかの知れないが、そこはエヴァが配慮してくれている。

周りの生徒達は神楽坂が何かしら撃っていたのは気付いていたが、余程の事でもないので気にしないでいたが今回の強烈な音には流石

に神楽坂に目を向けた。

エヴァと茶々丸と数人以外は神楽坂に視線が向いていた。

「な…何よ！今のはわたしじゃないわよ！」

「そやで〜うち見とったし」

「何を言いますか。バカのくせに体力は有り余ってて、暴虐の限りを尽くし、粗暴で乱暴者の問題児で、スケベでインランの貴女に決まっていますわ！」

雪広が罵倒の限りを尽くしたセリフを言うや否や神楽坂は筆箱を投げつけ、それに激怒した雪広は授業そっちのけで取っ組み合いを始めてしまった。

ネギが二人を止めようとするが無情にも授業の終了を告げるチャイムが鳴ってしまった。

「ふっ…見たか私の華麗なる狙撃」

「あれ、頭吹っ飛ぶんじゃないか？」

「マスター、ギャグ空間またはギャグ補正というものです」

誰が見ても当たればデーンな、速度の消しゴムだったが、驚異の赤松空間により何事もなかったようにクラスの者は休み時間へとは

いって行くのであった。

だが、魔法生徒のものや一部の者は異常性に気付いているのだが。

出席番号25番

長谷川千雨の場合

なんだあれ…いや、あり得ないことすぎて突っ込みきれないんだが…
とりあえず落ち着こう。うん。素数でも数えるか…2、3、5、7、
11、13…23…28、いや違う。29だ。

最初からまず突っ込んでみよう。

まず、教室の扉を開けて入ってきたのが子供。うん、納得できない。
さらに見間違いと思うが、頭で醤油たつぷりのタライを受け止めて
いた。あの量を？ありえない。

で、多分あのロリ双子が仕掛けたはずの罠の面々がLunatic
とまではいかないがHardぐらいになっていた。

なんでバケツにコールタールが入っているんだよ！どっから調達
してきた、ハーミット・パープル隠者の紫でも使ったかのか。

まあ爆竹はどっかの駄菓子屋行けばあるかもしれないけど…
後になってこいつが担任になるとか…

昔、大人はうそつきじゃなくて間違いをするだけだとか言っていた
気がする。

ほんとにこのガキが授業できるのかと思ったが、案外出来ているか
ら驚いた。

雪広になんかされていたけど。

で、次が問題だ。突っ込みきれそうにない。

神楽坂が消しゴムをちぎって飛ばしだしやがった。そんなに気に入
らないのか。

これは別に問題ではない。次だ。
私の斜め後ろ方向かたぶん消しゴムのようなものがものすごい勢いで飛んでいた。正直何が起こっているのか分からなかった。その席にはラグナ・上杉って言うわけのわからない名前の奴が座っているはずだが…とと思ってその方向に目を向けようとしたが、神楽坂と雪広が騒ぎ出したのでついそっちに目を向けてしまった。気付いたときに首を戻して見てみたが、エヴァンジェリンとかいうパツキンロリと話をしていた。
私の杞憂だったのだろうか…そう祈るしかない。

結果…長谷川千雨は大変だ。

出席番号18番

龍宮真名

いいトラップだ…

あの高速撃ちも、なかなかやる…
実に理にかなっている。侮れないな。

結果…どうしてそう思うの

出席番号15番

桜咲刹那

ケシゴムをあの速度で撃つだと…！？
真名の銃撃にも劣らないのではないのだろうか。
くっ！何としてでもお嬢様を守らければ！

結果…貴方もどうしてそう思うの

総合結果…長谷川が苦労者

ガラ

教室の扉を開けて入ってきたのはタカミチだった。

扉付近で何やら話をしていたようだがこちらにも来たようだ。

「やあラグナさんにエヴァ。どうだったかい？」

「タカミチや、私をさん付けで呼ぶとおかしいんじゃないのか」

「なんで私にはさん付けじゃないんだ。おかしいだろ」

「そりゃーエヴァは同期だからね」

「それじゃあ、こいつも同じだろ！」

「いやいや、紅き翼の英雄を呼び捨てなんて…ね？」

「まーそんなことはどうでもいいから何で来たんだよ？」

ラグナの言いたいことはわざわざ来たのはネギの事を見に來ただけではないだろうということである。

いくら紅き翼で仲間だったナギの息子といえども、ラグナがナギにいい感情を持っているわけではないわけである。

エヴァンジェリンも15年もこの地に縛り付けたまま、というのは耐え難いであろう。

つまり、タカミチがわざわざ来たのはネギに過激なアプローチはやめてくれということだった。

「あーそのことならしんぱいごむようだぞー（超棒読み）」

「なーそうだなーわたしたちはなんにもかんがえていないぞー（スペシャルに棒読み）」

「そうですね。考えていることは考えていますが流石に重要機密なので高畑先生にはおしえられません」

「茶々丸う!?」「」

「あっはははは。まあ僕が言いに来たのはあまり面倒事を起こさないでくれってことさ」「」

「無理だな」「無理だろう」「善処します」「」

三者三様の言葉が返ってきたタカミチは苦笑いを浮かべるしかなかったという。

ブロッコリーとタイトル、緑色はどっち？（後書き）

もも鉄やりながら、白騎士物語やりながら、書いてる。

なんか…駄目な人だな。

はいはい次回予告でせう。

『愛』と『平和』と『ケチャップ』で世界を救う。

そこは機械帝国ザイエスによって戦争が勃発した世界。

そこに現れるはマジパネエこの世界の人々もなんなく蹴散らす物。

その名は…ケ・チャップ夫人じゃなくてラグナである。

ラグナは自分の三原則を見つけ世界を止めることはできるのだろうか？

ケ・チャップ夫人はマヨネーズ戦争を終結させた男です。すごい方です。

墮威十流（前書き）

いつもと違う書き方に挑戦してみた。なので遅くなった。
所詮、いいわけ。

墮威十流

その後は歓迎会やら、ホレ薬やら、巨乳比べやら、ドッチボール対決やら、期末試験やら、学年トップおめでとうパーティーとか、さまざまな行事があった。

彼女、ラグナは期末試験のトトカルチヨでウハウハだった。何分少ない原作知識の記憶の中でこの期末試験だけは脳細胞が破壊されようと覚えておこうと決意をひそかにしていたのだ。

もうしゃもじの内職をしなければならぬほどエヴァ家の財産は尽きかけていたのだった。謙信恐るべし。

「で、今回は誰を襲うんだ？」

「今回は佐々木だ。茶々丸、捕捉できているか？」

「…確認しました。マスターいつでもいけます」

満月の夜の会話には少々、趣がない会話だ。

ラグナ達は三年になり、ネギを襲う計画をそろそろ始動させようとしていた。今回はエヴァの魔力を補うための吸血活動だ。

ナギによって『登校地獄』をかけられてから魔力も封印されている、と思っっているのはエヴァ達だけなのだが。本当は科学による結界によってその膨大な魔力を抑えつけられているのだ。

夜の桜通り…

佐々木まき絵。彼女は新体操部だ。その活発さはあの個性の強いAクラスでもなかなかのものだろう。

しかし今は違う。彼女は恐怖により顔をゆがませ、得体のしれない者に怯えている。

彼女はラグナ達から逃げるために必死に走っている。息遣いからもその必死さがひしひしと伝わってくる。

そんな中、ラグナは少しみじめに感じた。

「きゃあっ」

もちろん姿をさらすようなへまはしないし、エヴァの魔法によって昨日は歩いていたら気を失った程度に思うだろう。

ジェイル・ハウス・ロックがあれば簡単なのに、とラグナは思った。ジェイル・ロック・ハウスは作中では脱獄しようと鉄格子に触れた者に対し、新しい出来事を3つまでしか覚えられなくさせる能力だが、応用次第では何とかなるだろう。

しかし今はスタンドの特殊能力はほぼ使えない状況だ。精密動作性や破壊力といったスタンドパラメータは著しく下がっている。

こんな状態で戦えるのかと疑問を持つ人もいるだろうが、ノープログレムである。とりわけ強い奴でなければ問題ないはずである。タカミチ、と言った本当の猛者でなければ後れをとるほどもないであろう。ただ…いかせんこの学園には常人離れが多い。

「あ……いや…いやああ~~~~ん」

エヴァが佐々木に噛みつく。これは吸血行動なのだがエヴァは小さい口で一瞬懸命吸っているので何故だかわいらしく思える、とラグナは思った。

だが、一つ気になることがあると、ラグナは思い、考える。

「どうしてこんな叫び方なのだろう」

そんなどうでもいいことは思考するだけ無駄、と切って捨てる輩が多いだろうがラグナは違う。

読者の疑問、茶々丸隊長に聞いてもらおうとしよう。

「ラグナさん。どうしてもいいことを考えるんですか？」

「どうでもいいことだと！？私は子供の頃『刑事コロンボ』が好きだったせいかこまかいことが気になると、夜もねむれないんだよ！」

どうでもいい性であった。そうこうしているうちに、エヴァの吸血行動も終わったようである。

暇な時間をつぶせてよかった、と思うのか、エヴァの無防備な状態をほったらかしにしていたことを怒るのかはだれも考えていなかった。

「チューチューッハ。とりあえずこのくらいだろう。ラグナ、茶々丸帰るぞ」

「了解ズラ」「了解です。マスター…ズラ？」

「茶々丸はまねしなくていいんだ」

エヴァは思う。最近ラグナによって、健全な茶々丸が毒されてきているのではないのだろうか、と。

何分、エヴァ家では、働かない者率が多い。謙信は言わずもがなニートである。

エヴァは『登校地獄』といまだ本人は知らぬ結界によって魔力が著

しく低下している。

ラグナは働き口がない。よって謙信と同族である。

この駄目な人の形をした者たちは、茶々丸の収入によって生きながらえているようなものだった。

悲しいかな、戦争の英雄は戦争が終わってしまうと華散らすものなのか

…

ラグナはふと、佐々木まき絵を見る。少し思案し考えをまとめた後エヴァのいるであろう方向を見る。

すでに彼女の姿は無かった。どうやらラグナは置いてけぼりにされてしまったようである。その考えていた時間が長かったのか短かったのかは関係ないのだろう。

エヴァがいないのなら、とラグナはエヴァに吸血され眠ってしまった佐々木まき絵に詰め寄る。

ラグナは思いついたのだ。眠っているものを対象にして発動するスタンドの存在を。

しかし、ラグナのスタンド能力 とくに特殊能力の部位は発動が難しくなってしまうている。

今から使おうとしているスタンドもその類に入るだろう。だが、その程度なら何とかなるはずである。寝てしまっているせいで精神は無防備な状態！

それほど脆いなら少しつづくだけで簡単に連れてこれる。

「スタンド：デス・サーティーン死神13発動！さあ夢の時間だ」

…

「ん…あれ？私どうしたんだっけ」

そこはまるで大人が子供を連れて遊びに来たり、カップル達がデートの場所を選びそうな立派な遊園地であった。

そして佐々木まき絵は木にもたれかかって寝ていたのである。

これはどんな人間だろうと驚くだろう。まさか自分に夢遊病の気がっ！？と言う方に。それか夢だと思えば勝手にする人もいるだろう。だが彼女はそんなことは一切気にせず、いや、少し怪しんだが自分の周りにだれも人がいない。貸し切りと勝手に認識してしまったようである。

「わーい。何でか知らないけど遊園地が貸し切りだよー。あー誰か誘いたかったな」

「ラリホー、私がいるからいいんじゃない？」

ふと、聞こえた声の方向を見る佐々木まき絵。何故か自分しかいないはずの空間にドラクエの魔法を言うおかしなセリフが聞こえたから。

そこには仮面をかぶり、ぶよぶよの真っ黒なローブを着たおかしな人物？がいた。ラリホーラリホー、と奇怪なことを言っている。

一言でいえば可笑しな人である。少なくとも佐々木まき絵の認識はそうであった。

「んー？貴方はいつたいたれですか？」

彼女はそんな奇怪な人物のいきなりの出現に驚きもせずただそこに居る人物がだれか知りたいたからというような感じで可笑しな人に尋ねる。

そのおかしな人物は数秒考えるようなしぐさをし、どこからか鎌を持ちだした。

それは突然であった。どこから出したのだろうか いつの間にか何の違和感もなくスツとその手に握られていたのだった。

その可笑しな人は佐々木まき絵に見せつけるように左右に振って見る。

それから数秒 やつと自分がどれだけ危ない状態なのか気付いたのか顔を青くしている。

「え……い、いや…あ、あれ？さっきもこんなことがあった気がする…」

「貴方の認識は間違っていない。しかしここでの出来事もさっきの出来事も明日には忘れてしまっているでしょう」

なだめる様に言いつつその手に握られた鎌をゆっくりと上に上げていく。

デス・サーティン
死神 13

その能力は眠っている相手をスタンド能力で作りに出した空間に精神だけ連れ込む能力である。

その仮面をつけぶよぶよのローブを着た人はラグナのスタンドなのである。

一方彼女は動けないままでいた。それもそうだろう。ただの一般女子中学生が人の首をも簡単に刎ねられるような鎌を見せつけられて普通でいられるはずがない。

彼女はただ、　呆然とするしかなかった。

「必然。そう、怖がることは無いの。傷つけるつもりはないから」
その言葉に佐々木まき絵は少しだけ自分を取り戻した。こんなバカでかい鎌を持つ人がそんなことを言うのかと。こんなものを殺す程度にしか使うことはない。

そしてさっきのセリフは嘘だと彼女は思ったわけである。何とかして逃げなければ、それが彼女の考えていること。それと並列して考えていることは、何とかこのことを誰かに伝えてみんなを守る。だった。

彼女は何と強いのだろうか。この状況においても自分だけを考えず彼女の、クラスメイト　学園の生徒たちの心配までしているのである。

その心意気が彼女の足を動かした。
そこにヒュン、とスタンドの鎌が一気に振り落される。その鎌が斬った者は彼女の服だけであった。

ただ、赤松ワールド故かも胸が見えてるだろ、というところまで露出してしまっているのである。

彼女はこのことに気付き左手ですぐに隠したがスタンドの咆哮によって手をはなしかけてしまった。

「うおおおおお！もう少しもっ少しいい！見えそうで見えない。それ最高だあ！」

どうも奇怪な人はただのスケベだったらしい。佐々木まき絵があきれ返っているのに脇目も振らずいまだ最高だー！と叫んでいる。

彼女は恥ずかしさに顔を真っ赤にし、無言でスタンドに近づいたかと思うと　右手を振り上げ、勢いよく振り下ろした。

「つぎやあゝゝ!？」

あまりの痛さに転げまわるスタンド。その手の鎌はいつの間にか消え失せてしまっていた。

転げまわっているスタンドに馬乗りになる佐々木まき絵。いつのまにか目のハイライトは消え失せてしまっている。

「え〜と、私、すごく大変なことになりそうなよカブラッ！」

彼女の右手が、左手が、交互に仮面にぶち当たる。どこからか出たか新体操の道具まであるではないか。

そのままスタンドはなぐりつづけられるのであった。

ここで疑問に思うのは死神13弱デス・サーティーンツ！である。

その理由こそはスタンド能力の低下である。もちろん死神13の能力も下がってしまったている。

そのせいでただの女子中学生の佐々木まき絵にフルボッコにされるのだった。

桜咲く〜(ry

「えと…改めまして3年A組担任になりました、ネギ・スプリング
フィールドです。これから来年3月までの一年間、よろしくお願
いします」

わー、と教室が盛り上がる。皆、楽しそうにしている。

この年頃の女子達にはこの年の子供はともかわいく見えるのだろ
う。

朗らかで騒がしい空気にネギはうれしそうにしていた。だが、突如
鋭い視線に首筋がキュツとなったように感じる。
視線の先にはエヴァとラグナがいた。

「（おーおー青ざめてるぞ。やっぱガキンチョか）」

「（あたりまえだろう。英雄の息子といえども実戦などほとんどし
たことあるまい。これ以上は可哀そうだな。やめとけ）」パイ

プイツ、とエヴァがネギから視線を避ける。それによりネギの顔色
が少し良くなったように思えるが、いまだラグナの視線は途切れて
いないのでまだ青い。

このまましているといずれ誰かがネギの状態に気付き面倒なことに
なるだろう、とラグナは思いエヴァと同様に視線をプイツ、と違う
方向へと向けた。

さて、昨日ラグナは眠ってしまったて佐々木まき絵にちよつとした
出来心で悪夢世界に引きづり込んだのであったが、あまりの予想外
に苦戦してしまったのであった。

あのあと、何とか逃げ出したラグナはエヴァ家に帰り茶々丸のあつ

たかいご飯を食べ、家族に頭のたんこぶを気にされつつ就寝したのであった。

ラグナがそんなことを考えていると、教室の扉が開き、源先生が身体測定の間接連絡をしてきてくれていた。

ネギはあわててしまつて「今すぐ脱いで」準備してください」「今すぐ脱いで」と、突拍子もないことを言つてしまつてクラスの者にかからかわれていたのだった。

冗談しながら身体測定しているクラスの中で柿崎美砂が吸血鬼のうわさをしだし火のついた火炎瓶のように一気にクラスが盛り上がった。しまつた。

そんななかエヴァが神楽坂に何か言つているようであつたが、生憎ラグナの位置では聞こえていなかつたようである。

和泉亜子がじやりんこチエのように騒ぎながら「まき絵が：まき絵がー」と血相変えて走ってくる声が聞こえたせいでクラスの者が扉、窓と一気に開けてしまふせいでネギがラッキースケベにあつてしまつたようである。

「おもつんだけどさ、何でいつも放置なのさ？」

「面倒だからだ。幸いここは治安がいいからいいだろう」

そういうものなのかね、とラグナは身をひるがえし身体検査に戻つて行つた。ただ、エヴァが言いたいことは一つ「成長せんぞ」

< side : ネギ >

僕が挨拶をして、クラスみんなが楽しそうにしているときだった。

今日に悪寒を感じた。その方向を見ると、二人の娘が僕を見ていた。だけど、すぐに目をそらしてしまった。どうということなのだろうと思ひ、一度出席表を取り出して見てみる。

金髪の方は…出席番号26番エヴァンジェリンA・K・マクダウエルさん　囲碁部と茶道部に入っていた。

きっと日本文化に興味があるんだね〜じゃなくて…えーと、困った時は相談しなさいってタカミチが書いてるけど…頼りになるの？

もうひとりには青がかかった黒い髪の色娘だ。えーと出席番号32番ラグナ・上杉　面白い名前だなーええっ！？醤油を飲まず部ってなんだろう…

きつと間違った日本文化を覚えてる娘なんだね。そうなら僕がきちんと教えてあげなくちゃ！…また脱線した。

タカミチはなんて書いてるんだろ…ええ〜と触らぬ神にたたりなしって！？…どうということなの、何があったのタカミチ！？

< side out >

満月の夜〜桜通りにて

街灯に照らされた桜通りを歩く前髪を下ろし顔を隠した少女がいた。彼女は宮崎のどか。一言で言うなら”目立たない”今は、だが。さて、どうしてそんな娘の紹介をしているかと言うと、たまーたま襲われちゃう可哀そうな娘だからサ！

ざわっ…

風に揺られ桜の木が音を立てる。そんな些細な音にも過剰に反応してしまふような彼女だった。

しかしどうやらなにか思うところがあるようだ。それが何かと気付いたら…

「ひ…あ」

彼女が見上げる先には足場の少ない街灯に立つ、黒い影だった。その影が何かを呟く。

「27番宮崎のどかか…悪いけど少しだけその血を分けてもらおうよ」

其の影の正体は！？宮崎のどかに襲いかかる影、彼女は悲鳴を上げるしかできない。

そんな所に「待てーっ！」と幼い声が響き渡る。

宮崎のどかは恐怖のあまり気絶してしまったようだ。

そこに現れたのは子供先生ことネギ・スプリングフィールド、彼であつた。

「ぼ…僕の生徒に何をするだーっ！ラス・テル マ・スキル…風の精霊11人 縛鎖となりて 敵を捕まえる」

ネギが魔法を放つため詠唱をおこなう。

「魔法の射手・戒めの風矢!!」

ネギの魔法が黒い影に殺到するが、影の方は何かを呟く。

「もう気付いたか。あいつに怒られるか？氷楯…」

影が投げた物体がネギの魔法とぶつかる。するとネギの魔法が全部跳ね返されてしまったのである。

それに驚愕し何か理解するネギ。彼は大急ぎで倒れてしまっている宮崎のどかを助け起こす。

そこで、魔法による衝突の煙幕が晴れたところで影の帽子が風で飛び去ってしまう。

帽子の下は金色だった。みんな御存じロリババアっていた奴でてこい。東京湾に沈めるぞ。

「驚いたぞ。凄まじい魔力だな……」

「えっ……き、君はうちのクラスの系、エヴァンジェリンさん!？」

「フフ…今更、挨拶はいいだろう先生…いや、ネギ・スプリングフイールド」

エヴァが指に着いた血をペロリと舐める。

「10歳にしてこの力。流石に奴の息子の事だけはある」

「何者なんですかあなたはっ！僕と同じ魔法使いのくせに何故こんなことを!？」

「この世には…いい魔法使いとわるい魔法使いがいるんだよ、ネギ先生」

エヴァはそう言い魔法薬と血液を構える。
そしてそれを放り投げ。

「氷結 武装解除！！」

エヴァの魔法が発動し武装解除が起こる。
が、ネギは咄嗟にガードするが近くに居た宮崎のどかに当たってしまい服が氷飛び散ってしまった。
ネギはそんな状態にアタフタしてしまうがエヴァは隙見て離脱したのだった。

そこに神楽坂と近衛このかが武装解除の音を聞きつけ走り寄ってきた。

一時は素っパの宮崎のどかに誤解をする二人だったがネギが意識的に対象をそらしエヴァンジェリンを追いかけるのであった。

墮威十流（後書き）

こんな感じですよ。

次回予告

全略

「なんだこれは！何も書いてないじゃないか！」

「だって、だって最初にそう書くんだって」

「それは”前略”だ！全略だと全部略してしまっているだろうが！」

「あ、そっか〜」

墮威十流真拳奥義』この小説のタイトルを変える！！（前書き）

と、思っていたのか？

墮威十流真拳奥義『この小説のタイトルを変える』！！

エヴァがネギの『風花 武装解除』を食らい追い詰められているように見える。見えるだけ。

「魔力もマントも触媒もない貴方に勝ち目は無いですよ！！素直に……」

「…これで勝ったつもりなのか？」

エヴァがもう、勝った気でいるネギに挑発の言葉を投げかけると同時に満月に照らされた影が二つ、飛び降りる。

ZUN！ シュタツ！

「さあお前の得意な呪文を唱えてみるがいい」

エヴァがさらに挑発の言葉を言う。ネギは新手に驚き、三人まとめて捕縛にかかるうとするが影の二人が先に動く。一瞬にしてネギに近づき、詠唱しているネギに一撃を加える。

「はあああ！流星小指！」
スター・デコピン

「……機械指閃」
メタル・デコピン

ピシッ と音から分かるようにさほど力がこめられていない二人の凸ピンが当たる。

だが、ネーミングセンスは壊滅的だった。

エヴァもまさか茶々丸があほみたいな技名をつけるとは思わなかっただろう。

シリアス顔が一転、ツツコミ顔に変わる。

「おいー！ラグナ！茶々丸に何教えたんだ！？」

「大人の真名しんめいの付け方を18分割して3秒ごごとに教えた」

「意味分からん！」

僕らのエヴァさんはきちんと突っ込みできました。エライデスネえ。

とか思っているとネギが現れた人物に対して認識。状況を理解した。

「貴女達は僕のクラスの…茶々丸さんとラグナさんじゃないですか！？」

「紹介しよう、私のパートナー。3 - A 出席番号10番”魔法使いの従者” 絡操茶々丸と、もうひとりのパートナー3 - A 出席番号32番ラグナだ」

エヴァの発言により驚くネギ。そして空気の主人公。

この状況を打破するべくエヴァのセリフを横どって行くラグナ。

「フツ、パートナーのいないお前じゃあ私達には勝てないぞ」

「こら！台本道理にやらないか！」

「いや、だってあまりに私が空気じゃないか。酷いだろ」

「どうせこの後ではんぐらいある。今はわたしの見せ場だ！それに茶々丸だって似たようなもんだろ」

「茶々丸はいいんだ。なー？」

「私は出番、人気、人望、それと言ったことに興味はありません。尊敬する人は劉玄德です」

「それなりに興味あるー！！」

ネギはこの異常な空気に付いていけなかった。それもそうだろう。この異常な空気に付いていけるもの。そのような猛者はあの伝説の『デビルタワー・エクセトリック』を昇り、修行したものぐらいだろう。

『デビルタワー・エクセトリック』ではただ修行すればいいだけではない。

M・1に出るために日本中のお笑い芸人が集う。生きて出られるものは100万分之一！

そして『デビルタワー・エクセトリック』で無事生還した者たちは修行で高めたお笑いパワーを使い一発屋となっていくのであった。この物語は日本に住む、吉本虎子道による過酷な生涯を描いたサスペンス・フォーエヴァーである。

「…なんなんですか？」

「今だ！私達の作戦に引っかけかかっている間に坊ずを拘束するんだ！」

「えーと…ヒヤッハア…でいいんですたっけ？ラグナさん」

「いい発音だ。茶々丸、君は全国を狙えるぞ！」

「なんてこと覚えさせてるんだ貴様はー！？」

「麻帆良の柱になれ 絡操」

そうこうしているうちに茶々丸はちゃっかりネギを拘束。

まるで時間が飛んだ感覚を受けたネギはジタバタとするしかない。

そんな中エヴァはこの日を待ちに待ったと言った。そしてやっと呪いが解けると続ける。

ラグナも腕を組みうんうん頷いている。きっと頭の中では核弾頭を装備したガンダムに乗る人のセリフが流れているのだろう。

「え……の、呪いですか!？」

「そつだ。ナマハゲ的扱いを受けるような畏怖される私と英雄的扱いを受けるようじゃなかつこいいラグナが舐めた苦汁……」

英雄的というエヴァの言葉にネギは疑問を覚えた。そのような

自分の父と同じような扱いを受けるラグナの存在を、何故そんな人物が呪いを受けるのか、と思うのは当然だった。

そこにまるでネギの考えを見抜いたようにラグナの言葉が聞こえてくる。

「必然。お前がそう思うのも無理ないだろう。その理由、話してやるつ」

「お、おいそんなこと言っているのか？」

「……なーに主要なところはある程度ほかすさ ボソツ」

ネギは気になってしまつ。自分の父と同じような扱いを受けるもの

ならもしかしたら自分の父の事を知っているかもしれないと。

「そうだな。エヴァは『サウザントマスター』つまりお前の父親に負け、魔力を極限まで封印されて、15年も麻帆良学園女子中等部に在籍している。で、私はそれに巻き込まれた。以上」

「大分はしよりましたねえー!!」

ネギは残念で胸がいっぱいだった。大分手短に話され疑問の存在は”まきこまれただけ”と言われる始末。

全部実話なだけどね。

そしてラグナとエヴァが意地の悪そうな顔をする。まるでいつかのうさんくさいロリ好き戦友みたいに。

「でなあ〜？そのふざけた呪いをぶち殺すにはあいつの血縁のお前の血が大量に居るんだわ。理解したか？」
トリアンダスタン

「そ、そんな…僕、知りません」

「喝ううう!!甘ったれるなや糞ガキヤア!こちら15年も学園に?がれとるんじゃ!エヴァアア!やっちまいなあ」

「…悪いが死ぬまで吸わせてもらおう…」

エヴァがネギの首筋に迫る。茶々丸に抑えられているせいで逃げだしたくても逃げ出せない。

カプツとエヴァがネギの首筋をかむ。チューチューとネギの血が吸い取られていく。

ネギは後悔した。こんなことならパートナー探しておくべきだったと。

勢いよく音を立てて走る音が聞こえる。
あまりの音にエヴァはネギに噛みついた口を離す。

「コラー！ この変質者共ーっ！」

そこに現れたのはどこからか参上した神楽坂明日菜、その人であった。ここ8階だよ。どっから上がってきたんだよ。

神楽坂がネギを拘束している茶々丸と噛みついてたエヴァに迫るッ！だが、一步早くラグナが会えに立ちふさがる。

だが、能力の大半は封じられている。そこに神楽坂渾身の蹴りがある。

「ぐうう！？ すまないエヴァ……」

パワー勝負に競り負けエヴァ、茶々丸ともにぶっ飛ばされるラグナ。エヴァはあぶぶぶーっ！と屋根に顔面を擦りつけてしまっている。そく、立ち上がり形勢を立て直そうとする3人。

「あつあれー？ あんた達ウチのクラスの…ちよっどーゆーことよ！？」

「ふははは、私の存在に気付いたか…」

「ま、まさかあんた達が今回のじく「そのとーり！ 私こそは無限の精神を操る者、スピリットマスターだ！ ハハハハハ」ってちがうわー！ 吸血鬼の方よ！」

神楽坂はどういうことだろうかと思う。この娘ってこんなハツチャ
けてる娘だっけ？

その理由は久しぶりのシャバ…じゃなくてやっと計画を行動に移し
ているからである。

「ぐっ…よくもラグナを足蹴にしてくれたな神楽坂明日菜…お、覚
えてるよ〜」

「エヴァ駄目だ！そんな二流悪役的な逃げ台詞を言っちゃ…」

エヴァ、茶々丸、ラグナの3人が八階の屋根から飛び降りる。

神楽坂はここが八階だということに疑問を持つがネギの事が心配に
なり、考えを中止した。

空中でロボットがバーニアで飛んでいた。茶々丸である。

エヴァとラグナの二人は茶々丸の腕に器用に乗り、話をしていた。

「思わぬ邪魔が入ったな。まあ坊やがまだパートナー見つけていな
い今がチャンスであることには変わりない…で、大丈夫かラグナ？」

「ああ…んっ。くそ、この程度の蹴りに体が耐えられんとは…まあ
当たらなければどうということは無いがけどね」

「ですが、麻帆良学園の女子生徒はバケモノかー！？という格言
が残されていますが」

「何でそんな言葉が残されているんだ!？」

「フツならば今の私もその女子生徒…多少の無茶は承知の上だ!！」

翌日、タカミチから夜の空中散歩は控えめにね。結構うるさいから。それに魔女っ娘じゃないんだから、とのご通達がありました。エヴァは少なくとも魔女っ娘じゃないのかね?というと。

「年期過ぎてるだろう?。」

直後、溜めていた血液と魔法薬をぶっ放したエヴァさんでした。

墮威十流真拳奥義』この小説のタイトルを変える！！（後書き）

フェイト／エクストラ楽しみだなー

わっしょい！わっしょい！わっしょい！わっしょい！わっしょい！

A C E Rもほしいんだけどね。

I a m a t i t l e (前書き)

キャスター！キャスター！キャスター！キャスター！

つてなりました。キャスターかわええ。セイバー？なにそれ。新種の雑魚？

キャスターのスペックが低かろうとそこは愛で乗り越える！

もちろんメディアさんも大好きだよ！

I a m a t i t l e

学校の屋上　そこには麻帆良学園の制服を着た二人の女の子がいた。

「坊ずが担任だとサボリやすいな。…ふあ〜」

「タカミチが担任だとサボろうとしてもすぐに捕まったからね〜。

…ふあ〜」

エヴァは吸血鬼としての性。ラグナは夜更かしによりどちらも眠そうにしている。

目を細めてどちらもすぐに寝てしまいそうな表情である。

こんな昼間に何故屋上に居るかと言うと、ただのサボリである。茶々丸は律義に授業に出ているようだが、それが逆にネギをビビらせていたり。

ぼけ〜として半目の二人。もしアルなんとかさんがいれば自分の肉体がどうなるうと呐喊していただろう。

そのあと二人にぼこられるだろうが。

どちらも眠たそうにしていると、突如何かに気付いたような顔をした。

「む、ラグナ。気付いたか？」

「何か来たな。結界を越えたものがある。学園都市内部に入ったんじゃないかな」

「仕方ないが調べるか。まったく厄介な呪いだ」

「そうだな」

「何のんびりしてるんだ！お前も来るんだ」

「やだやだ。日陰から出たくない〜」

「ええい、いい加減にしるおお！」

エヴァはどこからか出したのか手際よく縄でラグナを簀巻きにする。ラグナは「変態ー！ロリババア！エヴァンジェリン！」とか言っているがエヴァはさほど気にした様子もない。

なぜなら学生生活と茶々丸が家事全般をすることによって完全に自堕落な生活をしていたために、エヴァは実力行使でラグナを行動に移さねばならないのである。

そのたびにこのようなやり取りがあったりーなかったりー。

さてさていつの間にやら夕刻。

エヴァとラグナは侵入者の反応を感じ茶々丸を同伴して、学園を回っていたのだった。

そんな中、夕日がきれいな場所にて、いまだラグナはエヴァに引っ張られていた。

「エヴァ！離してよ。目が痛いよ！」

「茶々丸。こいつがバカやった時の対処法は目からしを塗りこんで、鼻に唐辛子を突っ込むんだ」

「わかりましたマスター」

「ちや、茶々丸う！？理解しなくていいんだよ！」

そうこうして回っていると突如「ネギーーツ」という声が聞こえた。

すると、前の曲がり角から神楽坂明日菜が飛び出してきた。勢い余ってラグナが踏まれた。

「あ、ごめんなさい。ってあなた!？」

神楽坂は何かふんずけてしまつて反射的に謝つた相手がラグナだと知ると昨日の事を思い出し、つい構えをとる。踏んだまま。

「……ほう、神楽坂明日菜か」

神楽坂は声のした方を見る。そこにはエヴァと茶々丸がいる。茶々丸は礼儀正しくお辞儀をしていた。ええ子や。

「あなた達！ネギをどこへやったのよ」

「踏んでる！まだ踏んでるよ!？」

「ん？知らんぞ」

と、返されて神楽坂はじゃあ一体だれが、と思った。昨日の件もありエヴァ達がその有力候補なはず。

そう考えていたがエヴァが次の満月まではわたしたちは襲わないと言った。

どういうことだろうと神楽坂が考えると、それを見越したエヴァが満月を過ぎると魔力が低下すると丁寧に教えて口の牙がないことも見せた。エヴァってば…優しい子なのね。

「次の満月が近づくまで私もただの人間。坊やをさらっても血は吸えないというわけさ」

「神楽坂！踏んでるよ！まだ私踏んだままだよ！？」

さらにエヴァがネギがパートナーや助言者を見つけれなきゃ私達には勝てないだろう、と挑発する。

それに反応する神楽坂。主に足に力が入る。

「ダメーっ！一線越えちゃううううう」

ラグナが新たな境地に目覚めかけているとエヴァが話の話題をネギに変えた。

「子供は嫌いじゃなかったのか？同じ布団に寝ていて情でも移ったか」

「なっ…か、関係ないでしょ！とにかくネギに手を出したら許さないからね、あんた達！」

「あ、あ、あ、このまま行くと新しい個性を得られる代わりに、無職無能存在無価値になってしまう…」^ア

神楽坂のあんた達！のあたりで思いつきりふんず蹴られたラグナ。

誰も全く気にした様子は無い。

エヴァは神楽坂をさんざん弄り満足したのか仕事がある、と言って踵を返した。ラグナを引つ張って…

お分かりだろう。上から踏まれる力と、横から引つ張られる力で大変なことになるが、神楽坂が走つてどこかへ行ったのでそれは間逃れた。

なんだがラグナの顔が赤いのはきっと唐辛子のせいだと思う。

次の日

散々エヴァに引つ張りまわられた挙げて特に関心なエヴァ一行。今日も学生達の元気な登校風景が見られる。そんな中、下駄箱周辺できよろきよろしているネギがいた。

恐らくエヴァ達がいなか心配なのだろう。しかし、そんな風にしている方が余計に人目に付くと思わないのだろうか。

「おはようネギ先生」

「エ、エヴァンジェリンさん！茶々丸さん！それにラグナさん！！」

案の定話しかけられたネギ。エヴァから堂々とサボらせてもらうと言われ、何故かつえを持ちだそうとする始末。実力行使か？

そこをエヴァに止められる。たしかに校内でどんちゃんやるのは不味い。

「そうそう、タカミチや学園長に助けを求めようなどと思うなよ。また生徒を襲われたくないだろう？」

エヴァは自分の力が封印されているのにもかかわらず、どんどんネギを挑発していく。

「まあそういうこと。じゃ〜ネギ先生や。ゆっくりサボらせてもらいんす」

「なんだその語尾は…」

「キャラ付け。最近影が薄い気がする」

ネギはそのような話は一切耳に入らず、悔しさのためか走り出してしまふ。それを神楽坂が追いかける。

きつと慰めるのだらう。そんなネギ達に目もくれず踵を返すエヴァ達。だが、エヴァだけはネギの方に乗っていたオコジヨを見た。

「しかし、ラグナ。お前、とある学園都市の黒髪巫女みたいに影が薄くなってきたな」

「マスター、ぐるぐるまっぷにそのようなデータはありません」

「…早く来てくれスネークよ」

いまだにこないもう一人のオリ主であった。

だが、ラグナは気付かない。これ以上メンバーが増えるともっと影が薄くなる、と。まるでそう、ラッキー　ンのヒーローみたいな感じ。

人数が増えると必然的に出番は少なくなるもの。赤松さん！あんたすげえや！

「ほれほれ醤油だよー」

ここはどこかの茶道部の前。そこにラグナは居た。彼女はエヴァや茶々丸のように茶道部員ではないため、こうして醤油を飲まず部の活動をしていた。どうやら今回の活動対象は自然界の動物たちだった。両の足が立つ地面を歩く小さな虫達。小川を流れる魚達。森にすむ動物達。

完全に環境汚染だった。だが、ラグナが実行に移す前に運よくタカミチが通りかかった。

「やあラグナさん。…何してるんだい？」

「ん？タカミチじゃないか。何って人間以外の動物に醤油を吞ませられるかどうかって研究さ。タカミチも飲む？」

「…いや、僕は遠慮しておくよ。それよりエヴァは居るかい？」

「そうか。エヴァなら茶道部だ。ところで大豆食つか？味噌もあるよ」

「…何で味噌なんか…大豆はもらっとくよ」

「…貴様ら何やってるんだ」

声をかけられた方を見る。そこにはエヴァと茶々丸がいた。

どうやら部活動が終わったようだ。

エヴァは完全にあきれ顔をしていた。どうやら話は聞かれていたようである。

「で、タカミチ。私に何か用か？」

「学園長が呼びだ。一人で来いってさ」

どうやらエヴァに話があるようだ。

エヴァだけ。ここ重要。つまり主人公用無し。

「ひどい！私とは遊びだったのね…」

「何わけのわからないことやってるんだ。茶々丸、この馬鹿連れて帰っておけ。じゃあタカミチ行くぞ」

「お気をつけてマスター」

茶々丸が簀巻きにされたラグナの縄を持つ。

荒れ道をズルズルと進んでいった。

しばらく茶々丸が歩き、ラグナが引つ張られ来たところは桜並木。

「（茶々丸ともう一人だが何か縛られてるぜ。一気にやっちゃいましょう兄貴！）」

「（だめー人目に付くし。もう少し待って）」

「（なんか辻斬りみよん。クラスメイトだし…）」

茂みで隠れて茶々丸たちの様子をつかがっていたのはネギ達だった。どうやらエヴァがいると勝てないので個別にやりに来たようだ。兵法的に間違っていないが、それで我らが主人公をやるかな？

ズルズル

「ねー茶々丸。離してくれよー」

「駄目です。マスターからの命令です」

「離してくれないと自爆しちゃうよ？いいの？」

「問題ありません」

「いいの！？私の晴れやかな姿がスルーですか！？」

「その縄の耐久度は『シヨクパンヨリフランスパン』並みの耐久度ですから」

「私の心配じゃなくて縄の心配だった！？」

バカなことをしながら人助けをしつつラグナを弄る茶々丸であった。もう無垢な茶々丸は居ない。

エヴァの英才教育はキチンと実を育んだようだ。

歩道橋では階段で引きづり、川では猫助けのついでに溺死させられる始末。

時間も夕暮れに近づき、茶々丸はとある場所で猫に餌をあげていた。

「茶々丸!? 私は餌入れじゃないよ!」

みーみー

「ただ飯ぐらいなんですから餌入れぐらいしてください」

「何この茶々丸!? 鬼畜だ!」

あんがい切れてる茶々丸だった。

「私ですか? 私切れさせたら大したものですよ?」

あ、ちよ、なにするンギヤァー

「地の文は犠牲となつたんだみゃー」

「しかし、地の文はいくらでも蘇るにゃー」

ふっ、私のねむりをすぐふうう!?

「ちよっとー!?!? あんた達何してんの!?!?」

「女体盛り。猫の餌」

「ちがうわ! ええ加減にしろー!」

「…こんにちはネギ先生、神楽坂さん。…油断しました。でもお相手はします」

「え！？いつの間にか出てきてしまいました！？」

「兄貴：こいら並みじゃねえぜ！」

茶々丸がネジを取る。どちらも臨戦態勢をとる。

そんな中、またもや放置のラグナだった。

茶々丸と神楽坂のデコピン合戦が繰り広げられる中、ネギは呪文を詠唱。

魔法使いと従者の関係を上手くあらわしていた。

「魔法の射手 連弾・光の11矢！！」

「すみませんマスター。もし私が動かなくなったらラグナさん弄りお願いします」

「ひでえ！？って、いつまでもこんな事してるわけにもいかないな！たかが『シヨクパンヨリフランスパン』程度の硬度。どうということはない！」

ふん！と気合いを入れ、縄を引きちぎろうとするラグナ。

だが、縄は千切れなかった。

「オー！ノー！こうなったら15年かけて編み出した新技だ！」

茶々丸に魔法の射手が迫る。

ラグナの口が何かの言葉 かどうか分からないことを紡ぎだす。

瞬間、ラグナの体から半裸の大男が出る。

黒い髪に鍛え抜かれたその体。シヨルダーアーマを付け体を隠している部分は股間部の布程度。

その大男はその巨体に似合わずものすごい速度で茶々丸とネギの魔

法の間に入り 体を張って魔法を耐えきった。

「ゴフツ。…結構きついわー。やっぱり体張るとか性に合わないね」

「っ！ラグナさん。大丈夫ですか！？」

「茶々丸うー茶々丸が私の心配してくれるなんて…」

「いえ、あまり傷がつくと私の番がないですから」

「やっぱりひでえ！！！」

そのまま茶々丸はラグナを抱いてバーニアで飛んで行ってしまった。残されたネギ達は呆然とするしかなかった。

「なんなのあれ…」

「分かりません…ですが最後に出てきたあの半裸の大男。ものすごい力を感じました…」

「兄貴…こいつはやばい橋かもしれないぜ…ッ！」

少年と少女と動物は迷う。

このまま敵を知らず、己を知らず、挑んで勝てるのだろうか 否。感じたものは強大な力。それを統べるは謎の美少女。ラグナ・上杉。

迷い揺れる決意。少年は勝てるのだろうか。

「何しているのですか？」

「地の文書いてるの。いいできだろ！」

「謎の美少女って…プツ。底が知れますね」

「茶々丸う！覚悟ー！」

ペシ

茶々丸のはたく攻撃がラゲナに当たる。

「酷いや…」

I a m a t t i l e (後書き)

まっ、フェイトしてて遅くなる。断定。

たった今、この領域はタイトルに支配された（前書き）

主人公の活躍が少ないから書いてみた。

突っ込みたきゃあ、突っ込めばいいと思うよ。

画面に。

たった今、この領域はタイトルに支配された

図書館島の地下。クウネル・サンダースの秘密の部屋にてここに四人の会談が行われていた。

一人はそう、我らが主人公ラグナである。もうひとりはこの主、アルビレオ・イマことクウネル・サンダース。では、後の二人は誰であろうか？

「で、獅子神。長瀬の入浴シーン手に入れたのは本当か？」

「ガウ」

ガウ、と奇抜な返事を返した獅子神と呼ばれるもの。風貌はまるでライオンのような顔つきにライオンのような四肢。ライオンのような尻尾にライオンのようなタテガミ。すなわちライオンである。

余談だが、彼は麻帆良学園の森の主的存在である。好きな物は森に修行に来る長瀬楓。

獅子神がスツと数枚の写真を取り出す。

「ホウ…これはナかな。あなたはどう思います？クウネル」

「私は生憎興味はありません。私的にはラグナが写真くれたらそれで立ちます」

「エージェントC。無駄な会話をクウネルに振るな。大抵私に矛先が向く」

エージェントと呼ばれる男は一言で表すなら紳士のような見ためであった。

ような とはどういうことかと言うとジェントルマンが持つ仗の先にドリルが付いていた。

少しずれている人物であった。

余談だが彼は麻帆良の教師でもある。

ちなみに朝、一杯のレモンを絞ったジューズを飲む。

「しかし獅子神。よく難易度Aクラスの長瀬の写真が撮れたな」

「ガウ」

「ナっ！んと…『サウザントマスター』の息子と入っていたから撮れたと…」

「ガウ」

「あのネギ坊主俺の楓たんといチャイチャしゃがって、カ…どうする。我ら転生者の三連星デ妨害をするか？」

転生者の三連星 実はこのライオンと似非紳士、転生者だったりする。

前世ではネギまを知っている者たちが偶然集まり、寄り集まった集会である。ちなみにクウネルは関係なし。

彼はいつも良い写真が集まればそれでいいのだ。

たまに初等部に写真を撮りに行ったりしているがこのメンツには需要がなかったりする。

「やめとけ。それなら私とエヴァで秘密裏に不能にしてやるっ」

ラグナが発言する。彼女は原作にかかわりを持つ存在なのでなにかと発言権が大きい。

しかし、その権利とは今この瞬間では無意味に近い。

完全に獅子神のタテガミが逆立っているのである。想像するはスパーサイヤジン。

その隣に立つエージントCも杖のドリルを高速回転させていた。

「ガウウ」

「生憎俺の楓たんを汚した奴は不能程度じゃすまさねえ、か。エージントCそちらに言い分はあるか？」

「私はソうですね。：面白そうなので獅子神殿に付き合います」

「そうか。ならば仕方ないな：クウ。少し暴れるぞ」

「程々にしてくださいね。この前もコレクションが瓦礫の下敷きになりましたし」

クウネルが言いきるや否や二人の猛者は飛び出す。

獅子神はキバ、ツメを武器に。エージントCは杖のドリルと格闘術を。

対するラグナは制限を課された戦いになる。仲間を傷付けるわけにもいかになく、二人の暴走を止めなくてはならない。

今だ戦いが始まった場所にとどまるラグナ。

そこへ二人の攻撃が炸裂する。

「ガウウ（『^{デス・}死心の碎牙^{ファンク}』！！）」

「耐えられますか？ 『螺旋の如く巡るマイワールド』！！」
バン！ドガン！

パサアと瓦礫が崩れ、地面はあとかたもなく消し飛んだ。
晴れていく砂煙には二人の影しかない。

「おっと、やりすぎましたかね」

「…不死にケンカ売ろうなんて大分やる気じゃない」

エージエントCの漏らした言葉にかえされる声。

二人の攻撃によって消し飛んだ反対側に居るラグナ。

「おや、生きてくれましたか。殺す気でやったんですがね」

「ガウ（だが、勘違いするな。俺らの攻撃はまだ終わってねえぞ）」

ユラ、と向きかえる二人。その双眸は確実にラグナの死をとらえていた。

ダツ、と飛び出す二人。ラグナを挟み込むように飛びかかる。

ラグナは懐に手を入れ一枚のカードを取り出す。それはパクティオカード。

それを大きく上に突き出し、高らかに声を上げる。

「『吸血鬼の必需品』！！でろおロードローラア！！」

『吸血鬼の必需品』それはかの有名なDIOという吸血鬼が主に使ったとされる武器を取り出すアーティファクト。

辺りが一瞬暗くなる。

ラグナの数メートル上に現れた巨大な機械。

ロードローラーはその重さに従い一気に落ちてくる。

「なんと！」

「ガウ（このままでは貴様もろともペシャンコになるぞ！？）」

「あんたらは忘れてないか？俺の売りはそれだけじゃないんだぜ？」

もう眼然と迫る大きなロードローラー。

いつまで経ってもラグナは動かない。

このままでは潰されると思ったエージエントCは狙いをロードローラーに変える。

「くう！『螺旋の巨大なブレイカー』！！」

上体を反らし、杖をロードローラーに向け、力いっぱい打つ。

瞬間、ドリルの部分が大きく巨大になる。

そのドリルは紅い閃光をあげながら回転し、ロードローラーへと突き刺さる。

「ガウ（ロードローラーは任せた。俺は本体を殺る！）」

エージエントCと地面のすれすれの間をその巨体で華麗に通り返ける獅子神。

その雄大な体で力いっぱい飛びラグナに迫る。口を大きく開け、その両の爪が付いた腕を大きく振り上げる。

その両の爪と牙の生えた口は今まで数々の獲物をしとめてきた。その相棒達にかかれれば今回も殺せるはずだろうと。

「ガウウ（『百獣王の爪キング・クロウ』！！）」

「まだやるか…ならば15年…15年で習得した技を見せてやるッ
！」

消え去った。一瞬にしてラグナの体が消えた。

獅子神が目を離したわけでもない。一瞬にして消え去ったのだ。

「ガウ（なに！？消えた…スタンドか！…しかし奴のスタンドは封
じられているはず…）」

ギュールルルルルルル

甲高い音をあげ、獣の咆哮に似た炸裂音をあげるドリルとロードロ
ーラー。

エージェントCのドリルがロードローラーとあたり、破壊した音だ
ったようだ。

「奴はどこに行ったんでしょっか？」

「ガウ（警戒を強める。気配を探れ。奴はスタンドを使った…）」

背を向け会い死角がないようにする二人。

ザツ、と二人の足が当たり瓦礫が崩れる音しかしない。

そんな中、奇妙な歌が聞こえてきた。あまりにも歪で、この場所に
そぐわない様な歌。

I am the bone of my sword
体は剣で出来ている

「な、何ト!?この詠唱は…!?!」

「ガウ（バカな!奴にこの能力は無かつたはず…!?!）」

Steel is my body, and fire
is my blood

血潮は鉄で 心は硝子

I have created over a thous
and blades

幾たびの戦場を越えて不敗

二人の動揺の仕方は異常に尽きる。まるですぐにこの場から離れな
いと死んでしまうような それぐらいの必死さが見えてくる。
この技は彼の英雄。エミヤシロウにしか使えないはずの呪文。『無
限の剣製』彼の魔術回路を持ち、ある呪文を唱えて発動する固有結
界。

世界を塗り替えてしまうほどの超魔術。常人にはなしえないはずの
技なのだ。

だが、今それをラグナが使おうとしている。
それにより二人の動揺はおかしすぎるのだ。

Unknown to Death

ただの一度も敗走はなく、

Known to Life

ただの一度も理解されない

「どこにイるのです!」

「ガウ（このまま詠唱を続けさせたら厄介だ:）」

Have withstood pain to create
many weapons

彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う

Yet, those hands will never
hold anything

故に、生涯に意味はなく

「いつたいどこに…」

「ガウ（ちいくしょおお！出てきやがれこの臆病モン!）」

「…それは貴様らだろう」

「はっ！/ガウ（はっ!）」

二人の前にはラグナがいた。構えを解き、手は腰のあたりに置かれている。余裕がにじみ出ている。

そんな彼女に二人は一体どこに居たのかと、聞こうとするがその声をさえぎるように、邪魔な物のように口を開く。

「最初からここに居た。それだけだ。貴様らが俺に怯えて見えなかっただけだろう?」

「なんですっ！？」

「簡単なことだ。単に貴様らは俺の氣に吞まれていただけという話
さ」

「ガウ（そんな馬鹿な！それほど強い氣だと…！？）」

「おしゃべりはこの辺でしまいだ。終われ」

S o a s I p r a y , u n l i m i t e d b l a
d e w o r k s

その体は、きつと剣で出来ていた

瞬間世界が変わる。別の力に塗りつぶされるような ラグナによつて支配されていくのだ。

二人はその光景を呆然と見るしかない。足は動かなかつた。ここまでの強大な力にはとても打ち勝てないと。

切り替わつた世界。そこは

「ここが15年かけた俺の世界。『スタンド・ワールド聖幽波紋領域』だ」

「……………」

「……………（……………）」

「ん？どうした。あれか『無限の劍製』かと思つたか？残念だが違う。あれはよく使われていてインパクトがないからな。頑張つて作つたんだ」

「ガウ…（じゃあ詠唱はなんなのさ…）」

「そんなもん飾りだ。飾り。実はなこの技タイムラグなしで発動できるんだぜ。すごいだろ」

「「バカ死の淵をすするに落ちろ！！」」

意気消沈していた二人があまりのラグナの横暴に遂に切れた。ひっ倒し、足でけり、かかとを落とし、溜めにたまった怒りを爆発させる。

「オラオラ、何バカなことぬかしてんだ！？ああ！？」

「ガウウウ（空気つてもんがあるだろ！ええ！？わかってんのかあ！）」

ガシ、ゲシ、ボコ、

散々に蹴られていくラグナ。

踏みつけ、砂を蹴り、ボコボコ二していく二人。

だが、やはり耐えられなかったようだ。

「どがらがしゃーーい！てめエらしい加減にしゃがれエ！」

二人をふっ飛ばし起き上がる。

もう顔は般若のようになってる。抑えきれない怒り叫びが響き渡る。

「貴様ら二人まとめてぼこぼこじゃあい！」

「ふっ…出来масかね」

「ガウ（舐めるんじゃねえぜ）」

ふと、怒りが静まったような声音でラグナが話し出す。

「一つ言い忘れていた。この『スタンド・ワールド聖幽波紋領域』では精神を解放することができる」

「それが…どうしたというのですか？」

「分からないか。スタンドは精神。それをすべて解放できる『スタン聖幽波紋領域』つまり…貴様らは全スタンドにフルボッコにされるんじやあああああ！…！」

「ガウウウウウウ（なんとおおおおお！？）」

そこに立つ一人の男性。

「ふう…よくあれほど暴れますね」

男性の独り言が続く。それは誰にも聞かれないゆえの安心感なのだろうか、危機感がない。

「まあ、いいんですけどね。ラグナのパンチラ手に入りますし」

この場にはすでに自分しかいない、と行ってしまったことがこの男の敗因だろう。

もし誰かが、忘れ物や用事があり戻ってきた場合の事は考えていなかったようだ。

「それほどその写真に興味があるんだな」

「ええ。そうですよ。この角度。この画質。そして本人もいい。これほど素晴らしいのはキティぐらいでしょう」

「そうか。残念だが、その写真は没収になる」

「なにをいって…」

男性が振り向いた先はすでにこの空間よではなかった。

たった今、この領域はタイトルに支配された（後書き）

クウネルは犠牲となったのだ。

戦いに必要なのは勇気ではない…タイトルだ！

人間の偉大さは恐怖に耐える誇り高き姿にある

<side:ネギ>

僕は逃げないと決めた。

長瀬さんとの修行でそれに気付きました。

きつと茶々丸さん達に仕掛けましたからエヴァンジェリンさんが報復に来るのは間違いなしと踏みました。

でも、僕はこれ以上誰かに迷惑をかけるわけにはいかない。

何か手はあるはずだ。逃げずに何とか最善の道を見つuckerんだ！

と、思つてエヴァンジェリンさんに果たし状を渡しに行きました。

ホントは怖いんですけどね。前にカモ君が「兄貴！動物園の檻の中の灰色熊を怖がる子供がいますか？そんなのもちろん、いなアアア〜いッスよ！」つて言つてたけど大丈夫かな。

でも、エヴァンジェリンさんはまさかの風邪。ラグナさんは外出。

茶々丸さんは薬を取りに。知らない人はピッツァ食べてました。

僕一人で看病することになってしまいました。

しかし、僕一人が幸いしたのかエヴァンジェリンさんの夢を盗み見ることができました。いや、ホントはやっちゃいけないですよ？でも、こう、好奇心とかがでてきちゃってですね。

やっちゃったわけですよ。あーかつこよかつたなあ僕のお父さん。聞き捨てならないことがたくさんありました。最後の方で男の人がエヴァンジェリンさんを助けようとしてましたけど落っこちてしまいましたね。マヌケですね。笑い物です。

盗み見したせいでエヴァンジェリンさんに怒られましたけどそんなこと Good Bye ですよ。

次の日来たらびっくりしましたよ。エヴァンジェリンさんが授業に出てるんですよ。なんでも昨日僕が看病したお礼だそうです。：： テンションあがってきたああ！

うへへあれですよ、あれ。最高に「ハイ」ってやつだああああ！
！って感じですよ。

：： まあラグナさんは出てないんですけど。

でも僕は諦めませんよ。逃げてばかりじゃいけませんからね。

< side out >

電気の付いていない部屋でパソコンが一台稼働している。

パソコン室？であろうか。そこには3人の麻帆良学園の制服を着た女子学生がいる。

パソコンの前に座り、両側に座る二人がのぞきこむような感じになっている。

「やはり『登校の呪い』の他に魔力を抑え込んでいる『結界』があります。どうやら学園全体に張り廻られているようで大量の電力を消費しています」

「しかし、魔法使いが電気に頼るとはな！。ハイテクってやつか」

「世の中便利になったんだな」

後始末をし、パソコンの電源を切った後、三人はドアを開け出ていく。

この『結界』は電力で発動しており、今日大規模な停電が起きる。今回はその停電と共に作戦を開始。ネギの血液を手に入れる作戦である。

『結界』が切れたらエヴァの魔力は『登校地獄』分で抑えられている分を除いて、戦闘をするのに十二分な魔力が戻る。

それほど大部分を抑えられている『結界』に何故気付かなかった、というのはエヴァが機械に乏しかった、ということだろう。ラグナにも専門的な知識も原作知識も随分と消え去ってしまったている。

そこで茶々丸の登場である。

彼女のおかげでエヴァの能力が戻ったものだった。補佐に掛けてはピカイチだろう。

そんな彼女が「対象のネギ・スプリングフィールドが神楽坂明日菜と仮契約を結んでいる」という重要な報告を黙っていたのである。

「おい、ラグナ。何で黙ってた？」

「え？そんなことあったっけ？」

「馬鹿モン！…まあいい奴にパートナーがいようと、いまいが関係ない」

忘れているかもしれないが彼女は目からしを塗りこまれていたりした。激痛で忘れていた、それだけである。

ラグナが首を捻っているとエヴァが飛び立とうとする。

しかし、足を引っ掛けて盛大にこけた。

ただの人間のままで飛べるわけないのだ。エヴァはこうなったのも

スプリングフィールド一族のせいだと色々切れていた。こけた瞬間ラグナがカメラを構えたのは秘密である。

午後20時

辺りは月明かりだけが照らす暗い世界になった。月が照らす塔に金髪の吸血鬼が現れる。憎しみを力に変えて、奴から奪うために。

「ふう、バカと何とやらは高いところが好きってか。まあ私はあのラグだけは折らせてもらおうよ」

彼女の後ろには電気系統の字が書かれたプレートのある扉があった。この場所で何をするというのか。彼女がいなければ計画は破綻するのではないのか。それとも居ないからこそ成功するのか。

466

パシャ、と水の音がする。大浴場である。

心細い声を通る、ネギである。

彼は突如裸で現れた佐々木まき絵を追いかけてここへ来た。エヴァンジェリンが戦いを申し込む、と。

「パートナーはどうした？一人で来るとは見上げた勇氣だな」

妖艶な女性を取り囲むようにネギのクラスの生徒達に加え茶々丸とラグナがいる。もちメイド服。

ネギは声の下方向を向くと、迫力の満ちた顔で、

「あ、あなたは…！？どなたですか!？」

いきなりのボケに妖艶な女性は盛大にこけてしまう。

「私だー！ー私ーっ」

ボン、と音を立てて煙の中から現れたのはエヴァンジェリン。妖艶な女性は彼女が幻覚で化けていた姿なのである。

その姿を見て合点が行った、という顔をするネギ。普通見たらわかるだろう。ナギと言い顔を覚えるのが苦手なのか？

「今夜はここで決着をつけて坊やの血を存分に吸わしてもらおうよ」

「でも、そうはいきませんよ。今日は僕が勝って悪いことするのはやめてもらいます!」

余裕綽々のエヴァに対し、決意の籠った顔をするネギ。

彼は逃げることを放棄した。戦いに馳せ参じた者である。

ラグナの前に人影がわらわらと集まる。その中の一人が口をあける。

「もう就寝の時間だが…とりあえず言い訳を聞こうかラグナ・上杉？」

スーツを着た成人男性が喋る。

見た限り麻帆良の魔法先生達であろうとラグナは判断を付けた。

「なあに、今夜は地上の光がない分月がきれいに見れると思ってね」

「ふざけるのもほどほどにしろよ！」

先ほど喋った男性とは違う男が声をあげる。その声音には明らかに『キレている』色が見えている。

『キレている』というのはいささか違うかもしれないが、何かに対して正義であろうという志が見え隠れしている。

「落ち着きたまえ。…ここに居るといことは『こちら』側と云うことでいいな？」

「ああ、そう捉えてもらっても構わない。一つ言つがさっさと逃げた方がいいよ」

「どういふことかは知らんが逃げた方がいいのは君の方だ。でなければ暴力的になってしまふ。本当は不本意なんだがな」

「あんたも苦労してるんだな。中間職つて言つのか？」

「まあそうかな。だが、私は自分の道を進んでいる。それが明るかるうと、暗かるうと関係は無い」

男はそう言って手をあげる。

それに合わせて周りの人影がラグナを取り囲むように動く。

「重ね重ね言っておく。逃げた方がいい。三度目は言わせるなよ」

「そういうわけにはいかない。何、手荒なまねはしない。君が暴れなければの話だが」

まるで戦艦の司令官が艦砲を撃てと命令するように手を下ろし、宣言する。

「かかれ」

暗い夜のはずなのに幾人もの魔法により辺りが一気に明るくなる。多彩な魔法が発動し、それが一気にラグナに飛びかかる。相手は紳士な態度だったが、先と言っていることが違っている。ラグナはまだ暴れていない。それなの魔法を撃った。

バーン

魔法が当たり視界は白く染まる。辺りの確認はまだできない。

男はこう思う、『闇の福音』といるのだからどれほどの手だれかと思えば…こんなものか、と。

そう思考していた男に一人の若い男が近づく。

「あ…あの、いいんですか？あの子はまだ何もしてませんよ？」

「ふん、悪の魔法使いと一緒に居る奴に情けをかける必要もないわ。どんな手をつかおうが……最終的に…勝てばよかるうなのだアアア」

アッ！！」

若い男はあまりの考え方に身を引く。

今回の男の考え方はそう、悪の魔法使いに対して、良見的な考えを持つ人の役割をすることだった。

一方的に追いやられる悪の魔法使いに対し、立派な魔法使いがすることは弾圧。

ならば、それとは違う方法で行けば悪の魔法使いはそれなりに隙を見せるだろうと。

その考え方によりこうして成功した。あとは停電の復旧を早めるだけ。

そう考えていたが煙が晴れると、ボロ布の状態になった制服を着るラグナがそのままだった。

「あーあ制服ボロボロだよ。先生どうしてくれるのかな？」

男は目の前の現実が信じられなく目をひんむいた。

「（何故生きている…？あれだけの魔法をくらい。何故まだ…）」

男の思考は答えを出さなかった。男はぐらりと倒れる。

周りの人影に焦りの色が見える。

ラグナが男の腹に一発、ただ殴っただけなのだ。

「無駄は嫌いなんだ。一度でいいことを二度も言わせる奴は頭が悪
いって事だ」

「っ！お前！」

杖を構える。再度呪文を唱えようとする。
が、すぐさまラグナに殴られ気絶…しているのかもわからない。死
んでいるのかもしれない。

「無駄は嫌いだと言っているだろう？三度目は言わせないでくれと
言ったはずだ」

その言葉を聞いた者達は杖を構え、強大な者に挑み逝った。動くも
のはいなくなった。

橋。カツ、と強い光が夜を照らす。

「ってことで、契約更新！」

「むっ…そこか!？」

空を飛んでいるエヴァと茶々丸。生憎ラグナは飛行能力を持たない
ため茶々丸におぶってもらっている。

「どうしたばーや。お姉ちゃんが助けに来てくれてホッと一息か？」

その言葉にネギは恥ずかしいのか顔を赤くする。

カモは気にすんな、とネギを援護し神楽坂は「あんた達三人なんだから卑怯でしょ!？」と言っている。

エヴァは気にした様子もなく地上に降り、「悪の魔法使いだからなだが、素人の二人にはきつかるう？茶々丸は抜いてやってもいいぞ？」

「なっ!？」

エヴァは余裕の様子を保っているが心底神楽坂の障壁破りを気にしている。

小声で二人に注意を呼び掛けるぐらいだ。

「ネギ、あんな奴ら二人どうってことないわよ」

「で、でも明日菜さん…」

「シャキッとしなさい。エヴァちゃん達を更生させるんですよ。あの二人は私に任せてエヴァちゃんと語りあつてきなさい」

「…分かりました!こーゆー時つて拳で語り合っんですよね!」

「なんかちが…(いや、私もあやかと拳で分かりあつこともあるし…)ええ、頑張つてきなさい!」

「お喋りはそこまででいいか？」

エヴァが小声で話していたネギ達に声をかける。

「本気で来るがいい。ネギ・スプリングフィールド」

「…はい！」

冷たい夜の風邪が吹く。

決意を胸にしたネギが構える。

「契約執行90秒間！ネギの従者『神楽坂明日菜』！！」

エヴァは始動キーを唱える。それに合わせて茶々丸とラグナが前に出る。

二人は神楽坂との間合いを一気に詰め、手を突き出す。

バシッ

シユシユシユシユ

「うひゃっ、ちょ、なんでラグナちゃんまでこんなに早いのよ!？」

「なめちゃ駄目だぜ。流星 デコピン！」

茶々丸のロケットデコピンとラグナのデコピンを食らいつつ両手で器用に仕返す神楽坂。

神楽坂が悶えているとそれを見たネギは子供用の練習杖を取り出し仕掛ける。

「ネギ！」

「よそ見したちゃ駄目だぜ？」

「っ！あんだ！」

バシユバシ、シユシユシユ

「あんだ結構痛いわね…！」

神楽坂が赤くなつたでこを抑える。

「神楽坂もやるじゃないか。…じゃあ度胸試しと行こうか？」

「…？何するきよ」

ラグナの隣にバイザーを付けたスタンドが現れる。
手には不釣り合いな球体が付いている。

「スタンド：紫の煙。パープル・ヘイズ 神楽坂、これから挑む難題に立ち向かえるか？」

「な、なによ！その不気味な奴は…いきなり現れて…！」

「（スタンド…ッ！？スタンドだって！？そいつぁ大戦中の英雄の技じゃねえか！）」

神楽坂はいきなり現れたスタンドに驚き、カモは好奇心がどんどん膨れ上がっていく。

「ネギと仮契約したんだろ？なら、これから…そう、あいつはどんな険しい運命の袋小路に入ってしまうだろう。それでも、それでもお前はあいつに付いていけるか？見限らないでいれるか？」

「っ…！何よ、それがどうしたっていうのよ！そんなの問題ないわ

「！」

「そうか…なら、こいつに勝てるか？挑めるか？逃げないか？」

「…ちよつと怖い外見だけどどうってことないわよ！」

神楽坂はパープル・ヘイズにデコピンするため走り出す。

「駄目だ姐さん！そんな簡単に乗っちゃあ…！」

カモはパープル・ヘイズに挑みかかろうとする神楽坂に静止の声をかける。

カモはまほネットなどの知識により『スタンド』というものがどれほど強大なのか知っている。

先の大戦を生き抜き、その魔法にもとらわれない存在。そういう存在なのにまるで魔法のようなことをしてしまう。

このスタンドは見たことも聞いたこともないが『直勘』が告げている。

自分のオコジヨとしての、生物としての生き残る勘が告げている。

あの、あいつに近づいたら死んでしまうと。

パープル・ヘイズの腕が持ち上がり手に付いている球体を見せつける様にする。

「これを聞いても進めるか。この球体には猛毒のウイルスが入っている。触れれば30秒で発病、ぐちゃぐちゃに溶けて死ぬような骨すら残らない」

「っ…！？」

そのあまりの発言に両足で急ブレーキをかける。
そして距離をとる。そして疑問の声が出る。

「あ、あなたはどうなのよ！そのままじゃ死んじゃうんじゃないの！？」

「生憎、私は死なない。そして問う、これから理不尽ともかわらないこつという相手が出てくるかもしれない。それでもネギの隣に立つか？」

「……………」

神楽坂は考える。ネギと居たら死んでしまうような相手と戦うことになるのかと。

チラリとエヴァンジェリンと戦うネギを見る。

彼は必死に魔法を撃ちあっている。完全に押されているというのに諦めた顔はしていない。

「…な……………じゃな…わよ」

「ん？」

「あ、姐さん…？」

「なめんじゃないわよって言うてるのよー！」

神楽坂は猛毒のスタンドなど気にせずそのまま歩いていく。

「あ、姐さん！どうする気っすかあー！？」

そして神楽坂はラグナの前に立つ。その隣には唸っているパープル・ヘイズが立っている。

もし、球体が割れようというのなら即効でウイルスに罹ってしまうだろう。

そして、ラグナの額にデコピンした。

「ほんと…っ！なめんじゃないわよ。ガキの癖にあんなに頑張ってる…」

「…ハツハハハハ」

「な、なによ！その猛毒とかって言うのを試してみなさいよ！？そんなのどうってことないんだからね！」

「何、まさかここまで覚悟があるとは思わなんだ。さて、私の役目はここで終わりだろう」

そういうとパープル・ヘイズが消えていき、ラグナまで消えていく。

「ちよっ…！？あんた大丈夫なの！き、消えてるわよ！」

「なーに、いままで見ていたのは白い蛇の幻覚さ。私はちゃんといる」

そう言っただけの場に現れたのはなんとも奇妙な人の形をしているだけの者だった。

それからラグナの声が聞こえてくる。

「どうやらネギが勝つみたいだぞ。適当に祝ってやれ」

そう言っつて蛇は消えてしまった。

電気系統の字が書かれたプレートのある扉の前に立つのはラグナ
人。

それに相対するは半デコの剣士、桜咲刹那。褐色の肌の銃器を操る、
龍宮真名。

「まさか魔法先生達と連絡が取れないから探しに来たらこうなっ
ているとはな……」

「あなたが…やったのですか？」

「そう　　と言ったらどうする？まあそうなんだがな」

それを聞いた瞬間、刹那は剣を構え、真名はハンドガンを持つ。

「貴女の目的は…?」

「なに、もうすこし停電の時間を増やすだけさ」

「…?」

刹那たちがどうしようかと悩んでいたら「おっ、終わったみたいだな。スタンド：レッド・ホット・チリ・ペッパー」

ラグナの隣に爬虫類のような外見をもつスタンドが現れる。それを見た二人は即、構える。

「攻撃はしない。ただ電気をこいつに集中させるだけだ」

橋の方で大きな光がした。

そのあとレッド・ホット・チリ・ペッパーは電気を一気に集める。

体中がバチバチと光、力強さが見えてくる。

橋の方の光はすぐに収束した。

「貴女は…いつたい…?」

「そつだな…世界に居てはならない存在か」

奇妙な空気が空間を包んでいた。

戦いに必要なのは勇気ではない……タイトルだ！（後書き）

ホワイト・スネイクは遠距離操作型

ならばいけると思った。

幻覚も見せれるし。

世界を創るのは文章一人じゃない……タイトル一人一人だ！（前書き）

いえ、文章でした

世界を創るのは文章一人じゃない……タイトル一人一人だ！

ここは図書館島の地下。その一室。

クウネル達変態が集まる純粋な子供達にはとても見せられない世界。

「いや〜疲れたわ〜」

「いいんですか？ネギ君の血を奪わなくて……貴方なら簡単にできたはずでしょう」

エヴァとネギの魔法撃ち合い合戦はネギがくしゃみにより勝利。

世界の修正なんたらが発動して七分二十七秒速く、停電が復旧してしまった。

だが、ラグナがレッド・ホッド・チリ・ペッパーにより復活した電力を再び吸収。

『結界』がまた止まり、エヴァは空中で体制を立て直すことに成功。ネギに助けられることもなかった。

だが、作戦にホワイト・スネイクで参加したことがエヴァにはれ、散々怒られたりした。

それからはエヴァが負けたことにより授業に参加。主人権限が発動し、ラグナも無理やり参加させられる羽目に。

授業に出るたび刹那と真名から熱烈な視線を受けてしまう。これって私からにじみ出るカリスマってやつなのね！という感じでスルーしている。

で、クウネルが聞いたことだがラグナにも何かしら考えがあるらしい。

「私はどっちみちスネークが来ないと元の姿に戻れないから解く必要は無いんだな。あいつが来たら無理やりこの呪いも解いてくれる

だろうし」

「そうですか…スネークには来ないように文を出しておきましょう」
「老衰させるぞ」

フッフフ勘弁ですね、と胡散臭い笑顔をするクウネル。

「ガウ（じゃ、戦利品の報告でもするか）」

「今回八いいものが手に入りましたよ」

「フツ、だが、貴様らはこれには勝てまい」

「何かいいものがあるんですかラグナ？」

「カモーン茶々丸」

パチン、と指で音を鳴らしたらどこからかサツ、と現れる茶々丸。周りはどよめいたが、「茶々丸の手に持たれている裏向きの写真を見たらすぐに冷静になった。

そして皆が息をのむ中、茶々丸がその写真をゆっくりと表に向ける。見た瞬間、クウネルは血の海に倒れた。

「見よ！喝目せよ！これぞ超高性能SPW財団製カメラで撮った全裸エヴァだ！」

この写真はどうかやらネギとの魔法撃ち合い合戦で負けたときに素っ裸になった時、茶々丸によって納められたものである。

「ぐふ……なかなかいいものをお持ちのようですね……このラグナのパンチラと交換でどうですか？」

「待て！私がそんなのでいいわけないだろう！ていうか何で持っているんだ！」

「ラグナさんは黙っていてください。この写真は私が撮りましたので私のです」

「え！？いや、撮ったのは私のカメラだよ？だからデータも私のな
んだよ？」

「関係ありません。クウネルさん、これとかがでしよう？」

「おお……なかなかですね。分かりました。これを譲りましょう」

「これで交渉成立ですね。今後とも有益な交渉ができることを望んで
います」

「……何だっつてんだこいつら」

「ガウ（世界は広がった…俺もまだまだ井の中の蛙のようだな）」

「そうでスね。私の精進が足りません」

「駄目だこいつら、早く何とかしないと……」

そういう風に和気あいあいとのんびりと過ごしていく変態メンバ
ーであった。

そんな中、突然の呼ばざる客が現れる。

茶々丸のようなのでは無い。飛び入りだ。

チャランチャラン

鈴の音を鳴らして入ってきたのは短髪の背中などいたる所に剣を装
備した男だった。

クウネルはその男を見たあと一言。

「おや、お久しぶりですな緋平ひらさん。いいものが入ってますよ」

どうやら彼はここ常連のようだ。

しかし、いたるところに剣。それは奇妙すぎるのではないのらう
か。

「いや、仕事でトラぶってなあ。しかっしこの剣肩こるわ」

「そうですね。あ、これなんか緋平さんの趣味じゃないんですか」

「すまんなクウネル。今回は写真買い来たんやないんや。今回は仕事でな」

少し含みがあるような言い方でエージエントCを見ながら言う緋平。だが、それもすぐにクウネルに視線を移し誰も気にしなかった。だが、エージエントCだけは違っていたのかもしれない。

「すぐ終わると思うで。そこのおっさん殺すだけやから」

言った瞬間、一本の剣を振りぬき、エージエントCに突撃する緋平。だが、ラグナ達がそれを見過ごすわけがない。緋平がいた場所はドア付近。十分防御に間に合う。

「『中条流奥義 絶妙剣』！」

ガキン

振り下ろされた剣はラグナのスタンド、アヌビス神にて受け止められていた。

そして緋平の周りを囲むクウネルと獅子神。茶々丸はエージエントCと下がっている。

「緋平、お前どうしてこんなことをする？」

「簡単なこつた。そこのおっさんがうちの組織抜けるんが悪いんや」

「組織…ですか？」

組織という単語に『完全なる世界』を思い出したクウネルが問う。

「そや、わいらファイブエキスパートから途中退場は無いやる」

「カウ（で、抜け出したエージェントCを殺しに来たってわけか…）」

「せやから、組織のケツ拭きせなにやらんねん。じゃませんといてくれるかー？」

「無理だな」「無理ですね」「ガウ（無理だろjk）」

即答の三人。その答えに予想はしとった、という顔の緋平は距離をとり、剣を下げる。しかし、いつでも切りかけられるような状態である。

「なら、しかたない。お前らも殺って、おっさん殺すだけや。ちいと痛いけど我慢しーや」

そういつて走り出す緋平。

三人は構える。ラグナは真ん中でアヌビス神を構え、クウネルは後方で重力魔法を唱える準備、獅子神はラグナのサポート。

「いくで！『新陰流奥義 一刀両断』！」

振り下ろされた剣をアヌビス神で受け止める。

受け止めた時、奇妙な感覚を感じる。体が動かないのだ。

「（なっ…！？これは一体…）」

「へん！この攻撃を食らったなあ！一刀両断は受けた相手を痺らせるんや！」

「ガウ（助立ちするぜ！『超級獣王電影弾』！）」

動けないラグナを見て獅子神が緋平を攻撃する。

しかし、流れるような動きでその攻撃をかわし、かわし際に剣を一振り。

「ガウウウ（つうつう…て、てめえ…）」

獅子神の勇ましい胴体からは真っ赤な血が流れ出る。

手傷を負ってしまった獅子神に、動けないラグナ。とどめを刺そうと緋平が剣を振り上げるとき。

空気が淀む。違和感と危機感を感じた緋平はすぐにその場を離れる。そこは黒い球体が突っ切って行った。これは重力魔法。

「やれやれ、あなた達だけでは心配ですね」

「ちい、クウネルかいな。まったくめんどくさいやつちゃで」

「獅子神はラグナを啜えて離れていてください。はあ…またここが壊れてしまいますね」

「ほな、いくで」

なんと緋平は離れた場所で剣を構える。剣は接近して使うもの、こんなところで構えてはクウネルの重力魔法が襲いかかる。

クウネルは違和感を感じ取った。

二人をここまで追い詰めておくほどの技量の持ち主が無駄な行動をするわけがない。
自惚れてはいないが自分も紅き翼の者。なめられるようなものではないと思っっている。
緋平もそのつもりはず…と思ってクウネルは緋平を見るが先の考えは間違いでないと気付いた。
彼の周囲に気が集まって行くのである。

「はああ『新当流奥義 神妙剣』細切れになれえええい！」

「くう…!？」

クウネルは危険を感じ取り横へ転がり込んだ。

緋平の剣先から遠当ても比べモノにならないような気の集合体が飛び出す。

それはクウネルのいたところを完全に削り飛ばし、跡形もなく消滅させてしまった。

たとえるならそれはそう、ドラゴンボルの孫 空の超かめ め波 みたいなもんである。

「おーおーかわしよったか。そりゃそうやろうな。なんたってワイの攻撃や。ワハハハハハ」

緋平は自分の攻撃が英雄がかわすほどの能力を持っており随分満足のようなのだ。

「てめえーいい加減にしやがれ」

そこに現れたのはラグナと茶々丸だった。

「ラグナ！獅子神はどうですか？」

「心配ありません。どうやら懐に隠し持っていた写真のおかげで、命を取り留めました」

「そうですか…良かったです」

「…おい、お前らそれ聞いてなんとも思わへんのか…？」

ラグナが緋平の前に立つ。

「お前だけは許せねエ。獅子神を切り、クウをここまで追いやったお前だけはゆるさねえ」

「へえ、嬢ちゃん。ワイを許さんと。それやったらワイに勝つってことか？」

「そのとおりだ」

「面白いこといいやる嬢ちゃんやで」

緋平が剣を構える。ラグナもアヌビス神を構える。

「ほおーなかなかええ剣やないか。ワイが勝ったらそれくれよ」

「お前が勝てるわけねえんだよ！」

ガキン

二つの剣が渡りあい、小さな火花をあげる。

ギギギギ

「ほお〜近くで見たらますますほしくなってきたの〜。まるで水にぬれているような感じだな」

「喋ってないでさっさと死ぬ準備しやがれ！」

ガキン キン キュイイン

ラグナは思いつきり攻めている。

しかし、いつまで経っても緋平の剣を折ることも、剣を飛ばすことも、緋平自身に刃を付けることも、できないでいた。

緋平は楽な顔して呑気に剣を受け流しているだけだった。

たまに競り合うかと思えばアヌビス神の刀身を眺めているだけだった。

ギンン ガキンキュイイイン

もう一度競り合った後、ラグナは一度仕切り直しに後ろに飛んだ。

「嬢ちゃん〜もうおわりかー？」

「くっ（いつまで攻めても埒が明かない…何か奴の想像を超える攻撃をしなければ…）」

キヨロキヨロと首を動かすようなまねはせず、目だけで切り合って瓦礫まみれになった部屋を見る。

どうしようか悩んでいると急に頭の中に声が聞こえてきた。

「（一体いつまで悩んでるんだ。俺の能力を忘れたか？）」

頭の中で響くような声。像は小太郎を酷くした感じ。
アヌビス神のスタンド像である。

「（忘れていたんだろう。俺に切れない物はない。どちらかと言うと抜けるけど）」

そう言うって像は消えていつてしまった。

アヌビス神の能力は受けた攻撃を学習するだけではなく、もうひとつの能力があるのだ。

じゃあなんでさっきまで打ち合ってたはずなのに勝てないの。という方がいるだろう。それは緋平が単純に手加減していたのである。それでも何十回も打ち合った。そのたびにアヌビス神は覚え、強くなる。

それでも手加減してられる緋平の底の深さが深いということだろう。

ラグナが状況把握とアヌビス神のスタンドが言っていた事を考えていると、ヒーローの変身を律義に待つ悪役並みに待っていた緋平が動いた。

「もうええやろ。嬢ちゃん切るのあれやし『新陰流奥義 一刀両断』で痺れといてくれや」

一気に近づいた緋平の剣が振り下ろされる。

ラグナはアヌビス神を横に構え迎え撃つようにする。

「嬢ちゃん、覚えときや。これ受けたら痺れンやで！」

ラグナは顔を見せずに下を向いたままだった。

ガキイイイイン

緋平の剣をラグナは確かに受けた。

これで動けまい、と思った緋平は適当におっさん殺るかー、と思いいラグナから目を離そうとした。

だが、離そうとして一瞬見えたのが幸いだったのかもしれない。見えたのは大きな瓦礫だった。

「なっ…！ちよ、まちいや！」

嬢ちゃんはどこに、緋平は剣を構え、瓦礫を目に収めつつ周りをみる。

どういうわけか動ける嬢ちゃんはこれに紛れておそってくるはず…だが、どこにもいない。後ろは見えていないが剣格としての勘、相手の心意気。それを考えて後ろは無いと思った。

どこだどこだと探していると、面前まで迫った瓦礫の後ろから声が聞こえた。

「俺は後ろに居る。このまま切るが受け止められるか？」

緋平はバカが、と思った。あんな嬢ちゃんの細腕で、あんな刀身の細い刀で、こんな分厚い瓦礫が切れるわけないと。

なので腕で瓦礫を受け止めようとした緋平は切られた。肩から股間辺りまで斜めにバツサリと。

緋平は我が目を疑った。

どうやって…瓦礫を切らずに…

アヌビス神のもう一つの能力は『斬戟、本体が物質を透過すること

ができる』

この能力により目の前に壁があるつと、後ろにいる敵を切ることができるのだ。

緋平は切られてま後ろに倒れてしまった。背中に背負っていた剣がバラバラと落ちた。

ラグナは瓦礫を蹴り飛ばし、倒れた緋平の前に立つ。

「ふう、これで死んだか？ いや、魔法使いじゃ、無いんだ。そんな柔じゃないはずだ。そうだろ？」

「く、く、クハハハハハハハハハハハハハハハ」

倒れていた緋平は突如笑い出す。その笑いには狂喜が含まれていた。

「ほんま楽しませてくれるで。もうええ手加減せえへん。いや、どちらかと言うとできひんが正しいのぉ！」

バラバラになった剣の束から何やら気品の違う二振り剣を選び鞘から振りぬいた。

「この刀は相模国の刀工・五朗入道正宗の作。正宗！もう一本は京の刀工・長谷部国重の作。圧切！覚悟せえよ！」

緋平がラグナに斬りかかる。

なにかの圧迫感を感じるラグナは反射的にアヌビス神で防御した。

「ほれほれ！『二刀流奥義 虎振』くらえええい！」

ガィィィン ジャキィィン

二つの剣が三つにも四つにも見えてくる。

その剣戟を必死にアヌビス神で受け止めるラグナ。

しかし、押し切られアヌビス神が回転しながら宙を舞う。

ラグナの手にはもう武器がない。

「うひゃひゃひゃひゃ、さいならな嬢ちゃん。あの世でにいつぐう
う…!？」

ラグナにとどめを刺そうとした緋平が急に苦しみの声をあげる。

顔をあげて見ると、綺麗な手が、その手の指が綺麗に緋平の両目に
突き刺さっていた。

しかし、その手は手首辺りから途切れており、ワイヤーでつながれ
ていた。

その伸びるワイヤーの方を見る。

「勝利のV。^{ファイ}ロケットピースです」

茶々丸が残った方の手でVサインを作っていた。

ラグナは首を縦に振ると落ちてきたアヌビス神をつかみ、終わらせ
る。

「これで、終わりだあ！」

アヌビス神の柄を握り緋平を切るッ！

「ブオブオブオブオブオブオブオブオブオブオブオブオブ
オ」

幾度の剣戟が緋平をおそう。その体は真っ赤に染まっていたがまだ

息をしていた。

だが、仲間を傷付け、世を乱すやつはこの俺が許さない！

「ブオナジヨルナータ（よい一日を）」

バタリ

白目をひんむき再起^{リタイア}不能となった緋平。彼の天使^{しゃしん}は誰だったのだからだろ。
うか。

「で、説明してもらいましょつかハーシエントC?」「

まだ埃っぽい感じのする部屋で、五人が集まっていた。

「それでスね…なにから八なしましようか。まず、ファイブエキスパート VEXは名の通り五人の精鋭が集まった集団です。皆、英雄の引けを取らぬ実力の持ち主です」

「ガウ（それほど奴がいるのか…エージェントはそいつらから抜けだしたんだな？）」

「はい…私はあの人たちのやり方に賛成できなかったのです」

エージェントCはとてもじゃないが聞けないような顔をしている。それほどつらいことがあったのか…、四人はそう思った。

「では、緋平さんが失敗したからあと三人ですか」

「ガウ（へん、あいつ程度なら屁でもねえぜ！）」

「何いつてるんですか。真っ先にやられたようなものでしょう」

「ガウ（うぐ…）」

獅子神の言うとおり大分苦戦したが今回は奇襲のようなもの。万全の準備をしておけば勝てるはず、と踏んでいるのだ。しかし、エージェントCの暗い声はその思惑を断ち切った。

「残念ですが、彼はVEXの中で一番弱いのです…」

「「なっ！」」

「ま、待ってください。では、エージェントあなたは彼より強いのですか？」

「いえ、私が抜けての状態です。残念ながら残り三人はもっと強いはずです…」

この言葉を聞いた者は皆、喋ることができなくなってしまった。これからエージェントCを狙い襲いかかるVEXの三人達。ラグナ達は一体どうなるのか。

「いででででで！看護婦さんもっと優しくしてええ〜」

「キモイ。死ね」

「グバァァ。…ひ、酷いで…いくら尻触っただけやないか…！」

「冥土送りDEATH」

世界を創るのは文章一人じゃない……タイトル一人一人だ！（後書き）

オリキャラの緋平さんです。

彼のモデルはるる剣の張。：全然似てないけど。

彼の技は太閤立志伝Vから引っ張ってきたので正確かどうか知りません。ごめんね。

まあVEXとの戦いはだいたい主人公がネギとかとからめない時の緊急隊です。

たとえば修学旅行の時とか。

夏だ！海だ！タイトルだ！（前書き）

夏なのに忙しい。

いや、夏だから忙しいのか。

そんな感じですよ。

夏だ！海だ！タイトルだ！

ここは学園長室。時間は夜。三年A組の方達は修学旅行三日目である。

そんな『登校地獄』掛けられ組のエヴァと私。その手伝いの茶々丸はを含め、暇つぶしにここへきていた。謙信？おうちでゴロゴロしてますよ。

エヴァと学園長の二人は囲碁をしている。生憎私はこの手のボードゲームのやり方を知らない。それに嫌いだし。

だから茶々丸と眺めてるだけ。それでも結構暇つぶしになるんだよ？他人の対局って見ごたえあるよね。学園長、エヴァに負けすぎだけど。

パチン

エヴァの一手が置かれる。それを見た学園長はその蓄えられた長いひげを撫でて「まっ」待ったはなしだ「…何じゃケチじゃのっ」

学園長の待ったは取り消されたようだ。残念。

トゥルルルルル

な、なんだ！？ボスからの指令か！電話はどこだッ！

「いいえ、学園長の電話です」

何イ？その電話をよこせ！ちょ、何するんじゃラグナ殿…！？うるさい、ボスからの指令だ。何でてめエが持ってやがる！

そう言っつて私は学園長から電話を奪った。

チャッ

「もしもし、ドッp…じゃ、なかった。ラグナです」

『え？ラグナさんですか！？えーと確か学園長に掛けたはず…間違えちゃったのかな…す、すいません間違えました！ブツ…』

何て野郎だ。ボスの電話回線を勝手に使っただけじゃなく間違いだと！？フザケンナ！クソクソッ！

「お前分かってやってるだろ」

「ごめんちゃい…てへ」

ちなみにネギは私の番号は知らない。なので掛かるはずがない。

「まったくじゃ…で、誰からだったのじゃ？」

「すぐにまた掛かってくる」

そしてまた掛かってきた電話に同じことを三、四回繰り返してやっ

た。

うむ、学園長が長い頭からも汗流してあわてている。そんなに大事な用件だったのだろうか。

それなら悪い事してしまったな。

しかし、いい予感と悪い予感がする。

その予感は当たったようで学園長がこっちを見て何か思いついたような顔をしていた。

「こっちみんな」

「ん？何だジジイ。マヌケズラして」

「いやゝの？なんでもネギ君の話によると関西呪術協会の総本山が襲われている。長、詠春君まで戦闘不能になってしまったようなのじやよ。そこで、誰かに助っ人に行ってほしいのゝなんて。タカミチ君はおらんし」

聞き捨てならぬ。詠春が？おいおい、冗談だろ。仮にも紅き翼で共に戦った仲だぜ。

ネギの野郎がトーキング・ヘッド付けられてるんじゃないかねえだろうな。

というか、それが本当だとして助っ人うんぬんは無理だろう。私達を見て思いついたような顔をしていたが『登校地獄』があるんだぜ？

それを何とかしないとどうしようもないんだぜ。

「ラグナの言うとおりだ。さっさと適当な魔法先生でも、向かわせてやれ。ほれ、さっさと対局の続きするぞ」

学園長はしわくちやの顔をどやっとした顔でこう言った。

「それが……できるのじゃよ」

その顔はまさしくどや顔だった。何かこう、胸の奥からこみ上げてくる感情が抑えられそうにない。

…

碁盤をどかし、なんだか魔法くっつけてきな感じの空間ができていた。

どや顔だった学園長には刺殺。絞殺。毒殺。射殺、斬殺、撲殺、博殺、磔殺、焼殺、扼殺、圧殺、轢殺、凍殺、水殺、爆殺するような勢いでやったのだがたんこぶ一つで済んでいた。

どういうことなの…？考えられる限りの殺し方をしたのだが…何故か死ななかった。これは孫ラブパワーとか不明なパワーが働いていたりするのだろうか。

私がどうしたら殺せるのか考えていたら学園長が『5秒に一回書類にハンコを押す』というやり方で呪いの精霊をだませることを見つけた。

だが、考えてほしい。これは一人での話だ。エヴァと私を連れ出そうというのなら先の工程を2回やることになる。学園長オワタ（
^o^）ノ

目処がついたようなのでエヴァが水晶玉持ち出して坊主と交信するようだ。

「一分半持ちこたえる。そうすれば私がすべて終わらせてやる！」

エヴァが坊主たちの士気をあげるためかっこいいこと言ってる。だが、帰ってきた答えはなかなか絶望的だった。

『エ、エヴァちゃん！？た、大変なの！ネギが敵の攻撃で石になっちゃいそうで！刹那さんはでっかいのに落とされるし…と、とにかくすごくやばいの！は、早く来て！』

えーと。「こちら本部。よく聞こえない」

これで大丈夫なはず…

ドバアアアアン バシャンバシャン

水晶玉からは悲痛な音が聞こえてくる。

エヴァや学園長、拳げ句に茶々丸までこっちを見てくる。

まるで『お前これどうするんよ…』という目をしている。

あれか、私がドッピオコールセンターやったのが悪いのか。それで色々遅れてこんな状況になったのか。

「……………それでも私は悪くない」

「悪いわ!」

エヴァはそう言って私と茶々丸を影の転移魔法の渦に放り込んでしまった。

…

ごめんなさい。この状況は素直に謝らせていただきます。

どういう状況なのかと言うと、スクナ、全身でている。後つま先のところが出てないくらい。

ネギ、体半分は石化。刹那、湖にプカーって浮いてる。このか、スクナの制御のため天草千草と一緒に。

神楽坂、どうしようか悩んで知恵熱。白髪の少年、ポケーとしていたが私達が現れるとすぐに構えた。

……ええ、ちょっと酷いですね。はい。

「うう…？エヴァンジェリンさん…ラグナさん…」

坊主…何かすまん事した。どっちにしる石化していたような気がするけど謝らなければならぬ。

「ぼーず、安心しろ。この私が華麗に素敵に素晴らしくこの戦いを終わらせてやる」

「私の分は？」

「その白髪のカギでも相手してろ」

なんと！あの大きそうで見栄え良く倒したらキヤーカーコイイなんて言われそうな奴じゃなくて、あのお坊ちゃんですと！

反論しようとした私だったがエヴァは茶々丸と一緒に飛び立ってこのか救出に向かった。

やれ、白髪少年の相手でもしようかと思ったら神楽坂がまだいるじゃないか。

「おい、坊主を壊さないようにどっか行ってる」

「ええ！？…ど、どうやって運べば…」

「もたもたするなあ！」

「はいい！」

神楽坂はネギを丁寧かつ迅速にスタコラサッサ、と運んで行った。

で、私は白髪少年と対峙する。

適当にぶちのめしてスクナ倒そうと思ったら少年が話しかけてきた。

「…『人形使い』と一緒に居るといことは……」

怪訝そうな顔をして悩んだ拳句だしたような答えを私に出す。

「『悪霊使い』…、か？」

ほお、少年良く分かったじゃないか。エヴァと居るだけなら茶々丸だつてその範中なのにな。

「噂で聞いただけだよ。『サウザントマスター』に『人形使い』と一緒に呪いをかけられた、だとか」

よく知ってるな。噂で聞けるもんじゃないぞ。

「ああ、確か『サウザントマスター』がかけた呪いは……『幼女化』」

「どんな魔法だあ！！」

「違うのかい？『人形使い』も『悪霊使い』も幼くなって能力まで封印されているらしいじゃないか」

確かにい！確かにい！エヴァは幻術で大人ボディだったからな。それが二人とも幼女なら…そう考えるのが普通かもしれん。

「どつちにしろ関係ないよ。いくら大戦の英雄だからと言ってもここで死ぬ」

おおーえらく強気じゃねえか。少年に負ける気はないんでね。

さっさとコイヤ！簀巻きにして罪袋かぶせたる。

「『ドリス・ペトラス』の槍」

少年がそういうと周りにいくつもの石でできた槍が現れた。

石の槍の乱れ打ちか…

「だが、残念だったな！超低温の世界ではそんなもの関係ないッ！石の槍だろうと止められる。爆走する機関車だろうと止められる！荒巻く海だろうと止められるッ！」

石の槍が迫ってくる。俺を串刺しにしようとする。

目前に迫った石の槍はまっすぐ俺を貫くはずの機道だった。

だが、道は逸れ、不可思議な方向へと反転を繰り返している。

カンキ ギュン カキン

そしてその石の槍はビデオの巻き戻しを見るような感じで綺麗に白髪少年に戻って行った。

ザシユ ジュサ ザクザクザクザク

少年が放った石の槍は俺の周りを浮かぶ氷の楯により反射された。

石の槍の勢いで少年は湖の向こう側まで飛んで行ってしまった。

誰もいない中で最強の防御の名を言う。

「ホワイト・アルバム ジェントリー・ウィープス！」

しかし、ここで重要なことに気付く。

「はっ！しまった……止めると言っておきながら、反射してしまっ
た……」

キヨロキヨロ

周りにだれもないことに気付いて安堵の息をもらすラグナだった。

…

少しのんびりしてエヴァがこのかを助け終わっているであろうところに
歩き出した。

どこからでもその大きい姿が見えるスクナ。

その周りを飛び回っているエヴァ。……うん、なんか小物みたい。

きっと茶々丸の結界弾が効かないから詠唱しながら飛んでるんだろ
うな。

なら俺が手伝ってやるぜ！

ダッ

ザ・ワールド
世界！！

時間が静止する世界でナイフだとか色々物を置いて飛びあがっていき

世界の継続が難しくなるとクラフト・ワークでその場に固定。安全にエヴァの隣に付きました。

「エヴァ〜大変そうだな」

「契やつく、に…従いッ！我に、した…がっ！」

「大丈夫か？手伝ってやろうかあ」

「え…氷の、じよつ、王！」

「そうか。手伝ってほしいか？ホワイト・アルバムで、あのでかブツを周りの空気ごと凍らせる！」

エヴァが『とこしえのやみ』を叫ぶ前にスクナが凍ってしまった。

その見たくない現実に、そむけそうになる現実にエヴァの怒りの矛先はラグナに向いた。当然である。

「バツカ者おおおおお！！！！」

「わざわざ近衛このかを助け出し、どこかで見てるかもしれないばーや相手に威嚇回復のために特大呪文をせつせとかわしながら唱えたのだぞお!？」

エヴァがこれまでの努力を熱烈に語っている。私はそんなこと気にせず氷漬けになったスクナに別の手で触る。

そして私は手をまるでスイッチを押すような形にして、「エヴァ」
花火だぜえ」

エヴァのえ?という返答が返ってこないうちに親指で見えないスイッチを押した。

ドオオオオオオオオオ

「きたねえ花火だ」

キラール・クイーンンの起爆型爆弾で氷花火です。なんじゃそりゃ。

バシヤンベト

湖とかに氷の破片とかスクナの体液っぽいものが散乱している。きめえ。

ベシヤ

近くで音がしたから振り返ってみると体液っぽいなにかで汚れたエヴァがいた。

「くつくつく…何がいる？ぼーるぎゃぐあいますくなわろうそく、それから……」

「マスター×××^{バキューン}とかどうでしょう」

茶々丸もべ茶べ茶になっていた。なんだか黒い……。

ここは三十六計逃げるに如かず！

逃げ切れると思っていた私がバカでした……

すぐさま茶々丸の結界弾が飛んできて、結界を張られ（これで世界で逃げだすこと不可）エヴァのこおるせかいでおもちかえり！

後は皆さん言わなくても分かりますね？では私は自分の体を心配しておきます。

…相棒、先に逝ってるぜ……ガクッ

夏だ！海だ！タイトルだ！（後書き）

八月中は忙しそうなんで更新できるか分かりません。
こんな駄文を楽しみにしている心優しき人達、申し訳ありません。

ああ、ACE R楽しみだったのいい！

タイトルレース(前書き)

わずかな時間を見つけて

タイトルレース

ここは図書館島の地下。

ラグナを含む四人がまたもや集まっていた。

「で、修学旅行どうでした？」

クウネルが聞いてくる。他の二人も聞きたそうにしている。仕方ないので話してやるか。あんまり勿体ぶるのもどうかと思うしな。

「そうだな。まず、『悪霊使い』のラグナ。とばれた」

「英雄とばれたんですか。どうしてとばれたんですか？」

「あいつだあいつ。オコジヨのせいではれた」

何でも私がスタンドを使うのを見たりして正体を見破ったようだ。

……他の魔法関係者は分からなかったようだけど。

「で、帰ってきてそうそう師匠になってくれたとか」

魔法は使えないし、格闘もスタンドに頼ったところが大きい。

こんな私に教えられることがあるのか。

魔法関係はエヴァが教えられるけど……私にできるのは模擬戦程度だろう。

「ほう。色々大変なんですね」

「それだけじゃないんだ。エヴァ何が頭に來たのか弟子にするのに条件を出したんだ。その条件がネギが私に一発当てられたらだぜ。無理がありすぎる」

かわすだけならいくらでもできるんだ。ネギの攻撃が当たるわけないんだ。

「ガウ（がんばれよ）」

獅子神からも応援されたし何とかしようか。

私ができるのは伝えること。私が信じるもの、信じたもの、大切だと思えるもの、正しいかどうかではない。正しいと信じるその思いを伝えること程度だろう。

未来を、まだ子供達に伝えること色々あるのか。教える側ってのもいいものなのかもしれないな。

チリーン

ドアに付いている小さな鈴が鳴った。

これがなるといふことは誰かが來たといふことだ。いつものメンバーは來ている。では、誰だ？

「うおーい」

「どづも〜っす」

「おひたっす」

常連、とまではいかないが彼らもよくこのクウネル写真館的な場所へ来る人たちだ。

最初に挨拶してきたカツコイイ系の男は凍次。

次がカークランド。髪が左右に飛んでるぽっちゃりした奴だ。

最後にラインバック。まるで仗助のようなリーゼントなのだか若干、もどきである。カークランド同様愛嬌のあるぽっちゃりした奴だ。

「おや、久しぶりですね。皆さん。久しぶりでしょうか」

クウネルが爽やかに話しかけている。

彼らも久しぶりだというのに気楽に話しているようだ。

新たに三人を迎えて冗談交じりに話していたのだが、凍次がふと奇妙なことを言い出した。

「実はな、今日は仕事で来ているんだ」

「仕事ですか？女の子のパンチラでも撮るんですか？」

「違う。……と言うかお前はいつもそんなことを考えているのか」

凍次があきれた声を出す。まあ冗談とはいえいつも同じようなこと言っただら仕方ないよな。

そして、凍次が立ち上がりカークランドとラインバックも席を立つ。そしてこう一言。

「エージェントC、お前を殺す」

どこかのヒロインに言うべきセリフを言い放った。

瞬時に私、クウネル、獅子神、エージェントCが臨戦態勢をとる。前の戦いでは急だったためエージェントCには下がってもらっていたが今回は違うぜ。

皆が各々攻撃を仕掛けようとする。

そこを凍次の声が遮った。

「待て……お前もスカウトだろう。3狩リアだ……3狩リアで勝負しよう」

説明しよう！3狩リアとは三対三で戦う方式だよ。ちなみにスカウトはナイフとか使っちゃう人の事だよ。全然関係ないね！

「ガウ（四対三だと分が悪いと思っての3狩リアか！だが、わざわざ乗るつもりはないぜ！来いよベネット）」

「待て、3狩リアの提案を持ちかけた時点でルールを破ると……」
ルールを破ると……？

……

つ、この間は一体……！？

な、何か恐ろしいことが起きるのかぁ！

「鶏になる」

「どおしてえ!?!」

引っ張って、引っ張って、それがこの有様ですかあ!

「お、恐ろしい。3狩リア……なんて恐ろしい決闘方なのでしょうか……」

「ガウ(ピヨピヨピヨピヨピヨピヨピヨピヨピヨピヨガタポン)」

「ああ!獅子神がなんだかひよこっばいものになってしまいそうですよ!?!」

なんてこった。3狩リアのルールを少し破りそうになっただけでライオンか鶏がよく分からないものになってしまうなんて。

いつそルール破ってしまえば完全な鶏になれたのに。ちくしょう、なんて残酷な決闘方なんだ!

「じゃあ始めるか。3狩リアの開幕だ!」

ラグナ・クウネル・エージェントC vs 凍次・カークランド・ラインバック

くっ、この即席のチームで勝てるのか?

相手はわざわざこの戦闘法を提案してきたぐらいだ……チーム戦は強いのだろう。

「やってみなきゃ分からないか。行くぞ二人とも!」

「ええ。なめられっぱなしはどうかと思いますしね」

「ふう、やれやれですナ」

おい、それ私のセリフだ。

「お喋りはそこまでだぜ！」

凍次がこちらに向けて走り出す。

「行くぜ！氷結真拳奥義『凍りつく時間』！！！」

一瞬、ホルス神やホワイト・アルバムにも及ぶほどの氷が私たちの周りから現れた。

その氷は私達を呑みこもうとする。

っ！このままでは飲み込まれるッ！

「クウネル！エージェントC！熱いが我慢しろよ！マジシャンズ・レッド魔術師の赤！！！」

私の体からうっすらと鳥の頭をした人の体を持つスタンドが現れる。マジシャンズ・レッド、その口から鉄をも溶かす高温の炎を生み出す。

「炎を自在に操るマジシャンズ・レッドにイ！氷など目ではナイッ！」

氷が炎で解かされ水蒸気が辺りを白く染める。

……あれ、やばくない？

タツタツタ、と誰かが走る音。

私の周りにはクウネルとエージェントC。
動くものはあいつらしかいない。

「水蒸気があだになったな！奥義『まといし氷の破片』！！」

「なッ！こ、凍ってしまっ！？」

くっ、氷を溶かしたのが……もう一度溶かすか？いや、そんな事しても繰り返すだけだ。

この水蒸気をふき飛ばさなければ。

「エージェントC！！」

クウネルがエージェントCに叫びかける。

一体……そうか！

「そういうことですネ！」

エージェントCの仗、先のドリルが急速回転する。

ドリルを上につきあげそのドリルが巨大化する。

ドリルは回転し、その回転で強烈な風を生む。

「ギガドリル薙ぎはらい！」

轟、と凄まじい音を立てて「って薙ぎはらっんかい！回転で水蒸気を吹き飛ばすのかと思ったわ！」

「いや、薙ぎはらった方が早いでしょ？」

やってやったぜ、ていう顔のエージェントCがどやって顔をしていた。

しかし、これで氷の技は効かないぜ。

「ふっそれはどうかな。俺があの程度の力だと思っつか？」

全力じゃないってことかよ……

あの速さ、氷の精度、スタンドに引けをとらないな。

凍次……並みの者じゃないってことか。

「えエ、彼はファイブエキスパートの氷結の凍次と呼ばれるほどのすごい腕ですから」

「最初に言えよ！！何で黙ってるんだ！？」

「私ヲ狙ってきたということはファイブエキスパートしかいませんし……」

ぐう確かに……

こんな似非紳士狙うのは数少ないだろうしな。

「よそ見してていいですか！DB真拳奥義『かめはめ波』っす！！」

カークランドが両手を前に突き出し、青白く光る光線のようなものを打ち出してきた。

その光線はカークランドの両手から線を引くように私たちのところへ飛んできた。

あ、あれは当たるとまずいか……！

私は危険を察知し、咄嗟にエージェントCを引っ張り横に飛ぶ。だが、クウネルはまだそこに止まったままだ。

光線は吸いこまれるようにクウネルに当たり、貫いていった。

光線が通り過ぎた後は小さな雲のようなものがもくもくと漂っていたが、クウネルのいた場所だけそれが多いように思えた。

そしてそこから魔法障壁に守られたクウネルが現れた。

「無事だったかクウネル！」

「っ！ラグナ！近づいてはいけません」

はっ、と私がカークランドの居る場所を見るとすでに小さな気弾をクウネルに放っていたところだった。

「でやでやでやでやでやあッす！おまけに奥義『ギャリック砲』っす！！」

青白い小さな気弾がクウネルに連続で当たり、それを魔法障壁で防いでいると先ほどの光線とはまた違った色のする砲撃を放った。

そしてカークランドの放ったそれは見事に全弾当たり、先ほどとは比べようもないほどの煙で場が覆われた。

そして煙は風に乗りだんだんと晴れてきた。

カークランドの勝利の笑みが見える。凍次とラインバックも同様の顔だった。

しかし、どこからかスンとした声が聞こえた。それはクウネル・サングラスのものであった。

「連続気弾はフラグ、ですよ？」

煙から現れたクウネルは傷一つ、汚れ一つ受けていなかった。

「クウネル！流石だな」

「幼女に褒められると照れますね」

「くっ！カークランドの次はこの俺っすよおおお！」

傷一つ受けていないクウネルを見て呆然としていた三人だったが、いち早く持ち直したラインバックが飛び出してきた。

ラインバックはカークランドの気弾を防いだ場所から離れていないクウネルの突撃する。

「行くっすよおお！ギャルゲー真拳奥義『しっしょもの刺笑物語』っす！」

「な、なんですかこれは！下にウィンドウが……！？」

なんとクウネルの上半身部分によく見るウィンドウが現れている。さらに周りの風景までもが変わっている。

これは……空間を無理矢理塗り替えるほどの大技か！

あたりは夕焼けに染まる砂浜だった。

そこにクウネルと見知らぬ女の子がいる。歳は……16〜17くらいであろうか。

その女の子は夕焼けで見間違えるかもしれないが顔を赤らめている。

両陣営、この空間では動けないのかじつと事の結末を見ている。

「わ、私……クウネルさんのことが好きなんです……」

少女が、全く見知らぬクウネルに対して超問題発言をした。それに対しクウネルは紳士な返しをした。

「私はあなたみたいなのババアはボールと言うかデットボールです」

クウネル……あんたは漢へんただよ……

クウネルの答えを聞いた少女は俯いて震えている。

クウネルの答えがよっぽどショックだったのだろう。

なんか、すごくクウネルにいらついできた。

そして少女は震えていた体を無理やり止めると顔をあげた。

その顔を見たとき私達はぎよっとした。

少女の目は白目と黒目が反転しているようだった。まるで狂気に彩られてしまったようだ。

少女はどこからか持ち出した包丁を持っている。

「クウネルさんが私に物にならないなら私の物になるようにするしかないよ。うんそうするしかないよ。きつとどこか悪いんだ。そうじゃないきゃ私のことを拒絶するわけないもん。悪いなら病気を治してあげなきゃだめだよ。そのためには病院に行かないきゃ！……駄

目、それじゃあ間に合わないかもしれないから今からやるしかないよね。あれ？クウネルさんどうしたの？顔、真っ青だよ。ああ！きつと病気が進行してきたんだね。そ、それならすぐに治療しなきゃ！大丈夫だよ……私こういうことしたことないけどきつとうまくいくよ。だって大好きなクウネルさんのためなんだもん。うふふ、待っててねクウネルさん。私がすぐに助けてあげるよ」

彼女が言いきるやいなやクウネルの叫び声が響き渡り、とても見せられない者が広がってしまった。

そして空間がさっきまでいた部屋に戻ってきたようだ。……どうやらクウネルに戦闘は無理かもしれない。

「はっはっは！どうっすか！これぞ俺っちのギャルゲー真拳っす！」

馬鹿な名前なのになんて凶悪なのだろう……

「このまま流れに乗るッす！DB真拳奥義『デデー』をくらえっす！」

緑の光弾が迫る。何かすごく嫌な予感がする……ここは何とかしてかわさなくては！

えーと何か投げるもの……あ！何か血のようなもので薄汚れたクウネルがあつたぞ！

何か血のようなもので薄汚れたクウネルをつかみそのまま緑色の光弾に投げつける。

そのまま惹かれあつように何か血のようなもので薄汚れたクウネルと緑色の光弾がぶつかった。

デデー、と奥義の名を冠するほどの音が辺りに響き渡った。ものすごい破壊力だった……もしあれが当たれば不老不死ともいえどもその概念を破壊して殺されるほどだっただろう……当たってしまった何か血のようなもので薄汚れたクウネルは一体どこに……もしかしたら死んでしまっているかもしれないが、あいつは私の大切な友人、戦友なんだ！

あっ！壁に当たって横になっていた。きっと吹き飛ばされて壁に当たったのだろう。

しかし、何か血のようなもので薄汚れたクウネルはいなかった。そこに居たのは一体何なのか分からないほどになったクウネルだった。

ラグナが無意識のうちにとっていたのは「敬礼」の姿であった。そこには自分を傷つけながらの仲間を守った真の漢の姿があったのだ。涙はながさなかった。奇妙な出来事だった。

「はっ！隙ばつかだぜ！氷結真拳奥義『魔闘凍霊拳』！凍りつけええ！……」

絶対零度にも近い拳をラグナに叩きこむ。しかし、その拳はラグナには届かなかった。いつの間にかそこから居なくなっていたのである。

「っ！ザ・ワールドか！？カークランド、ラインバック！よそ見するな！」

「あ、兄貴！そこっす！」

カークランドの指さす場所にはラグナがいた。

「っ！？あ、あいつな、何かが『きて』いやがる……」

ラグナの雰囲気には何か物言わせぬ空気があった。その空気に凍次達は一瞬、身をこわばらせた。それは味方のエージエントCさえもそうさせるほどだった。

「う、うおおお！つす。DB真拳奥義『超化』！つす」

耐えられなくなったのかカークランドは自らの能力をあげて立ち向かった。

その姿は金色の頭髪になり、その気は金色の闘気をまとっていた。

「はああああ！！つす。奥義『兄貴かめはめ波』！！つす」

いつの間にか凍次がカークランドの後ろに回り両手を突き出していった。

前に居るカークランドの両手からは先ほどの『かめはめ波』とは何もかもが違う光線が飛び出していた。

しかし、それもただ何も無い空間を突っ切るばかり。

ラグナの姿はなかった。

凍次とカークランドが気付いた時、ラインバックが突如現れたラグナに突っ込む。

「ギャルゲー真拳奥義『やん！な世界』！つす！ついでにエージエントCには奥義『デットエンド46通り』！つす」

二つの空間が生まれる。

ラグナからはエージェントCは見えないが同じことになっているの
だろう。

体は動かない。先ほどのクウネルと同じようになっているのだろう。

場所は大きな木のした。影ができており、風までリアル。

そこには少女がいた。さっきのクウネルに告白し、笑いごとで
できない状態まで持っていくようには見えない。

彼女は顔を赤らめている。さっきの少女のように告白するのだろう。

「私、あなたの事が好きなの。百合ってのかもしれないけどあなた
が好きなの」

真つすぐラグナに投げかけられた言葉。

それにかえす言葉はこれだけ。

「ああ、私もだ」

少女の顔が嬉しそうに笑う。狂気は無い。

そのまま少女はラグナに抱きついて涙を流しながらお礼を言っ
た。

すでに彼女はいない。なぜならあの空間はすでに破壊されたから。

「バ、バカなつす……このギャルゲー真拳の弱点を見抜くなんてっ
す……！」

ギャルゲー真拳の弱点。それは少女からの告白にオーケーすること。
そうすればハッピーエンドを迎え元の世界に戻る。

クウネルは年齢の問題があり、断ったためデットエンドに至った。

「ぐ、ぐふう」

見るとそこにはエージェントCが倒れていた。

「エージェントC！大丈夫か！」

「タ、タイプじゃなかったんです……」ガク

エージェントCは少女がタイプでなかったために倒れた。だが彼は漢だ。

46のデットルートを避け告白にまで持ち込んだ彼のテクニクは尊敬するしかないっ！

ラグナはエージェントCを静かに地面に置き、三人に向き直った。

「覚悟はできてるんだろうな！お前ら！二人の敵イイ！」

「いや、クウネルの方はお前が……」

「問答無用！『スタンド・ワールド聖幽波紋領域』」

空間が変わる。

ラインバックのギャルゲー真拳のようなちやちなものではない。精神を解放させるほど強力な世界である。

この世界では精神を解放するためスタンドに制限はないっ！

「おおおお！合体スタンド技ホルス神・ホワイト・アルバム！！！」

ラグナが走る。

三人が構える。

「『お前だけの時が止まる』」

ラグナが走り去った後、巨大な氷の彫刻があった。

「いや〜なかなか強かったですね。あの三人」

「ええ、しかし、あの凍次の部下もなかなかでしたネ」

「ガウ（鶏になってて分からないぜ）」

図書館島の地下ではいつも道理の空間が広がっている。

「さて、これで後二人、か」

私がそうつぶやいたとき、エージェントCは何やら薄気味悪い笑みをしていた気がする。

「おお凍次ともろもろやん」

「ん、緋平じゃないか。まさか隣とは」

「緋平さん！つす。でも、もろもろはひどいつす！」

「そうつす！そうつす！」

「ソースはねえぞ。凍次もあいつらにやられたくち、か？」

「ああそうだ。……ラグナは強かったな」

「ほんま酷いで。ワイなんかズタズタに切り裂かれてんで」

「俺達は凍死しかけたな」

「凍次だけにか？ぎやはははは！」

「……面白くないぞ」

「天才の事はいつの時代も理解されへんのなあ」

タイトルレース（後書き）

一話から見てくれた人はこんにちわ。

この話から読む大胆な人ははじめまして。

今回はオリキャラ戦でした。

カークランドとラインバックに聞きおぼえがある人はいるのかな。

さて、上の件に覚えがある人はいませんか？

そう、禁書目録のあとがきみたいな感じです。

もし、ネギまが終わったら禁書でやりたいな〜なんておもって
みた
り〜

……時間ないけど。とりあえずネギま頑張るぜえ！

試験タイトルマッチ……なのかい？

深夜

世界樹の広場にてネギの弟子入りテストが行われる。
その相手はラグナ。もろもろの事情でこうなってしまった。

「あゝ眠いわ……。……帰っていい？」

「馬鹿もの。それではぼーやのテストが始められんではないか」

「え、何。弟子ほしいの？あんな面倒くさがってたのに」

「違うわ！約束だから守ってやっているだけの事だ。それに弟子にするならもつとましな条件にしている。ラグナに一撃当てるなど連邦にシヤアが居るぐらいありえん」

エヴァ……もつとマシな例えは無いのかい。

「まあ、そうかつかしくない。エヴァみたいな吸血鬼でもつと落ち着いてるやつだっているんだよ」

「……誰だそれ。お前、私以外に吸血鬼の知り合い作っていたのか
！」

「え、いや……。ロリカードさんですけど……」

「何だその名前から駄目な奴は！」

「エヴァ…そんなこと言うと中からコンニチハされるぞ」

「マスター、ネギ先生がラグナさんに一撃与える確率は概算約0・7171%以下です」

ナイスだ茶々丸。無理やり話題を変えろとはな。

「ふふ〜ん。そうか、弟子とらなくても済みそうだな」

エヴァ、済まんが場合にもよるぜ。

「エヴァンジェリンさーん！ネギ・スプリングフィールド、弟子入りテストを受けに来ました！！」

「よく来たなぼーや。では早速始めようか」

「よし、覚悟しろよ〜」

広場に降りる。

が、そこには不要な人物達がいた。

3・Aの面々である。ネギいわくついて来ちゃったらしい。彼女らはネギにがんばれー、とかやったれー、等の声援を送っている。

美人って怖いね。応援されている奴は無駄に頑張るし対している奴はなんか悪者みたいな構図になるし。

「ラグナさん、お願いします！」

「堅苦しいのは無だ。武人ってがらじゃないし」

周りからがやがやと声が聞こえる。

あれですか、どっちが勝つか掛けてるんですか？

やめてよね、ネギが僕に勝てるわけないじゃないか。

ここは圧倒してポカーン、とさせてやるうじゃないか。

「時間も息の根も止めてやるぞ、小僧！」

「契約執行90秒間　ネギスプリングフィールド」

ネギの体がオーラの的な物で覆われる。

じゃあこっちはクレイジー・ダイヤモンドだ。

「言っておくが攻撃を受けない方がいいぞ。受けたら……色々あって石化とかしたりする」

「ええっ！？あわわわわ！」

防御しようとしていたネギが後ろに飛んで逃げた。

敵の言うことを鵜呑みにするのはどうかと思うけど当たったらアンジェロ岩みたいになるからね。

どんな感じかという隠し持っている小石とかで、治す時に放り投げる。

そうすると治る時に小石や砂と合成して石化、みたいな感じである。

フーン！フーン！フウン！

クレイジー・Dの拳は人じゃ骨が折れてしまう勢いで殴りかかる。ネギは最初の一言で行動が回避に傾いていしまっている。

パソコン、と音を立て地面が吹き飛ぶ、がクレイジー・Dで直す。周りから見たら面白いだろう。

轟音と共に砂煙が舞うが地面は傷ついていない。反対に新品みたいに綺麗になっている。

「ホラホラ、どうした？避けてばかりじゃ試験には合格できないよ。ま、攻撃を受けたら石化しちゃうんだけどね！」

「くっ、カウンターが取れない……老師の言った通りの戦方がとれない。一体どうしたら……」

「肘打ちっ！裏拳正拳！とおりやああっ！」

「うっうわー！」

交わしきれなくなり、思わずネギは腕を交差させてクレイジー・Dの拳を受けてしまった。

破れてしまった服にさっと小石を投げ込む。

ややイビツな石化の仕方である。服の一部が盛り上がったような感じ。

「あわわ！服が石になる！？すぐに破り捨てないと……！イワオミたいになっちゃうよ」

すぐにネギは石化し始めたところを破り捨てる。だが、奇妙なことに気がついた。

「（攻撃を受けたところだけが石化している……？なんだか小石をそのまま服に合成したような感じがする……）」

「服に救われたな！だが、攻撃はまだまだ終わらないぞ。お前が石化するという恐怖に尻尾を巻いて逃げるのが目に見えているぞ！」

「（こうなったら一か八か……老師にはこんなのならってないけど！）」

ネギはクレイジー・Dの拳が迫ってきたとき、思いつきリジャンプしてドロップキックをクレイジー・Dの拳に浴びせてきた。

しかし、クレイジー・Dの威力の方が高かったのか押し出されるようにネギはドロップキックの状態で飛ばされてしまったが、数々の古^クの修行により無茶な姿勢からの着地もできるようになっていた。それも相手が私ということもあるのかもしれない。茶々丸よりは危惧されているのかな。

着地したネギは私を警戒しつつ足……正確には靴を見た。

その靴は石化していなかった。

あちゃ、ばれたかな？

「ラグナさん！あなたのその技の秘密がわかりましたよ！どうして服が石化して、殴られた靴が石化しないのかを！それは……壊したものを石化するからです！」

ばれてしまったか。正確には違う気がするが。

クレイジー・Dは壊れた物質や傷を治すことのできるスタンド。その直す工程で異物を放りこんで直しているにすぎない。

靴はどうやら壊し損ねたみたいらしいな。

しかし、やっぱり主人公で天才なんだな〜あの程度の情報でクレイジー・Dの石化の秘密を発見するなんて。

キヤーネギクススゴイとかヤッターネギクスー等の黄色い声援が聞こえてくる。

向こうに居るギャラリーたちだ。あれですか？クレイジー・Dの石化のネタが分かったっていう程度の事で盛り上がりつつあるんですか〜〜アア！

おーおー、長い間感じていなかった。チートな能力もらってから感じる事がなかったこの感情。

嫉妬。

妬ましい。そこはかたく妬ましい。とりとめもなく妬ましい。

う、うがああ〜〜〜！

「ラグナもう容赦せん！くらえ目からビームツツツツ！！」（空裂）
！・ステインギアアイズ
！・ステインギアアイズ
眼刺驚（）」スペースリバ

高圧で体液を目から発射する。

逃げ惑え〜〜〜！

ビュウウウウウンツツツ！

と、空間を切るようにスペースリバー・ステインギアアイズがネギに迫る。

「うわ~~~~やめてくださーい~~~~!」

ビュン、ビュンと空気が震えるが一向にネギに当たる気配がしない。

「えーい!走るなー、当たらないだろうがーッ!止まれええー
ーッ!」

「止まれと言われて止まる人なんていませんよ~~~~!」

バコーン、と地面に穴をあけたりビュウウウン、と木に穴をあけた
りしていた。

「あいついつからあんな技が使えるようになったんだ……っという
か全然試験にならんだろうがーッ!」

「マスター、元よりネギ先生がラグナさん勝つ確率は低いものです。
この『圧倒的』というのが本来の形ではないのでしょうか?」

「うむ……確かに、ぼーや相手なら赤子の手を捻るようなものだろ
う。だがこれは試験なのだッ!ぼーや本人にその適性があるかどうか
調べるもの……現に分析能力、ラグナのクレイジー・Dの石化ネ
タを完全とは言えんが見破ってしまった。直接戦闘能力にかかわり
はないが、実戦で相手の手の内を見破るのは大切なことだ。だが、
それだけでは足りないッ!もっと私を満足せしめれるような『なに
か』を見せつけてみせなければッ!」

「かつこいいいマスターはあれですね。似合いませんね」

「どーゆーことだ茶々丸！」

広場から少し離れた場所に居る。
追いかけてこをしすぎた。

「はあー……はあ……ふう……はあ……」

ものすごく疲れた。

「はふう〜……もう動けません〜」

目がカラカラしてきた。

スペースリパー・ステインギーアイズを撃ちすぎたのか。ドライアイみたいになってしまっている。
目からビームって大変なんだな。

「さあ〜て、お遊びはここまでにしよう。さっさと試験しないとなあ……エヴァに怒られそうだ」

「いつ!? 今までの遊びですか……ま、まだまだ僕はいけますよ
」!

どー見てもやせ我慢だよな〜?

「ま、いいや。いきなりだが小僧、確か夢はナギを探し出すことだ

「つたよな？」

「ふえ？あ、はい。そうですね……何か？」

いちいち癪に障る奴だな。

「いや〜な？仮にだ。言っておくがもしもの話だぞ？もし、……私のスタンドに周りに生き物をなあ『恐竜』^{モンスター}なんぞに変えちまう能力があつて、そのスタンドを使つて3-Aのメンバー、『恐竜』^{モンスター}に変えて小僧をおそわしちまったらどうするよ？」

「え？」

ポカン、としてどうしてそんなこと言うのか分からないって顔しているな。

もちろん、そんなスタンドもつちや〜いないし使う気もない。

「で、これが質問だ。どちらかしか取れないからな。ナギに関する手掛かりと3-Aメンバーを戻す物どつちをとる？」

「そんなこと言われても……」

「何、難しい質問じゃねーだろ？『お父さんを見つけたんだ』だとか『元』は生徒なんだから傷つけられない。戻す方を取るう』とかよあ〜？なんでもあるじゃねーか。簡単な質問なんだよ。街頭のテレビのインタビューに答える程度にさ〜、動画のアンケートに答える感じにさ〜なんとでもあるだろ？」

「あ、その〜……僕そんなことなかったことないし……どうしたら……」

小僧はいきなりの意味不明な質問にたじろいでいた。
まあ我ながらよく分からない例えだと思うが。

「ねえ、二人何いつてるか聞こえないね。もう少し近づいてみようか」

「そやね。ネギ君のかつこいい雄姿みなあかんもんな」

ラグナの質問は聞こえていなかったようだが近づいてくる生徒達。

それに合わせて後ろのほーーうでメガネをかけているような人もいるようなく気がする。

なんだがガヤガヤするな。ギャラリーが騒いでいるのか？
まあいい。さつきから小僧はアタフタしたままだ。

「答えにくいなら簡単に言ってみようか。そうだな……小僧がどちらの立場にいるかということだな。先生か、英雄の息子か。先生としてみんなを助けるのか。英雄の息子としてナギを探し出すのか」

「僕は……3-Aの皆さんは大切です。でも、それでも僕はと「言わなくていいんだよネギ君。別に言うことじゃないからね」あつタカミチ！」

いつの間にかタカミチが来ていた。

それもそうか。何人もこんなところで集まっていたら広域指導……だったか？が来るのも分かる。

「ラグナさん。ネギ君に無駄な心配させなくてもいいじゃないか。彼は彼なりに頑張っている。あなたもそれを見ていただろう。……確かにネギ君はまだまだ未熟かもしれないが大きく咲くと思うよ」

「タカミチッ！てめエーは黙ってDOD（ドラッグオンドラ ーン）でもしとけバカヤロー！赤ちゃんに食われる」

ホワイト・スネイクでDOD（ドラッグオ ドラグーン）のディスプレイを突っ込む。

ここからはお見せできない。タカミチが赤子の泣き声をしだしたり、何やら危ない雰囲気を出し始めたため、一応ディスクは抜いておいた。白目で失神しているけれど。

「さて、考えはまとまったか？とりあえず聞いておくでしょうか」

「はい……僕は、両方をとります！父さんの手がかりもほしいですし、みなさんを助けることもしたいです」

んな、こと言う質問じゃないんだけど……

「小僧、そんな都合がよくてうまい話があるのか。だいたいできるわけねーだろ、小僧じゃ」

「そのために……僕はエヴァンジェリンさんに師事するんです！」

あー、確かにできないのなら出来るようになればいい話だな。二つを得られないのなら二つを得られるようになる……、か。

「プ、ツかは、ハツハツハハハハ！」

「ど、どうして笑うんですか!？」

辺りから音がする。

「ネギくん、だいじょーぶー？」

「どないなつたんやー？」

「うわっ、た、高畑先生!？」

ギャラリー達が来たようだ。

「小僧、いとしの姫様達が来たな。喜べ小僧、合格だ」

「え……?？」

何で合格なのか分からないって顔しているな。

私にも明確な理由は分からないが、単純に面白そうだからである。

できないならできるようになればいい。よくそんなことが簡単に言える。

多分、タカミチに素質はある的なことを言われたからかな。

「やったーーーーっ！」

「ネギくーーーーん？」

うん、ちょっと妬ましい。

「で、将来性があるから面白そうだしやってみようってわけだな？」

エヴァと話をしているんだが若干納得していない様子。

「うん。バカみたいなこと言ったし、どうせ暇だろう。暇つぶしにはもってこいじゃないか！」

エヴァはまだ納得していない様子だった。

まだ色々と力を見たかったようだが私が強引に合格させてしまったからであるう。その機会がなくなった。と、思っているようだがそれは違う。修行に手伝えは面白いだろう。

多分、ポンポン成長していくだろう。教える方としてはそっちの方が面白いんじゃないか？

ワイワイとはしゃいでいる小僧たちのところへ行く。

怪我とかそんなにしていなかったから胴上げとかされているぞ。

試験タイトルマッチ……なのかい？（後書き）

どうもです。

何回も修正したこの話ー、まともになったかな？
禁書読みながら書いてたら上条さんの説教が出そうになって何回も直した。

しかし、ネギ君や欲張りですなー、アツハツハ。

第43話ぐらい タイトルは……もじいいや(前書き)

説明が多いかも

第43話ぐらい タイトルは……もういいや

広大な海があり、そこには塔が立っている。

そこはエヴァが所有する別荘。別荘と言ってもただの別荘ではない。

この別荘は外の世界とは違い時間の流れが違うのである。

別荘の一時間は外の世界での一日。

これがあれば夏休みの宿題も、溜まっているアニメの録画も簡単に消化できるね。

で、別荘の説明はこんなところで。

今はホワイトボード前に立ち、小僧に特別な修行法を付けてやるのだ！

エヴァは魔法関連。ならば私はこうだ。

書き書きと、ホワイトボードにペンを滑らせていく。

題名はこうだ。

「『DCSを使って体力をあげよう！』君も上半身がムキムキ』
これで小僧はなんだかすごいことになるぞお！」

「あ、あのその『DCS』ってなんですか？というか上半身だけっ
ていつのは……」

「そうだな。初心者には略語は分からないよな。『DCS』それは
ドーピング　ソメスープの略である！」

「ど、ドーピングって明らかに違法じゃないですかッ！そんな物の
ませないでくださいよ！」

「え、ただの数え切れない食材と薬物を精密なバランスで配合、特
殊な味付けを施し7日7晩煮込み続けた究極の料理というすごいコ
ソメスープなんだよ？」

「明らかにッ！『薬品』という単語が入ってるじゃないですか！？
普通ならプロテインとかの話をするんじゃないんですか！？」

ここまで嫌がるとは……せつかく『シユプリムS』に行つて至
田オーナシェフに教えてもらったのに……

あ、じゃあこれならどうだろうか。きつとこれなら喜んでくれるだ
ろう。

「じゃあとある探偵事務所の助手さんにもらったものなんだがこの
チヨコレート、食べないか？なんでも普通のチヨコレートの800
倍の栄養があるとかで、食べたらぬふぁーんってなるらしい」

「ぬふぁーんってなんですか！？普通のチヨコレートの800倍っ

てどう考えてもおかしいですよ！？もつと修行って感じのにしてください！」

むう……、修行っばい修行か。

それで小僧の能力もあげれる奴だろう。

……、何かあつたっけなー？

「小僧、確か10歳だったよな？」

「え、はい。そうですけど……」

「よし、小僧に足りないのは体力だ！魔法使いで体力云々かんげーないぜって訳がない。小僧は天才だがただの10歳だ。体力的に厳しいところもある。なので体力の付く修行法をするぞ！」

「体力ですか……、そうですね。カンフーをするのにも要りますからね！お願いします師匠。まずは走り込みとかですか？」

「否！断じて否！この私が教えるからにはそんな普通の修行法なわけがない！その修行法は……『波紋』！または『仙道』と言う技を習得するのだ！」

『波紋』とは特別な呼吸法によって体内に流れる血液から微弱なエネルギーを作り出しそれを操る技であり呼吸法である。

それは修行すれば何里走ろうとも、もろともしない肉体を作り出すことができるのである。

これほど小僧にあった修行法はない。

本人には覚悟がある。ならば、この厳しい修行にも耐えられるだろう。……もしかしたら死ぬかもしれないけど。

「で、結局この波紋法、すっごーく時間かかるのね。普通なら瞑想だとか、肺を鍛えたりしないといけないけど……面倒だから小僧の横隔膜を突いて一気に覚えさせてやるッ！」

「ぼ、ぼ、暴力はいけませんよラグナさん！瞑想からでも十分いけますって！」

「ラグナ容赦せん！ちいーっ！と苦しうだけだから、往生せいやあ！」

小指を突き出した右腕を思いっきり小僧の胸へと突き刺す。

ドスン、多分……死なない。すごく苦しうだけ。

「くっつ、うふ！がはっ！」

「そのまま肺の中の空気をすべて吐き出すのだ！いっつも残すんじゃないぞ！」

ゴホゴホと苦しうな小僧だったがやがて起き上がり、自分の体を確認する。

すごく涙目で苦しそうだ。が、気にしない。今はそういう時ではない。いちいち弟子の心配などしないんだからねっ！

みたいな考え方じゃないと修行に支障が出る。

小僧が体を見て、特に何も変わっていないことに気付くところをみた。

文句言われる前に言っておこう。

「今のは小僧の呼吸法を変えただけにすぎない。『波紋』を習得するにはこれから小僧の頑張りが必要なのだ。だが、今の小僧の呼吸は確実に波紋エネルギーを生み出しているッ！」

「……、はい！師匠、よろしく願います！」

「うむ、では呼吸法は大体こんな感じだ。コーホーコーホーって感じで」

「ウォー マンですか！もうネタはいいですよ……」

あ、なんか小僧の気分がダウンしてる。

こりゃいけないな、何か見せておくか。

「おーい、ちょっと茶々丸。蛙と岩とタライに水張って持ってきてくれー、大至急だ。ハイウェイ・スターぐらい」

どれくらいかっつていうと時速60kmぐらいの速さである。

……

おおっ、さすが茶々丸。ハイウェイ・スターどころかザ・ワールド
して持ってきてくれた。

あなたはどこかのメイド長ですか。

まあ、そんなことは置いといて、早速、波紋を見せてやろうじゃないか！

< s i d e : バカ弟子小僧もといネギ >

師匠が茶々丸さんに意味不明な物を持ってこさせた。

蛙に岩にタライ（水たっぷり）って……波紋っていったい何をする
ためにあるんですか。

と、思っていた数秒間が僕にもありました。

師匠の空気が変わりました。呼吸一つでここまで変わるものなんで

すね……

師匠はそのまま下からタライ、岩、蛙の順番に並べてタライの水の上に立ってしまいました。

いえ、僕も見た時は驚きましたよ？師匠は師匠と違って魔力がない
ラグナ エヴァ
そうなのです。

ですから、水の上に立てるのは氣のおかげだと思っていましたが使っているようには見えません。

僕はきつと波紋というものは氣に近いものだと思っていましたが全く違うものなのです。

しかし、水が不自然な波紋を立ててバシャバシャしているんですが、思いつきり体にかかっていますね。

「小僧、よく見ておけ。これが波紋エネルギーを流すということだ！網膜にしっかりと焼きつけておけよ。るおおおおー！」

師匠の拳がそのまま蛙に迫るッ！

このままでは蛙がペチャンコになってしまう。師匠は一体何をすることがつもりなんですかー！？

蛙に拳が当たり、圧迫され体が反るようになった時それは起きた。

メメタア、と音が鳴り蛙に電気のようなものがまとわりついた。

ドグチアア、と破壊音が聞こえたと思ったたら石は真っ二つに割れてしまっていた。

そして、蛙は何事もなかったかのようにタライの水の中を泳いでいる。

「じ……これは一体……？蛙は何ともないのに……」

「これこそが波紋エネルギー！私の波紋エネルギーが蛙の肉体を波紋となって伝わり、岩を砕いたのだ！」

「す、す……すぎます師匠……！これなら普通に尊敬できますよ……」

< s i d e o u t >

オイオイそりゃーどういうこつたい。

こいつはちよつと聞き捨てならないよな。

うん、すごい修行法にしてやるぞ。

「ちよつと、茶々丸……あれとかあんなのとか……みたいなやつとか、もってきてくれー」

速さはメイド・イン・ヘブンぐらいで。

さすが茶々丸。

非の打ちどころがないパーフェクトだ。

まさか私が話しかける前にすでに持ってきているなんて。

多分、茶々丸が居れば困らない。一生ニートになってしまおう。

で、茶々丸を褒めるのはこの程度にしといて、持ってこさせたものを小僧に使ってみるか。

「さて、小僧。まだ波紋に目覚めたばかりだから上手くは使いこなせないだろう。だがこのマスクがあれば大丈夫！常時波紋の呼吸をしなければ息ができなくなる優れものだ！」

ババーン、とまるでハエの顔のようなマスクを掲げる。その名も呼吸法矯正マスク！

小僧の反応をみるとポカーン、としてしまっている。こいつ人の話を聞いているのか。

「もしかしてそのマスクをずっと付けていなければいけないんですか……？」

「うむ、その通りだ。例えるなら常時スーパーサイ 人で、その状態を維持するようなものだ。簡単に言うとこれつけてるだけで強くなるぞ」

小僧の目がきらきらしてる……、何かおねだりビームを撃たれている気分でもある。

そこまでするなら付けてやろうじゃないか。

ハエの顔のようなマスクを小僧に取り付ける。

うん、ちょっとマスク大きいかな？

でも、効果はちゃんと発揮しているようだ。

「おーい、大丈夫かー？息できるか？ちゃんと波紋の呼吸をすればできるぞ」

「うっうぐっうぐ、うっう」

「呼吸のリズムを乱すんじゃない！リズムが狂えば息はできなくなり酸欠で死ぬぞ！」

「そ、……そんなこと言われましても……うぐ、うっ、うっ」

「小僧！呼吸のリズムを整えろ！そうしたら簡単に息ができる。それこそ風邪のマスクぐらいにだ。まだ、波紋に目覚めたばかりかもしれないが、小僧の呼吸は確実に、波紋を練れている！」

小僧の呼吸が段々と落ち着いてきた。

きっと上手く呼吸できるようになったのだろう。

よし、なら1000?走っても、平気になるぐらい鍛えてやるか!

……

修行の日々は別荘のおかげでもものすごく進んだ。

まるで日捲りカレンダーをそのままゴミ箱に突っ込むぐらい。

その早すぎる修行中ではハエマスク、もとい呼吸矯正マスクを四六時中つけたまま。

もちろん、学校の教師の時にもつけている。そのことで相談されたこともあった。

「師匠!このマスクの事を明日菜さん達が気にしてくるんですが、何かいい訳はないでしょうか?」

「まあ、別にほつともいいんじゃないの？どうせ後からキヤーネギクンカワイイーナニソノマスクって言われるんだろ」

「え、？どうして分かったんです？」

……、何故聞いてきたし。

そしてその日に何故かばれる別荘。

そして小僧の過去。は、特に見ていない。眠たかった。

……

で、今に至るわけだが小僧とその他が、ジェントルマンな黒コートと戦っているんだわ。

エヴァもどこかで見ているはず。……だと思っ。

そう思うのは私が一人にいるから。場所は小僧たちが戦っている広場の隅っこ。頭だけ出して覗いている。

ふんぶん、おっ行け！そこだ！あー、ちいっくしょー！何で外すんだよ！？

そこ、そこ！そこで波紋疾走するんだ。あー！何でかわすんだよジエントルマンめっ！

うおっ、あのジエントルマンすごいパンチを放つな。小僧、ガードばつかしてるんじゃない！せっかく相手が近づいてきているのだから上手く波紋を流すんだ。

スタンドに波紋が流せるんだから、がんばれば魔法にも流せるって！諦めんなよ！もつと熱くなれよ！

って、バリバリ戦っていたのに急に止まった。

何か話しているのか？ん、ジエントルマンが帽子をとった。そこから人間ではない顔が出てきた。

私もよく見たことがあるような顔だ。悪魔。UUURRRYYYYYY、だとかWWRYYYYYYYY、とか言うような奴だったはず。

波紋法を修行していた時は、よく相手にしたものだ。だが、何故悪魔がこんなところに？

そのとき一瞬だけ、小僧の姿が見えなくなった。

体を纏う戦いの歌、波紋の量が跳ねあがっている。どういうことだ？ さっきまで手も足も出なかったジェントルマンを相手に、格闘の連撃。

はい、どー見ても波紋疾走の過剰オーバードライブですな。

何とか止めないと大変なことになるな。よし、世界ザ・ワールドを使ってちまちま距離を稼ぐ。

ジェントルマンの姿が完全に悪魔に変わる。口から光が漏れている。

そのまま小僧は突っ込んでいってしまう。カツ、と必殺技のような擬音が聞こえた気がする。

そのまま悪魔の口から、砲撃が放たれた。

「この、バカ弟子がー！ーっ！」

「う、ぎゃあああ〜」

悪魔の砲撃が当たる寸前、思いっきりライダーキックで小僧を蹴った。

だってね、時は止められても空は飛べないんだよ？クラフト・ワーク？時間がないよ。

「ネギいいー！！」

犬耳の少年が近づいてくる。その前に、プルプル震えている小僧に喝を入れなければ。

「あ、……う、……ぼ、僕……」

「今のは波紋疾走オバドレイブの過剰使用のせいだ。太陽の光は悪を滅するが、強すぎる光は善人すら溶かし尽してしまう」

普通の人が波紋を浴びれば痺れて気絶する程度だが、強すぎる波紋は肉体を液体化し、気化させてしまう。

「え、し、師匠！？ど、どうしてここに……？」

「そういう事は聞かないもんだ。ん、いつの間にかマスクが取れるじゃないか。……高かつたんだぞ」

愚痴っていると犬耳の少年が此方に着いた。うん、私は狐耳派だ。

「ネギイイ！このアホンダラ！ダラス！アホ！あんな闇雲に突っ込むからおっさんの攻撃があた……らなかつたな。ところで、このチビ誰や？」

ムカツ、と仕掛けたがここは耐えるところ。

さっさとバカ弟子小僧に言うこと言って帰ろう。

「私はしがない通行人だ。犬少年、気にすることじゃあない。で、小僧。呼吸を乱すな、これだけだ。それさえ守れば勝てるさ」

そう言って世界を使い、その場からスタコラサッサ。

……

また、もとの位置に戻り彼らの戦いを見る。

私が去ったあと、いつの間にか捕まっていたらしい3-Aの数人は自力で逃げ出した。全裸で。

「こっちが本体やで、おっさん」

アッパーがジェントルマンに当たる。ほー、犬もなかなかやるじゃないか。しかし、多重残像拳でも使っているの？

まあ、ジェントルマンに隙ができたのは確か。

「魔法の射手 雷の一矢 カクダチヨウチユウ ? 打頂肘 サンライイトイェロオパーバードライフ そして、刻むのは波紋のウエーブ！山吹色の波紋疾走！」

決まったああああ！とどめの一撃。

悪魔のジェントルマンでは、もう立つこともできないだろう。

ちょっと、おくりびととしてくる。

「…………君達の勝ちだ。…………トドメを刺さなくていいのかね？」

その声色には若干、疲れたような気分が伝わってくる。

彼のコートは大分気化してしまい、そのうち自分の国へと帰ってしまふのが見てとれる。

「このままにすれば、私はただ召喚を解かれ自分の国へと帰るだけだ…………しばしの休眠を経て復活してしまふかも知れんぞ？」

どういふつもりで言っているのかは本人以外分らない。ただのブラフか、好奇心から来るものなのか。

その問いに対し、ネギは間を開けてこう言った。

「僕は、トドメを刺しません」

彼はそう、きつぱりと言った。本当は敵の悪魔なのに、何度かヘルマンに挑発されても。

彼はただ、一言。

「それでも、あなたが全くの悪人かもしれなくても。トドメは刺しません」

ヘルマンは沈黙した。

そして突如、吹っ切れたようにお腹を抱えて笑いだした。

「ふ、ふはははは……ふ、ネギ君。君はお人よしだなあ……やはり、戦いには向かんよ。だが、君を取り巻く存在はそう簡単には戦いをやめさせてはくれないだろうな」

「びつくりした……何今の笑い声。変態でもいるの？」

その場に居た者たちはちよつと空気が読めなさすぎるラグナに、それぞれ感情を持ってしまった。

多分、マイナスの方向に。

「……、そこのお嬢さん、すまないが笑っていたのは私だ。ところで……ネギ君の奇妙なエネルギーを伝授したのはあなたかな？」

その言葉を聞いても、場違いな空気を出すラグナは改めたりはしなかった。

「そうだけど……バカ弟子小僧がなんかした？」

「ああ、敵であるはずの私にトドメを刺さないといい放つただけかな。それが彼の強さなのか聞いておきたくてね」

「まあ、私の修行がスバラシイからかな！っていうのは置いといて、

そんなこと言ったのか」

ラグナがネギの方を怪訝そうに見る。

うっ、とネギがひるんでしまう。

そしてからラグナはまたヘルマンを見る。

「別にいいんじゃないかな。敵を許せるのもまた自分の強さなんだし。成長知ったって言う事で」

「そういうことなのだろうか……、彼は別に許すとは、言っていないはずだがね。ふふ……だが、礼を言っておこうお嬢さん……いや、お嬢さんでは失礼かな。『悪霊使い』でどうかな？」

また、懐かしいものを……と、ラグナは思った。

そんな二つ名など、二つ名なんてどうでもいいものだから。

「いずでまた、成長したネギ君を見るとするよ。それまで存分に鍛えていてくれると嬉しいんだがね。ふふふ……はははははー！」

そう言ってヘルマンは消えてしまった。

ラグナに対して面倒事を残していった。

第43話ぐらい タイトルは……もういいや（後書き）

遅くなりました。

そして今回の話は作者がよく分からなくなってしまった。もっと書きまくるしかないんだろうな……

さて、今回は『波紋』です。一部と二部を読み返して何とか書きましたが間違っているとことがあるかもしれせん。その時は教えてください。

遅れた理由 1

最近、健康に良かれとウォーキング始めた。体重落ちてきた。

第44話 帰ってきたアイツ!? みたいなタイトルどうだろう(前書き)

みんな、知ってるかい?

『転生したら史上最弱の妖怪だった』でレビューされてるんだ……結構前なんだけどもね、作者気付いた時ものすごくうれしかったんだ。だから、あっちでお礼言おうと思うんだけどなかなか投稿できなくてね。

だからこっちでとりあえずの形で言っておきます。

蠱毒成長中さん、ありがとございます!!!!

では、本編へ。

第44話 帰ってきたアイツ!? みたいなタイトルどうだろう

人気がない、麻帆良学園でもあまり無い、草木が生い茂った場所。迷彩ガラの服でも着こんでしまえば、間近で見ないと見当もつかないだろう。

しかし、学生達はここへは一切来ることはない。なぜなら皆、麻帆良祭の準備で忙しいからだ。

だが、そのめったに人が来るようでない場所に、ザツ、と靴で土と草を踏み歩く音が鳴る。

「うゝむ……、広い。そこはかとなく広い。初めて来たら絶対に迷うな。だから俺が迷うのは仕方のない事なんだよな。……たつくよゝ一体ここはどこなんだ？」

どこからどう見ても生徒ではない。教師でもない。

そんなただの青年がそこに居た。だが、見る者が見れば雰囲気や物腰が違う。

その年齢と似つかわしくないのだ。

彼は頭に緑色のバンダナを巻いて、別に右目は怪我をしているわけではないのに眼帯をしている。

「しかも、無理矢理入ってきたのに誰も来ないってどーゆーことよ。ちよっと、ゆっくりしすぎじゃないの？ アイツもどこにいるかわか

んね〜しよ〜」

彼は懐から葉巻を出して口に咥えた。

その動作は手慣れた動きがあつて、不思議と似合っているように見えてしまう。

彼が、のんびりその場で止まっていると、竹刀袋を持った半デコ少女が現れた。

その少女の名は桜咲刹那。

京都に伝わる神鳴流という剣術の使い手でもある。

サツ、と青年との距離を詰め、大体一、二メートルぐらいと言うところで竹刀袋から彼女の愛刀『夕凧』を取り出し、夕凧の水にでも濡らしているような綺麗な刀身を青年に向けた。

「あなたは侵入者ですね。即刻、この場から立ち去ってください。ここに来るまでに結界が張ってありましたでしょう。そこを無理矢理通ってきたという事は……覚悟はできていますね？」

刹那はキリッ、とした表情で青年を睨む。

ここ麻帆良学園には、彼女が護衛する近衛このかがいるのだ。

彼女は膨大な魔力を持つ身なので、その身を狙われることがたびたびある。

刹那は今回もそのような件だと思い、ここへ来たのだが……、関西呪術協会にこんなミリタリー風な、男はいないはずである。と、思いたい。

なので、この男は蟠桃ぱんとうと言う神木を狙う者か、この学園で教師をしている英雄の息子のネギ・スプリングフィールドを狙う者の可能性が高い。
彼女が思案している間もずっと、葉巻を吹かしているだけの青年はただ立っているだけだった。
刹那は凶器を見せられて物怖じしないとは、余程の手だれか、ただの思いあがったバカかと思いい、もう少し脅すべきかと思ったところで青年が急に喋り始めた。

「『銃は剣よりも強し』ンツン〜名言だなこれは。見たところ
どうか完全に嬢チャンの得物は剣だなあ〜?」

「あなたはさつきから何が言いたいのです……? 言いたい事がある
ならさっさと言うべきですね」

「俺の得物は銃だ。銃に剣では勝てねえ。それによ、嬢チャンぐら
いが知ってるわけねえーと思うが軍人将棋つてあるよな。こちと
か読んでたら知ってんじゃねーか? あれってなんかの紹介が多いし
よー」

青年は大ざっぱに手や腕を動かしたオーバーな動きをする。

その動きはまるで外国人にジェスチャーで意思を伝えるような感じ
である。

だが、相手は日本人である。刹那から見ても、他の人物から見ても
可笑しいだけである。

「話がそれちまったが軍人将棋の説明をするぜ。『戦車』は『兵隊』より強いし、『戦車』は『地雷』に弱いんだ。ま……戦いの原則つてヤツよ。この俺の銃は嬢チャンより強いから、俺の得物も戦う前に教えてやってるんだぜ……『銃は剣よりも強し』名言だな、これは」

「あなたがわざわざ、教えをこいてくれたのはありがたいですがいらぬお節介でしたね！神鳴流に飛び道具は効きません！」

そう言いきつた刹那は夕凧を構えて走り出した。

元より二人の間はそれほどない。一步踏み出せばそこは刹那の間合いだ。

彼女の得物は剣、と言ってもそれはそれなりに長さがある野太刀である。大抵は三尺（約90cm）ぐらいあるのだが作者は夕凧の長さは把握していなかった。

刹那が夕凧を右斜めから振り下ろす。

が、青年は奇妙な構えをとっていつの間にか持っていたサバイバルナイフで受け止めた。

受け止めたと同時に青年はナイフを離して中腰になり、刹那の後ろに回ったら脚を崩し体制の崩れた刹那の細い首を右腕で、気道が閉まるかどうかの力加減で絞めた。

そして持っていた夕凧を足で蹴り飛ばし、また、いつの間にか持っていたナイフを刹那に見えるようにして構えた。

「さあ〜とて、嬢ちゃんの負けは決まったも同然なんだが……俺は嘘をついた。銃を使うと言っていたが今回、一度も使っていない。引つかかった？はっはは。銃なんか使ったら嬢ちゃんが死んじまうからね。だからこのビリビリナイフさ。死なないように……かつ、簡単な戦闘員の排除。だからこいつは使えるのさ〜。……嬢ちゃんみたいな自分を犠牲にしそうなタイプにはね！だからビリビリしてくんさい！」

(こっで……！くっ……このちゃん！)

ヒュンッ。

風邪を切る、小さな音がした。

青年は刹那を突き飛ばしてかわそうとしたが、その必要はなくなったので刹那への拘束も解いてしまった。

青年が見る方向にはヒラヒラした物が浮いている。

まるでティッシュのようだが、いつまで経っても地面には落ちはしないしよく見ると色んな細工がしてあるようにも見える。

それはマンハッタン・トランスファー。スタンドである。青年はこれの存在を知っていて、これを使える者が一人しかいないという事を知っていたからの行動である。

ヒュウウン。

また風切り音が聞こえる。だが、マンハッタン・トランスファーが何故かその軌道線上来て飛んできた物は軌道を外れ、木に突き当たった。

青年がそこを見ると木には小さな穴があいていて円形の跡がある。銃弾である。それもライフルの。

ヒュウン。

さつきからする風切り音はこれが飛んできたからである。

マンハッタン・トランスファーは気流に乗って浮遊し、弾丸を目標へ中継するスタンドであるが、意図的に目標を変えることも可能である。

サツ、とまた草を踏む音がする。

青年からの拘束を逃れた刹那は夕風をとって構えていたが、その音に気付き振り向く。

そこには初等部とも言われても仕方のないくらいの中等部の制服を着た少女が居た。

ラグナである。彼女の登場に刹那は驚き、理由を聞く。

「何故あなたがこんなところに！？っ！離れていてください。真名の援護射撃がどういうわけか効いていません。あの男からは何か底知れぬものを感じ始めました……」

風切り音と銃弾の正体は龍宮真名の射撃であった。

今はマンハッタン・トランスファーの不可思議さに射撃ポイントを変えているころだろうと思う。

刹那が警戒する中で、青年はスットンキョーな言葉を言った。

「お！ラグナじゃねーか。女の子になったとは聞いていたがまさかその通りとは……ぷっくく。わりい、いやすまん。いやこれいかにってぐらい迫力が怖いんですけどお！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ

ラグナからは無言の圧力。

刹那も腰を抜かして失禁してしまいそうな圧力がある。

ラグナは青年に近づき、自分の腕でない剛腕で青年を殴った。

「遅い！！来るのが遅すぎる！何年だ。戦争終わって何年テオドラのところでのんびりしてたんだあッ！」

青年は痛みを耐えつつ、消え入りそうな声でラグナの問いに答える。
問いと言うかむしる脅迫。

「二十年ぐらいじゃね……？っていうか大戦で生き残りかつチートな不老不死の俺をスタンドのパンチ一発でここまで追い込むとは……恐るべし、幼女……あべし！」

ラグナの逆鱗に触れたためとどめの最後を貰い、完全に伸びてしまった青年。

青年の左足を掴むと、思い出したかのように刹那の方に振りかえって一言。

「さっきの事は学園長に報告いらねいからね。来たのはスネークだから」

そう言って、ズルズルと迷彩ガラの服を汚しながら青年を引っ張っ

世界、裏の世界を問わずこの学園の最強をみたい。それだけネ」

ざわ……、超の不可思議な発言によりわけを知らない表の世界の間はざわつく。

さらに彼女は事情を知る者たちに大きな驚きを与える。

「飛び道具及び刃物の使用禁止！！……そして呪文詠唱の禁止！！この2点を守ればいかなる技を使用してもOKネ！！」

魔法を知っている者からすれば重大発言だが、超は映像記録がなければだれも信じない、と言葉を漏らした。確かに今の時代、科学的に素人は信じてしまうようなことがある。魔法などの絵空事は普通信じてもらえないだろう。

そして、開会式は終わり、予選会が始まる。

屈強な肉体をもつものや、自身の技を使う者、さまざまな人間が集まっている。

中には子どもや中年、女の子や迷彩ガラ、パイナツポー（朝倉ではない）に幼女と来たものである。

ここまで来ると武道会には見えないはずがないが、気にしてはいけない。

『まほら武道会』予選会は20名一組のバトルロイヤル形式！！AからHまでのかつ組みより2名ずつが選出！！合計16名が明日の本選に出場となります！！優勝賞金は一千万円、くじにより20

名そろつたら順次試合開始！！定員160名に達するぎりぎりまで参加受付中！！麻帆良の強者さん奮ってご参加を！！」

朝倉のアナウンスが響き渡る。予選会の会場は観客だけでもものすごい数であるというのに。

そして各ブロックにて戦いが始まる。

戦いと言っても、強者が弱者を一方的に片づけてしまったが、本物の戦いとはその後誰かが居なくなってしまう事である。

「皆様お疲れ様です。本線出場者16名が決定しました。本線は明朝8時より、龍宮神社特別会場にて！では、大会委員会の抽選の結果決定したトーナメント表を発表しましょう。こちらです！！」

その時絶句した本線出場者は少なくはなかっただろう。

本線出場者は大抵魔法の事は知っているメンバーであり、裏の事もある程度知っている。

もしそこに先の大戦で英雄と、うたわれた者の名前が書いて会ったら驚くだろう。

そして次に本物が疑うだろう。こんな場所に居るわけがないのだから。でも、関連性が皆無なわけではなくて、可能性が0ではないのなら。

「なっ……、どういう事だこれは！なぜあいつらの名前がっ！」

エヴァが驚いたのも無理はないし、タカミチも絶句している。心なしかその表情は嬉しがつてもいる顔に見える。

そして3-Aのメンバーは修学旅行で詠春から耳かじりに聞いている。

第一試合 佐倉愛衣 対 村上小太郎

第二試合 大轟院ポチ 対 クウネル・サンダース

第三試合 長瀬楓 対 ラグナⅡザⅡブラッ
ドエツジ

第四試合 龍宮真名 対 古菲

第五試合 田中 対 高音・D・グッドマン

第六試合 ネギ・スプリングフィールド 対 タカミチ・T・高畑

第七試合 神楽坂明日菜 対 桜咲刹那

第八試合 エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル 対 スネーク

彼女が驚く事は無理も無いだろう。

大抵はわかる。そうなると決まっていたようなものだし。

だが、エヴァンジェリン本人の対戦相手と、長瀬楓の相手は可笑しい相手である。

ラグナはまだ分かる。しかし、掲示板に乗っている名前は大戦中に使っていた名前で、ラグナ・上杉出鱈目の適当に名乗った名前である。

この名を使うという事は……、ここまで考えてエヴァンジェリンは

考えるのをやめた。

今ここで考えても仕方がないのである。先ほどまで予選会をやっていたので、この近くに居るはずと思い彼女は歩きだした。

「どこだー！ーっ！ー！何処にいるでてー！ー！おおい！」

「お嬢ちゃんどうしたのかなあ、迷子？」

「違っわー！」

第44話 帰ってきたアイツ!? みたいなタイトルどうだろう(後書き)

対戦表に乗ってる主人公の名前は後付け設定です。

そしてもう一人のオリ主、あいつが帰ってきましたww

登場するのが遅い? だってテオドラの事ろに居たら普通外で無くなるでしょう。

第45話 やはりこの体はなじむぞ!! (前書き)

だんだんっていうか投稿速度が落ちてきている……前に比べるとホント遅い。

まあその代わり文章量が増えたってことで。……できれば文章力も上がっていると、うれしいな。

ただ、全然ストーリー進まないな……

第45話 やはりこの体はなじむぞー！

「どこだ〜〜ッ！どこにいる！？でてこ〜〜いっ！」

「ケケケ、ソウ簡単二見ツカルアイツラジャーネーゼ」

エヴァンジェリンは従者のチャチャゼロを連れて、予選会場を走り回っていた。

その理由は『まほら武道会』の本選に出場するメンバーの中に彼女の旧友と同居人兼従者が入っていたからだ。

何故来ているのに私に挨拶の一つもないのか、出るのなら出ると一言ぐらい……みたいな感じで彼女は予選会も終わり、人が少なくなってきた会場を歩きまわるのだった。

ただ、問題があるとするのなら人が少ない中で、少女が一人（人形付き）いた場合、どうなるかは分かっってしまうだろう。

「お嬢ちゃんどうしたの？パパやママとはぐれちゃったのかな？」

「うるさい！私はどちらかと言うと保護者側だ！」

「ヴえ？」

呆氣にとられたスタッフは数秒停止、その間にエヴァンジェリンは彼らを探しに行く。だが、毎回このような感じで声をかけられる頻度も多くなっていく。なかなか事が思い道理に進まないため、段々とイライラが募っていくのであった。

エヴァンジェリンが走り去った後の地面。

何の変哲のない地面であり、何か可笑しい所を挙げて見る、と言われても挙げようのない地面である。

が、そこからひそひそと声が聞こえてくる。

心なしか、横から水平にみると盛り上がっているように見える不自然な地面。

「どうやら行った見たいだぞ……ただ、見る限りご立腹の様子だが……」

「そうだな……しかし、一体全体どうしてエヴァにお前が来た事を

教えちゃならないんだ？」

地面から声がする。

そんな不可思議なことだが、周りにいる人たちは特に気にしている様子はない。

何故ならさつきから此処にいるからだ。最初こそは驚かれていたが、今となってはさほど気になっている様子はない。

「そいつはよ、俺がエヴァに来ている事を言うと、ここに泊っていかけて言われるにきまつてる。そしたらテオドラのところに帰れないじゃないか！俺は断じて嫌だね、俺はおばい派だ！」

「まあ……お前が告げたがらない理由はよく分かった。じゃあなんとで武道会に本名で出場したんだ？」

「あ……」

「……、まあ、そう言う事もある。気にしてたら生きること疲れてくるぜ。それよりも明日の本選の事と、そろそろここから移動しようぜ……痛いんだわ」

「ああ……俺もそう思っていたところだ。むしろ、お前から切り出さなければ俺から言っていた……」

そう、彼らが使っているのはステルスマツト。そのマツトはまるで忍者が使う物の究極版と言うべきところか。自分の上から使えば、自分の姿が消えてしまうように見えるのだが、いかせん自分自体はなくならないので、地面で寝転がっていると思いきり踏まれてしまうのであった。

バサア、と被っていた物を大きく払いながら立ち上がる。そこにはいつの間にか二人の青年が立っていた。

一人は迷彩ガラの服を着ていて、緑色のバンダナを巻き、特に怪我はしていないのに右目に眼帯をしている。終いには年齢に似つかわしくない葉巻まで吸っている。が、その動きはかっこいいと思ってしまうほど似合っていた。

もう一人はどこにでもいるようなただの青年なのだが、その髪型は異様であった。

まるで朝倉のようなパイナツポーだったのである。彼はこれをネタに嫁にしつくパイナツポーとして見られていたのであった。

しかも、不老不死と言うおまけ付き。大変だったらしい。それに彼はナギによって『登校地獄』に『性転換』『幼児化』の恐ろしい三連コンボを食らっていたのだが、今回スネークの活躍により元の姿に戻る事が出来た。

ちなみにエヴァンジェリンの『登校地獄』は解かれていない。何故ならスネークが会っていないからである。

彼はエヴァンジェリンと会うのを今極端に恐れている。なので、この一件が終わったらするらしい。

「さて……これからまず」

「

「寝るか」

奇妙な視線を集めながら二人組は去って行った。

A : M 5 : 00

全くもってこんな時間に来る馬鹿はめったにいないはずである。まるで遠足を期待しすぎて一日早く遠足の準備で学校に来てしまったようである。

まだ空気は冷たく、朝日はまだ顔を出すかのどうかのところ。
『まほら武道会』の選手控室にて、食べれて家も作れて防弾体制もある優れた箱が部屋の隅の方に二箱、鎮座していた。

「……………ぐう……………クシュンッ!……………ずるる」

「ん……………さむ」

バカな二人である。本選で戦うまでエヴァに会いたくないと言いつ張るスネークにラグナが付きやっつてあげただけである。

しかし、いくら優れた箱があっても毛布一枚では最近の夜は寝付く

ことはできない。

チート能力で不老不死でもつらいことあったりするのだった。

魔術師の赤マジシャンズ
レッドを使おうにも、箱が焼けてしまう可能性があるので却下。

よって、寒い部屋で縮こまりながら時間が過ぎるのを待っていた。

周囲がガヤガヤと、うるさくなってきた。

足音もするし、人の気配もある。段々と、試合開始時間が迫ってきたのだろう。

そして、そこへネギ・スプリングフィールドが小太郎、刹那、明日菜を連れてやてきた。

どうやら先に来ていたタカミチと話をしているみたいだ。

ッ！ど、どういうことだ……何故、エヴァがここにいるッ！

……落ち着け俺。エヴァがたまに早起きしていたっていいじゃないか。

それはむしろ喜ばしいことなんだよな。毎朝いつも『吸血鬼の性なんだ〜』と喋ってベッドにしがみつくエヴァを無理矢理引きはがさなくてもいいんだよな。

でもよ〜、でもよ〜ッ！今日に限って早く起きてくる必要はないじ

やないか。

エヴァの試合はまだまだ先のはず……

やはり、これほど早く来るのは俺たちが関係しているのだろうか。

し、しかしこのままではこの万能箱を脱げない。

きつとエヴァはいつも通り遅れてくるのだらうと、楽観視していたのが間違いだつた。

俺の試合は2試合挟むが、試合相手が片方にとって悪すぎる。

すぐに俺の番の試合はやってくるだらう。

ええい、くそ、どうすれば……あッ！そのフードやろっつちみんなや！

俺がバリ魔法使いやってます、という白いフードをかぶって顔を隠しているヤツに箱に開けている穴から睨み付けてやっていたら目の前が突然、目の前が黒くなってしまった。

どういうことだらうかと悩んでいると、比較的近い位置から声が聞こえてきた。

「おい、その『シャゴホッド格納庫』とか書かれている箱をかぶっているヤツ」

俺は箱に入るために足を抱えて座っているから、耳の位置も低い。近くから、ということとは相手もしかがんでいるか、背の小さいということになるがまさか……ッ！

「フフツ、箱が揺れているがどうかしたのか？初めはただの物品だと思っていたが奴らがいなくなてな。適当に鎌をかけてみたらどうや

ら正解のようだったな。フハハ」

げえーエヴァー！

まさか見る限り怪しすぎる箱を差し置いてほかのところを探すなんて……

だが、見つかるには今はまだ早い。スネークはできるだけ可能ならば戦うまであいたくないといていた。

それならば今ここで、エヴァと会うのはあいつがもっとも最悪と想定しているパターン。

他人が戦っている間、ずっとエヴァに問い詰められることとなる。まあ、エヴァはいいやつなだけだな………なんというか、征服性が強い気がする。

あれか、肉食系女子というヤツなのか。もう女子という歳ではない気がするが。

「……ほう、中に入っているのは誰だか知らないが、もしかしたら大会出場者かもしれないし、全く関係ない人物かもしれないしなー！？これは私が直にみてやる必要があるようだ」

エヴァのこめかみが引きつったような気がする。聞こえていないはずだが………まさかこういうときに限って口に出してしまう症候群なのか！

サワ……

エヴァが箱をつかむ感覚が伝わってくる。

このままではスネークの存在がばれてしまう………！！

あつ、でもよく考えたら俺が見つかつても全く困らないんだった。いや、でもエヴァに小言言われるのは完璧に確定済みであるだろうが。しかし、よく考えたら俺はスタンド能力がフル稼働できるように戻っているのだ。

ならば我が真髄、とくとご覧に入れよう！

……しかし、こちらが勝てると分かるとホント強気になるな俺。

「どうだ……フフ、あげるぞ〜。あげてしまつぞ〜。貴様の慌てふためく姿が私はしつかりと見えているーぞおっ!?!」

エヴァ………すまない。

さて、時間の止まっていたスネークとかは分からないから説明するよ。

俺はメイド長並に世界ザ・ワールドが使えるようになったのである。

で、その無制限な止まった世界ではナイフなど投げても、標的に刺さる前にいったん止まってしまい、時が動き出すと同時にスピードを取り戻し、標的に刺さる事になる。

つまり、止まった世界では『結果』は始まらないのだ。

だから俺は止まった時間の中でエヴァを押し続けた。

これにより押し続けていたパワーは止まり続け、『結果』が始まるときに莫大なパワーとなるのだ。

エヴァには悪いが、ただ押しつぶっ飛んだだけである。

だが俺には男と男の約束があるのだ。エヴァならすごい肉体で怪我などはしないだろうし、それほど痛くしたつもりはない。むしろ、エヴァのためと思って胸が大きくなるようにモムぶっは!?

「きいゝさあゝまアゝ……覚悟はできているんだろうなあ？私はできていないぞ。貴様の人生、関係、運命、すべてひっくりかえす気でこの場にいる……ッ！」

幽鬼のようにたたずんでいるエヴァ。

所々がほこりや砂で汚れている。エヴァは黒い服などを好んできたりすることが多い。そのため余計に汚れが目立っている。

そして俺はそこはかかない恐怖に腰が抜けてしまっている。

ぎゃー助けてーだーれーかー！

「初めはな……誰か分からなかったが、こんな芸当できるのはおまえしかいないとすぐに分かった。それに元に戻っていたからな。その特徴的なパイナップールとか。

で、ラグナが元に戻ったのはすごくうれしいんだ。全く、家に帰らないでどこほつつき歩いていたのだ。すごく……その、心配したのだからな。もう夜歩きはするんじゃないぞ！」

俺はそのとき、人は言葉だけじゃなくて心でも通じ合えることが分かったんだ。

きつと最初に殴られたのはちょっと勢い余ってぶつかっただけだったんだね。

あの意味滅裂な台詞は幻聴だったんだ。

それにさっきの言葉聞いたかスネークよ。もう、完璧じゃないか。デイ・モルトベネ、といたい気分だよ。

これならきつと止まった時間でエヴァの胸が大きくなるようにモムぶっちゃらてい!?

「ラグナ……今なんといった……? よく聞こえなかったんだがな。私には今、確かに『エヴァの胸は い』と聞こえたんだがな……! だが、まあ待て。落ち着け。ラグナはきつと口を噛んだせいで、ああ言ってしまったんだな。私はよく分かっているぞ。ラグナがまさかあのようなことを言うとは思ってもいないし、私がそのようなことを気にするわけがない。冷静に考える。よ……く考えれば、分か……るな?」

瓦礫に埋もれてしまった俺に返事をどうこう求めてくるなんて……
というか、選択肢はYESしかないよ……

結局あの後、エヴァはもう一つの箱を開けることはできなかった。それはラグナの世界ザ・ワールドによって時間は止まり、何度も何度も押され返されてしまったからである。

瓦礫に埋もれてしまったラグナだったが、数百年かけて蓄えられたスタンドエネルギーは並ではなかった。

ラグナは世界自体をみていないながらの操作でそれを行ったのである。

通常、スタンドは本体が操ることで行動ができるものが多い。

しかし、それは見ながら操作しなければ本来のパワーは発揮できないのだ。

スタンドは本来ただのエネルギーが何らか力により結合し、本体の考え方、精神、個人により形も能力も変わっていく。

そう、スタンドはただ殴ればものが壊せるわけでもないのだ。

物を破壊するのなら、スタンドエネルギーを腕から拳へと流れるように流すのである。

そのために一番効率がいいのは自分で見ながら操作する、であるのだがラグナはそれをしないで膨大なスタンドエネルギーを使いこなしている。

もしかしたらスタンド使いでもない人間にスタンドが見えているのはラグナの高すぎるスタンドエネルギーのせいなのかもしれない。

『ワアアアアア！！！！！』

わつと歓声が起きる。
どうやらラグナが瓦礫に埋もれている間に大会が始まってしまったようだ。

朝倉の声が聞こえてくる。この大きな歓声の中、よく聞こえたものだ。

「い……一閃！！カウンター気味の右掌低がクリーンヒット！！終始押され気味に見えたクウネル・サンダース選手まさかの大逆転！！大豪院選手無念！！顔をすっぽりと隠した仮装が謎を呼ぶクウネル選手1回戦突破です！！」

続けてそれにしてふざけた名前だクウネル・サンダース、とちよつと朝倉の本音が分からない声がきこえてきた。

そして、次はラグナと長瀬楓の戦い。両者の名前が呼ばれる。ラグナが瓦礫に埋もれていたため、立ったときガラガラ、と音が鳴る。

スネークの入る箱の前に圧倒的に立っていた世界が薄くなり、消えていく。

先ほどまでチャチャゼロを使って特攻していたエヴァの手が止まる。

そしてそっぽを向いてどこかへ行ってしまった。どうやら彼女は彼女なりにプライドがあるらしい。

ちなみにスネークが入る箱に、今のところ一切の変化はない。寝ているのであろうか？

そして、次の試合。

長瀬楓 対 ラグナ「ザ」ブラッドエッジ。

周りを観客と水に囲まれたステージ。

向かい合い立つ二人だが一見ぱっとしないラグナと、街で歩けば10中9人は振り返るであろう楓では誰しもが抱く印象は楓の方が強いだろう。服装的にも。

髪型だけならラグナの方が注目を引いた……はずである。

.. ..

まあ、どういいうわけか楓は何かしら感じ取ったのか、すでに臨戦態勢をとっており、目もうつすら開かれている。

彼女をよく知る人物から見れば驚きだろう。が、ラグナの写真を見たことのある物たちから言えば、

「「どうしてここにいるんだー！？」」

と思っっているわけである。

ネギたち一行は、修学旅行の時に色々あり色々あってラグナの昔の写真を見て、幼女状態のラグナがそれ、ということも知っているが

……

いざ、幼女が一般人張りの平凡青年っぽいヤツで英雄なんて言われなくても信じない。

だが、今ここでそれが証明されてしまったようなのでいそいそしている人物たちがいる。それがネギたち一行であったり、魔法を知る人物だったり。

まあ、幼女⇨青年は証明不足ではあるのだが、皆やっぱり驚くようである。

(ええ!??ってことはお風呂のとき堂々と見られてたの!?)

(……まさか長と一緒に戦った人とクラスメイトだったなんて)

(なんかボクすごい人の担任してて戦ったんだ!?)

(サボテンの花が咲いている……)

最後のは現実逃避に走ったようである。

『さて、次は第三試合です!土日は山で修行するさんぽ部長瀬楓選手!!対するは髪型が私に似ていてちょっとかぶるぞラグナ⇨ザ⇨ブラッドエッジ選手!!ちなみにウチのクラスに同じ名前の人がいます!』

そこでいったん区切って、

『では〜〜第三試合開始!』

朝倉の言葉とともに楓の姿はかき消えた。

第45話 やはりこの体はなじむぞ！！（後書き）

三人称だと遅くなる。

一人称だと軽くなる。

うむむ、

三人称だと多くなる。

一人称だと早くなる。

どっちもどっちだね。まあ、あまり進んでいないことは気にしないで。この辺終わったらたぶんすぐ終わると思われる。

あ、あと世界うんぬんの話は作者が勝手に思った設定だから。

ホントならポルナレフを階段から動かしたみたいにするばいいんだけど結果云云の話をちょこっと入れたかっただけ。

第46話くらいだった気がする。(前書き)

へへっ、禁書二期一話目から見逃したぜ!

第46話ぐらいだった気がする。

『第三試合開始！！』

朝倉の言葉とともに、楓の姿は一瞬にして消えてしまった。観客からどよめきの声が聞こえる。いきなりフルスロットルで戦闘を開始した楓を見て、選手席にいる者たちはやはり驚きを隠せないようだ。

ステージには、中央よりに立つラグナと隅の方にいる朝倉だけのように見える。うに見えてしまう。

楓は目にもとまらぬ速さで、ステージさらには観客席の屋根まで使って走り回っている。

その理由は楓視点ではラグナに全くの隙がないように見えるからである。

楓は本来忍者であるため、こういう場合は暗器を使った方がいいのだろうか、今大会『まほら武道会』では刃物などの扱いは厳禁である。

つまり、自らの体と、気、テクニクで戦わなければならないのだ。

楓は変則的な移動で、ラグナの隙を探し続ける。

一方、ラグナはずっとステージの中央よりに突っ立っていた。

観客から見れば隙だらけだし、戦ってもいないのでちょっとブーイングが飛びそうである。

「（速すぎて見えなかった……）」

何ともまあ、な話である。

ずっと平和ぼけしていたためか自分がその平和にとらわれていたようである。

何とも情けない話だ。

「（最近の子ってこんなに強かったんだね……あれですか老兵は静かに去るのみってヤツですか）」

不老不死だから老も若もないだろう。

「（いやいや、これは久しぶりのボディであるからの些細なズレであるとして……でもまあ、見えないことには変わりないか）」

平和な生活でゲームばかりしているからである。

「（始めからスタプラ（スター・プラチナ）出しておくべきだった……あ、でもいきなり人が増えたら2対1になって反則負けになるのか？ならスタプラの顔をこっ、出してきて……想像したらきもか

った……)」

顔面だけスター・プラチナを出すと二十面相もびっくりなやり方である。

もちろんひよろひよろの体に屈強な顔のスター・プラチナはあわなかつた。

「（これじゃあ攻めてくるのを待つか、ザ・ワールド世界やキンクリ（キング・クリムゾン）みたいな時間関係のスタンドの能力を使うのが有効かな？まあ、腕だけ出したりするのは、ばれないなら別にいいだろう）」

ラグナが自分の中で答えを出したとき、いつまでも様子見だけでは勝てないと判断した楓が分身3体を引き連れて、さらに気で強化して突撃を仕掛けてきた。

「これで……ッ！どうでござるか！」

この分身3体は、ほぼ本体の楓と見分けがつかないできであり、その道の者が見れば絶賛する者であった。

が、

「全部攻撃すればいい話なんだよな」

楓本体を含めた4体はなにが起こったのかも分からず、上空へ打ち上げられた。

会場はいきなり現れた楓に驚き、すでにやられたことに驚いた。

ボンツと音を立てて3体の分身は消え、ステージには……楓はいなかった。

「ッ！？（あれ、もしかして全部分身か！）」

ひゅっ、とラグナの後ろに影が差す。

そこには楓がいた。

右手に気を溜め、密度の濃さに空間がゆがんでいるように見える。

「油断大敵でござる。ニンニン」

楓が攻撃をたたきつけようとした瞬間、前を向いているラグナから攻撃を受けた。

「無駄ア！」

リングアウトぎりぎりのところまでぶっ飛ばされる。

朝倉はいきなりの展開に驚きを隠せなかったが、何とか持ち直したようだ。

『ッ……！？これは一体どういうことなのでしょう！突如現れた楓選手でしたが、今はすでに倒れてしまっている！！（オイオイ、どういうことだよ）』

ふらふら、と楓がふらつきながらも立ち上がる。

「今のは……一体なんなのでござるか？一度に分身が殴り飛ばされて、拙者まで殴られてしまったのでござる」

「奥の手とかそういうのぺらぺら喋るヤツはいないだろ？」

「ふ、それもそうでござるね。いや、御仁話してみるとなかなか。それに強くて不思議でござるな」

「煽ててもしかべんねーぞ？」

「あいやそういうつもりで言ったわけではないでござる。しかし、御仁が強いのは明々白々。拙者も本気でいくでござるか」

『おつとー！ー！？先ほどの分身が本気ではないようです！これは楓選手の底が見えませーん！ー！』

「（えーあれで本気じゃないの？さっきはスタンドの両腕と自分の両腕で足りたからよかったけど……もっと増えるのかよ。ぎりぎり

でスタンドの腕を戻してやっと追いついたのに。ジョブチェンジしたい……盗賊とか)」

楓が後ろに下がり、距離をとる。

「忍！」

虚空から、そこにいたかのように楓の分身が現れる。

その数16。

ラグナを取り囲むように上空にとび、気による遠当て、続いて右手に気を溜めた拳がとんでくる。

しかし、そのとき誰一人人間が認識できない時間が止まること occurred。

面前に楓の顔と、今まさにたたきつけられそうな気の塊がある。

だがそれは動く気配がない。

「おおう危なかった。遠当てで動けなくして必殺技とか……ドラゴールかよ!!しかし、連続は危険臭がプンプンするぜ。こうして俺がかわすんだからな」

そういつてヒョイと楓の分身の群れから抜け出す。

「時が止まってるのに喋っていると、相手に聞こえないから独り言に

なるのか？……まあどうでもいいか。この世界には同じ力を持つヤツがいらないから、時を止めればどこでもシエルターだな」

ガヤガヤとしていた観客席は静かになり、朝倉もマイクを握ってその状態のままである。

ふと、上空に顔を上げると、

「あんなところに本体がいやがった。……ひーふーみーよー、攻撃に参加していたのはよく見ると15人だな。よし驚かしついでに終わらせるか」

水の上に立つが沈むことはない。

別段、気で立っているわけでも魔法で浮いているわけでもない。

水が止まっているからである。水の粒子は崩れない。

よじよじと観客席から屋根に上がっていく。手が届かなかったらスタンドを使って上る。

止まった時間で時が進むのはおかしいが、感覚で分かる1〜2分はたった感じがする。

「スタンドを使えば跳ぶことはできると思っけど、なんか投げてもらう感じがいやだな……誰も見てないし、誰も気づかないし、時間も進まないから関係ないんだろうけどね」

空中で止まっている楓をつかみ、自分も空に上がる。

そして、時は動き出した。

ドゴンと大きな音がする。

『おつとー！！楓選手の攻撃がブラッドエッジ選手に炸裂うううう！！あれは効いたかあ！だが、威力がちよつと強すぎてリングを壊さないで欲しい』

分身15体の攻撃でリングに亀裂が走ったようだ。

粉塵でリングはよく見えない。

普通の人なら死んでもおかしくないだろう。

が、

『こ、これはどういうことだろうか！？煙が晴れたと思ったたら楓選手しかないー！！多すぎてブラッドエッジ選手が確認しにくいがああ髪型はすぐに分かるぞー！！』

『あ、あそこにー！』

観客席から声が聞こえてくる。

彼が指さす方向は観客席に屋根。丁度、反対側のようだ。

『一体いつの間にも移動したのでしょうか！？リングにいたはずのブラッドエッジ選手はすでに楓選手と対峙しているうううー！！』

「全く、御仁には驚かされてばかりでござるな。拙者の足をつかん

で引きずり落とすとは……よくそんな真似ができると小一時間ご教授願いたいでござるな？」

「まあ、そういうな。たぶん、俺にしかできないと思うから心配するこつたゝ無い。そんなこと気にしてたら俺の高速パンチにあたるぜい？」

「御仁の攻撃に仕方……少々疑問に思うことがあるでござる。普通なら馬鹿なことかも知らぬが……御仁、腕が四本あるのか？」

ぎくつ、とラグナの肩が上がった気がした。

「え、え〜？な、なんのこつとかなあ〜。どう見ても俺の腕は二本ですよ〜？」

「うむ、そうでござるのだが、馬鹿なこととござる。はっはっはっはっは、……四妖拳」

ぼそりと楓がつぶやいてみたがラグナに変化はなかったので違つと断定したようだ。ちなみに四妖拳とは肩から腕が生えるよ！

「しかし勝ち目がないでござるな。拙者の速度についてこれるとは……」

「大丈夫だ、問題ない。俺がひきよーなだけだから。適当にかかってこい」

「では、お言葉に甘えて。……忍！」

残像が見えるほど速く動いた楓。

だが、脳を揺さぶる拳があたり、長瀬楓は殴り飛ばされた。

「やはり、勝てないでござるね。拙者の負けでござる……」

『決まったー！！これで第三試合は終了です！勝者はラグナ』
『ブラッドエッジ選手です！ブラッドエッジ選手は第二回戦へと進みます！！』

ラグナはクラフトワークなどで選手席まで戻っていった。

楓もそれほど重くなかったのか一跳びで、選手席まで戻ってしまった。

ちまちまと進むラグナに、ネギたちは何ともいえない様子だった。

この後、古菲が真名に勝利する。

が、重傷のため棄権することになり、ラグナは準決勝まで進むことになる。

次に試合では高音が田中に勝利する。

この時問題の脱げ女となる悲しい試合であった。

注目の一戦であった、ネギ対タカミチ。

ネギがタカミチに勝利する。

そのときには、エヴァが戻ってきていたのでメタリアで背景に溶け込む。影の薄いヤツみたいだ。

その次では刹那が明日菜に勝利する。
明日菜のアーティファクトが突然、大剣となり、大会ルール違反に
なった。

そして、第8試合。

エヴァ対スネークが始まる。

動くことの無かった箱が持ち上がる。

第46話ぐらいたった気がする。(後書き)

承り太郎がいない世界だとワールドの独壇場だな

まあ、そのせいでワールドしか使っていないなww

(. . .) 〇三三 ゆるる、ゆるる(前書き)

どうしてこうなった……

所々ごりおしです。

(。・。・)〇〇〇 ゆれる、ゆれる

『第八試合 麻帆中団碁部、エヴァンジェリン・A・K・マクダ
ウエル選手!!』

朝倉の声が大きく響く。

いつの間にか戻ってきていたエヴァは周りを完全に威圧する雰囲気
で、ステージへと上がっていった。

選手控え室から異色な男が現れる。

エヴァの対戦相手 スネークだ。

頭に緑色のバンダナを巻いて、別に右目は怪我をしているわけでは
ないのに眼帯をしている。

場には合わない、迷彩柄の服を着てメタリカで風景に紛れている俺
を見てきた。

「こっちみんな」

「おや、なにもないところから声がするな。空耳かな？」

「おまえの頭がおかしいんだよ」

「ははっ、軽口がたたけるってのはいいねえ」

『対、どこからともなく現れた!!!ミリタリー部の手先かスネーク
選手!!!!』

スネークの名前が呼ばれた。
彼もステージへ上がっていく。……エヴァになんて話すつもりなん
だろうか。

『それでは〜第八試合、ファイト!!』

観客席からは相変わらずの声援が飛んでくる。

やはり、構図が構図だからだろうか。
中学生か、と言われて信じられるかどうか分からないエヴァと、ど
う見てもサバゲーやってます的な外見のスネーク。

観客からはエヴァを応援する声が多い。

「さて、ラグナに邪魔されたから話す機会も会う機会もなかったが
……単刀直入に聞こう。何故、今になってきた？」

「……」

朝倉はこの時、また魔法関係なのか、と少しジャーナリズム精神が
騒ぎ立てていたそうなの。
だが、スネークの口から帰ってきたのはエヴァと朝倉の期待を裏切
るには大きすぎた。

一言に尽きる。これはひどい、と。

「エヴァ 俺はおっぱいが好きだ。
エヴァ 俺はおっぱいが好きだ。
エヴァ 俺はおっぱいが好きだ。
Cカップが好きだ。Dカップが好きだ。Eカップが好きだ。
Fカップが好きだ。Gカップが好きだ。Hカップが好きだ。

部屋で 寝室で 宮廷で 世界で 地球で 火星で 此处で 現在で

この地上で揺れる ありとあらゆる おっぱいが 大好きだ。

二つを並べた 乳房の魅惑の谷間が プルンと共に俺を 吹き飛ばすのが好きだ。

上乳が見えるような服が 階段の上から見えたときなど 心がおどる。

テオドラの持つ 褐色のおっぱいが 俺を撃破するのが好きだ。
悲鳴を上げて 胸を隠して俺をビンタでなぎ倒したときなど 胸がすくむような気持ちだった。

背筋をそろえた 宮廷のメイドが 俺の理性を 蹂躪するのが好きだ。

鼻を押さえた俺が テオドラの振り下ろした手のひらと共に 一斉に声を上げるメイドたちに わらわらと取り囲まれるのも最高だ。

哀れな鼻血面が 雑多な重火器で 健気にも立ち上がってきたのを テオドラの大きい胸が 俺の理性ごと木端微塵に 粉碎したときなど 絶頂すら覚える。

宮廷のメイド隊に 滅茶苦茶ににされるのが好きだ。
必死に守るはずだった 理性が蹂躪され 理性が犯され 飲み込まれていく様はとてとても どうしようもないものだ。

メイドの物量に 押し潰されて 揉みくちゃされるのが 好きだ。
テオドラに 追いまわされ 四六時中一緒にいるのは 感激の極
みだ

エヴァ 俺はおっぱいを テオドラの様な おっぱいを望んでい
る。

エヴァ 胸の小さな 大切な家族エヴァ。

お前は 一体 何を 持っている？

大きな おっぱいを持っているか？

情け容赦ない 最高のおっぱいを持つのか？

雲泥万里の 明確な差 三千世界に理性を壊す 夢のようなおっ
ぱいを 持つか？

貧！！ 貧！！ 貧！！

よろしい。

ならばおっぱいだ。

俺は満身の 力をこめて 今まさに 振り下ろさんとする 握り
拳だ。

だが このエヴァとの 数百年の間 堪え続けて来た 俺に
ただのおっぱいではもはや足りない！！

おっぱいを！！

テオドラのおっぱいを！！

俺はわずかに ただ一人 ただの一人 個人にしか過ぎない。

だが諸君は おっぱいの 古強者だと 俺は信じている。

ならば俺は 諸君と俺で 総兵力100万と 1人の 軍集団と

なる。

ロリコンを忘却の 彼方へと追いやり 眠りこけている おっぱい星人を叩き起こそう。

髪の毛をつかんで 引きずり下ろし 眼を開けさせ 思い出させよう。

ロリコンに恐怖の味を 思い出させてやる。

ロリコンに我々の 思いの足音を 思い出させてやる。

天と地とのはざまには 奴らの哲学では 思いもよらない事がある事を思い出 させてやる。

一人の吸血鬼の 戦闘力では 我々を燃やし尽くすことはできない!!!

固有結界術式 発動開始 煩惱スベテ・ムネノ・オツパイ 始動

離床!!! 全ワイヤー 全索引線 解除

最後の希望 より 全おっぱい星人へ

目標 魔法世界 テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア

ロリコン駆逐作戦 状況を開始せよ

征くぞ 諸君」

そう言ってどこかへ行こうとするスネークを、何とか朝倉が引き留めた。

会場全体は絶句だった。

何の反応もなかった。

空気が、空間が、雰囲気、すべてにおいてこの場でのことが異常だった。

世界は使っていないはずなのに、まるで世界全体が止まってしまっ

たみたいだった。

ただ一つ、この場にいる全員が思ったこと、それは

「「へ……変態だ!!」」

この場でまともでいた者は
限りなく少なかっただろう。

その中でフードをかぶった男、クウネル・サンダースは思っていた。
（……これだからおっぱい星人は困りますね。エヴァかわえー。やはり、私たちのような紳士がロリータをめで……？）

クウネルが考えを巡らしていたところで急に異変を感じた。

（か、体が……）

クウネル・サンダースはいきなり倒れた。

周りは騒然とする。まるでさっきのことはなかったことにするために。

「だ、だいじょうぶアルか!？」

「ちょ、ちょっとクウネルさん!？」

「ぐ、ぐう……」

「！な、何か書いているでござるよー！」

クウネルが最後の力で残した血文字。

天罰術式。

「一体なんのことアルか？」

「さあ……？」

悩みあぐねている古と明日菜に楓。

そこにステージのスネークが声を上げる。

「たった今！外見、年齢にかかわらず、ロリータに欲情したヤツは昏倒する術式をくんだ！その男はロリータに欲情したための悲しき結果だ」

（バカだ……バカがいる……本当に救えない悲しいバカがいる……）

男の理想は理解してもらえないものではなかった。

万人には万人の、個人には個人の、考え、理想というものがある。押しつけでものが通ることはない。

ステージで安心していたエヴァの瞳に意思が戻る。

その目はまるで何かを失い、悲しみにまみれ、それへの執着を振り切った、覚悟したものの目だった。

高らかに禁句を連呼しているスネークに一気に近づき、鳩尾を思いつきり殴る。

加減は必要ない。

不老不死とは死なないこと。ならば、どれだけやっても死なない。一生、痛めても死なない。

鳩尾を殴られ、「ふ……くう……」と言葉にならない声を漏らすスネーク。

目尻にはわずかに涙がたまり、体はくの字に折れ曲がる。

そこへ、エヴァのかかと落としがスネークの脳天にぶち当たる。足を上げたとき、ひらりと見えた禁止区域に目を奪われた観客、幾人はバタリと倒れてしまった。

脳天から蹴りを食らったスネークは地面にキッスし、顔面は埋まっ
てしまっている。

容赦のないエヴァはさらに上から蹴りをスネークに食らわせる。

「ええ！？何がおっぱいだ！！貧乳はステータスだ、バカめ！！大
体私に会いたくなかった理由は何だ！！全く要点を言っていないじ
やないか！」

蹴る音が、まるで人体に弾丸が撃たれたように、鈍い音がする。

グシャリ、グシャリ、と。

「それにテオドラ、テオドラ、と煩わしいわ！！何だ？私に胸がな
いことがそんなに不満なのか！？ケンカ売ってるのか！ああ、買っ
てやるぞ、いくらだ。いくらだろうと買ってやるわ！！このバカ
野郎がー！！！」

絶叫と共に、思いつき蹴り上げるエヴァ。

放物線を描いてステージと、観客席の間の水へと落ちていくスネーク。

ボシャン、と水に落ちる音がして、水から上がる音はしなかった。

『しょ、勝者！！エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル選手です！！変態の妄言を華麗にかわし、一瞬にして勝負を終わらせてしまった！！すごすぎるぞ！ちなみに昏倒した人は会場門救急所へとおねがいしまーす』

颯爽とステージを降りるエヴァ。

その顔は思案顔だった。

（スネークも変わったものだな……久しぶりに会うとやはり違うものか。人は変わるからおもしろい。しかし、話は全く聞けなかった……ラグナに聞くしかないか。だが、先ほどから姿が見えん。勝ち上がって戦うか）

エヴァの元へ駆け寄ってくる刹那や明日菜。

「え、エヴァちゃん大変だったね……」

「昔の友人だ。気にすることはない」

「ヴえ！？」

「それより、桜咲、次の試合。勝たせてもらっぞ、ではな」

そう言って、昏倒しているクウネルを蹴りに行くエヴァだった。

未だにスニーカーのロリコン天罰術式は続いているもよう。

男って言う生き物は、大抵が好きだ。あの重力に逆らうかのような張りが好きだ。

小さめの服を着て胸元が張っているのが好きだ。大きいのが好きだ。無駄に大きいってのがいいんじゃない。それなりに、適度ってものもある。

(。 。) 。 。 。 ゆれる、ゆれる(後書き)

作者はロリータよりおっぱいが好きなんだ……

ちなみにスネークの演説はロリコン駆逐術式の詠唱 W W

鮮血の決ま……ゲフン！

選手控えしつには幾人かの選手が、休憩を取っている。

第八試合が終わった後はすぐに次の試合が始まるのだが、先の試合でステージが出血量の多さで真っ赤に染まったため、清掃作業をしているのである。

忙しそうに清掃作業をする清掃員を尻目に、ラグナとスネークは控え室で暇を潰していた。

エヴァにはれないように隠れようとしたが、エヴァはとことん貫くようで、どこかへ行ってしまった。

「不老不死ってすごいな……肉塊になってもよみがえるんだな。ま、以前にもザ・ハンドで削り取っても、復活していたからな」

「俺は何がエヴァの癪に障ったのかわからねえ……」

「お前本気で言ってるのか？」

「他人を理解するのは大変なんだぜ」

「テオドラとは？」

「以心伝心！」

そんな感じで話に花を咲かせたり、先ほどの試合について話したりしていた。

だが、会話のネタが途切れるとあいかわらずテオドラの話ばかりしてくるスネークだった。

ステージの清掃は相変わらず続いているようだった。

この分でももう少しかかるだろう、と思っていたところで控え室に一人の人物がやってきた。
すたすた、と軽い足取りでまっすぐこちらに来た。

その人物は超鈴音。
チャオ・リンシエン

主催者とどこにでもいるようなただの青年だが髪型は異様、もう一人は迷彩ガラの服を着ていて、緑色のバンダナを巻き、特に怪我はしていないのに右目に眼帯をしている。

そんな二人のところへとやってきた主催者。

知らない人が見ればなにかある、と思ってしまうだろう。

ラグナとスネークもいきなりやってきた超に少し驚いている。
そして、超は間を取ってこういった。

「二人とも私の仲間にならないネ？」

「だが、断る」

「いいともー!!」

二人とも違った返答だった。

即決過ぎて超も少しどもり、ラグナ達も自分の答えた理由などを話している。

「そ、そうかネ。なら、スネークはこちら側と言っネ？」

「何故断ったし」

「お前こそ何故に了承した」

「人の話聞いてるネ……？」

長く生きすぎて精神は耳が遠くなっただけらしい。

「ごほん、と咳払いして超が仕切り直した。
このままでは流されてしまふと思ったらしい。

「では、スネークはこちら側についてくれる。それでいいネ？」
首を縦に振り超の確認に答えるスネーク。

「それではスネークにはついてきて欲しいネ。ラグナは試合が残っているからがんばって欲しいヨ」

踵を返してすたすたと歩いて行く超。

「じゃ、行ってくるわ。試合がんばれよ」

超の後に続いてくスネークは何か楽しげであった。

一人残されたラグナは控え室でステージの清掃が終わるのを待っていた。

まだかかるだろう、と思つて壁により掛かつて座り込もうとしたとき、清掃の終わったアナウンスが聞こえてきた。
どうやら短いと思つていたが、案外時間がかかつていたようだ。

（え〜と、次の試合は誰と誰だったかなあ）

のんびりと思い返すラグナの耳に、朝倉の観客に対するお詫びと次の試合の選手名が届いた。

（ローブと犬か……ローブはやっぱりクウネルなんだろうな）

犬は勝てないんだろうな、と思い古は棄権だろうから暇だなーと寝

ることにしたラグナだった。

麻帆良学院の地下。

昔の魔法使いの遺跡だとかなんだとかのはなしだが、今は全く関係ない。

そこには超とスネークが来ていた。

「なにこれキモイ」

「そう言わないでくれないか。工学部ががんばってくれたものヨ」
「顔面が凶悪。まるで造山帯みたいにゴツイ」

スネークたちの目前には『T・A・N・K・3』愛称『田中さん』
がずらりと並んでいた。

こうまでも同じような顔があると不気味である。サングラスをかけているだけまだマシなのかもしれない。

「あ、これはなかなかいいな。アクションゲームの中ボスみたいな
感じで」

「どついつ評価ヨ……」

直立不動の田中さんを抜けて、中ボス見たいな風貌の四つ脚のロボットの場所に着いた。

それは人型の田中さんと比べてまた大きく、力強い印象を与えた。田中さん自体も一般人の平均身長と比べたら大きいのだろうが。

「ふむ、で、俺を引き入れたことには何かあるのか？俺自体はラグナミたいに応用が利くわけではないんだが……」

「今回ばかりはあなたで良かったと思うヨ。むしろあなた以外に適任はいないネ」

「あれれ〜そんなにベタ褒めされちゃうと、ボクちゃんがんばっちゃうな〜」

「……楽に扱えるという点でも適任かもしれないネ」

「なんかいつた〜？」

「な、何も無いヨ！」

不自然な超にあまり関心を示さないスネークは四つ脚のロボットに張り付いていたりした。

もう、スネーク自身が四つ脚のロボットのように、ロボットに這いづりまわっている。

そんな英雄を見て先ほどの人選は間違いだったのかと、超は汗をかいたが気を取り直して這って動くスネークに声をかける。

「次に進むヨ。話は歩きながらで十分ネ」

「おう、じゃあ次はどんなの見せてくれるのかな」

「きと腰を抜かすヨ。それじゃあ仕事の説明でもするネ」

「まかせんしゃい！」

「やる気があるのはいいことヨ。では」

いったん区切って、柔軟だった空気を戻す。
スネークは相変わらさずだが、どことなく違ったように見える。
だが、それは些細な問題である。

「あなたには麻帆良祭最終日、6月22日ネ。その時の作戦の指揮官をして欲しい。ロボット達は自動で行動するがあなたに任せるヨ。ロボット達は好きにいじってヨロシ」

「ああ、確かここに来る前に話した『世界に魔法の存在をばらす』ために世界樹の拠点をどうにかするんだったな。だが、俺に任せていいのか？あつちにはたぶんラグナもいる。失敗するかもしれないぜ。むしろ、ロボットを自動で動かして俺をラグナにぶつけた方がいいんじゃないのか」

「どうもあなたとラグナは相性が悪いヨ。だからこそその物量ネ。不老不死相手に効くものじゃないが、押さえつけることはできるネ」
（世界あるし、無理だと思っけどな。何とか適当に相手してもらおうか）

四つ脚のロボットが置いてあった場所から少し歩いて、図書館等の地下のような場所へと着いた。
木々が生い茂り、地下ではないような感じを与える。

「あなたは本当に良かったネ？」

「ん、何が」

「魔法をばらすことヨ。そうなれば魔法世界もある程度の混乱が起きる。愛しのヘラス皇女も忙しくなるはずネ」

「大丈夫だ、問題ない」

「何が大丈夫力……」

いざとなればスネークのAI兵器や小月光を手伝わせるらしい。
なんともいつか機械の争乱が起きそうな話である。

すっ……、と大きな影ができています。
あたりに生えている木はとても大きなものばかりなので、その影か、と思つて上を見上げたスネークは絶句した。
隣の超はいい顔をしている。

「あなたにはこれも任せるヨ。葉加瀬達にはもう、迷惑はかけたくないからネ」

「こいつはすげえ……俺のREXとタメはれるんじゃないか。いや、RAYもいるかもしれない……。ははっ！コイツはいいモンだ！！あんに誘われて良かったかもしれない！」

「ご満足して私も嬉しいネ。では、後は頼んだヨ。主催者は忙しいネ」

すたすたと去っていく超。

子どものようにはしゃぐスネークは純粋に魔法側と戦つつもりだろう。

超はうまいことやったのだ。彼の好きなものを的確につき、引き入れた。それも元からあるもので、だ。

主催者のすることはまだある。

超はさっさと行ってしまった。

何度目だろうか、犬が賢明にクウネルに突っ込んでいくのは。だが、それも終わってしまった。クウネルに勝利が決まったのだ。

ひどいやられっぷりだったが大丈夫なのだろうか。そんなことを思いながら壁にもたれかかっていた。次は俺なのだろうか、と思い行動しかけたときに古が怪我のため棄権する等のが聞こえてきた。

（そうだった。って、ことは俺はクウネルと戦うことになるのかなあ）

スネークがいなくなつて一人にいるというのは何とも暇だった。ただ突っ立っているのでは、一人でも二人でも同じ様に思ってしまう。だがそんなことはない。個人にもよるが、やはり一人で突っ立っている方が苦痛である。

次の試合内容が聞こえてきた。
小僧とウルスラの魔法生徒らしい。

（長い間学生をしていたがあんなやついたっけなあ）

人の顔や名前を覚えるのが極端に苦手な人もいる。自分もきつとそうだ、と思いたい。決して記憶能力が悪いのではなく人間の脳の構造上、あんまり会わないヤツなんて覚える必要がないだけであつて

自分の中で自分の欠点を必死に補うという馬鹿なことをしていると

ステージからすごいのが現れた。
ウルスラの魔法だろうか。

（ん、あれがいいんなら俺のスタンドもよくな？いや、俺のこと本気にさせるヤツなんていないんだけどー。いないんだけどー）

一人でいると考え事が多くなる感じがする。

どうでもいいことなのだが、そのせいでウルスラのスタンドっぽいのが出てきたあたりから、見るのを忘れてもう終わってしまったよ
うだ。

なにやら悲しい出来事があったらしい。

そういうものは軽い気持ちで掘り返さない方がいいものだ。

結局は自分の出番が無くて適当に暇を潰しているだけであった。

小僧と少女Aが魔法がばれるとかオコジョ街道まっしぐらと、騒いでいる。

やれ、魔法使いでない俺には関係ないことだ、と次の試合を見ることにした。

『お待たせしました。続いて2回戦最終試合。桜咲選手対マクダウエル選手。この試合で学園祭郷ベスト4が決定します』

（次はエヴァか……勝ち上がってくるのか？正直、スネークのことなどはあいつ自身が試合の時に語っていたじゃないか）

その通りである。

エヴァの『何故今になって』はスネーク自身がテオドラ症候群にかかってしまったため、来るのが遅かっただけである。

その理由もステージを真っ赤に染めた演説の中で色々と大変に言われている。

だが、エヴァはエヴァなりにやるつもりなのだろう。

(だったら、俺が口出しするわけにもいかないよな。……手間はすごくかかるんだろうけど)

のんびりと、試合の行方を見守ることにしたラグナだった。

エヴァと刹那、今大会で順調に駒を進めている二人の対戦。なにかと女性陣からの出場も多かったまほら武道会。それもあとは二人を残すだけとなった。

「桜咲、今日は都合が悪い……暇ならば相手をしてやるのだったのだがな。すぐに終わりにさせてもらおうぞ!」

「え? はい!?!」

『エヴァ選手速攻! 桜咲選手なすすべ無く飛ばされるー!』

「ふん、どや?」

エヴァがくいっ、と指を動かすと上から引きつられたように刹那が

起きる。

だが、それは自分自身で起きたわけではないのだ。
エヴァの人形使いの技能、糸を操ったなんともエヴァらしい技である。

腹に掌低をくらい、ほぼ再起不能な刹那。
ゆっくりとエヴァは歩み寄る。

「時間があるのなら貴様の腑抜け、叩こうかと思っていたが……それはまた今度にしてやるう。今は負けを認めるんだな」

「うっ……う」

エヴァがくい、くい、と小さく指を動かす。
そのたびに刹那は小さなうめき声を漏らす。

「っ……分かりました。私の負けです……」

『2回線最終試合、マクダウエル選手の勝利です！』

「さて、次はぼーやか。適当に叩いてやるか。……ラグナの相手はアイツか」

アイツとはクウネルのことである。

エヴァは心配している様子はないのだが、クウネル自身は少々卑怯な手段を取っている。

そう思ったエヴァは途中で考えるのをやめた。

(何故私が……とりあえずスネーク同様血の池に沈めてやらねば……
… 躑とはきちんとやらねばな！)

「ワーツハツハツハツハツハ！！」

高笑いする幼女は奇異の目線を引くものである。
それに気づいたエヴァは、そそくさと去っていくのだった。

鮮血の決ま……ゲフン！（後書き）

エヴァが刹那に勝ってしまった。

この小説は練習作品みたいなモンで、原作なぞりばっかやってるんですけどやっぱりなにかしらはやらないといけないですよね。……小さいモンですが。

以後言訳

ANUBISっていうロボゲーにはまった。

だんおに久しぶりにやってた。

遊戯王エ……

てな感じです。

きっと東方の方も遅れるでしょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5871/>

異世界に逝くぜ

2011年4月20日16時34分発行